宮城県文化財調査報告書第 116 集

硯沢・大沢窯跡ほか

仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書

昭和 62 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
宮 城 県 道 路 公 社

序　　文

宮城県には私達の祖先が残した多数の文化財があります。しかし、近年の急激な都市化の波に洗われ、保護の手を差し延べなければたちまち消滅してしまう状況にある文化財も少なくありません。しかも、開発に伴い、最も保存の危ぶまれているのは土地と結びつきの強い埋蔵文化財です。

宮城県教育委員会は文化財保護のため、開発にあたっては関係機関と協議を行い調整を図っており、各方面からの理解が次第に得られるようになってきました。

今回報告する硯沢窯跡・大沢窯跡は仙台－松島道路事業工事に伴うもので、関係機関と協議を行い、道路は埋蔵文化財の少ない地域を選定したつもりでしたが、造成された梨畑の地下深くから多賀城に関係する多数の窯跡が発見され、結果的には東北地方で最大の窯跡調査となりました。また、近世初頭の松島瑞巌寺の瓦もここで造られたこともわかりました。

この報告書が研究者及び関係者は勿論のこと、広く一般の方々に活用され、文化財に対する温かい理解が一層深められるよう願ってやみません。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護のために協議や調整にご理解をいただき、発掘調査にも多大なご協力を寄せられました関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

昭和62年3月

宮城県教育委員会教育長　関 本 朝 吉

目　　次

序
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の経過 …… 7
Ⅳ．硯沢窯跡
1．遺構の概要 …… 14
2．須恵器窯跡の特徴 …… 15
3．瓦窯跡の特徴 …… 85
4．炭窯跡の特徴 …… 105
5．竪穴住居跡の特徴 …… 114
6．表土出土遺物 …… 125
Ⅴ．大沢窯跡
1．遺構の概要 …… 132
2．窯跡の重複関係 …… 132
3．須恵器窯跡の特徴 …… 132
4．瓦窯跡の特徴 …… 136
5．炭窯跡の特徴 …… 150
6．竪穴住居跡の特徴 …… 154
7．瓦捨場と土壙群、溝の特徴 …… 157
Ⅵ．壇山Ａ遺跡 …… 181
Ⅶ．考察
1．奈良時代の遺構について …… 187
2．奈良時代の遺物について …… 192
3．平安時代の遺構について …… 213
4．平安時代の遺物について …… 214
5．近世の遺物について …… 219
6．その他の遺構について …… 221
Ⅷ．まとめ …… 222

例　　言

1. 本書は、仙台－松島道路事業に係る硯沢窯跡・大沢窯跡・壇山A遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡の調査要項は「調査に至る経過」の章を参照されたい。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会・宮城県道路公社であり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査及び調査資料の整理に際し、多賀城市教育委員会・利府町教育委員会・仙台市教育委員会・多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館から多大のご協力とご指導・ご助言をいただいた。
4. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973 年）を利用した。また、土性区分については国際土壌学会法の基準を参照した。
5. 本書の第 1 図は国土地理院発行の 1/25,000 地図「富谷・松島・仙台東北部・塩竈」を複製して使用した。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料及び出土品については、宮城県教育委員会が保管し、もとめに応じて公開している。
7. 報告書の作製は文化財保護課が担当した。なお、発掘調査及び遺物整理の担当者は下記のとおりである。

発掘調査－藤沼邦彦・丹羽茂・加藤道男・斎藤吉弘・佐々木和博・真山悟・阿部博志・佐藤則之・笠原信男・古川一明・佐藤広史・伊藤裕
庄子敦（利府町教育委員会）

遺物整理－藤沼邦彦・新庄屋元春・丹羽茂・加藤道男・斎藤吉弘・佐々木和博・真山悟・阿部博志・佐藤則之・笠原信男・古川一明・小山田正男・茂木好光・大槻仁一

Ⅰ. 調 査 に 至 る 経 過

県道松島仙台線の交通渋滞を緩和するため、県道路公社は仙台－松島道路の建設を進めているが、松島町初原地区から同町根廻地区までの間は昭和56年度に埋蔵文化財の調査が終わり、道路も開通した。

今回問題になったのは、この道路に連続する松島町桜渡戸地区から利府町森郷地区までの道路建設である。建設路線については、県道路公社・仙台東土木事務所・県文化財保護課などで話し合いがもたれ、昭和11年に東北大学が発掘調査した大沢瓦窯跡など著名な遺跡を避けて通過することになり、現在の路線に決定した。大沢瓦窯跡は多賀城の瓦を生産した遺跡で、学史的に著名であり、遺構の保存も良く、陸奥国府多賀城の重要な関連遺跡である。しかも、大沢瓦窯跡の位置する沢地一帯には未確認の窯跡の存在が予測された。したがって、路線決定には大沢瓦窯跡及びその隣接地を避けることが大きな条件になったのである。

路線が決定した後、路線に沿って分布調査を行い、遺物の散布地や、かつて遺物が出土したと思われる次の地点を選びだし、試掘調査の対象とした。

No.	遺 跡 名	所 在 地	対象面積	試掘面積	調査年月日
1	壇山A・B遺跡	松島町桜渡戸字壇山	8,700	2,000	58,12,5 ～ 12,8
2	大沢窯跡	利府町春日大沢	3,000	2,000	59,10,11～11,19
3	硯沢窯跡	利府町春日二ツ石	7,000	5,000	60,3,4～3,23
4	袖沢窯跡	利府町春日袖沢			60,8,30
5	石田遺跡	利府町森郷石田	9,000	550	59,4,10

上記の遺跡のうち、壇山B遺跡では遺物・遺構とも発見されなかった。壇山A遺跡は遺物の発見はなかったが、年代不明の炭窯2基が発見されたので、試掘調査のなかで精査を行い、調査を完了した。周囲遺跡はごくわずかの遺物が出土したが、遺構はなく、路線敷は遺跡から外れた地域と判断し、事前の発掘調査は行わなかった。袖沢窯跡はすでに開田のため遺構部分は削平を受けていると思われたが、念のため工事の際に立会調査を行い、その結果遺物・遺構とも発見されなかった。

また、大沢窯跡は路線敷の一部に「太田市兵衛」銘の判を押した近世瓦が散布しており、松島瑞巌寺に供給した慶長期の瓦窯跡が予想された。硯沢窯跡では須恵器が2～3片表面採集されただけであったが、梨畑の造成で瓦が大量に出土したことがあるとの話を聞き込んだことと、道路の断面に性格不明の窯跡が露出していることから、若干の窯跡の存在が予想された。

しかし、大沢窯跡にしても硯沢窯跡にしても、開田や梨畑などの造成工事で地形が大きく改

変されていたのに気付かず、現地形から判断して遺構が存在したとしても小規模な窯跡群であろうとの見込みで、両遺跡の試掘調査を併せて行うことにした。ところが、試掘調査の結果、大沢窯跡では松島瑞巌寺の瓦を生産した窯跡は路線敷から外れていたが、瓦捨場が発見され、多数の瓦が出土した。また、古代の竪穴住居跡、須恵器窯跡、瓦窯跡、炭窯跡など予想をはるかに越える遺構の数であったが、窯跡の多くは窯本体の上半部が開田の際すでに削平されていた。一方、硯沢窯跡は県道路公社と地権者との交渉が難行し、この時期に試掘調査を実施することが困難となったので、代わりに大沢窯跡の試掘調査を事前の発掘調査に切り換えて調査を完了させた。

硯沢窯跡の試掘調査の結果も予想をはるかに越える遺構数であった。須恵器窯跡、瓦窯跡、炭窯跡、竪穴住居跡などが確認され、精査によって遺構の数はさらに増える可能性があった。これまで発掘調査で確認されたものとしては、東北地方で最大の窯跡群となった訳である。梨畑造成のため丘の上部を削って沢を埋めた部分から発見された窯跡が多く、遺構の保存も良好であった。このため、県道路公社と保存のための協議を行ったが、路線の決定が幾回かの協議を経て行われたこと、工期が迫っていること、すでにこの遺跡の東側まで道路工事が完了しているため、道路面より遺構面が低いのであれば橋を架けるかたちでの保存が可能であったが、切土部分に当たっていたため工法を工夫して保存することは困難であるとのことであった。県文化財保護課としても、ここで路線を変更しても、付近を通過する以上同様な事態に遭遇する危険性もあり、事前の発掘調査に踏み切ることになった。しかし、遺跡の重要性を考慮して、文化庁記念物課の文化財主任調査官河原純之氏に来跡していただき、現地で指導をしていただいた。

Ⅱ. 遺 跡 の 位 置 と 環 境

1. 自然環境

大沢・硯沢窯跡は利府町春日にあり、利府町役場の北東約 4㎞ に位置し、近くに「瓦焼場」の地名が残る。

遺跡周辺から塩釜市・多賀城市北部（第１図）にかけての地域は、大きくみると仙台平野の北東部にあたり、その地形をみると、利府町北部を中心とした急な斜面の多い丘陵地と塩釜市から多賀城市中央部にかけてのなだらかな斜面の丘陵地、及び利府町中央部から多賀城市西部にかけての沖積地、との３地域に大別することができる。

このなかで遺跡のある春日地区は北部丘陵地に位置し、大小の沢が多方向から入り込んで複雑な地形を形成している。

大沢・硯沢窯跡は沖積地から３㎞程北東に入った丘陵上に立地している。硯沢窯跡付近は幅160m程、周囲の水田面との比高 6～10m程の細長く東に延びる丘陵の先端部で、南から入り込んだ小さな沢（通称，硯沢）を取り囲むように遺跡が所在している。現状は梨畑と小規模な杉林及び水田で、梨畑と水田は近年土地造成を伴って作られている。

大沢窯跡は硯沢窯跡から北東に約 500m離れており、硯沢と同様に小さな沢に面した斜面に遺物の散布が認められていた。ただ、沢をはさんだ南側は旧国鉄線路建設の際に地形が改変され、遺跡の広がりを確かめることができない。遺跡付近の標高は約 61m、西側の水田との比高は数mしかない。

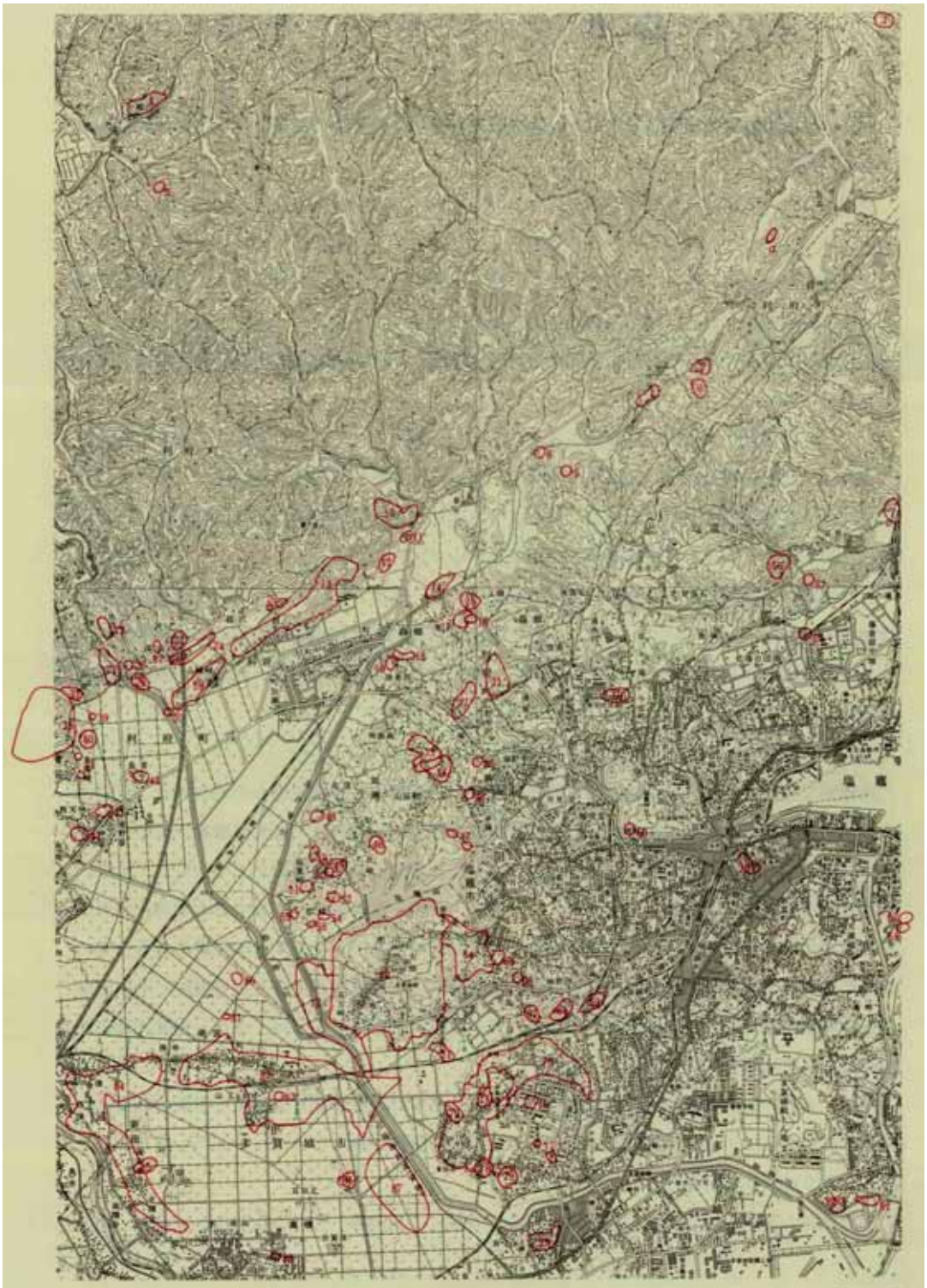
2. 周辺の遺跡

当地域で発見されている遺跡は旧石器時代から中・近世まで各時代のものがあるが、その多くは沖積地（仙台平野）に沿った丘陵裾部や台地上に立地しており、また沖積地の自然堤防のような微高地にも広大な遺跡がある。これに対し、丘陵地の奥には遺跡がごく少なく、大沢・硯沢遺跡近辺でも集落跡などは確認されていない。大沢・硯沢窯跡と関連する古墳時代から平安時代では、山王遺跡をはじめとして多くの古墳時代の遺跡があり、多賀城市教育委員会等の調査によって集落跡などが発見されている。奈良時代には陸奥国府である多賀城跡とその附寺の高崎廃寺が代表的であるが、周囲で奈良時代の遺構の発見例は少ない。また、近世初頭の時期には松島町瑞巌寺が関連する。

なお、大沢・硯沢窯跡の近くには最近多賀城市や利府町の教育委員会によって新たな窯跡も発見されており、今後の分布調査によってさらに分布密度が濃くなっていくものと思われる。

3. 春日地区の窯跡群

大沢窯跡と硯沢窯跡の所在する利府町春日には俗に「瓦焼場」と呼ばれる地区がある。この



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	硯沢窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良・平安
2	大沢９番窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良・江戸
3	巻の上遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
4	小鶴沢館跡	丘陵	城館	中世
5	堂屋場製鉄遺跡	丘陵麓	製鉄遺跡	近世？
6	春日大沢瓦窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良・平安
7	須賀遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
8	山下遺跡	丘陵端	包含地	古墳・奈良
9	袖沢遺跡	丘陵	散布地	奈良・江戸
10	摂津森館跡	丘陵	城館	中世
11	薮下遺跡	丘陵麓	包含地	古墳・平安
12	円福寺遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
13	利府城跡	丘陵	城館	奈良～鎌倉
14	石田遺跡	自然堤防	散布地	奈良・江戸
15	川袋遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
16	川袋古墳群	丘陵中腹	古墳	古墳（後）
17	山中遺跡	丘陵	包含地	縄文
18	関根遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
19	蓮沼遺跡	丘陵麓	包含地	古墳・平安
20	館ケ沢遺跡	丘陵麓	包含地	古墳～平安
21	深山館跡	丘陵	館跡	中世
22	深山遺跡	丘陵麓	集落跡	縄文
23	大沢東Ｂ遺跡	谷底平野	包含地	奈良・平安
24	熊野堂遺跡	丘陵麓	包含地	古墳・平安
25	沢乙遺跡	丘陵麓	集落跡	平安・中世
26	大沢東Ａ遺跡	谷底平野	包含地	奈良・平安
27	山岸遺跡	谷底平野	包含地	奈良・平安
28	前田遺跡	谷底平野	包含地	奈良・平安
29	八幡崎Ｂ遺跡	分離丘陵	集落跡	古墳・平安
30	八幡崎Ａ遺跡	沖積平野	集落跡	古代
31	後楽東遺跡	丘陵	包含地	旧石器
32	後楽遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
33	天神台遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
34	洞嬉遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文
35	十三塚遺跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安
36	十三本塚遺跡	台地	十三塚	
37	山苗代遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
38	菅谷横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古墳（後）
39	法印塚古墳	沖積平野	円墳	古墳
40	北熊野前遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
41	馬場崎の遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
42	伊豆佐比売神社	分離丘陵	神社跡	平安
43	産野原遺跡	丘陵麓	包含地	古墳・平安
44	西天神遺跡	丘陵麓	包含地	古代
45	北窪遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安

No.	遺跡名	立地	種別	時代
46	窪遺跡	丘陵中腹	包含地	古代
47	加瀬貝塚	丘陵斜面	貝塚	縄文（中）
48	台城Ｂ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
49	台城遺跡	丘陵中腹	包含地	縄文
50	台城Ｃ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
51	稲葉崎遺跡	丘陵麓	包含地	古代
52	松崎Ｂ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
53	稲葉崎Ｂ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
54	松崎Ｃ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
55	松崎Ａ遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安
56	摂津守館跡	丘陵	城館	中世
57	伊保石横穴古墳	丘陵麓	横穴古墳	
58	藤倉館跡	丘陵	城館	中世
59	清水沢横穴古墳	丘陵斜面	横穴古墳	平安
60	塩釜神社境内遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（晩）
61	塩釜古館跡	分離丘陵	城館	中世
62	一本松貝塚	海岸低地	貝塚	縄文・平安
63	一本松横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	
64	西沢遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
65	法性院遺跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安
66	高原遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
67	小沢原遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
68	野田遺跡	丘陵中腹	城館	奈良～中世
69	矢作ケ館跡	丘陵	城館	奈良～鎌倉
70	多賀城跡	丘陵	国府跡	奈良・平安
71	（館前遺跡）	分離丘陵	官衙跡	奈良～中世
72	市川橋遺跡	沖積平野	集落	縄文～平安
73	高崎古墳群	丘陵麓	円墳	古墳
74	多賀城廃寺跡	丘陵	寺院跡	奈良・平安
75	高崎遺跡	丘陵	寺院跡	奈良～中世
76	御屋敷館跡	丘陵	城館	中世
77	桜井館跡	丘陵	城館	鎌倉
78	東田中窪前遺跡	丘陵麓	城館	古代・中世
79	志引遺跡	丘陵	包含地	石器～鎌倉
81	南宮内館館跡	自然堤防	城館	中世
82	山王遺跡	自然堤防	包含地	古墳～平安
83	山王山地田館跡	沖積平野	城館	古代・中世
84	新田遺跡	自然堤防	包含地	古墳～平安
85	安楽寺遺跡	自然堤防	寺院跡	代末？中世
86	大日北遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
87	八幡遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
88	発向遺跡	沖積地	包含地	奈良・平安
89	八幡館遺跡	丘陵	包含地	奈良～中世
90	西原遺跡	自然堤防	包含地	奈良・平安
91	元舟場遺跡	自然堤防	包含地	平安

地名については、昔この地で多賀城の瓦を焼いたので生じたとの説明が一般的である。この地では、現在でもまことしやかに、昔ここで作られた多賀城の瓦は、人々が多賀城まで一列にならんで手渡しで運ばれたとの伝説が語り伝えられている。

しかし、「瓦焼場」の地名は、昭和11年にこの地の大沢瓦窯跡を調査した内藤政恒氏によると、「それ自体から考えてもさまで古いものではなく、少なくとも近世に於ける命名としか思はれない」と言う。当地では慶長年間に伊達政宗によって再興された松島瑞巌寺の瓦も生産されているので、松島瑞巌寺の「建築を行ふに當りそれに使用すべき瓦をこの地で焼いた結果、この地が瓦焼場なる名を以て呼ばれるに至ったものであらう」と述べている。しかし、古代の瓦窯跡が存在する桃生郡河南町須江にある「瓦山」の地名は、名取新宮寺所蔵の一切経の高僧伝巻五の奥書に「奥州陸奥国深江保瓦山別處之住人僧月圓坊永秀生年廿六寛喜二年大才庚寅正

月廿日之巳時計為佛法助成書寫了」とあるように、少なくとも寛喜二年（1230 年）まで遡ることができる。「瓦山」と同じ語感をもつ利府町の「瓦焼場」の地名も、古代の瓦生産に基づく可能性があると思われる。

春日地区付近の土は、古代の須恵器や瓦、近世の瓦などの生産に適していただけではないようである。宮城県図書館所蔵の伊達文庫本にある『仙台領鉱物調（御分領中御金山附拾五品物運上並請負人面附年限控帳）』は幕末から明治初年にかけての資料であるが、これによると下記に紹介するように、春日から赤沼にかけては、焼物に適した粘土が広く分布していると思われ、詳細に遺跡分布調査を行えば、古代にかぎらず各年代の窯業遺跡が多数発見される可能性がある地域としてとらえる必要があろう。

松島村赤沼村宮御林

一瀬戸土取場　壱ケ所　　御水主組請負人　　南　　惣吉

安田半四郎

此運上金壱歩也

但文久二年戌年より寅の年まで末五ケ年御下知済

慶応三卯年より未の年まで末五ケ年被任下度由願申出候

缺役願未の正月廿五日缺役被成下旨御下知済

ところで、この赤沼材宮御林の瀬戸土取場で採掘された瀬戸土はどこで使用されたのであろう。昭和 47 年に仙台市電力ビル一階のグリーンプラザで開催された『東北の窯とやきもの』の展示会のパンフレットによると、宮城県の焼物のひとつに松島焼というのがあり、「宮城郡松島の産。文政 6 年（1823）開窯といわれていますが、当時のことは明らかでありません。明治 36 年下飯坂秀治が万古焼倣って陶器を焼き急須などの雅作がありました。このかまも暫くして廃窯となりました」と説明されている。地理的にみて、赤沼の瀬戸土はこの松島焼に使用された可能性がもっとも高い。もしそうだとすると、文政 6 年（1823）開窯としても、史料に出てくる瀬戸土採掘の最後にあたる末の年は明治 4 年（1871）なので、約 50 年間も松島焼は続いたことになる。しかし、松島焼の窯跡はどこにあるか確かめられておらず、実態はよく分かっていない。

Ⅲ. 調 査 の 経 過

〈大沢窯跡〉

発掘調査前の分布調査で、斜面端部の沢に面した畑地や用水路から古代・近世初期の瓦が採集されていた。このため、瓦窯跡群の存在を予想して調査に入った。対象は有料道路敷の約3,000㎡であり、昭和59年10月11日から実施した。

調査区は道路敷の中心杭を基準として3m単位のグリッドを組んだ。表土を除去したところ、斜面下部では水田造成時の盛り土がみられ、その下は地山の黄灰色粘土層で、斜面上部の表土直下に続いている。

遺構はいずれも地山面で確認された。調査区南端の沢に接する南斜面裾部では古代の瓦・須恵器窯跡群が9基、竪穴住居跡が1軒、土壙などが発見されたが、窯跡は開田の際に削平されて保存状態は良くない。斜面下端では湧水のため調査しにくい部分があった。また竪穴住居跡は当初土壙としていたが、精査の結果住居跡と認められた。

調査区西部では土壙が集中する箇所と、多量の瓦や窯壁片・焼土・炭化物などが混在して検出される箇所とがあり、土壙群の中では炭窯跡が1基発見されている。瓦は近世初期のもので、それと共に窯壁が破片となって散乱していることから窯本体ではなく、灰原あるいは廃棄の場所として精査したところ、これらは竪穴状の落ち込み内に堆積しており、落ち込みの底・壁面とも加熱を受けてはいないことから捨場と考えられた。

以上の遺構精査終了後、写真撮影・遺構実測図を作製し、野外調査を終了したのは11月19日、最終的な発掘面積は約2,000㎡である。出土遺物は須恵器・瓦などで、平箱にして約500箱である。

〈硯沢窯跡〉

二ツ石地区にある通称硯沢と呼ばれる小さな沢奥部東半には梨畑の造成によって平坦部が生じており、その沢側の法面下に細い農業用通路があって、この通路から須恵器甕の破片が採集されていた。また、沢に沿って農道があり、それによって切られた崖面に窯跡の断面が2基分観察できた。このほかには西側の斜面で少量の須恵器片が散布し、東側の平坦部を越えた沢沿いでも以前に瓦が発見されている。

これらのことから、二つの沢とそれに面した斜面を遺跡の範囲と想定し、有料道路敷にかかる約7,000㎡を調査対象とした。調査範囲が異なる沢を含むため、東側の沢沿いをA地区、中央の沢（硯沢）沿いをB地区、さらに西側の斜面をC地区と3地区に区分した。

発掘調査は2次にわたって行われた。

第1次調査：昭和60年3月4日から開始し、道路敷の中心杭を基準とした3m単位のグリッ

49.9
石巻街道
46.6
46.8
51.4
52.9
53.6
54.3
54.6
W
W
54.3
58.3
58.3
62.4
62.2
62.1
66.7
63.9
61.6
60.1
A区
B区
C区
C1土
66.1
W
W
53.5
52.3
50.1
50.0
49.6
49.3
49.2
51.6
51.9
51.9
51.3
0
50m

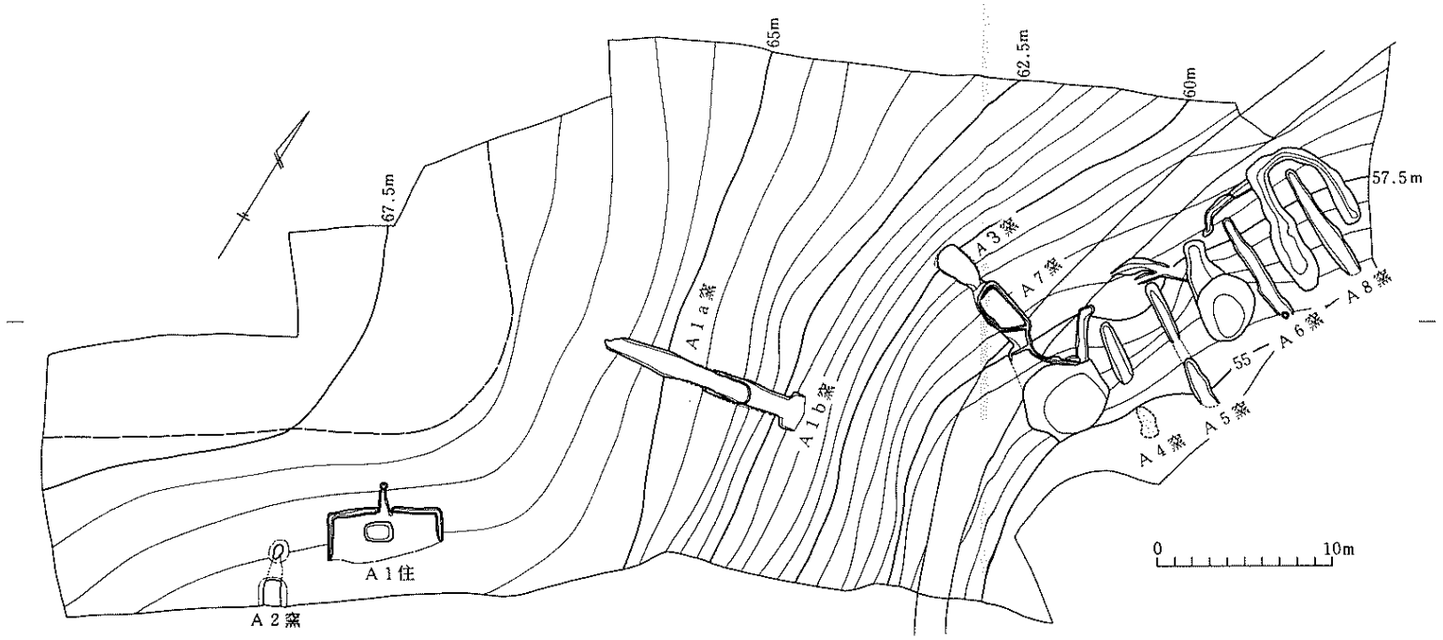
第２図　硯沢窯跡地形図

63.6
62.6
62.9
63.3
65
62.6
61.5
61.5
61.7
62.1
80
60.4
60.3
60.4
60.1
59.9
59.1
60.3
60.9
57.9
60.1
75
70
61.1
57.5
59.2
調査区
58.1
57.2
58
59.2
59.4
57.7
60
65
58.3
58.3
58.6
60.7
64.1
65
70
58.7
60.9
58.7
59.2
61.1
75
0
50m

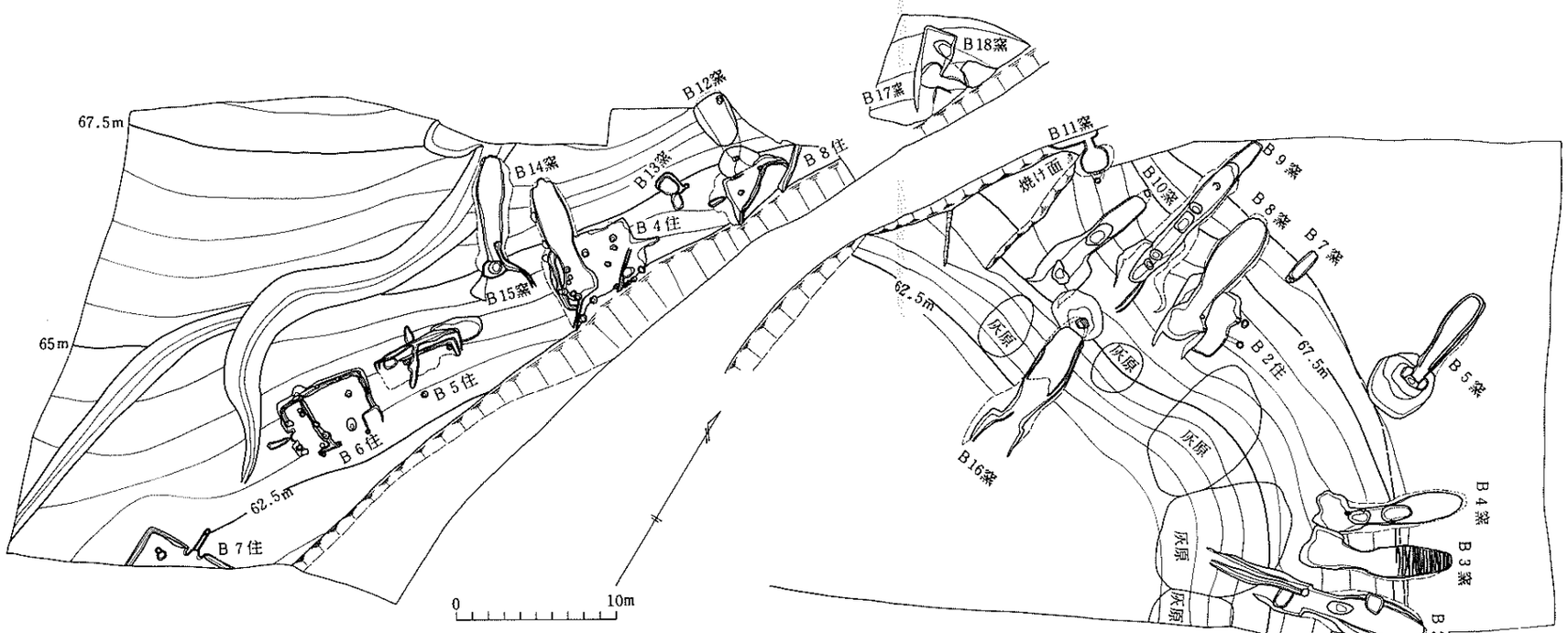
第３図　大沢窯跡地形図

ドを設定してＡ・Ｂ・Ｃ地区の順に遺構確認作業を重点として実施した。その結果、Ａ地区では斜面上部で須恵器窯跡２基・竪穴住居跡１軒を確認した。Ｂ地区では東半の梨畑造成による積み土を排除したところＢ地区西半と同様な傾斜の斜面が現れ、須恵器窯跡 15 基・竪穴住居跡 4 軒・溝１条などの遺構が沢を取り囲むように検出された。Ｃ地区では炭窯跡が１基検出されただけである。Ａ地区とＢ地区の間の平坦部では削平のためか遺構は発見されていない。第 1 次調査ではこれらの遺構のうち、窯跡の構造や特徴を知るためＢ地区の須恵器窯跡１基とＣ地区の炭窯跡だけを精査した。またＡ地区の斜面下部にも遺構の存在が確認されていたが、その範囲等については第 2 次調査の時点で調査を行うこととした。

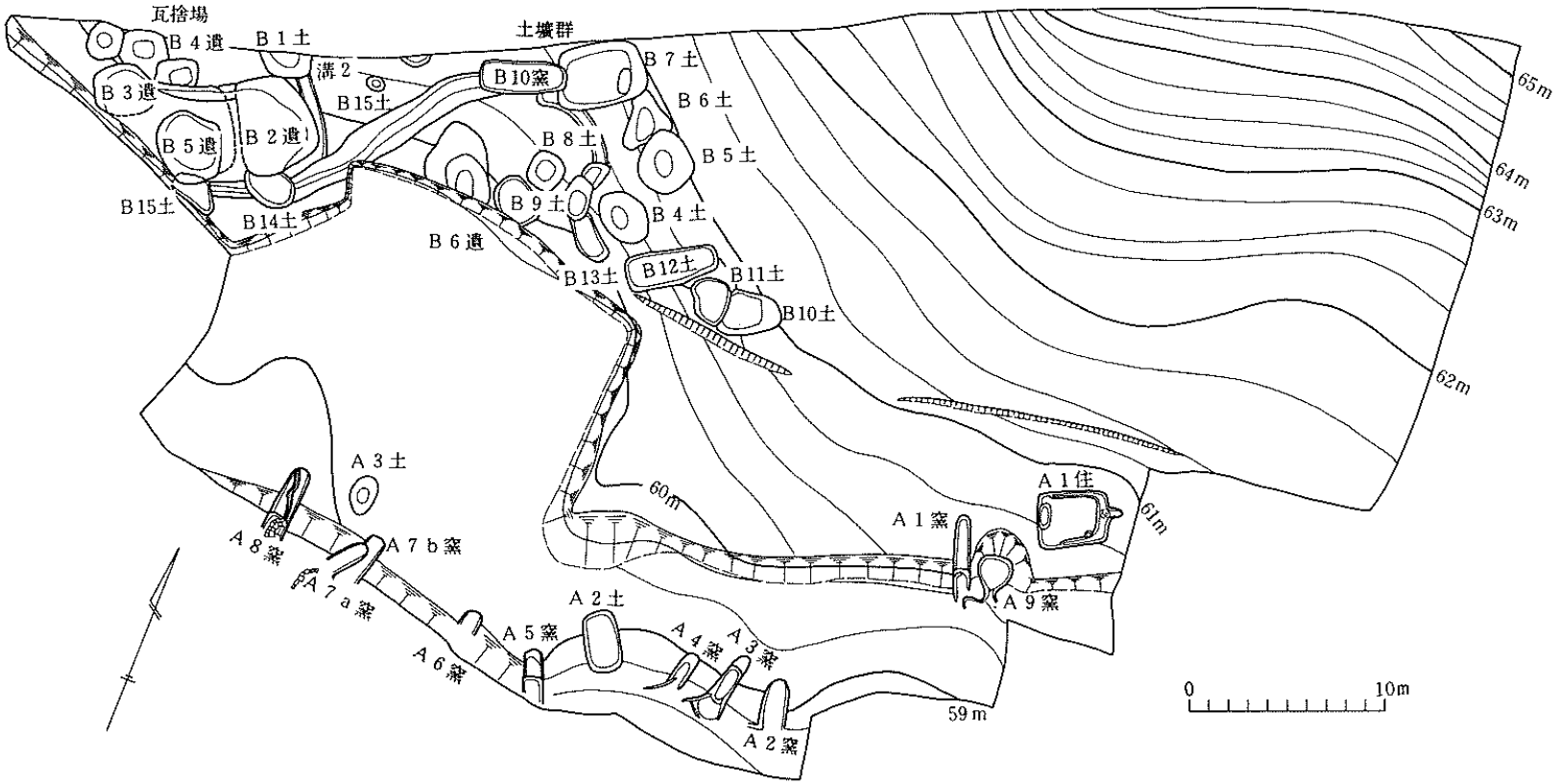
第 2 次調査：第 1 次調査の結果をうけて昭和 60 年 4 月 8 日に開始した。その結果、新たに発見されたものを含めて、奈良・平安時代の須恵器窯跡 16 基、瓦窯跡 4 基、竪穴住居跡 7 軒、炭窯跡 3 基と時期不明の炭窯跡 3 基、溝 2 条などの遺構が発見された。遺構の実測図作製は、窯跡が沢に沿ってほぼ放射状に構築されており、全体を包括した基準線による作業が不都合なため、個々の遺構に軸線を設定して実測し、基準点を平板測量する方法をとった。なお、調査が終了に近づいた 5 月 25 日に一般の方々を対象として現地説明会を開催した。野外調査は 6 月 1 日に終了している。発掘面積は約 5,000 ㎡である。



第4図　硯沢窯跡A地区遺構配置図



第5図　硯沢窯跡B地区遺構配置図



第 6 図　大沢窯跡遺構配置図

Ⅳ. 硯 沢 窯 跡

1．遺構の概要（第4・5図）

硯沢窯跡は今回の発掘調査の結果、遺構の分布状況からみると大きく2地区に分かれている。一方は遺跡西半部の、南から入り込む沢に面した遺構群であり、これをB地区とした。他方は遺跡東半部の、B地区同様南から入り込む沢に面した遺構群で、A地区としている。A地区とB地区の間は舌状に張り出した地形となっており、その先端部分は調査対象範囲外のため発掘していないが、遺構の存在する可能性が強い。また、A地区は沢の中央までを調査対象とした。なお、B地区のさらに西側の丘陵小尾根を越えた斜面は、C地区として遺構の確認作業を行っているが、炭窯が1基検出されただけである。

A地区で検出された遺構は須恵器窯跡3基、瓦窯跡4基、炭窯跡2基、竪穴住居跡1軒である。このうち竪穴住居跡と須恵器窯跡1基は斜面ではなく舌状地形の平坦部といえる位置にある。また斜面での位置関係をみると、瓦窯跡は斜面下方の沢奥部に同一標高で並ぶのに対し、須恵器窯は斜面上方に2基重複し、炭窯跡はその中間に2基重複して位置している。

B地区の遺構は須恵器窯跡13基、炭窯跡3基、竪穴住居跡6軒と、ほかに性格不明の土壙・溝がある。須恵器窯跡は斜面中腹にほぼ同一標高で放射状に並ぶ感があるが、それらより下方に位置するもの（B16号）、上方に位置するもの（B5号）もあり、また3ケ所に集中する傾向がみられる。なお、B17・18号は他と異なった特徴をもっている。炭窯跡は須恵器窯跡と並ぶが、規模・構造は共通しない。竪穴住居跡は須恵器窯跡と同じ標高に並んでいるが、そのうち2軒は須恵器窯跡と、1軒は炭窯跡と重複している。

これらをまとめると下表のようになる。以下A～C地区をまとめて遺構の種類ごとに説明するが、窯跡と重複するB2・B4号住居跡については、便宜上須恵器窯跡の項に含めた。

須恵器窯16基（B1.6号窯・B1.3号住居は欠番）	A地区－3基	（1a，1b，2号）	斜面上位　標高約64～65m
	B地区－13基	（2，3，4，7，8，9，10，14，15，17，18号）	斜面中位　標高約65～67m
		（5号）	斜面上位　標高約68m
		（16号）	斜面下位　標高約62m
	集中箇所－① 2，3，4号　② 7，8，9，10，16号　③ 14，15号		
瓦窯跡4基	A地区	（4，5，6，8号）	斜面下位　標高約57m
炭窯跡6基	A地区2基	（3，7号）	斜面中位　標高約58～59m
	B地区3基	（11，12，13号）	斜面中位　標高約65～66m
	C地区1基	（1号）	斜面中位　標高約61m
竪穴住居跡7軒	A地区1軒	（1号）	斜面上位　標高約66m
	B地区6軒	（2，4，5，6，7，8号）	斜面中位　標高約63～67m

2．須恵器窯跡の特徴

A1ａ号窯跡

A地区東向き急斜面の上部に位置し、A1ｂ窯を切って構築されている。半地下式窖窯である。煙道部はすでに削平されて残存しない。また、灰原は窯が急斜面に位置するため流失したものか検出されなかった。

〔焼成室〕　平面形はやや胴の張る長方形、残存部の断面形は半楕円形である。壁は地山にスサ入り粘土を貼って構築し、一部は剥落しているものの、大部分には還元面が残っている。床は淡黄色土を貼っているが、淡い青灰色に変化している。約 23°傾斜する。なお、壁及び床の構築は、床→壁の順である。床面及び天井の剥落層（No.2）下には、焼台として使われていた須恵器甕・窯道具が散乱している。

〔燃焼室〕　平面形は長方形、残存部の断面形は半円形である。焼成室との境の区分は明瞭ではなく、焼成室から燃焼室にかけて徐々に狭くなる。壁は地山にスサ入り粘土を貼って構築しているが、1ｂ号窯と重複する部分は1ｂ号窯を埋めた後に行っている。左側壁には須恵器甕の破片が埋め込まれている。壁面は熱によって溶解、凝固している。床は壁と同様に構築されている。熱を受けた痕跡は顕著でない。

〔焚口部〕　特に施設はみられない。

〔前庭部〕　明確な作り出しはみられない。

〔中軸線の方向〕　Ｓ－79°－Ｅ

〔窯の規模〕全体　－長さ 8.8m　最大幅 1.2m　確認面からの最大深 0.6m

焼成室－長さ 5.4m　幅　1.2m　残存高 0.4m

燃焼室－長さ 3.4m　幅　1.1m　残存高 0.5m

焚口部－　幅　1.1m　残存高 0.1m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 8 図 1・2）

1・2 ともに椀形である。1 は口縁部に比して底部がかなり小さめで、体部下半がやや丸みをもち、上半は直線的になる。底部に回転糸切り痕を残し、再調整は施されない。2 は体部下位に稜をもつもので、稜から上はやや外反気味になる。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。

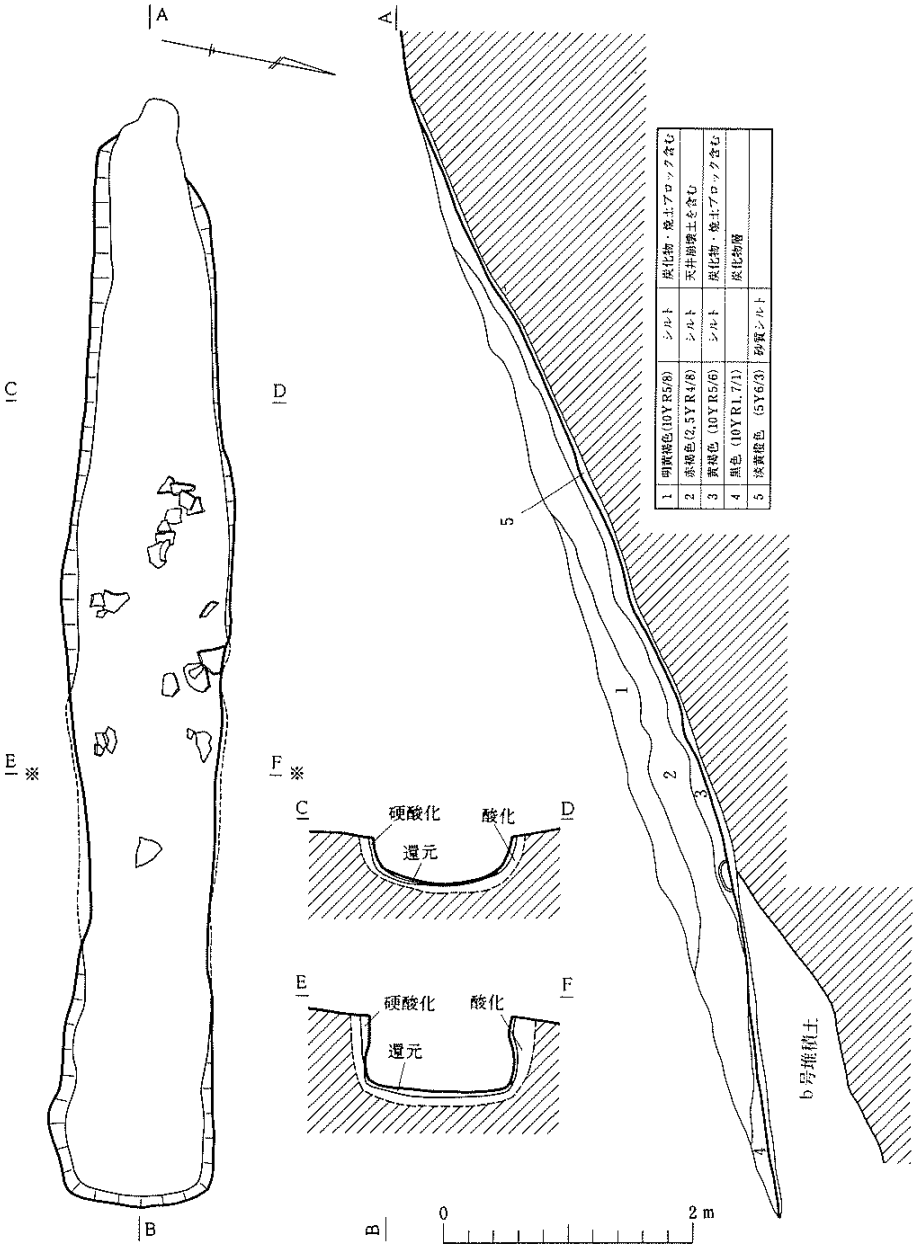
椀（第 8 図 3）

高台が付くもので、体部下端が強く屈曲し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。

高台は厚手で、特に下端部が反り気味に肥厚する。底部には回転ヘラケズリが施されている。

甕（第８図５）

肩の張る体部から頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が大きく外反する。口縁端部は外側の上下端を引き出して口縁帯をつくり出している。外面の口頸・体部には平行叩き目がみられ



1	明黄褐色(10YR5/8)	シルト	炭化物・焼土ブロック含む
2	赤褐色(2.5YR4/8)	シルト	天井崩壊土を含む
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物・焼土ブロック含む
4	黒色 (10YR1.7/1)		炭化物層
5	淡黄橙色 (5Y6/3)	砂質シルト	

第７図　Ａ１ａ号窯跡

るが、口頸部ではその後のナデ調整によって一部がすり消されている。

蓋・窯道具（第８図４）

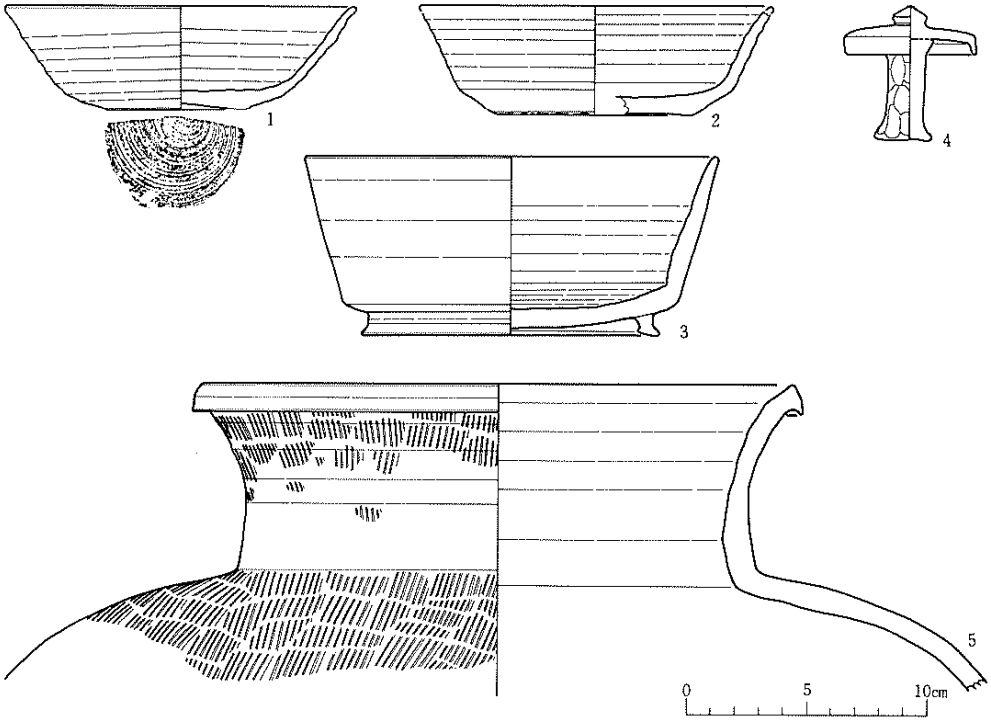
蓋と焼台とが焼成時に貼り付いたものである。蓋は小形の壷蓋で、天井部はわずかに丸みをもち、中央が突出するつまみが付く。体面全体に自然釉がかかっている。焼台は手づくねによって作られたもので、断面が円形の棒状を呈する。

A1b号窯跡

A地区東向き急斜面の上部に位置し、焼成室の上部がA1a号窯に切られている。半地下式窖窯である。煙道・灰原は検出されなかった。

〔焼成室〕　平面形はやや胴の張る長方形、残存部の断面は半円形である。壁は赤く焼けている。部分的にスサ入り粘土が付着、本来は全面スサ入り粘土で構築したと思われる。床は熱を受けた痕跡が顕著でない。約35°傾斜する。

〔燃焼室〕　平面形はやや胴が張る長方形、残存部の断面形は半円形で、焼成室との境は徐々



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	前庭部貼床	須恵器坏	ⅡGⅱ	14.6	5.8	4.3	A1a-1	11-1
2	堆積土1層	須恵器坏	ⅡBⅰ	14.6	8.0	4.6	A1a-5	
3	燃焼室貼床	須恵器椀	ⅠB	17.2	12.4	7.5	A1a-2	

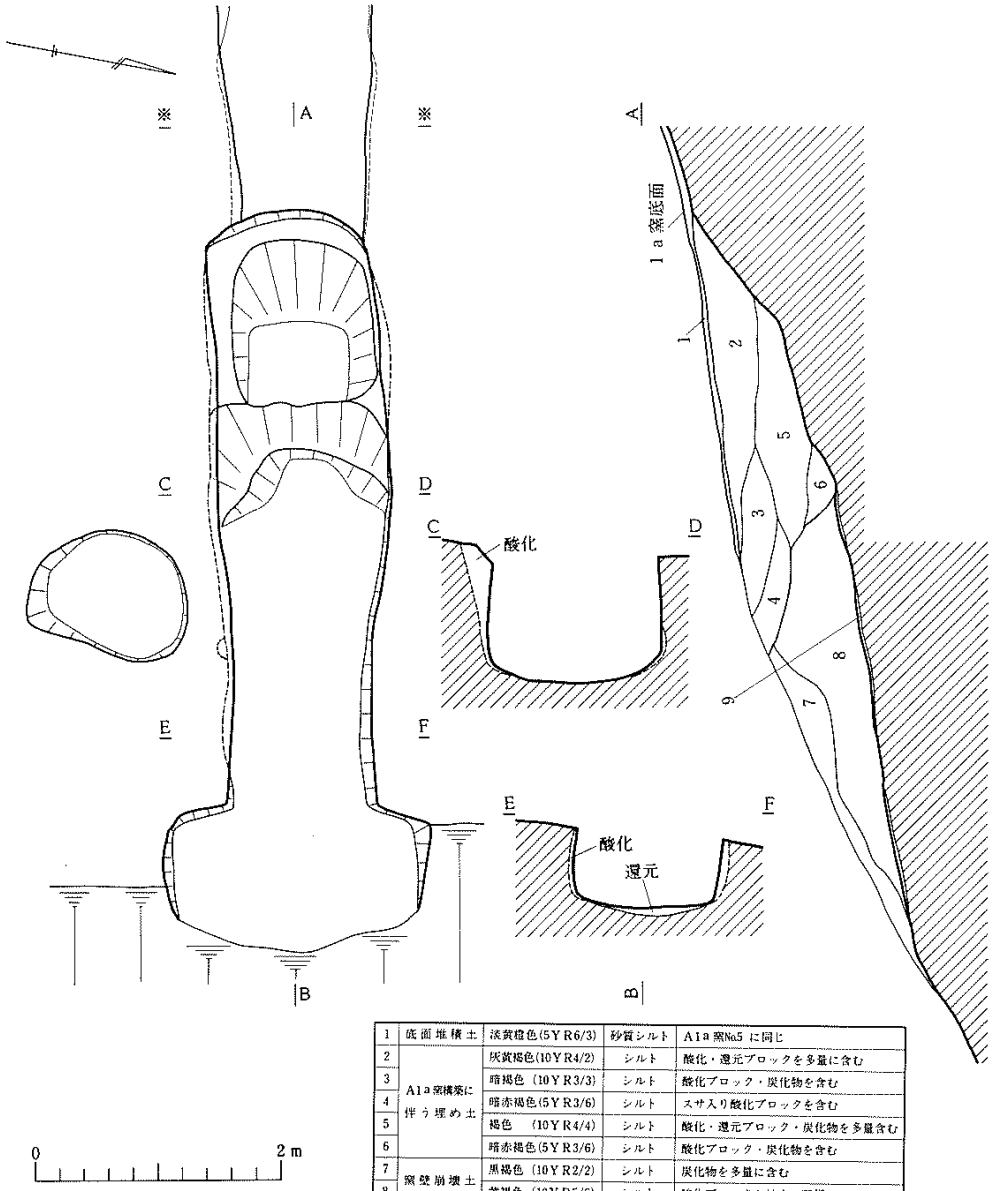
No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
4	堆積土3層	窯道具		5.4	——	2.0	A1a-4	11-5
5	堆積土3層	須恵器甕	Ⅱ	24.5	——	——	A1a-3	11-4

第８図　Ａｌａ号窯跡出土遺物

に狭くなっている。壁は赤化しており、一部にスサ入り粘土が付着している。床は黒褐色土（No.9）を地山に貼付して床にしている。炭化物層はみられない。

〔焚口部〕　特に施設はみられない。

〔前庭部〕　左右に掘り広げており、長方形である。



1	底面堆積土	淡黄橙色(5YR6/3)	砂質シルト	A1a窯No.5 に同じ
2	A1a窯構築に伴う埋め土	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	酸化・還元ブロックを多量に含む
3		暗褐色 (10YR3/3)	シルト	酸化ブロック・炭化物を含む
4		暗赤褐色(5YR3/6)	シルト	スサ入り酸化ブロックを含む
5		褐色 (10YR4/4)	シルト	酸化・還元ブロック・炭化物を多量含む
6		暗赤褐色(5YR3/6)	シルト	酸化ブロック・炭化物を含む
7	窯壁崩壊土	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物を多量に含む
8		黄褐色 (10YR5/6)	シルト	酸化ブロックと粘土の互層
9	貼り床	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物を多量に含む

第9図　A1b号窯跡

〔中軸線の方向〕　S－79°－W

〔規模〕全体　－長さ 6.2m　　確認面からの最大深　1.2m

焼成室－長さ 2.5m　　幅　1.3m　　残存高　1.3m

燃焼室－長さ 2.4m　　幅　1.4m　　残存高　1.2m

焚口部－　　幅　1.1m　　残存高　0.5m

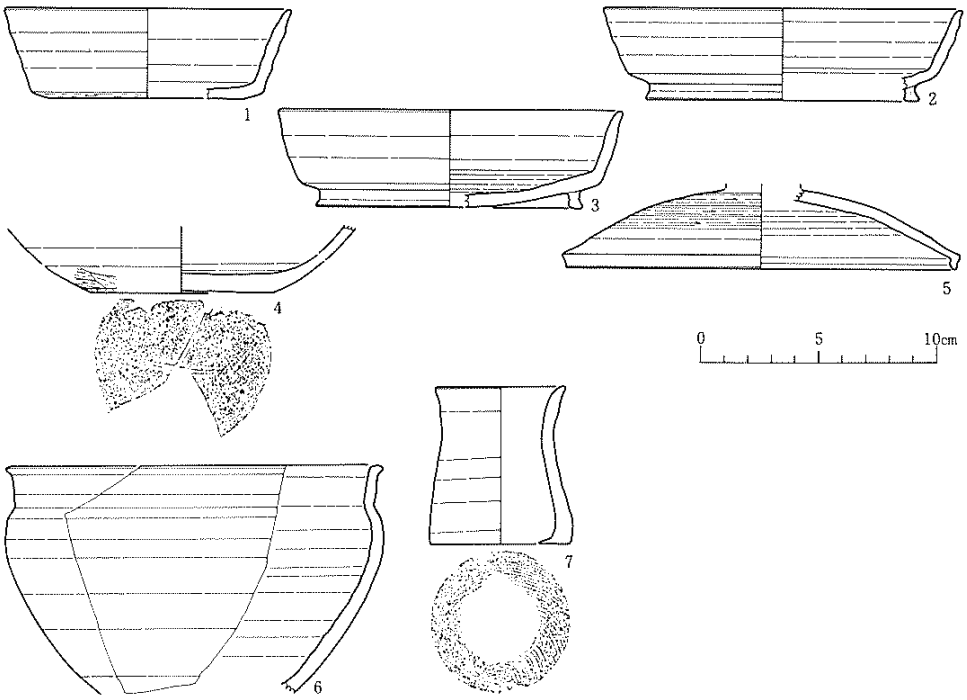
前庭部－長さ 1.3m　　幅　2.0m　　残存高　0.5m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 10 図 1・4）

1 はやや小形の椀状で、体部下端が強く屈曲し、体部から口縁部にかけて直線的かつ急角度で立ち上がる。底部には回転ヘラケズリが施されている。4 は器形が明確でないが、体部はやや丸みをもち、底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリが施され、底部に「×」とヘラ書きされている。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版
1	堆積土10層	須恵器坏	II D	12.2	8.2	3.8	A1 b-1	
2	堆積土6層	須恵器高台付坏	II C	15.2	11.6	3.9	A1 b-7	
3	堆積土7層	須恵器高台付坏	II C	14.6	11.2	4.2	A1 b-2	11-2
4	堆積土10層	須恵器坏		------	7.7	------	A1 b-5	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	堆積土10層	須恵器蓋	II	16.5	6.0	6.7	A1 b-4	
6		須恵器鉢	IV	16.1	体16.1	------	A1 b-3	
7	堆積土6層	窯道具		5.5	------	------	A1 b-6	11-6

第10図　Ａｌｂ号窯跡出土遺物

高台付坏（第 10 図 2・3）

ともにやや深めのもので、体部下端が強く屈曲し、口縁部にかけて急角度で立ち上がる。高台は厚手に仕上げられ、特に下端部が反り気味に肥厚する。3 は底部に回転ヘラケズリが施されるが、2 では欠損しており不明である。

蓋（第 10 図 5）

器高が高く、天井部がやや丸みをもつ。口縁部は下方に折れ曲がり、縁帯が形成されている。天井部上半には回転ヘラケズリが施されている。

鉢（第 10 図 6）

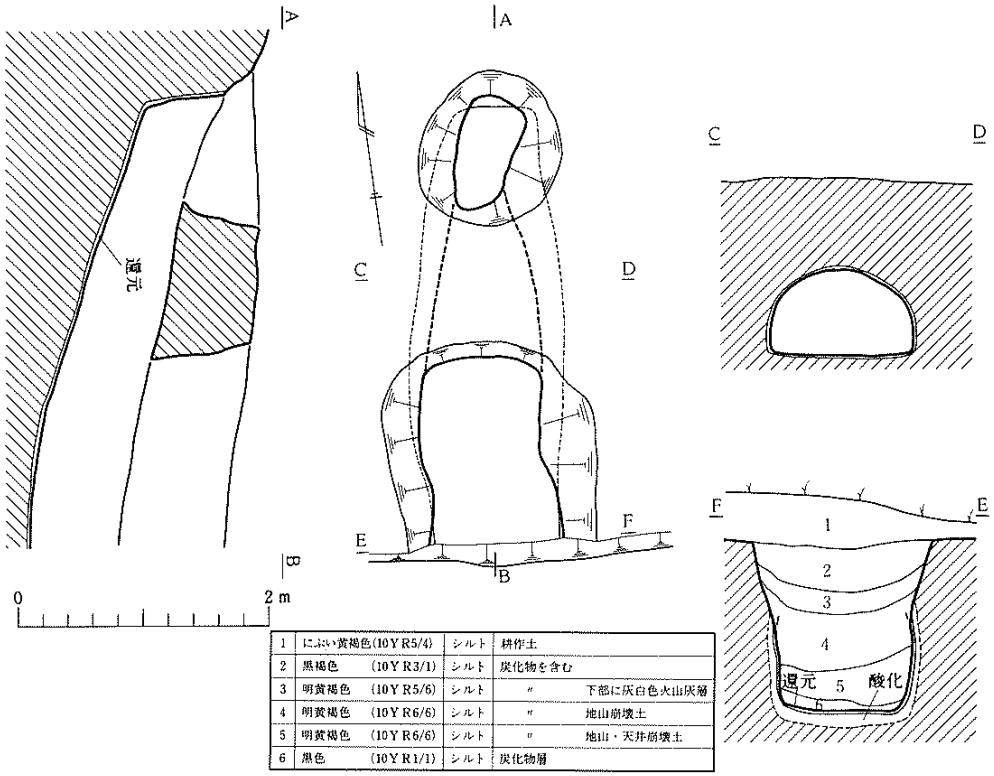
頚部がくびれて口縁部が短く外反する。口縁上端が平坦で、その外側がわずかに張り出す。

窯道具（第 10 図 7）

焼台の一種で、形態は筒形に近いが、中位よりやや上の部分がくびれる。底部は中央に焼成前の穿孔がみられ、その周囲には回転糸切り痕を残している。

A2 号窯跡

A地区南向き緩斜面中位に位置する地下氏窖窯である。煙道・焼成室が確認され、燃焼室な



1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	耕作土	
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物を含む	
3	明黄褐色 (10YR5/6)	シルト	〃	下部に灰白色火山灰層
4	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	〃	地山崩壊土
5	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	〃	地山・天井崩壊土
6	黒色 (10YR1/1)	シルト	炭化物層	

第11図　A 2 号窯跡

どは調査範囲外に続く。焼成室の煙道寄りに天井が残存している。

〔煙道〕　窯の先端にあり、平面形は隅の丸い長方形で、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面は還元している。

〔焼成室〕　平面形は長方形で、煙道でわずかにくびれ、断面は半円形を成す。床面は平坦で、約19°傾斜する。壁・床は還元している。床面上には須恵器片・礫が分布する。焼台とし使用されたものかもしれない。

〔中軸線の方向〕　N－24°－W

〔規模〕　全体－残存長3.5m　　確認面からの深さ1.5m

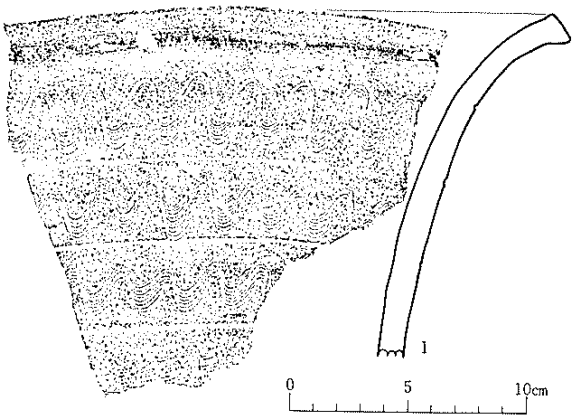
煙道－径0.8m

焼成室－残存長2.7m　幅1.2m　残存高0.7m

〔出土遺物〕

須恵器甕（第12図1）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は下端を引き出している。口頸部外面には平行沈線と櫛描き波状文が描かれている。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器甕	I	——	——	——	A2-1	11-3

第12図　A 2号窯跡出土遺物

B2号窯跡

B地区東端部、西向き斜面の中腹に位置する地下式窖窯である。ピット・土壙・溝に第二次床面が切られている。

燃焼室と前庭部付近にはB3 号窯あるいはその逆側の調査範囲外から流入したと思われる焼土・炭化物を含む土が堆積しており、本遺構はそれらを除去した面で確認された。天井の全てと側壁（焼成室の大半、燃焼室の一部）が崩落、他は保存良好である。

〔煙道〕　残存しないが、焼成室奥壁から約50㎝手前がくびれており、くびれから奥に煙道があったと推定される。

〔焼成室〕　平面形は燃焼室との境がくびれる左右対称の胴張り形である。壁は丸みをもって立ち上がる。還元層は2～3㎝と薄く、表面は青灰色で硬化している。床面は2枚ある。新しい面を第二次床面、古い面を第一次床面とする。いずれも平坦で、約25°傾斜する。第二次床面は灰層の上面を床とし、中央がわずかに窪む浅い皿状を成す。表面は青灰色で硬化している。焼成室のほぼ中央にこの第二次床面を横に切り窯壁にくいこむ溝(幅10㎝・深さ15㎝)と土壙

（1×1.1m・深さ 15 ㎝）・ピット（62×42 ㎝・深さ 53 ㎝）が窯の天井崩落以前に作られている。第一次床面は第二次床面から 10～25 ㎝下にある。第二次床面より若干幅が狭い。還元層は薄く青灰色で硬い。燃焼室との境に舟底状のピットがある。第一次床面と第二次床面との幅の違いは、窯の使用期間の途中で崩れた壁を補修せずにそのまま使ったためと思われる。

〔燃焼室〕　平面形は左右側壁が平行する長方形で、焼成室との境はゆるやかにくびれ、くびれ部の第一次床面は舟底状に窪む。壁は垂直・直線的に立ち上がり、表面は黒灰色で硬化している。床は第二次床面が黒色硬化面で、多少の凹凸がある。第一次床面は青灰色の還元面になっており、硬い。第二次床面の焚口近くでは床直上の炭化物層の上にスサ入り粘土のブロックが少量みられた。

〔焚口部〕　床はやや低くなり、左壁に接してピット（36×22 ㎝・深さ 8 ㎝）がある。

〔前庭部〕　焚口部手前から左右に広がり、平面形は隅が角ばる長方形である。左壁の一部は熱が及んで赤化している。床は砂質で軟らかい。

排水溝は焚口部のピットから前庭部左側を通り、斜面下方に続く。幅 20～50 ㎝・深さ 20～40 ㎝・長さ 6.1mである。また、この排水溝の左側にもこれを切って溝が掘られている。幅 20～30㎝、長さ 5.5mである。

〔灰原〕　斜面下に炭化物・灰を含む層があり、灰原と思われる。しかし、この灰原は第 3・4 号窯とを含めた範囲の下方にあたり、いずれのものか明確でない。

〔中軸線の方向〕N－74°－E

〔規模〕全体　－長さ 11.0m　　確認面からの深さ 2.3m

焼成室－長さ	5.5m	幅	第一次床面 1.8m	残存高	第二次床面　1.0m
			第二次床面 2.5m		第二次床面　0.8m
燃焼室－長さ	2.7m	幅 1.2m	残存高 1.6m		
焚口部－		幅 1.1m	残存高 0.6m		
前庭部－長さ	3.3m	幅 2.0m	残存高 1.0m		

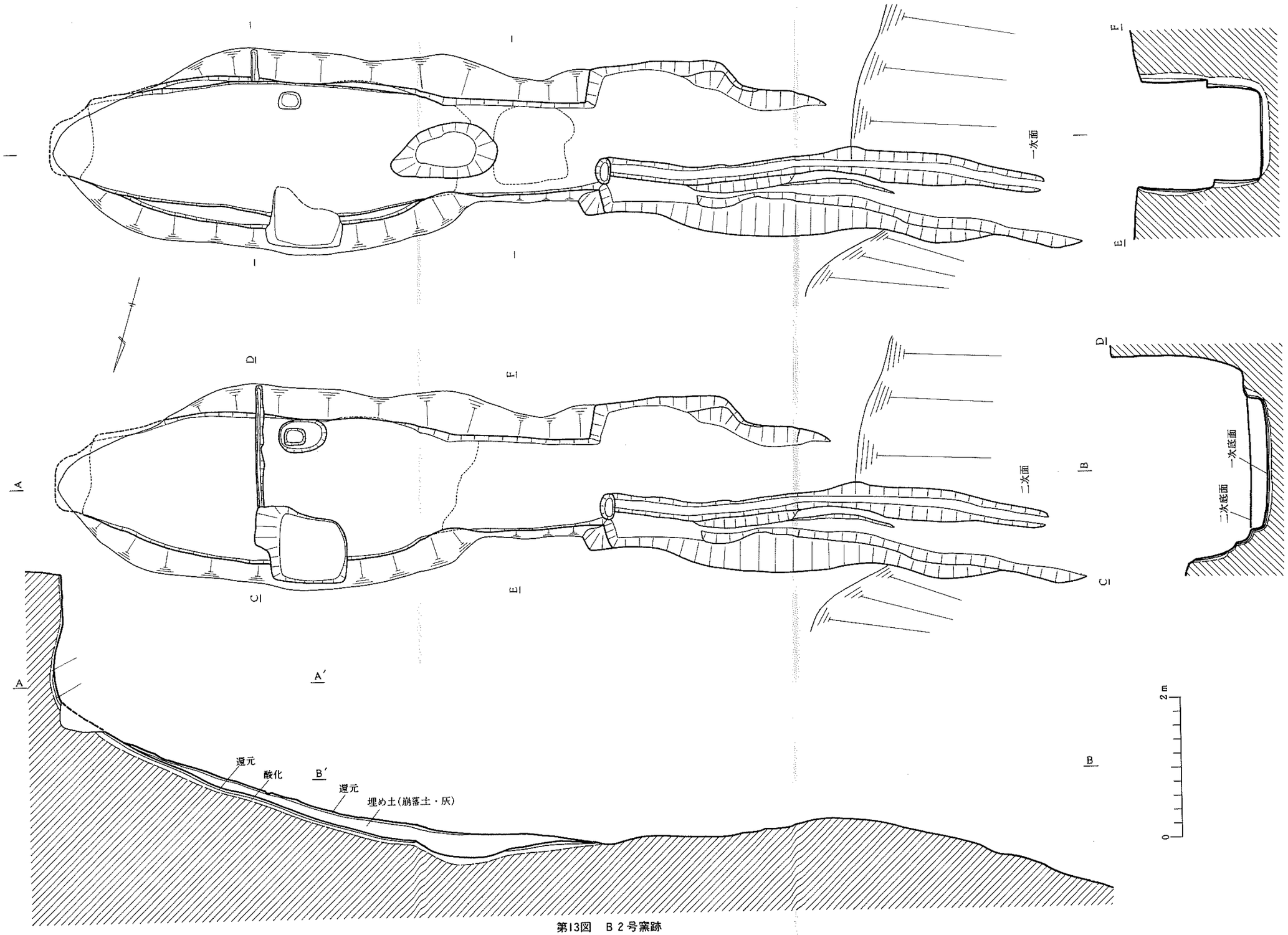
〔出光遺物〕

須恵器

坏（第 14 図 1～15）

1～9 は浅い皿状を呈する。このうち 1～6･9 は体部から口縁部にかけて外反ぎみなのに対し、7・8 はやや丸みをもって立ち上がる。また 1～8 では底部の周辺近くが浮き上がり丸底風になる。これらはいずれも底部全体に回転ヘラケズリが施される。

10～15 は椀状のものである。このうち 10～13 は体部中位に稜が付く。稜から下はやや丸みをもち、稜から上は外反ぎみに立ち上がる。10～12 の底部には回転糸切り痕、13 には静止糸切り



第13図　B 2 号窯跡

痕がみられ、再調整は施されていない。14・15 はやや小形で、体部から口縁部にかけては、14 は丸みをもって、15 は直線的に立ち上がる。ともに底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

高台付坏（第 14 図 16〜18）

14 は浅い皿状を成す。体部下位に丸みをもち、上半が短く直線的に立ち上がり、短い高台が付く。17・18 はやや深めのものである。体部下端が強く屈曲し、口縁部にかけて急角度で立ち上がる。「ハ」字状に開く高台が付く。これらは底部もしくは底部〜体部下位に回転ヘラケズリが施される。

盤（第 15 図 1〜4）

1・2 は高台の付く浅めの盤である。体部下端にゆるい屈曲をもち、体部から口縁部までやや丸みをもって立ち上がる。3・4 は無台の盤で、ともに浅く、体部から口縁部にかけて丸みをもって短く外傾する。3 では体部と底部との境にくびれ状の沈帯がある。いずれも底部に回転ヘラケズリが施される。

蓋（第 14 図 19）

ゆがみが強く、形状は明確でないが、器高の低いものと思われる。肉厚で口縁部は短く下方に折れ曲がり、外側に平坦な縁帯がつくり出される。つまみは中央がやや突出し、周縁との間は浅くくぼむ。天井部には回転ヘラケズリが施される。

鉢（第 15 図 6）

体部は丸みをもって立ち上がり、頚部でくびれて口縁部が短く外反する。

短頚壷（第 15 図 7）

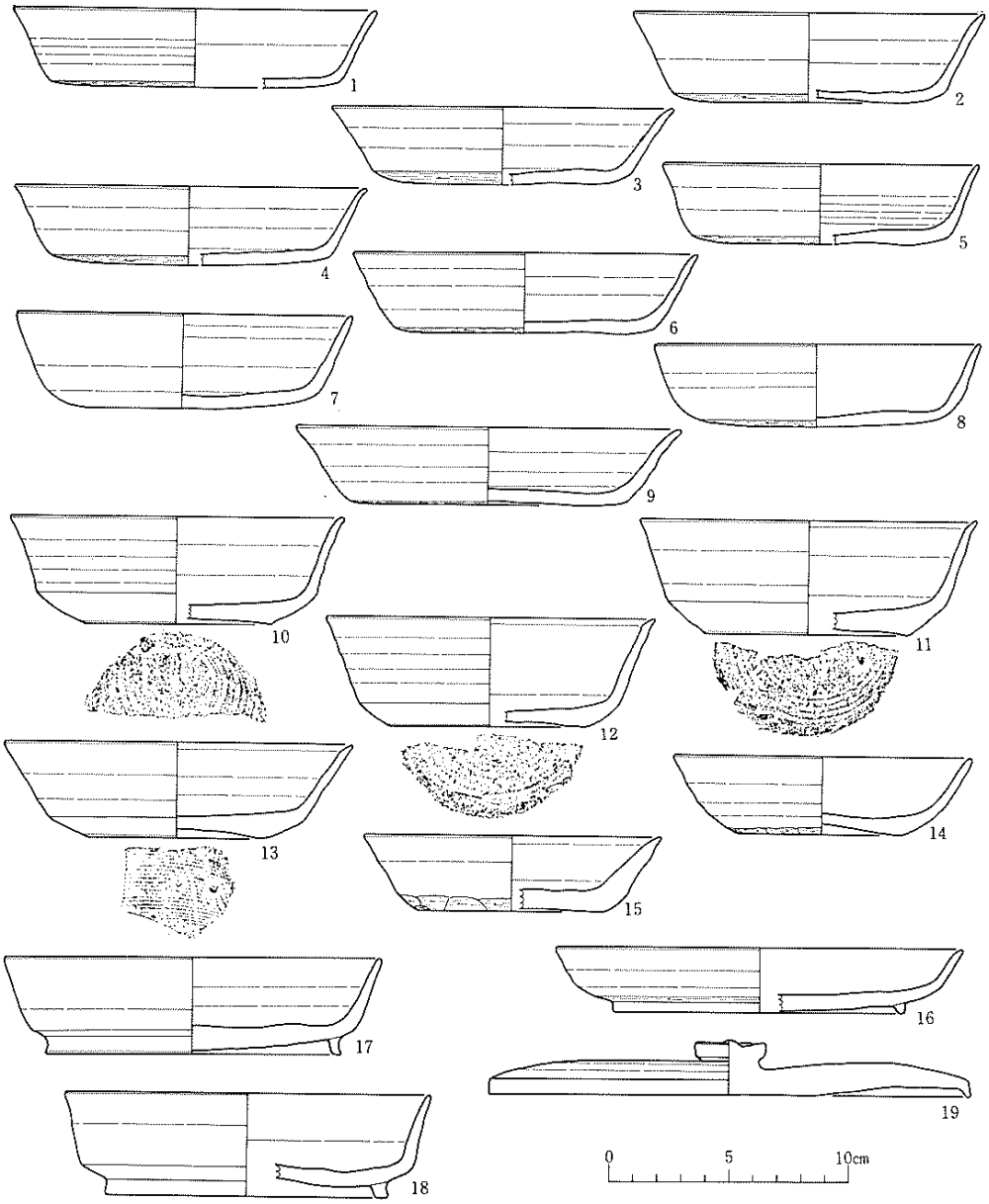
なだらかな丸みをもつ肩部から口縁部が短く直立する。端部内面は削がれたように仕上げられている。

甑（第 15 図 8）

器形は底部から口縁部までの立ち上がりが直立気味で筒状を呈し、体部中位上寄りの両側に舌状の把手が付く。底部は中央に円孔があり、その周囲に紡錘形の孔が 4 個穿たれている。外面体部に浅く幅の広い横位沈線がほぼ等間隔に 4 本引かれており、沈線より下位には平行叩き目・ヘラケズリが施されている。内面はほぼ全面がナデ調整されているが、体部下端にのみヘラケズリがみられる。

甕（第 15 図 5・第 16 図 1〜7）

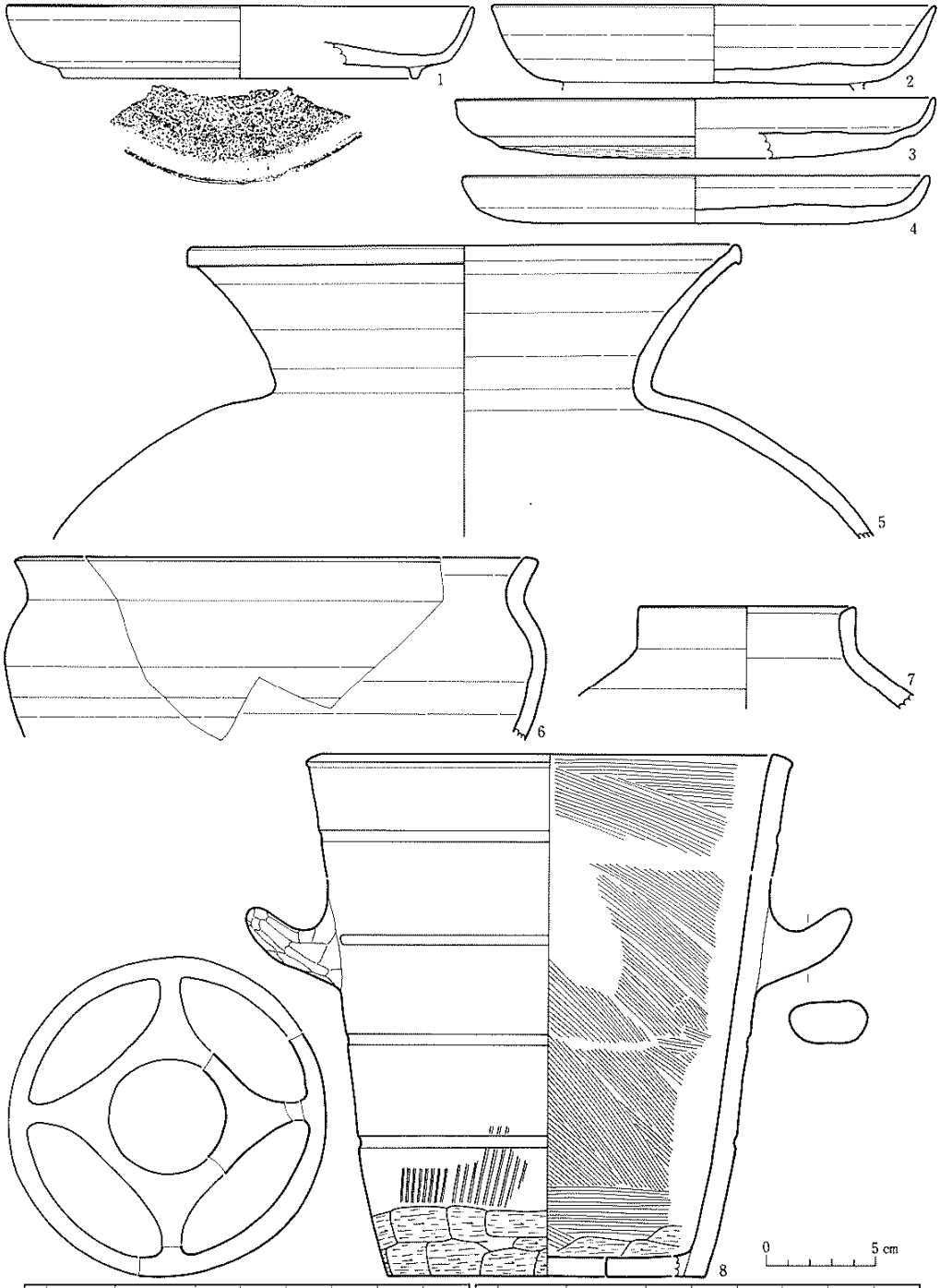
いずれも口縁部が長く、大きく外反するもので、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は第 16 図 1・2 が上下端、同 5・6 が上端、第 15 図 5・第 16 図 3・4・7 が下端を引き出



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器坏	ⅠB	15.2	——	3.3	B2-5	
2	床直上	須恵器坏	ⅠB	14.6	——	3.7	B2-4	
3	堆積土1層	須恵器坏	ⅠB	14.3	——	3.3	B2-3	
4	堆積土1層	須恵器坏	ⅠB	14.6	——	3.3	B2-2	11-8
5	堆積土1層	須恵器坏	ⅠB	13.2	——	3.4	B2-15	
6	堆積土1層	須恵器坏	ⅠB	14.4	——	3.4	B2-14	11-7
7	堆積土1層	須恵器坏	ⅠD	14.0	——	4.0	B2-1	
8	溝	須恵器坏	ⅠD	13.6	——	3.5	B2-6	
9	灰原	須恵器坏	ⅠAi	16.0	11.4	3.3	B2-13	
10	溝	須恵器坏	ⅡBiv	13.9	7.8	4.5	B2-7	11-9

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
11	堆積土1層	須恵器坏	ⅡBiv	14.1	8.5	4.8	B2-8	11-10
12	堆積土1層	須恵器坏	ⅡBiv	13.8	8.2	4.6	B2-9	
13	焼成1次床	須恵器坏	ⅡBiii	14.6	7.2	4.0	B2-12	
14	溝	須恵器坏	ⅡHii	12.5	6.9	3.3	B2-10	
15	堆積土1層	須恵器坏	ⅡHii	12.4	7.8	3.2	B2-11	11-11
16	堆積土1層	須恵器高台付坏	ⅡB	17.0	12.2	2.7	B2-21	
17	溝	須恵器高台付坏	ⅡB	15.6	12.3	4.1	B2-19	11-12
18	溝	須恵器高台付坏	ⅠA	15.3	11.8	4.3	B2-20	
19	床面	須恵器蓋	1	20.1	——	2.3	B2-23	12-4

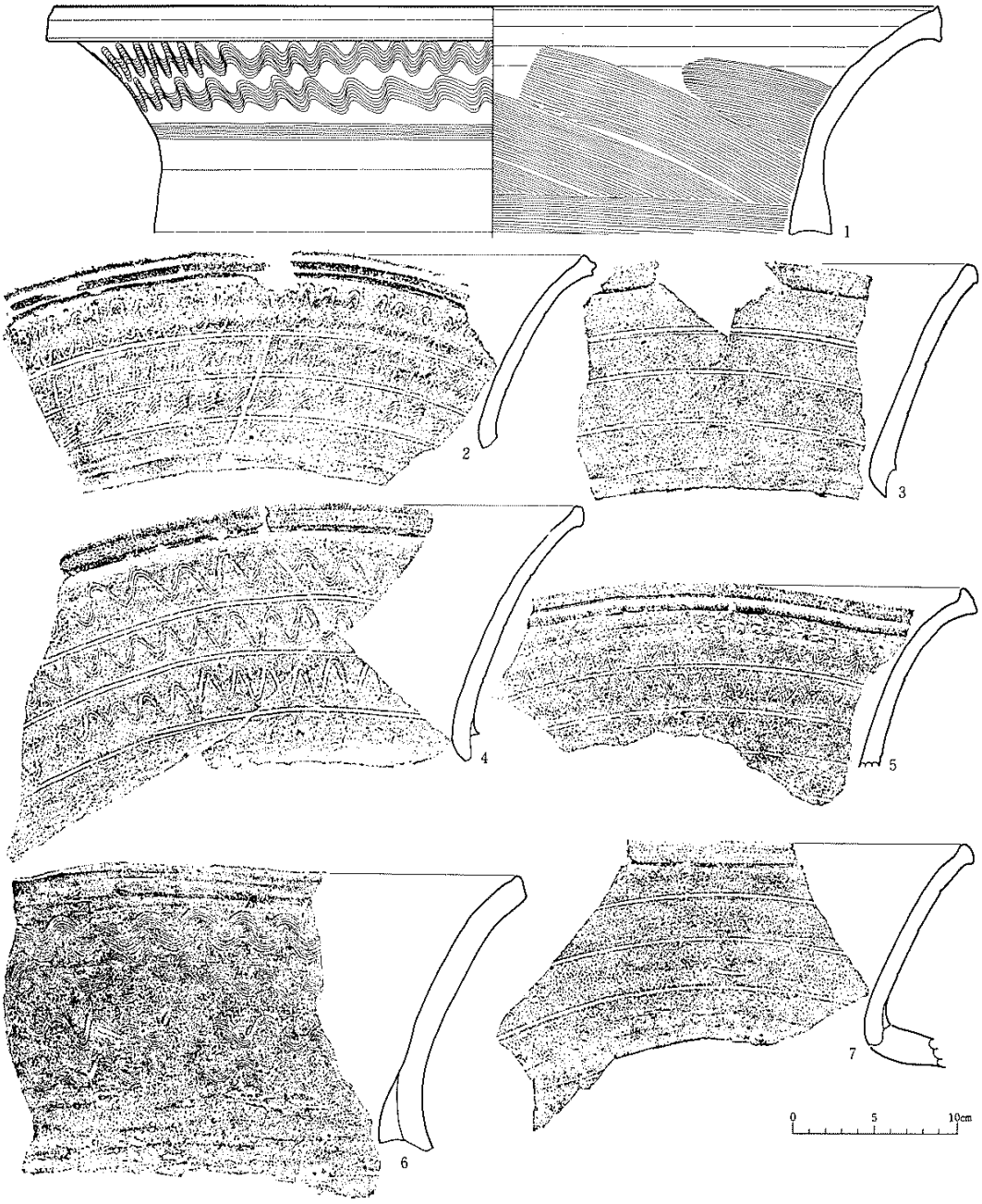
第14図　B 2 号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	溝	須恵器盤	ⅠA2	21.4	16.2	3.4	B2-22	12-3
2	堆積土1層	須恵器盤	ⅠA2	20.4	——	——	B2-17	12-2
3	堆積土1層	須恵器盤	ⅡA	22.0	——	2.8	B2-16	
4	堆積土1層	須恵器盤	ⅡA	21.4	——	2.2	B2-18	12-1

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	堆積土1層	須恵器甕	Ⅱ	25.0	——	——	B2-26	13-2
6	堆積土1層	須恵器鉢	ⅠA	23.9	体24.7	——	B2-24	12-5
7	堆積土1層	須恵器短頸壺		10.0	——	——	B2-25	12-6
8	溝	須恵器甑		22.2	14.5	24.0	B2-31	12-9

第15図　B 2 号窯跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器甕	I	54.4	—	—	B2-39	13-3
2	灰原	須恵器甕	I	—	—	—	B2-37	
3	灰原	須恵器甕	I	—	—	—	B2-29	12-8
4	堆積土1層	須恵器甕	I	—	—	—	B2-35	13-1

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	灰原	須恵器甕	I	—	—	—	B2-28	12-10
6	溝	須恵器甕	I	—	—	—	B2-30	12-7
7	灰原	須恵器甕	I	—	—	—	B2-33	

第16図　B 2 号窯跡出土遺物(3)

している。口頸部には平行沈線と櫛錨き波状文（2・4・5）、櫛描き波状文（1・6）、平行沈線（3・7）が描かれている。

B3 号窯跡

B地区東端部、西向き斜面の中腹に位置する地下式窖窯である。先端部は削平されており、煙道は残存しない。

〔焼成室〕　平面形は中央やや下寄りが膨らみ、幅を減じながら燃焼室へ続く。壁は良く還元され、硬化している。壁は内傾して立ち上がり、断面は半円形となっている。壁の立ち上がりから推定すると天井は先端に向かってしだいに低くなっていく。床は最大幅部の上と下で大きく異なる。上部は傾斜が急であり(約 35°)、幅 20 ㎝前後・深さ 5 ㎝程の浅い溝を横方向に 10 条以上掘り込み、階段状にしている。溝の間隔は斜距離で 30 ㎝程である。下部は傾斜がゆるやかで、階段はない。全体に還元され、硬化している。

〔燃焼室〕　平面形は焚口部でやや開きぎみになるが、壁がほぼ平行する長方形である。焼成室との境は焼成室が手前端でくびれる形である。特に施設はない。壁は垂直に立ち上がる。表面に薄く炭化物が付着している。床は平坦で、還元され、硬化している。床面に黒色の粘性土が貼り付いており、操業中に堆積した層と思われる。

〔焚口部〕　燃焼部の堆積土中にスサ入り粘土が若干みられたことから、窯の遮蔽の際に用いられたものとも考えられるが、特にこれと関連する施設はみられなかった。

〔前庭部〕　平面形は不整な方形の土壙状で、焚口部から左へ 40 ㎝程広がっているが、右側では燃焼部の壁がほぼ直線的に続く。壁はゆるやかに立ち上がる。床は皿状である。なお、前庭部には炭化物・灰を多く含む層が堆積しており、灰原となっている。層は上下 2 枚に大別される。

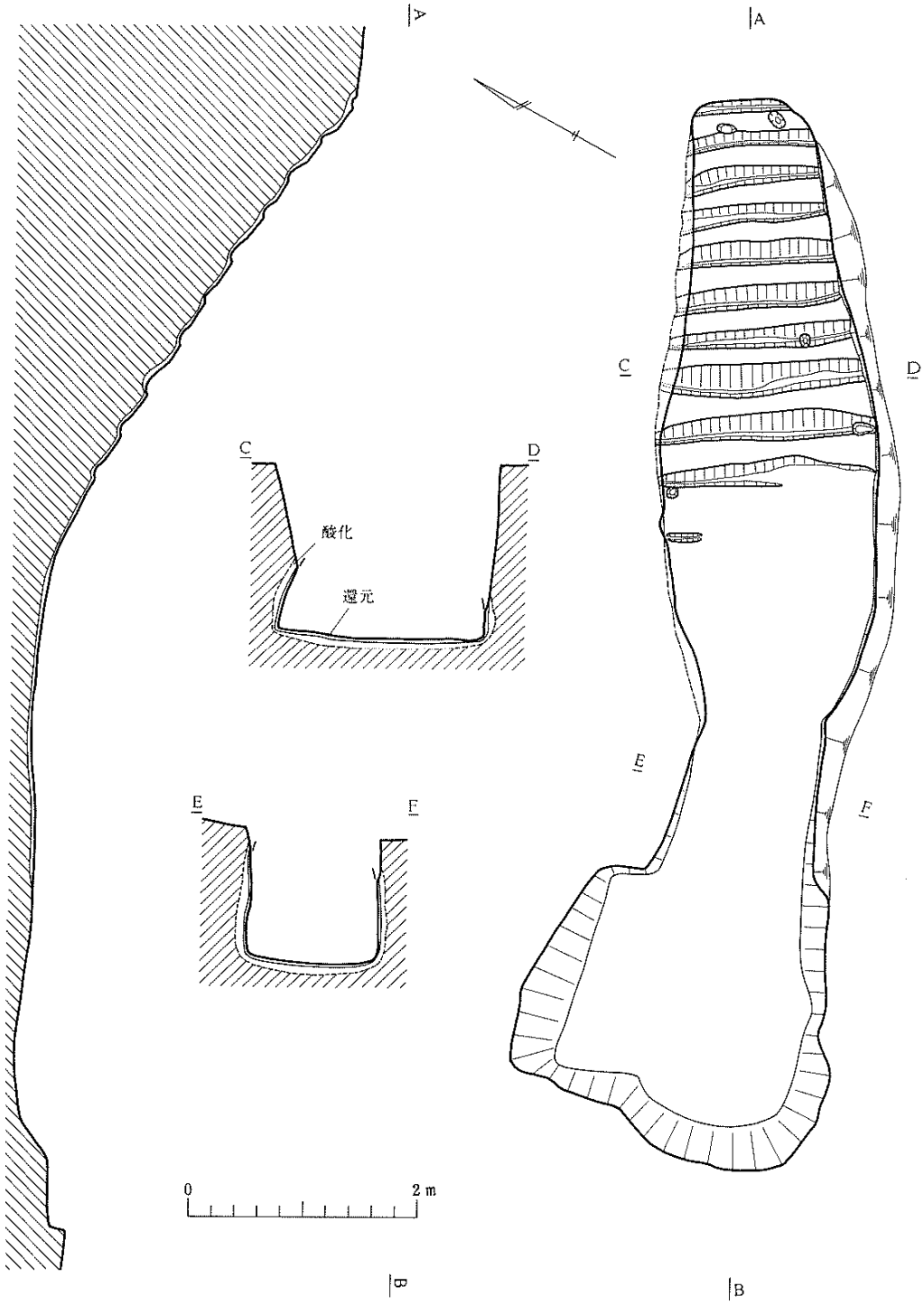
〔中軸線の方向〕　燃焼室が焼成室に対して左に折れ曲がっているため、両者の軸線が共通しない。より長い焼成室でみるとN－62°－Eである。

〔規模〕全体　－長さ 9.3m　　確認面からの深さ 1.7m
　　焼成室－長さ 5.4m　　幅 1.9m　　残存高 0.5m
　　燃焼室－長さ 1.9m　　幅 1.1m　　残存高 0.9m
　　焚口部－　　幅 1.3m　　残存高 0.7m
　　前庭部－長さ 2.0m　　幅 2.6m　　残存高 0.3m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 18 図 1～13）



第17図　B 3号窯跡

1〜12 は浅い皿状の器形である。1・6〜9・12 は体部から口縁部にかけて直線的もしくはやや外反ぎみに、2〜5・10 はやや丸みをもって立ち上がるもので、1〜3 は底部が周縁近くで浮き上がり、若干丸底風になる。11 は体部下位でゆるく内側に屈曲し、外面に弱い稜をもつもので、稜から上は直線的になる。これらの多くは底部あるいは底部〜体部下端に回転ヘラケズリが施されるが、5 のように手持ちヘラケズリのものや、11 のようにヘラ切り痕を残し、再調整が施されないものもある。

13 は椀状で、体部から口縁部にかけて丸みをもって外傾し、底部から体部中位に回転ヘラケズリが施される。

高台付坏（第 18 図 14〜21・第 19 図 1・2）

第 18 図〜第 19 図 1 は浅い皿状の器形である。体部下位に丸みをもち、上半がおおむね直線的に立ち上がり、短い高台が付く。高台の断面はいずれも逆台形に近い。第 19 図 2 は口径に比して器高が深めであり、体部下端が強く屈曲し、口縁部にかけて急角度で立ち上がる。短かめの高台で断面が長方形である。これらはいずれも底部に回転ヘラケズリが施される。

椀（第 19 図 6〜8）

6・7 は体部下端が屈曲し、口縁部まで直線的に立ち上がる。底部に手持ちヘラケズリが施される。8 は高台が付くもので、椀部の形態は 6・7 と同様である。高台は「ハ」字状に開き、断面が逆台形を呈する。底部には回転ヘラケズリか施される。

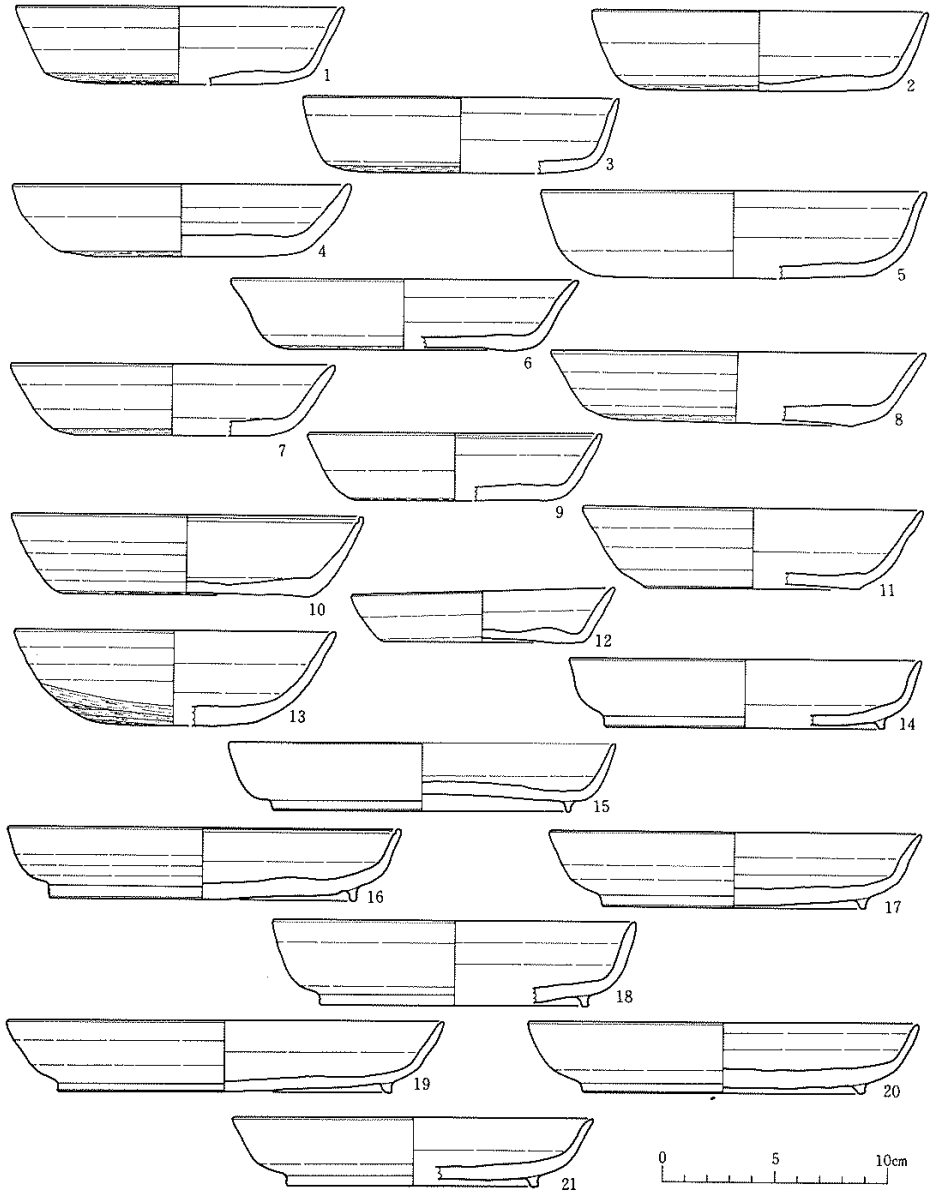
盤（第 19 図 3〜5・9〜17・第 20 図 1・2）

第 19 図 3〜5・9〜11 は無台である。3・4 は体部下端が屈曲し、口縁部にかけて直立気味に立ち上がるのに対し、5・9〜11 は体部下位にやや丸みをもち、体部上半は外傾する。いずれも底部には回転ヘラケズリが施される。

第 19 図 12〜17・第 20 図 1・2 は高台付である。このうち第 19 図 12〜15 は比較的浅めの盤であるが、12・13 では口径の割に高台が大きく、体部から口縁部にかけて外傾するのに対し、14・15 は高台が小さく、口縁部は直立ぎみとなる。第 19 図 16・17、第 20 図 1・2 はやや深めのもので、高台は前者と同様に大小の別がある。ともに体部は外傾するが、高台が大きいものでは底部が高台の下端より下方に張り出すのが特徴である。いずれも底部に回転ヘラケズリが施されている。

蓋（第 20 図 3〜20・第 21 図 1〜3）

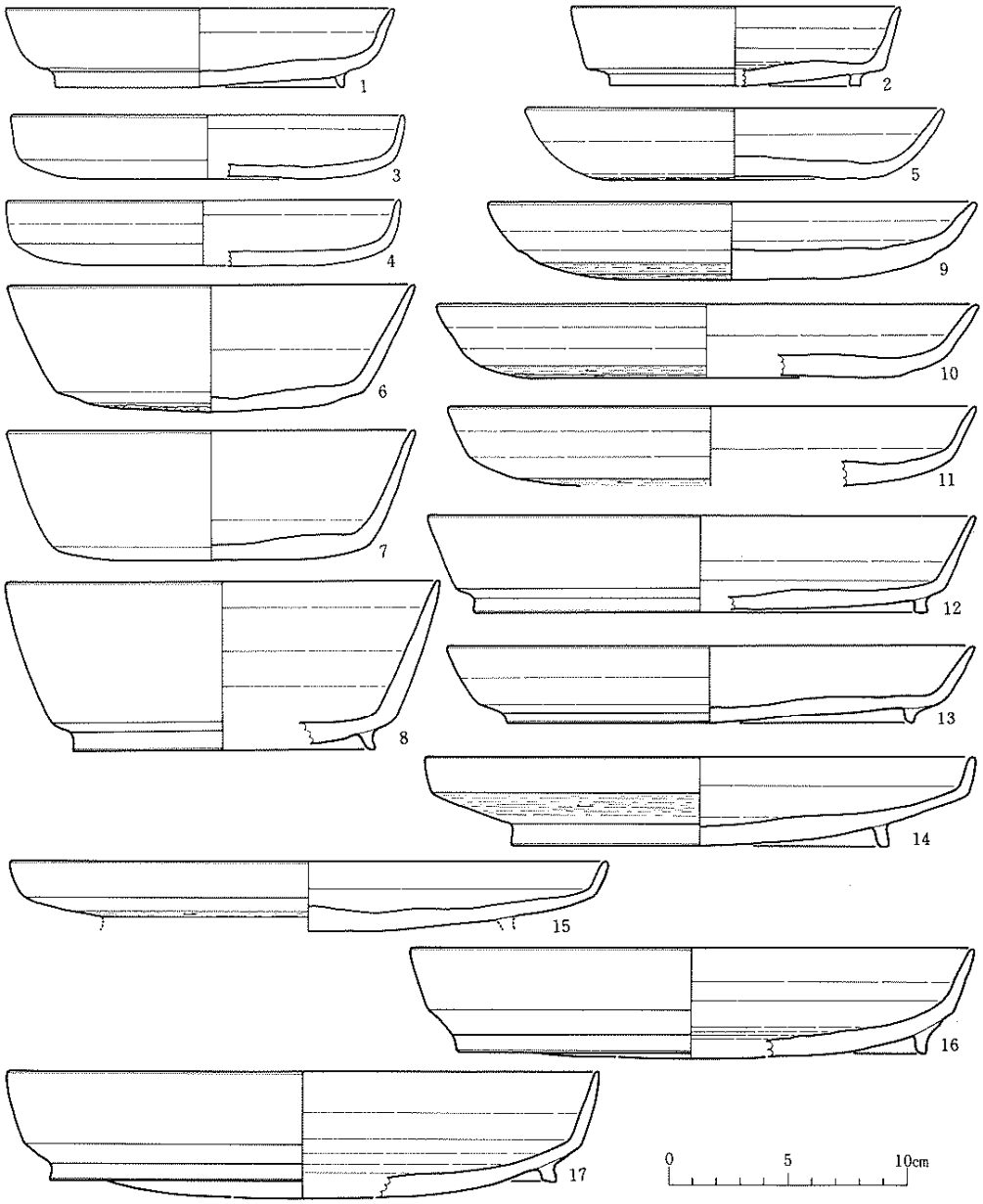
全体に天井部が平坦で、器高の低いものが多いが、第 20 図 13〜15・第 21 図 1 のように天井が内弯ぎみで、やや深めのものもある。いずれも口縁部は下方に短く屈曲し、外側に平坦な縁帯をつくり出す。つまみは第 20 図 3・7・9〜11・13 のように中央が突出するもの、第 20 図 5・8・第 21 図 1 のように中央がくぼむもののほか、第 20 図 4・6 のようにほぼ平坦なものなどが



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器坏	ⅠB	14.6	——	3.5	B3-6	
2	灰原	須恵器坏	ⅠD	14.8	——	3.6	B3-19	14-7
3	灰原	須恵器坏	ⅠD	14.0	——	(3.4)	B3-12	
4	灰原	須恵器坏	ⅠCⅰ	15.0	——	3.2	B3-7	14-5
5	堆積土1層	須恵器坏	ⅠCⅱ	17.0	——	3.9	B3-17	
6	灰原	須恵器坏	ⅠAⅰ	15.4	10.0	3.2	B3-25	
7	堆積土1層	須恵器坏	ⅠAⅰ	14.4	8.8	3.2	B3-9	
8	灰原	須恵器坏	ⅠAⅰ	16.6	10.3	3.2	B3-8	14-1
9	堆積土1層	須恵器坏	ⅠAⅰ	13.0	8.3	3.0	B3-11	
10	灰原	須恵器坏	ⅠCⅰ	15.6	10.6	3.6	B3-10	
11	灰原	須恵器坏	ⅠFⅲ	15.0	9.5	3.6	B3-18	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
12	灰原	須恵器坏	ⅠAⅰ	11.7	8.6	3.0	B3-13	14-8
13	堆積土1層	須恵器坏	ⅡF	14.2	——	4.2	B3-14	
14	堆積土1層	須恵器高台付坏	ⅠA	15.6	12.5	3.1	B3-27	
15	灰原	須恵器高台付坏	ⅠA	17.2	13.2	3.1	B3-28	
16	灰原	須恵器高台付坏	ⅠA	17.4	13.6	3.2	B3-26	
17	堆積土1層	須恵器高台付坏	ⅠA	16.4	11.7	3.3	B3-20	14-2
18	灰原	須恵器高台付坏	ⅠA	16.2	11.9	3.8	B3-21	14-12
19	床面	須恵器高台付坏	ⅠA	19.4	14.8	3.2	B3-29	
20	灰原	須恵器高台付坏	ⅠA	17.4	12.6	3.2	B3-23	
21	灰原	須恵器高台付坏	ⅠA	16.0	11.2	3.1	B3-22	14-10

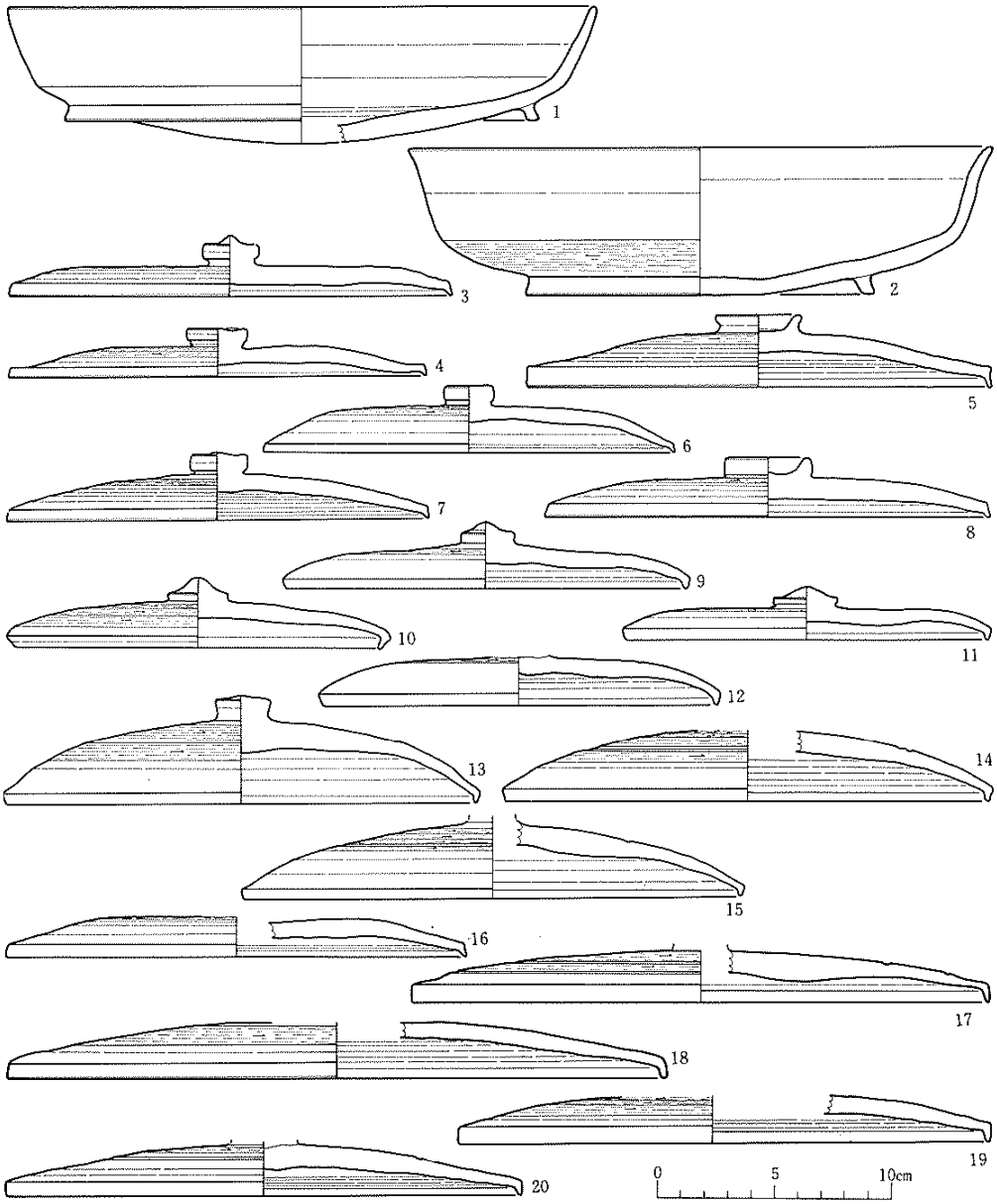
第18図　B 3号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器高台付坏	ⅡA	16.2	12.0	3.3	B3-24	
2	床面	須恵器高台付坏	ⅡB	13.7	10.6	3.3	B3-30	
3	床面	須恵器盤	ⅡB	16.4	——	2.7	B3-2	
4	灰原	須恵器盤	ⅡB	16.4	——	2.8	B3-1	
5	堆積土1層	須恵器盤	ⅡA	17.4	——	3.0	B3-5	14-3
6	灰原	須恵器椀	ⅡA2	17.0	——	5.4	B3-16	14-6
7	灰原	須恵器椀	ⅡA2	17.0	——	5.4	B3-15	14-4
8	灰原	須恵器椀	ⅠA	18.2	12.7	7.2	B3-31	
9	堆積土1層	須恵器盤	ⅡA	20.4	——	3.3	B3-3	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
10	堆積土1層	須恵器盤	ⅡA	22.6	——	3.1	B3-32	
11	灰原	須恵器盤	ⅡA	22.0	——	——	B3-4	
12	床面	須恵器盤	ⅠA1	22.8	19.0	4.1	B3-34	
13	堆積土1層	須恵器盤	ⅠA1	22.0	17.0	3.3	B3-33	
14	灰原	須恵器盤	ⅠA4	23.0	15.8	3.8	B3-38	
15	床面	須恵器盤	ⅠA4	25.0	——	——	B3-40	
16	灰原	須恵器盤	ⅠB1	23.6	19.6	(4.6)	B3-35	
17	床面	須恵器盤	ⅠB1	24.8	21.3	(5.3)	B3-36	

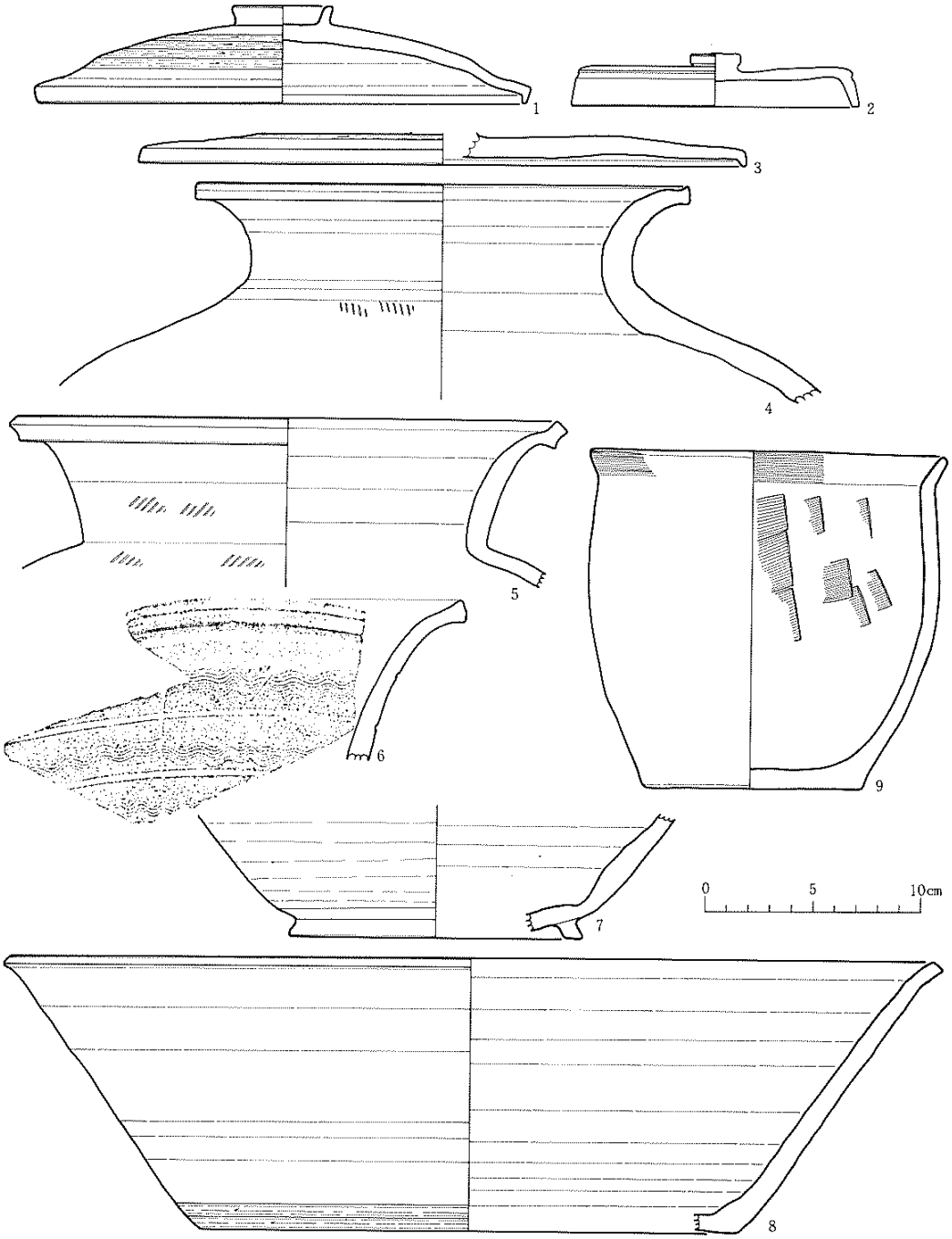
第19図　B 3号窯跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	床面	須恵器	盤	ⅠB1	25.0	20.2	(5.8)	B3-37	14-15
2	床面	須恵器	盤	ⅠB2	24.8	14.8	6.3	B3-39	
3	堆積土1層	須恵器	蓋	ⅡA	19.0	——	2.6	B3-45	14-11
4	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	17.8	——	2.1	B3-44	
5	堆積土1層	須恵器	蓋	ⅡA	19.8	——	2.7	B3-51	14-9
6	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	17.5	——	2.9	B3-48	
7	堆積土1層	須恵器	蓋	ⅡA	18.0	——	2.9	B3-42	
8	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	19.0	——	2.5	B3-49	14-13
9	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	17.1	——	2.8	B3-46	
10	床面	須恵器	蓋	ⅡA	15.6	——	3.0	B3-47	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
11	床面	須恵器	蓋	ⅡA	15.4	——	2.3	B3-54	
12	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	16.7	——	——	B3-55	
13	床面	須恵器	蓋	ⅡA	20.0	——	4.7	B3-43	
14	床面	須恵器	蓋	ⅡA	20.6	——	——	B3-58	
15	灰原	須恵器	蓋	ⅡA	21.2	——	——	B3-59	
16	堆積土1層	須恵器	蓋	ⅡA	19.6	——	——	B3-57	
17	床面	須恵器	蓋	Ⅰ	24.6	——	——	B3-61	
18	床面	須恵器	蓋	Ⅰ	28.2	——	——	B3-41	
19	床面	須恵器	蓋	Ⅰ	22.6	——	——	B3-60	
20	灰原	須恵器	蓋	Ⅰ	22.0	——	——	B3-56	

第20図　B 3 号窯跡出土遺物(3)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器蓋	I	22.5	------	4.6	B3-53	
2	堆積土1層	須恵器蓋	III	13.3	------	2.5	B3-62	14-4
3	灰原	須恵器蓋	I	28.2	------	------	B3-52	
4	灰原	須恵器甕	II	22.7	------	------	B3-66	
5	灰原	須恵器甕	II	25.7	------	------	B3-68	15-2

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
6	灰原	須恵器甕	I	------	------	------	B3-65	
7	灰原	須恵器壺		------	13.6	------	B3-64	
8	灰原	須恵器鉢	III	43.4	24.8	12.2	B3-67	15-3
9	堆積土1層	土師器甕	b	16.5	10.1	15.7	B3-63	15-1

第21図　B 3 号窯跡出土遺物(4)

あり、必ずしも斉一性はみられない。いずれも天井部に回転ヘラケズリが施される。

なお、第 21 図 2 は壷蓋である。天井部が平坦で、口縁部が下方に垂下する。つまみは中央がやや突出する。

甕（第 21 図 4〜6）

いずれも口頸部が長く、大きく外反して端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は 5 が上下端、4・6 が上端を引き出している。6 は平行沈線と櫛描き波状文が、5 の口頸〜体部と 4 の体部には平行叩き目がみられる。

鉢（第 21 図 9）

体部下端から口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁端部は平坦に仕上げられている。体部下端から底部には回転ヘラケズリが施されている。

壷（第 21 図 7）

体下部の破片である。外方にふんばった短い高台が付く。高台端部は平坦に仕上げられている。体部に回転ヘラケズリが施されている。

土師器

甕（第 21 図 9）

小形の甕である。器高はさほどなく、口径より小さい。体部中位にやや膨らみをもち、口縁部が短く外傾する。器面は磨滅が著しいが、口縁部内外面に横ナデ、体部内面にヘラナデ調整が認められる。

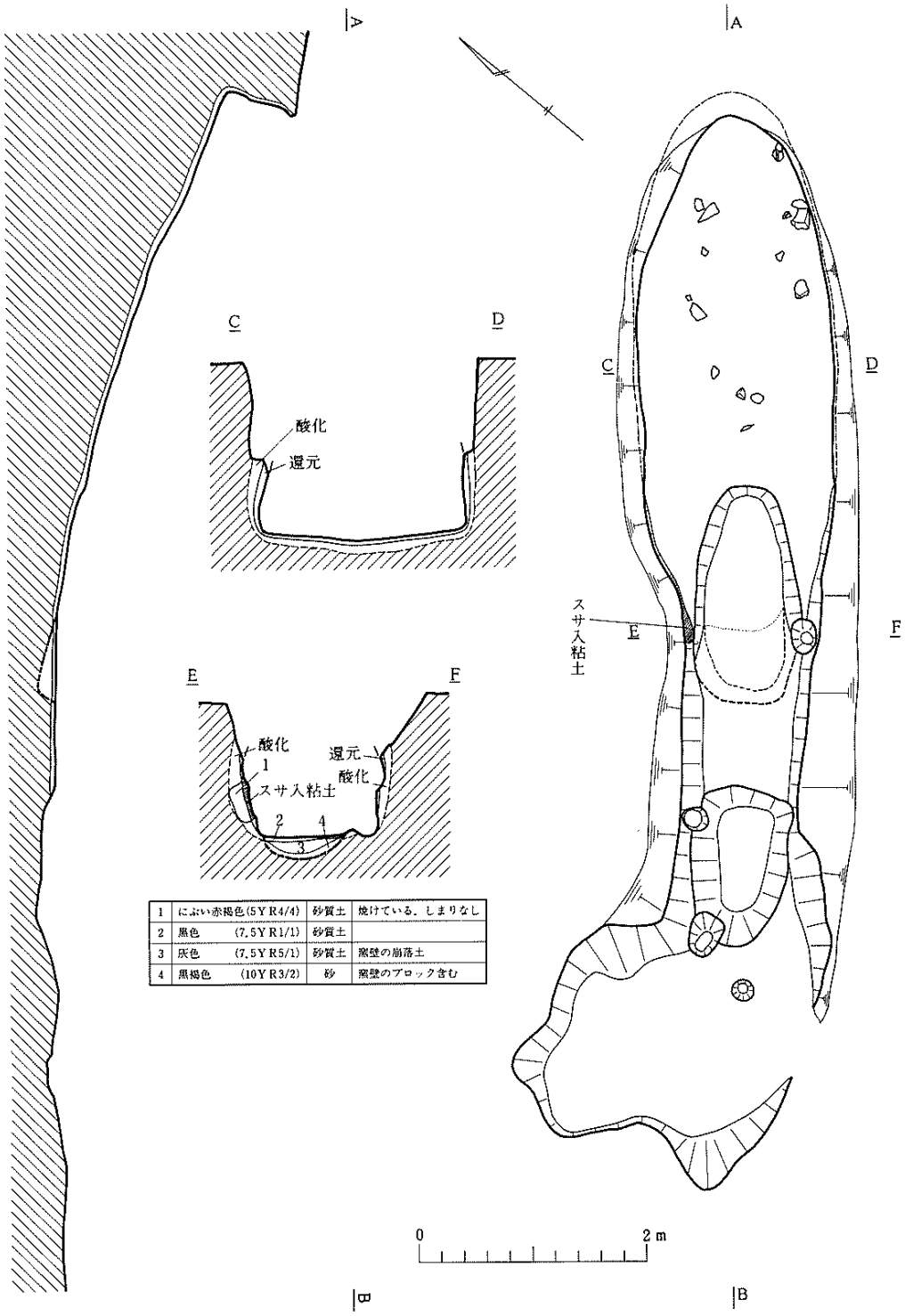
B4 号窯跡

B地区東端、西向き斜面の中腹に位置する。地下式窖窯である。上部は削平を受けているが、保存は比較的良好である。

〔煙道〕　焼成室の先端部に位置し、下方にいくぶん開きぎみになる。

〔焼成室〕　平面形は中央部が膨らむ胴張形で、先端部は丸くおさまる。壁は下端部が外傾、それから内弯し、崩れのためか不整形の部分が多いが、基本的には断面半円形と思われる。壁面は還元・硬化している。床面は平坦で、全体にほぼ同一の傾斜（約 15°）であり、還元・硬化している。燃焼室近くの床には炭化物を含む層が薄く堆積し、硬化・還元ともに弱い。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁が平行する長方形である。焼成室との境は明瞭にくびれ、楕円形の舟底状の落ち込みがある。左壁にはスサ入り粘土が貼りつけられて張り出し、右には壁に半分食い込んだピット（径 25㎝・深さ 5㎝）がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。還元され、硬化している。床は 2 面ある。第二次床面は第一次床面の上に少量の壁の崩壊土が堆積した後、舟底状ピットの手前半分まで崩落土の上にスサ入り粘土で貼り床をしている。



1	にぶい赤褐色(5YR4/4)	砂質土	焼けている、しまりなし
2	黒色 (7.5YR1/1)	砂質土	
3	灰色 (7.5YR5/1)	砂質土	窯壁の崩落土
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂	窯壁のブロック含む

第22図　B 4 号窯跡

〔焚口部〕　床は深さ 10 ㎝程の浅い皿状になり、内部は焼けていない。灰を掻きだしたためと思われる。他に左壁に半分くいこんだピット（径 20 ㎝・深さ 10㎝）がある。

〔前庭部〕　不整の土壙状で、底面も凹凸が激しい。壁はゆるやかに立ち上がる。また、炭化物と灰が多量に堆積しており、灰原となっている。

〔中軸線の方向〕　N－50°－E

〔規模〕全体　－長さ 9.6m　　確認面からの深さ 1.8m

焼成室－長さ 4.6m　　幅 1.8m　　残存高 0.5m

燃焼室－長さ 1.6m　　幅 0.8m　　残存高 0.7m

焚口部－　　幅 0.8m　　残存高 0.2m

前庭部－長さ 3.4m　　幅 2.2m　　残存高 0.2m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 23 図 1）

浅い皿状を呈し、体部から口縁部が外反気味に立ち上がる。底部には手持ちヘラケズリが施されている。

高台付坏（第 23 図 2）

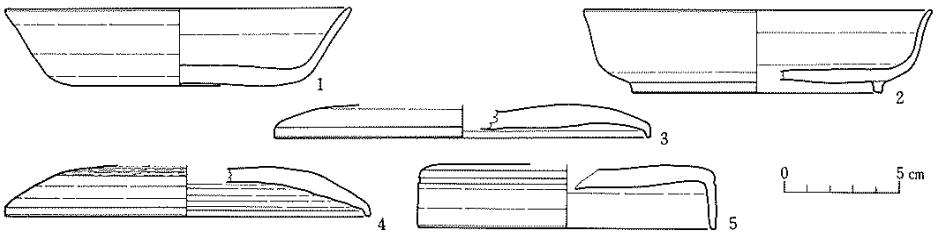
浅めのもので、体部下位に丸みをもち、口縁部はやや外反する。高台は下方に短くおさまり、断面は逆台形に近い。底部には回転ヘラケズリが施されている。

蓋（第 23 図 3～5）

3・4 は天井部が平坦で、口縁部が短く下方に折れ曲がり、外側に平坦な縁帯をつくり出す。天井部には回転ヘラケズリが施される。5 は壷蓋である。

B2～B4 号窯跡灰原出土遺物

B2 号窯跡から B4 号窯跡にかけての窯跡の下方で検出された灰原で、いずれの窯に直接伴



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器坏	ⅠAⅱ	15.1	9.0	3.4	B4-1	
2	床面	須恵器高台付坏	ⅠA	15.2	10.9	3.7	B4-2	15-4
3	床面	須恵器蓋	ⅡA	16.4	——	——	B4-4	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
4	床面	須恵器蓋	ⅡA	16.0	——	——	B4-3	
5	床面	須恵器蓋	Ⅲ	13.0	——	——	B4-5	

第23図　B 4 号窯跡出土遺物

うものか限定できないので、出土遺物について一括して説明する。

須恵器

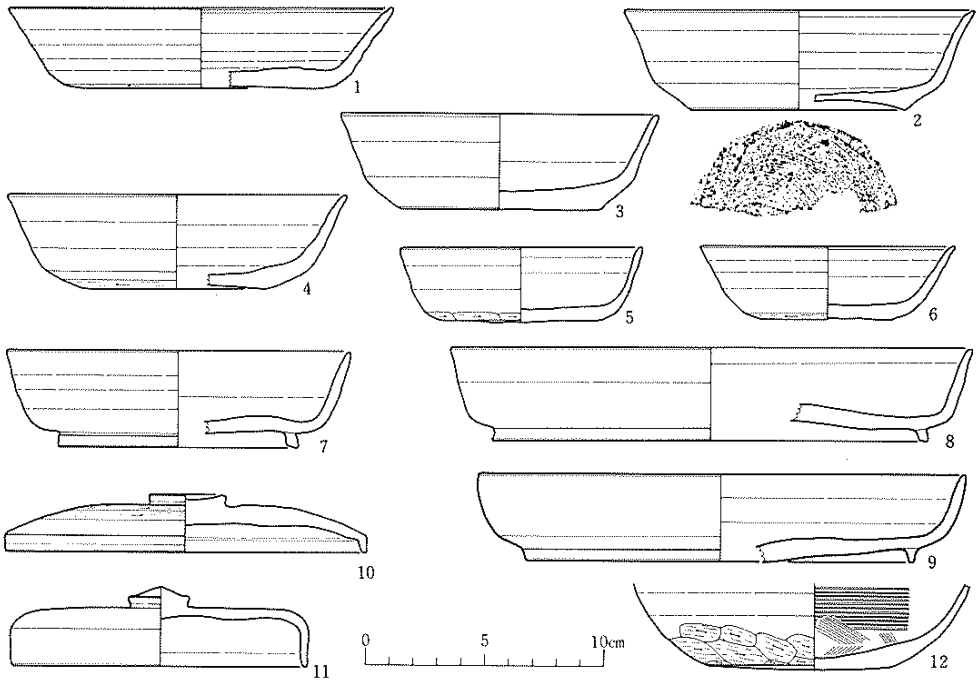
坏（第 24 図 1～6）

1 は浅く皿状を呈する。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、口縁部内面に細い 1 条の横位沈線がみられる。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。

2～6 は椀状を呈する。このうち 2・3 は体部下位に綾をもつもので、稜から下および上は直線的になる。4 も同位置に弱い稜がみられるが、稜から下が丸みをもつ点は 2・3 と異なっている。3 は底部にナデ、4 は底部から体部下位に回転ヘラケズリが施されるが、2 は回転糸切り痕を残し、再調整は施されない。5・6 は小形で、体部下位が丸みをもち、中位から口縁部にかけては直線的である。底部から体部下位に 5 は手持ちヘラケズリ、6 は回転ヘラケズリが施されている。

高台付坏（第 24 図 7）

深めの椀状を呈する。体部下端が屈曲し、体部から口縁部にかけて急角度で立ち上がる。高



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器坏	ⅠAⅰ	16.1	9.5	3.4	B₃～4-4	16-1
2	灰原	須恵器坏	ⅡBⅳ	14.6	8.8	4.2	B₃～4-1	16-2
3	灰原	須恵器坏	ⅡBⅱ	13.4	8.5	4.1	B₃～4-2	
4	灰原	須恵器坏	ⅡE	14.2	7.3	4.0	B₃～4-3	
5	灰原	須恵器坏	ⅡHⅱ	10.2	6.7	3.2	B₃～4-6	
6	灰原	須恵器坏	ⅡHⅰ	10.7	5.5	3.1	B₃～4-5	

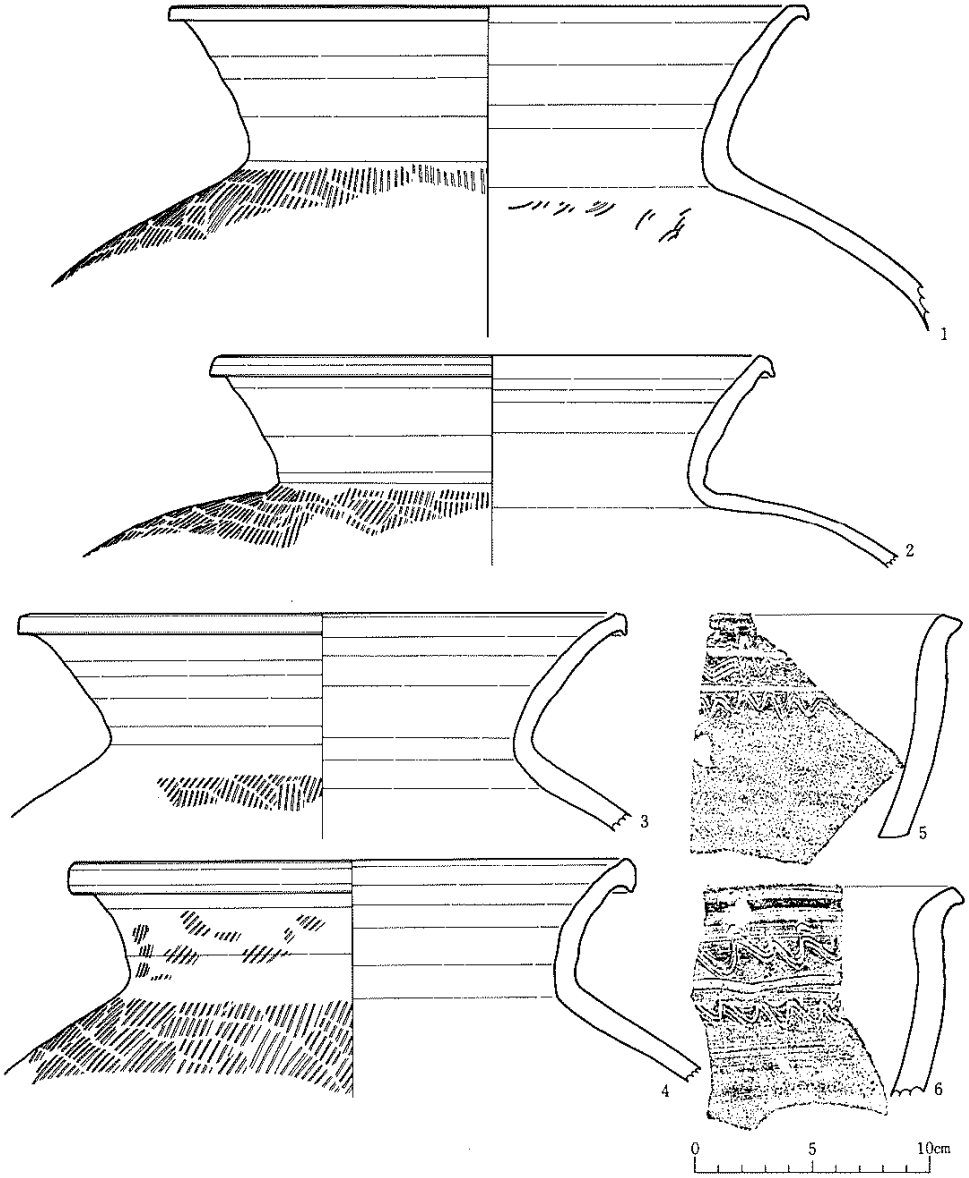
No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
7	灰原	須恵器高台付坏	ⅡB	14.4	10.0	4.1	B₃～4-7	16-3
8	灰原	須恵器盤	ⅠA1	21.8	18.2	3.9	B₂～4-1	
9	灰原	須恵器盤	ⅠA2	20.4	16.2	3.7	B₃～4-9	16-4
10	灰原	須恵器蓋	ⅡA	15.1	——	2.5	B₂～4-2	16-5
11	灰原	須恵器蓋	Ⅲ	12.3	——	3.4	B₂～4-3	16-6
12	灰原	土師器坏	b2	——	8.1	——	B₃～4-8	

第24図　B 2 号～B 4 号窯跡灰原出土遺物(1)

台はやや外方に開き、その断面は長方形に近い。底部に回転ヘラケズリが施される。

盤（第24図8・9）

ともに高台の付く浅めの盤である。8 は体部下端が屈曲し、体部から口縁部にかけて直線的になるのに対し、9 は体部下端から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。高台はともに短



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器甕	II	27.0	——	——	B_3-4-16	16-8
2	灰原	須恵器甕	II	22.9	——	——	B_3-4-10	
3	灰原	須恵器甕	II	25.0	——	——	B_3-4-13	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
4	灰原	須恵器甕	II	23.5	——	——	B_3-4-14	16-7
5	灰原	須恵器鉢	II	——	——	——	B_3-4-12	
6	灰原	須恵器鉢	II	——	——	——	B_3-4-11	

第25図　Ｂ２号～Ｂ４号窯跡灰原出土遺物(2)

く、径の大きい部類に属する。底部に回転ヘラケズリが施されている。

蓋（第 24 図 10・11）

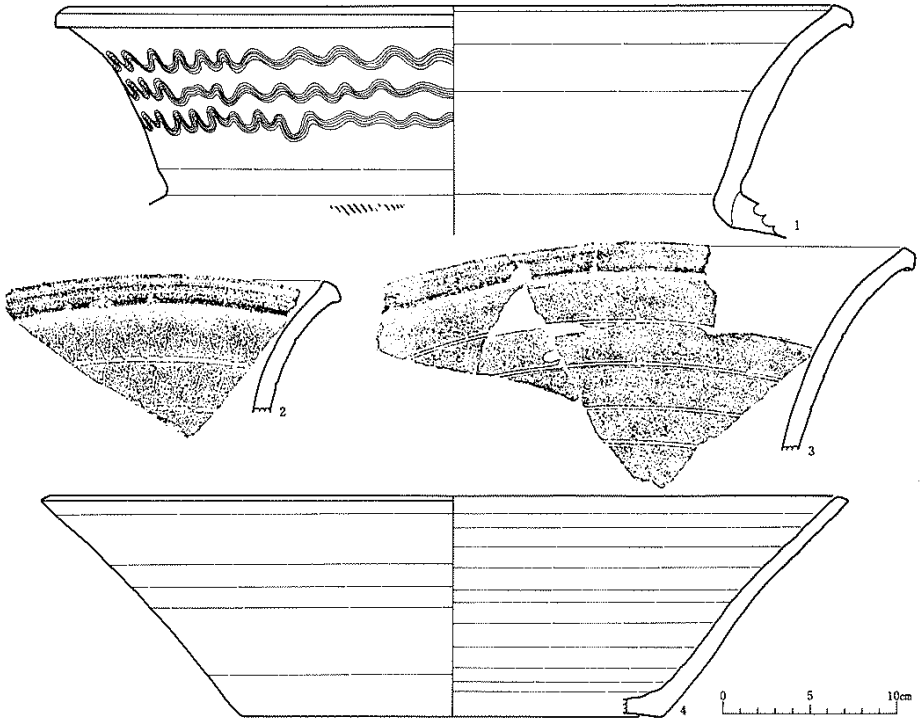
10 は天井部中央が平坦で、その周囲がやや丸みをもち、口縁部は下方に屈曲して外面に縁帯をつくり出している。つまみは中央が浅くくぼむ。天井部の上半に回転ヘラケズリが施されている。11 は壷蓋である。天井部はほぼ平坦であるが、周縁では強い丸みをもって口縁部に至るもので、中央の突出したつまみが付く。

甕（第 25 図 1～4・第 26 図 1～3）

口頸部は長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は第 25 図 1・2 が下端、第 25 図 3・4・第 26 図 1～3 が上下端を引き出している。第 26 図 1・2 は平行沈線と櫛描き波状文、第 26 図 3 は平行沈線がみられる。

鉢（第 25 図 5・6・第 26 図 4）

体部下端から頸部にかけて直線的に外傾するもの（4）と、体部から頸部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反するもの（5・6）とがある。4 は口縁上端が平坦に仕上げられている。5・6 は小さな口縁帯をつくり出しており、平行沈線間に櫛描き波状文が描か



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器甕	I	44.1	——	——	B_1～4-17	
2	灰原	須恵器甕	I	——	——	——	B_1～4-19	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
3	灰原	須恵器甕	I	——	——	——	B_3～4-18	16-9
4	灰原	須恵器鉢	III	45.5	24.2	12.7	B_3～4-15	16-10

第26図　Ｂ２号～Ｂ４号窯跡灰原出土遺物(3)

れている。

土師器

坏（第24図12）

製作にロクロを使用している。口縁部は欠損しているが、体部はおおむね丸みをもって立ち上がる。外面は底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリが施されており、内面は上半が回転刷毛目、下半は雑なナデがみられる。

B5号窯跡

B地区東部の斜面上方（現状では丘陵頂部削平のため平坦面）にある地下式窖窯である。B4号窯とB8号窯の間の空間中央上部に位置する。他の窯と違い、前庭部周辺を大きく、深く掘り下げた後、燃焼室・焼成室を掘り抜いている。煙道は削平のため不明、天井部は全て崩落、焼成室・燃焼室側壁も大半が崩落し、その下端と焚口部・前庭部が残存する。

〔焼成室〕　平面形は胴張り形で先端部が丸みをもち、焼成室に向かってゆるやかにくびれる。壁は残存部がわずかに膨らみをもちながらほぼ垂直に立ち上がる。還元され、硬化しており、中央から燃焼室寄りが著しい。床はほぼ平坦で、約25°傾斜しており、壁同様中央から燃焼部よりが著しく還元・硬化している。壁沿いに排水溝があり、焚口部まで続く。左辺の溝は壁に接し、右辺の溝は壁から15～20㎝離れている。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁が平行する長方形である。焼成室との境は焼成室側からくびれている。壁は外傾気味に立ち上がり、還元・硬化している。床はほぼ平坦で、焚口に向かってわずかに傾斜する。還元し、硬い。

〔焚口部〕　床はわずかにくぼみ、軟らかい。厚さ10㎝程炭化物が堆積しており、その上にスサ入り粘土が崩落している。

〔前庭部〕　左側に張り出したほぼ円形の深い土壙状を呈し、壁はゆるやかに段が付いて立ち上がる。底面は小さく長方形で、焚口床面よりやや高い。焚口部から炭化物層が続く。

〔中軸線の方向〕　N－9°－E

〔規模〕全体　－長さ9.3m　　確認面からの深さ2.0m

焼成室－長さ4.0m　　幅1.7m　　残存高0.5m

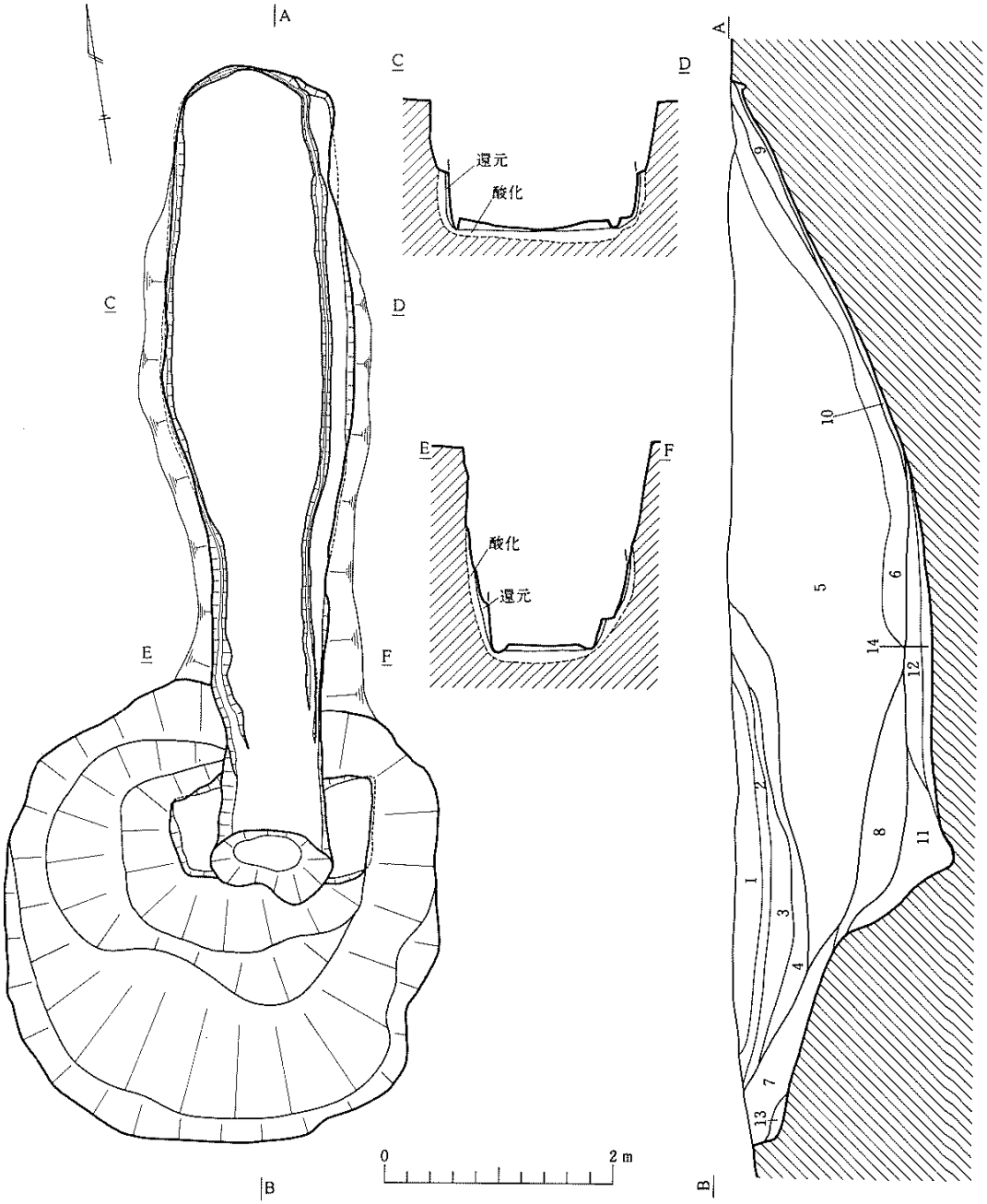
燃焼室－長さ1.8m　　幅0.9m　　残存高0.6m

焚口部－　　幅0.8m　　残存高0.2m

前庭部－（下端）長さ1.8m　　幅0.9m　　残存高1.9m

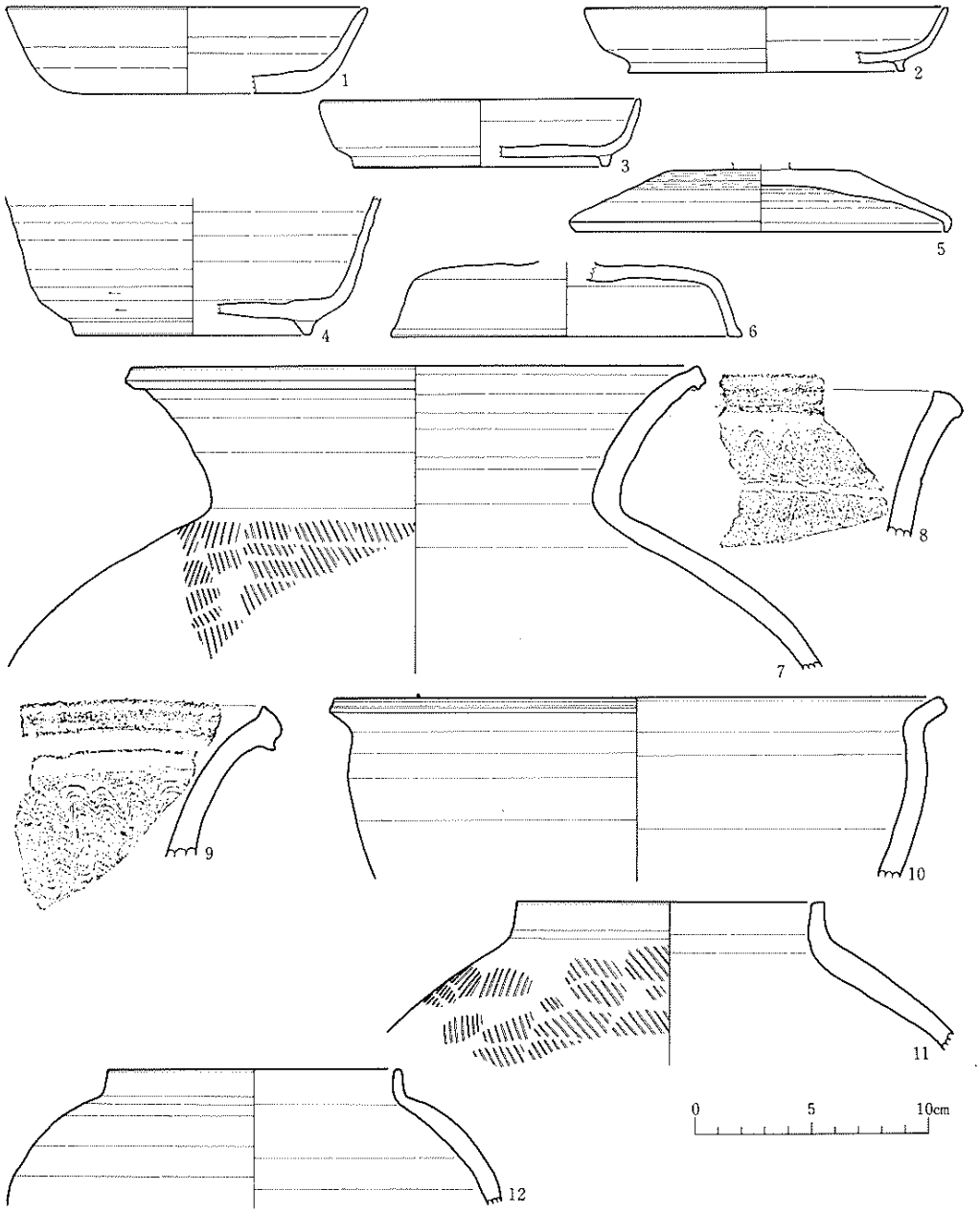
（上端）長さ3.5m　　幅3.8m

〔出土遺物〕　床面上には石・須恵器甕の破片など焼台らしいものがみられたが、位置が不規



No.	大別	土色	土性	備考
1	自然流入土	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黄褐色粒を含む
2		黒色 (10YR2/1)	シルト	均質，しまりなし
3		灰白色(2.5Y6/2)		火山灰
4		褐色(7.5YR4/3)	砂質シルト	
5	廃棄・地山崩壊土	明褐色(7.5YR5/6)	砂質シルト	炭化物を少量含む
6		赤褐色(2.5YR4/6)土・灰色(5Y5/1) 土・地山		
7	自然流入土	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物・粘土粒を多く含む
8		暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・粘土粒多量、焼土ブロック少量含む
9		暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を多く含む
10	廃機能時堆積土	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性があり、底面に貼りついている
11	自然流入土	黒褐色(7.5YR2/2)	砂質シルト	炭化物を多量に含む
12	炭化物層	黒色(7.5YR1.7/1)		
13	地山崩壊土	明褐色(7.5YR5/6)	砂質シルト	
14	炭化物層			赤褐色ブロックを少量含む

第27図　B５号窯跡



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版
1	堆積土4層	須恵器	坏	ⅠAⅳ	15.4	10.0	3.8	B5-1	
2	堆積土4層	須恵器	高台付坏	ⅠA	15.4	11.8	2.8	B5-3	
3	堆積土4層	須恵器	高台付坏	ⅠA	13.7	10.9	2.9	B5-2	
4	堆積土2層	須恵器	椀	ⅠC	------	10.2	------	B5-4	
5	堆積土4層	須恵器	蓋	ⅡA	16.0	------	------	B5-6	15-5
6	堆積土4層	須恵器	蓋	Ⅲ	15.0	------	------	B5-5	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
7	堆積土3層	須恵器	甕	Ⅱ	24.9	------	------	B5-11	
8	堆積土3層	須恵器	甕	Ⅰ	------	------	------	B5-9	15-7
9	堆積土3層	須恵器	甕	Ⅰ	------	------	------	B5-8	15-10
10	堆積土3層	須恵器	鉢	ⅠA	26.0	------	------	B5-10	15-9
11	堆積土3層	須恵器	短頸壺		13.2	------	------	B5-12	15-8
12	堆積土4層	須恵器	短頸壺		12.6	------	------	B5-7	15-6

第28図　Ｂ５号窯跡出土遺物

則で、床面から 1〜2 ㎝程浮いており、元の位置から動いていると思われる。土器は燃焼室近くに散乱している。以下出土遺物を一括して説明する。

須恵器

坏（第 28 図 1）

浅い皿状を呈する。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部にヘラ切り痕を残しており、再調整は施されない。

高台付坏（第 28 図 2・3）

ともに浅い皿状である。体部下位に丸みをもち、上半が短く外傾するもので、短い高台が付く。高台の断面は逆台形に近い。3 は底部に回転ヘラケズリが施され、2 は磨滅のため不明である。

椀（第 28 図 4）

体部下位に丸みをもち、上半が直線的に外傾するもので、断面が三角形の高台が付く。底部から体部下位に回転ヘラケズリが施される。

蓋（第 28 図 5・6）

5 は天井部の中央に明瞭な平坦面をもつもので、その縁辺から口縁部付近まで「ハ」字状に開く。口縁部は内側に短く折れ曲がり、外面に縁帯をつくり出している。天井部の上半には回転ヘラケズリが施されている。6 は口縁部がやや外側に開く壷蓋である。

甕（第 28 図 7〜9）

いずれも口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上下端を引き出している。

鉢（第 28 図 10）

体部から頸部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反する。

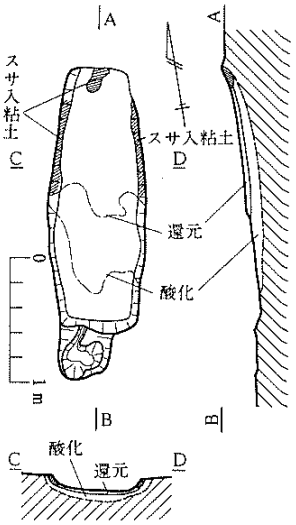
短頸壷（第 28 図 11・12）

口縁部が短く直立する。11 は口縁端部が平坦で、肩は丸みをもつ。12 は口縁端部が丸く仕上げられており、肩が張る。

B7 号窯跡

B地区沢奥部、南斜面の上部に位置する。半地下式窖窯と思われる。かなり削平され、焼成室の下端部だけが残存する。

〔焼成室〕平面形は膨らみのある長方形で、壁はスサ入り粘土を貼って構築している。床はわずかに傾斜している。粘土を貼って



第29図　B 7 号窯跡

おり、壁はその後に構築している。

〔中軸線の方向〕　N－10°－E

〔規模〕焼成室－長さ 2.0m　　幅 0.8m　　残存高 5m

〔出土遺物〕

須恵器

蓋（第 30 図 1）

天井部はやや丸みをもつが、器高は低い。口縁部は短く下方に折れ曲がり、外面に不規な縁帯をつくり出している。天井部の上半に回転ヘラケズリが施される。

甕（第 30 図 2）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は下端を引き出している。口頸部外面に平行沈線と櫛錨き波状文が描かれている。

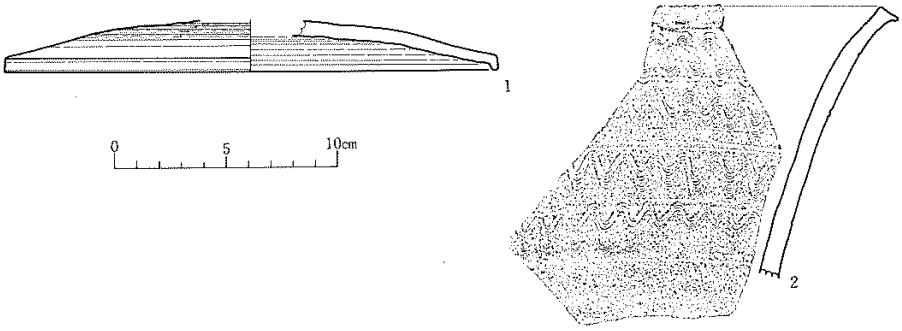
B8 号窯跡

B地区沢奥部、南斜面中腹に位置する地下式窖窯である。B2 号住居跡と重複し、それより古い。天井は崩落している。煙道・焼成室・燃焼室・焚口部・前庭部から成る。

〔煙道〕　奥壁よりやや手前の部分にあり、平面形は残存部から円形と推定される。壁は弧を描いて内傾気味に立ち上がる。

〔焼成室〕　平面形は左右対称の胴張り形で、奥壁は丸い。燃焼室に向かってすぼまる。壁は全体に還元され、硬化している。両側壁の床近くに段が付いており、壁の崩れを補修せずそのままくり返し使用したものと思われる。断面形はほぼ半円形になると推定される。床はごく平坦で、奥壁に向かいゆるやかに傾斜（14°）する。還元し、硬化している。

〔燃焼室〕　平面形は両壁とも直線的でほぼ長方形になる。焼成室との境はゆるやかにくびれ、左側壁にスサ入り粘土が貼り付けられて張り出し、右側は壁に半分食い込んだピットがみられ



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土1層	須恵器 蓋	I	22.2	——	——	B7-1	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
2	堆積土1層	須恵器 甕	I	——	——	——	B7-2	15-11

第30図　B 7 号窯跡出土遺物

る。壁は直線的で急に立ち上がる。還元し、硬化している。床はほぼ平坦で、赤変し、硬化している。床面上に炭化物・灰が堆積している。

〔焚口部〕　右側に壁に食い込んだピットがある。他には特に施設はみられない。

〔前庭部〕　平面形は不整の方形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、床はほぼ平坦である。床面上に炭化物が堆積している。

〔中軸線の方向〕　N－3°－E

〔規模〕全体　－長さ 10.5m　　確認面からの深さ 1.6m

煙道　－直径　0.4m　　残存高 0.9m

焼成室－長さ 5.3m　　幅 2.3m　　残存高 0.8m

燃焼室－長さ 2.2m　　幅 1.0m　　残存高 0.5m

焚口部－　　幅 1.0m　　残存高 0.4m

前庭部－長さ 3.0m　　幅 2.5m　　残存高 0.1m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 33 図 1～9）

1～9 は深めの椀状の器形である。いずれも体部下位に丸みをもち、口縁部にかけて外反ぎみに立ち上がる。底部にはナデ調整が施されており、底部の切り離し技法は明らかではないが、隣接する B9 号窯跡から出土した同類の坏のなかにヘラ切り（第 37 図 9）が認められることから、おそらくその技法によるものと考えられる。

高台付坏（第 33 図 10・11）

10 は浅い皿状の器形で、体部下位に丸みをもち、口縁部にかけてやや外反する。高台は短く「ハ」字状に開き、断面は逆台形である。11 はやや深い椀状のもので、体部下位に丸みをもち、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は短く「ハ」字状に開き、断面は方形である。底部に回転ヘラケズリが施されるが、10 では中央に削り残しの回転糸切り痕が残る。

皿（第 33 図 12）

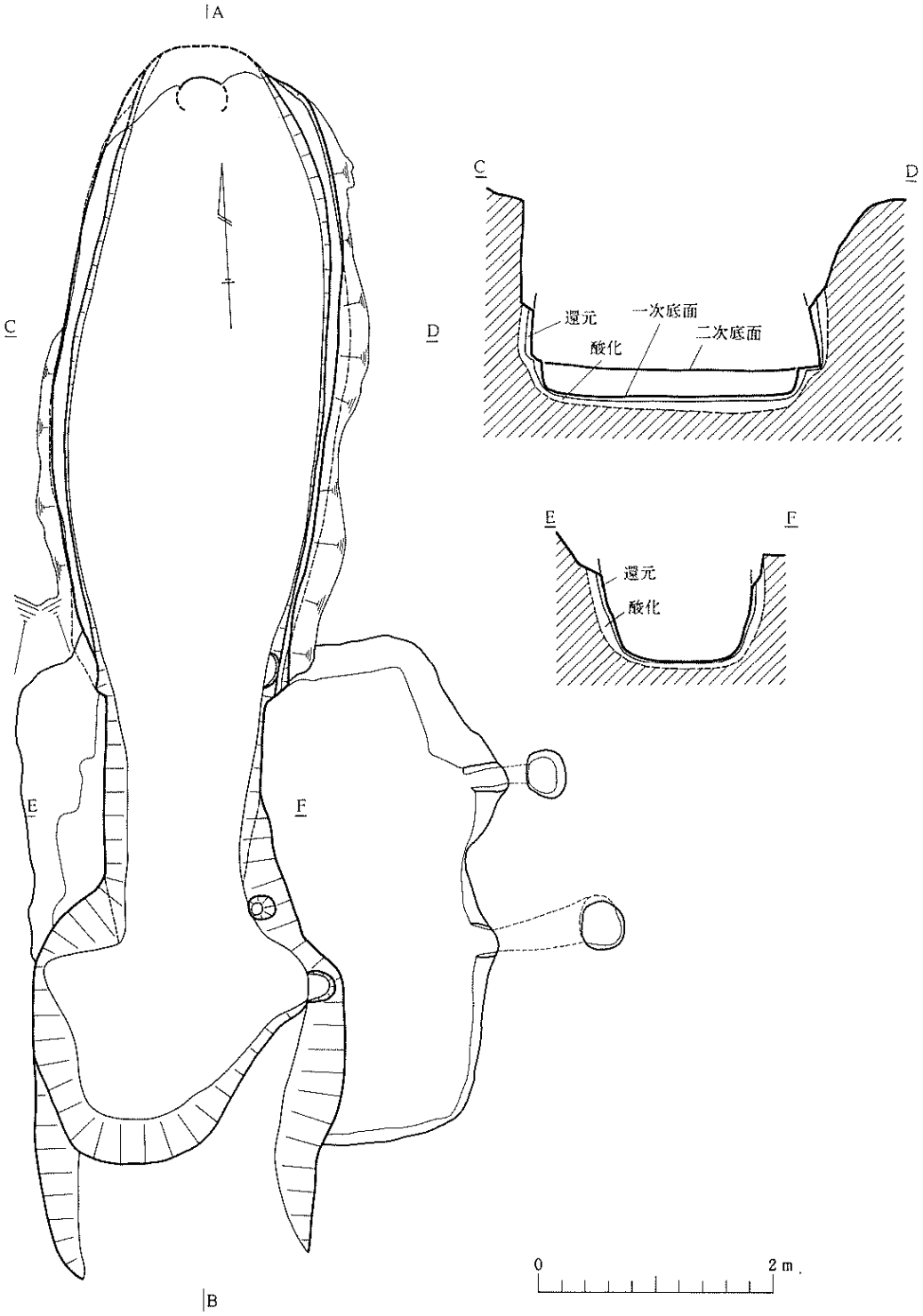
厚手のもので、体部から口縁部にかけて短く直線的に外傾する。底部はナデ調整である。

蓋（第 33 図 13）

器高の低いものである。天井部はやや丸みをもち、口縁部は開きぎみに折れ曲がり、縁帯をつくり出している。天井部の上半に回転ヘラケズリが施されている。

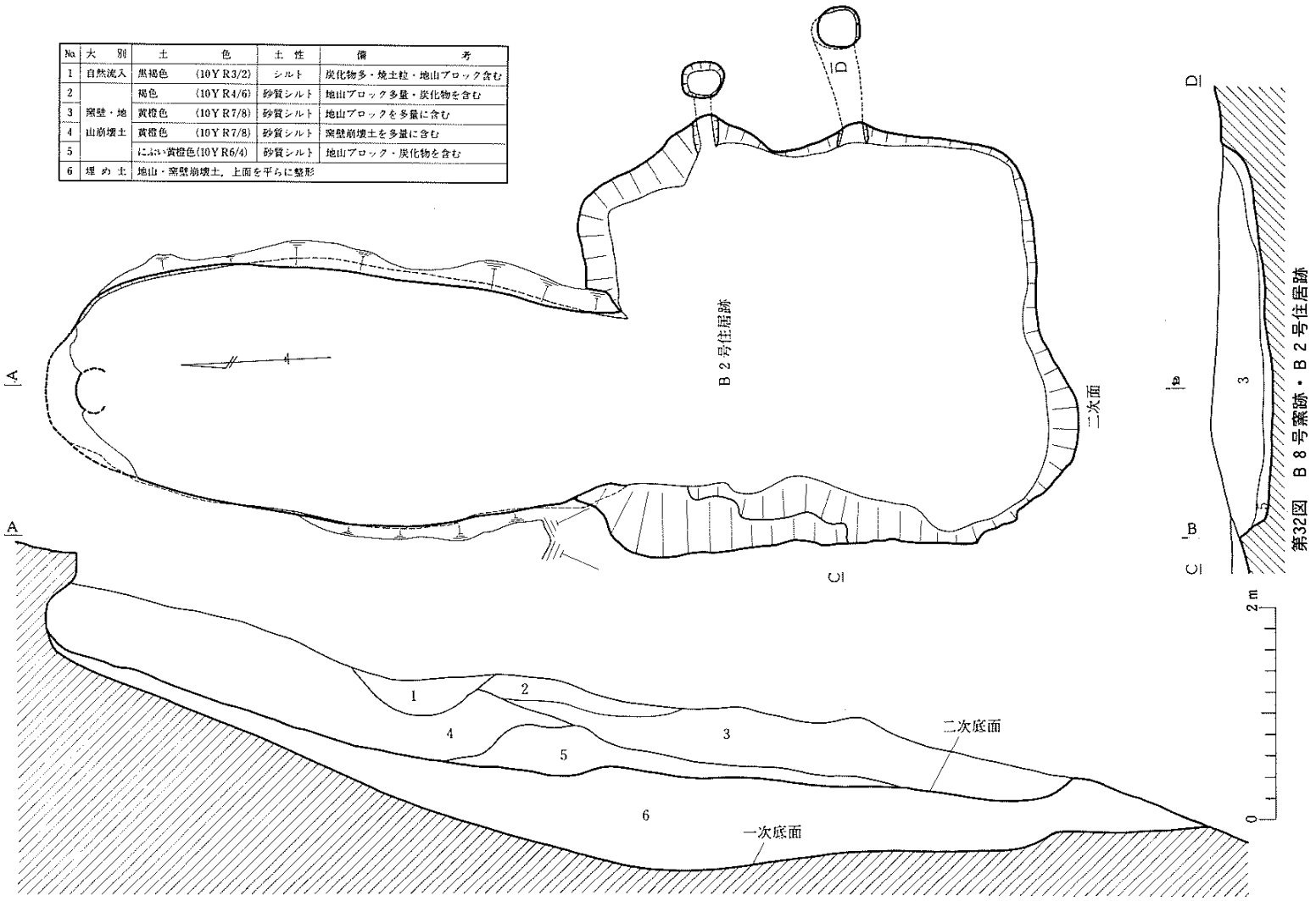
甕（第 33 図 14・15・第 34 図 1）

口頸部が長く、大きく外反する。端部に縁帯をつくり出しているもの（1・15）と、丸くおさまるもの（14）とがある。1 の縁帯直下には平行沈線と櫛描き波状文が描かれている。

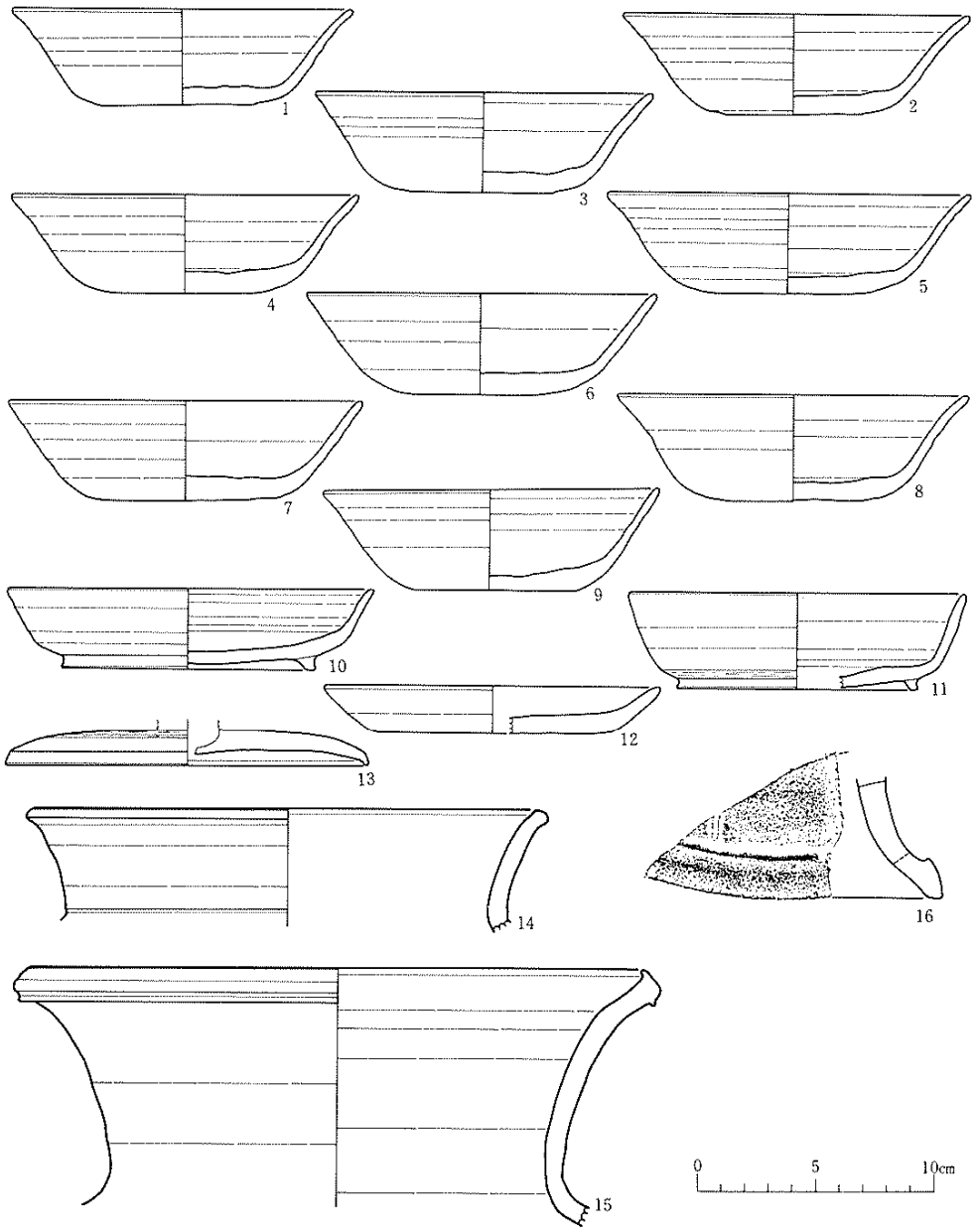


第31図　B 8号窯跡

No.	大　別	土　　色	土　性	備　　考
1	自然流入	黒褐色　(10YR3/2)	シルト	炭化物多・焼土粒・地山ブロック含む
2	窯壁・地山崩壊土	褐色　(10YR4/6)	砂質シルト	地山ブロック多量・炭化物を含む
3		黄橙色　(10YR7/8)	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む
4		黄橙色　(10YR7/8)	砂質シルト	窯壁崩壊土を多量に含む
5		にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	地山ブロック・炭化物を含む
6	埋め土	地山・窯壁崩壊土，上面を平らに整形		



第32図　Ｂ８号窯跡・Ｂ２号住居跡



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.4	6.3	4.1	B8-1	17-1
2	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.7	5.7	4.3	B8-2	17-2
3	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.2	6.0	4.2	B8-3	17-3
4	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.5	6.0	4.2	B8-4	
5	床面	須恵器坏	ⅡA	15.4	6.2	4.3	B8-5	
6	床面	須恵器坏	ⅡA	14.7	5.8	4.3	B8-6	
7	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.8	5.8	4.2	B8-7	
8	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.8	6.0	4.5	B8-8	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
9	床面	須恵器坏	ⅡA	14.2	6.7	4.3	B8-9	17-4
10	堆積土1層	須恵器高台付坏	ⅠA	15.4	10.8	3.4	B8-12	17-5
11	灰原	須恵器高台付坏	ⅡA	14.2	10.2	4.1	B8-11	
12	灰原	須恵器皿		14.2	9.7	2.0	B8-10	
13	灰原	須恵器蓋	ⅡA	15.2	------		B8-13	
14	灰原	須恵器甕	Ⅱ	21.9	------		B8-17	
15	灰原	須恵器甕	Ⅱ	25.7	------		B8-16	
16	床面直上	円面硯		------	------		B8-18	17-8

第33図　B 8 号窯跡出土遺物(1)

鉢（第 34 図 2）

体部が丸みをもって立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が短く外反する。端部に縁帯がつくり出されている。

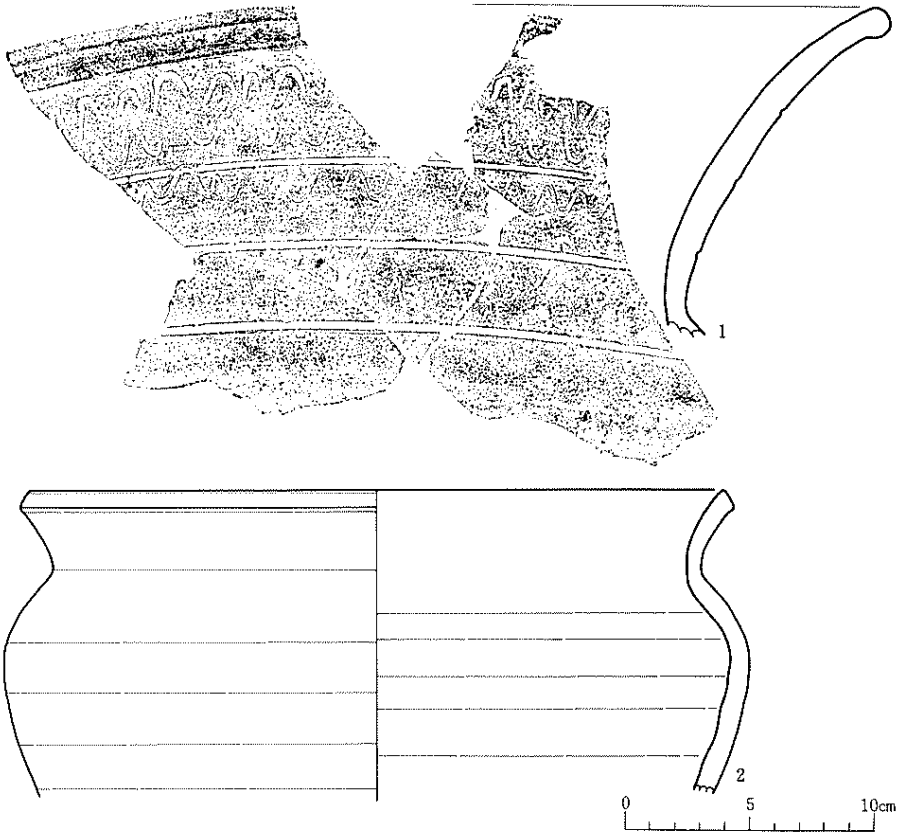
円面硯（第 33 図 16）

脚部破片である。下位が強く外反し、細い長方形と思われる透しがある。下端部にはやや幅の広い中膨らみの縁帯がつくり出される。

B2 号住居跡

〔重複〕　B8 号窯を切り、B9 号窯に切られている。B8 号窯との重複については、その燃焼部と前庭部の上部を壊しているが、削平した面から焼成室にかけて床を作り替えており、焼成室の空間を再利用している。

〔平面形・規模・方向〕　B8 号窯の焼成室を再利用しているので、平面形は紡錘形の大きな



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器甕	I	——	——	——	B8-15	17-7

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
2	須恵器鉢	須恵器鉢	IA	27.8	29.9	——	B8-14	17-6

第34図　B 8 号窯跡出土遺物(2)

張り出しをもつ方形となる。規模は竪穴部分が 4×4.2mでカマドと平行して若干長く、窯焼成室の張り出しは長さ 5mとなる。カマドの向く軸線の方向はN－89°－Eである。

〔堆積土〕　竪穴部の堆積土は主に黄橙色の砂質シルトから成り、5 枚の層に分かれるが、いずれも自然流入もしくは地山崩壊土とみられる。また、B8 号窯焼成室部分には窯壁・天井部・地山崩壊土が堆積しており、本住居が使用されている間はまだトンネル状になっていたと思われる。

〔壁〕　竪穴部は地山を壁としており、全体に凹凸が激しい。壁高は最も高い北東部で約 1m になる。

〔床面〕　白色の粘土を貼り付けて床としている。ただし、張り出し部は窯壁・天井部の崩落土を平らにたたきしめている。

〔柱穴〕　住居内及び近接する外側にピットはなく、柱穴については不明である。

〔カマド〕　東壁で 2 基検出された。ともに煙道と煙り出しピットが残存するのみで、本体は失われている。煙道は地山を掘り抜いたもので、底面はほぼ水平である。

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 35 図 1～5）

1・2 は皿状の器形で、体部が直線的に立ちち上がり、口縁部がやや外反するのに対し、3～5 は椀状のもので、体部から口縁部は丸みをもって立ち上がる。いずれも底部に回転ヘラケズリが施されており、3～5 ではそれが体部下半に及ぶ。

高台付坏（第 35 図 6・8）

6 は椀状の器形で、体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。高台は厚手で、特に下端で顕著になる。底部はロクロ調整されている。8 は底部が欠損している。体部に段をもち、あるいは第 97 図 17 のような盤状の器形になるかもしれない。

椀（第 35 図 7）

体部がやや丸みをもって立ち上がり、厚手の高台が付く。底部および体部下半に回転ヘラケズリが施されている。

鉢（第 35 図 9）

体部は丸みをもって並ち上がり、頚部でくびれて口縁部が短く外反する。端部には小さな縁帯がつくり出されている。体部内面には回転刷毛目がみられる。

土師器

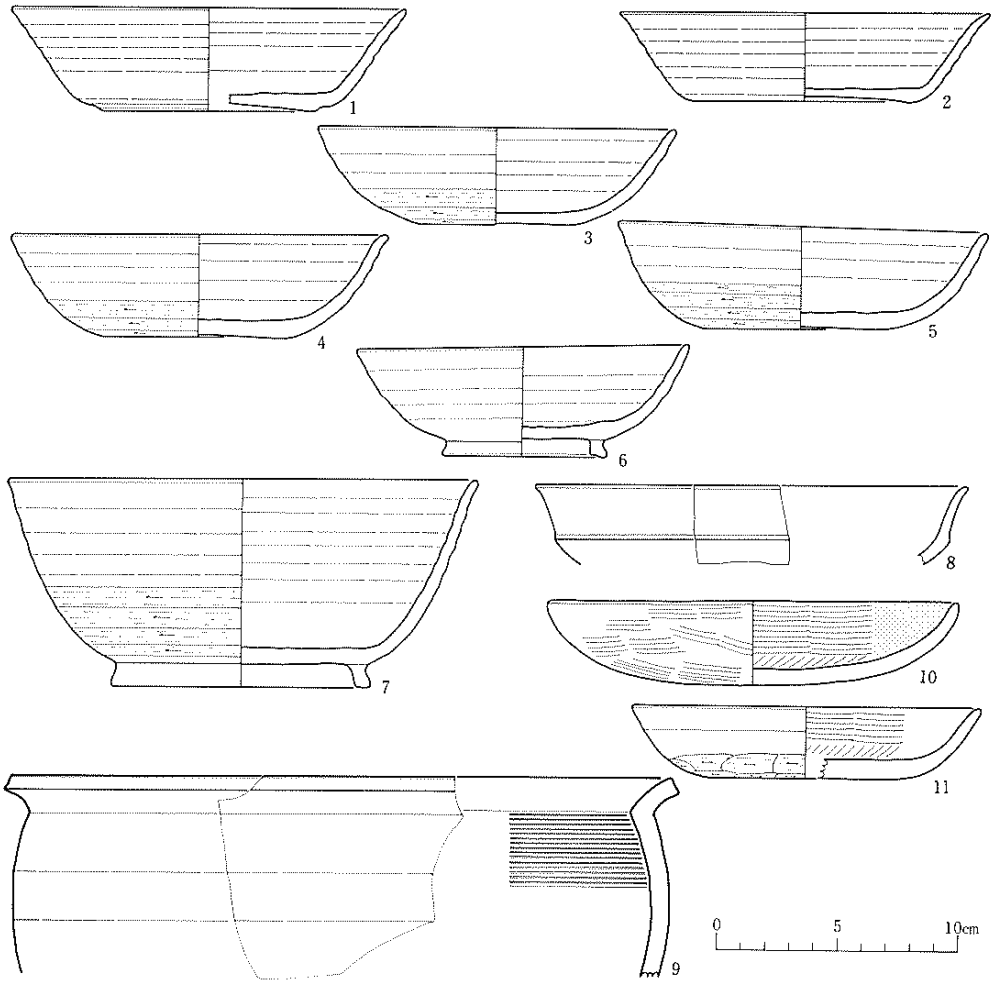
坏（第 35 図 10・11）

ともに皿状を呈する。10 は丸底で、底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。内外面

ともヘラミガキが施され、さらに内面は黒色処理されている。11 はロクロを使用しており、体部下位が丸みをもち、口縁部にかけて直線的に短く外傾する。外面は底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリが、内面にヘラミガキが施されている。

B9 号窯跡

B地区沢奥部の南斜面中腹、B8 号窯とB10 号窯の間に位置する。地下式窖窯である。灰原がB16 号窯の煙道を覆っており、それより新しい。煙道は削平され、天井部は崩落しているが、



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土1層	須恵器	坏	IEi	16.4	8.6	4.3	B2住-4	23-1
2	堆積土1層	須恵器	坏	IEi	15.4	8.6	3.7	B2住-5	
3	堆積土4層	須恵器	坏	IIF	14.9	6.2	4.0	B2住-3	23-2
4	堆積土4層	須恵器	坏	IIF	15.6	7.8	4.3	B2住-1	23-3
5	堆積土4層	須恵器	坏	IIF	15.3	7.5	4.2	B2住-2	23-4
6	堆積土4層	須恵器高台付坏		IID	13.7	6.8	4.6	B2住-6	23-6

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
7	堆積土4層	須恵器椀	ID	19.4	10.8	8.7	B2住-7	23-7
8	堆積土1層	須恵器		――	――	――	B2住-8	
9	堆積土1層	須恵器鉢	IA	27.3	体27.1	――	B2住-11	
10	床面	土師器坏	c2	17.0	――	3.5	B2住-9	23-5
11	床面	土師器坏	b1	14.4	7.5	3.0	B2住-10	

第35図　B 2 号住居跡出土遺物

他は保存良好である。

〔焼成室〕　平面形は両側壁がほぼ平行し、先端は細くなる。燃焼室との境は明瞭でない。壁はいくぶん開き気味に立ち上がるが、残りの良い部分では上部が内弯し、断面形は不整の半円形と推定される。還元し、硬化している。床は浅くくぼんで段・落ち込みがあり、特に燃焼室との境はピット状になる。床面は約 24°傾斜する。全体に還元し、硬化しているが、特に奥半分は溶解してガラス状になっている。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁が焼成室からそのまま移行して平行する長方形である。焼成室との境には左右壁面にスサ入り粘土が貼付されており、その中はピット状に穴が開いている。この部分の床には浅いくぼみがある。壁は開きぎみに立ち上がる。還元され、硬化している。床はいくぶん凹凸があるが、ほぼ平坦である。還元された部分はなく、赤く焼けており、硬い。

〔焚口部〕　床が皿状にくぼむほかは特に施設がない。

〔前庭部〕　平面形は両側壁とも燃焼室からそのまま移行し、しだいに浅くなる。壁は開き気味に立ち上がり、床はほぼ平坦である。床南寄りから排水溝が斜面下にのびる。

〔灰原〕　この窯と連続はしていないが、斜面下方に 3.5×2.8mの楕円形の土壙があり、その堆積土が灰原の残りと思われる。B16 号窯の煙道を覆っている。

〔中軸線の方向〕　N－12°－E

〔規模〕全体　－長さ 12.7m　　確認面からの深さ 2.1m

焼成室－長さ　6.0m　　幅 1.4m　　残存高 1.1m

燃焼室－長さ　3.1m　　幅 0.8m　　残存高 0.5m

焚口部－　　幅 0.7m　　残存高 0.4m

前庭部－長さ　3.6m　　幅　上端 1.4m、下端 0.7m　　残存高 1.0m

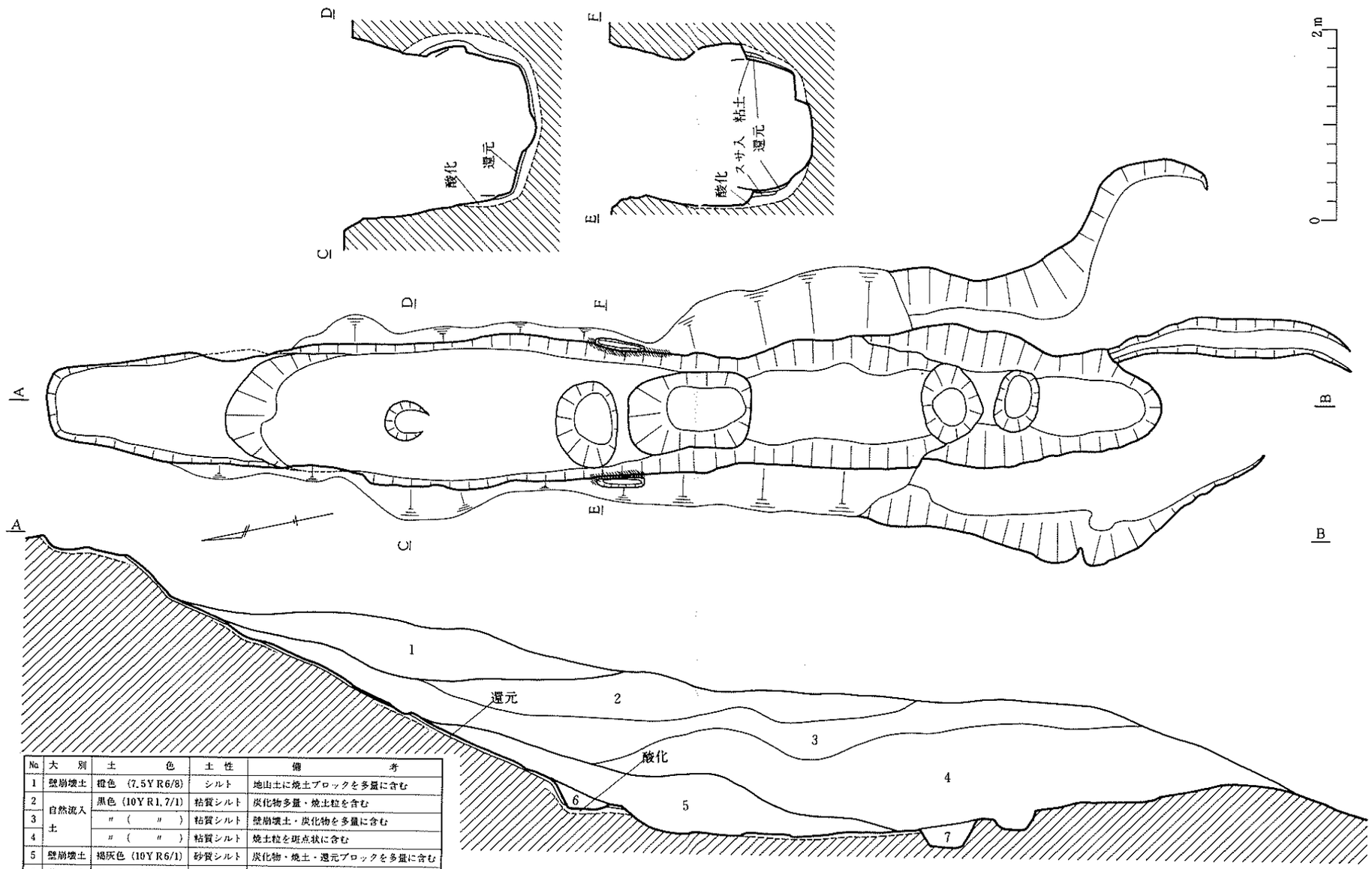
〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 37 図 1～10）

1～6 は皿状の器形である。このうち 1～3 は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものであるが、1 は底部の周縁が若干浮き上がって丸底風になり、また 2 は 1・3 に比して深めで口縁部が開きぎみになり、それぞれ形態に多少の違いがみられる。4～6 は体部下位に弱い稜をもつもので、稜から上は直線的もしくは外反ぎみに立ち上がる。稜については 4 が再調整時にヘラによって削り出されるのに対し、5・6 では再調整以前の段階でつくり出される点が異なっている。これらはいずれも回転ヘラケズリの再調整が施され、5・6 では底部中央の削り残しの部分にヘラ切リ痕が認められる。

7～9 は椀状の器形である。このうち 7 は体部下位に稜をもち、稜から上が直線的に立ち上



No	大　別	土　　色	土 性	備　　考
1	壁崩壊土	橙色 (7.5YR6/8)	シルト	地山土に焼土ブロックを多量に含む
2	自然流入土	黒色 (10YR1.7/1)	粘質シルト	炭化物多量・焼土粒を含む
3		〃 (〃)	粘質シルト	壁崩壊土・炭化物を多量に含む
4		〃 (〃)	粘質シルト	焼土粒を斑点状に含む
5	壁崩壊土	褐灰色 (10YR6/1)	砂質シルト	炭化物・焼土・還元ブロックを多量に含む
6	落ち込み	灰白色 (10YR7/1)		灰
7	内堆積土	黒褐色(10YR1.7/1)	砂質シルト	炭化物・焼土粒を含む．粘性・しまりあり

第36図　B 9号窯跡

がり、底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。8・9 は体部下位に丸みをもち、口縁部にかけて外反ぎみで、底部にナデ調整が施されるが、9 では前段階のヘラ切り痕が観察される。

なお、9 の体部および 10 の底部にそれぞれ「＋」「±」とヘラ書きされている。

高台付坏（第 37 図 11・12）

ともに浅い皿状の器形である。11 は体部中位に弱い稜をもち、稜から上が短く外傾して断面が方形の短い高台が付く。12 は、坏部の形態は 11 とほぼ同じであるが、口径に比して台径が小さめである。高台は短く、断面が逆台形である。ともに底部に回転ヘラケズリが施されており、12 では体部下位まで及ぶ。

盤（第 37 図 13）

体部に段の付くもので、段から上が直線的に外傾する。台部は失われているが、第 94 図 17 のように口径に比して小さめの高台が付くものと思われる。

蓋（第 37 図 14〜16）

14 は天井部のつまみ周辺がほぼ平坦で、口縁部付近にかけて丸みをもち、弱い稜をなして口縁部に至るもので、明瞭な縁帯をもたない。つまみは中央がやや突出し、周縁との間が浅くくぼむ。天井部の上半は回転ヘラケズリが施されている。15 はつまみをもたないものと思われる。天井部の中央に明瞭な平坦部をもち、その縁辺から口縁部付近までは「ハ」字状に直線的に開く。口縁部は下方に折れ曲がり、外側に縁帯をつくり出している。天井の平坦部にはナデ調整が施されるが、その前段階のヘラ切り痕も観察される。16 は天井部が強い丸みをもつ壷蓋である。

甕（第 37 図 17・18・第 38 図 1〜3）

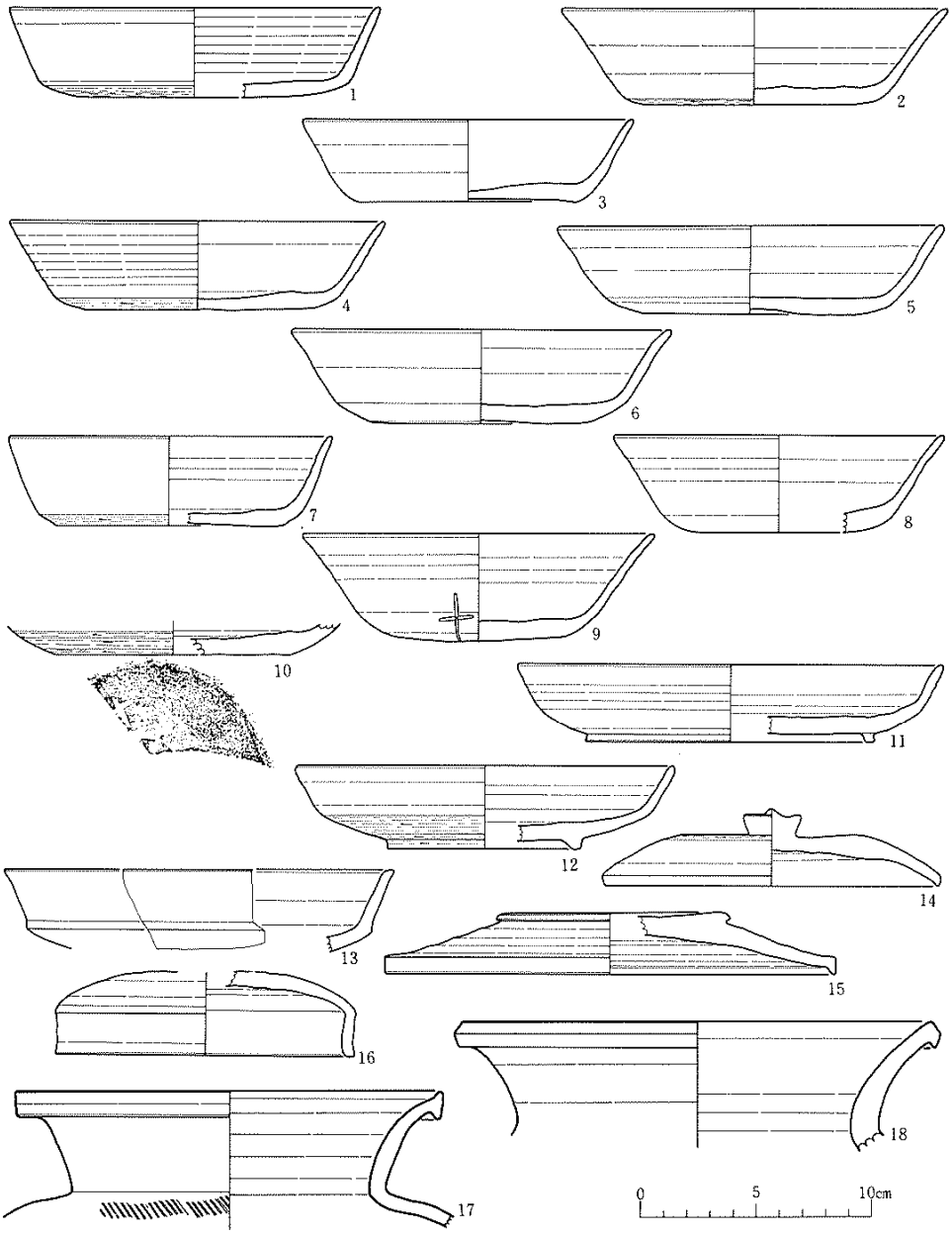
いずれも口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は 17 が上下端、3 が上端、18・1 が下端を引き出している。3 は口縁帯直下に 1 本の隆帯が巡り、その下部に数段の櫛描き波状文が描かれている。17・1・2 は体部外面に平行叩き目がみられる。

鉢（第 38 図 4〜6）

丸みをもって立ち上がった体部が頸部で括くびれ、口縁部が短く外反するもの（4・5）と頸部でわずかにくびれて口縁部が直立するもの（6）とがある。4・5 は口縁部下端をわずかに引き出し、小さな口縁帯をつくり出している。6 は口縁端部上端が平坦に仕上げられている。

壷（第 38 図 7・8）

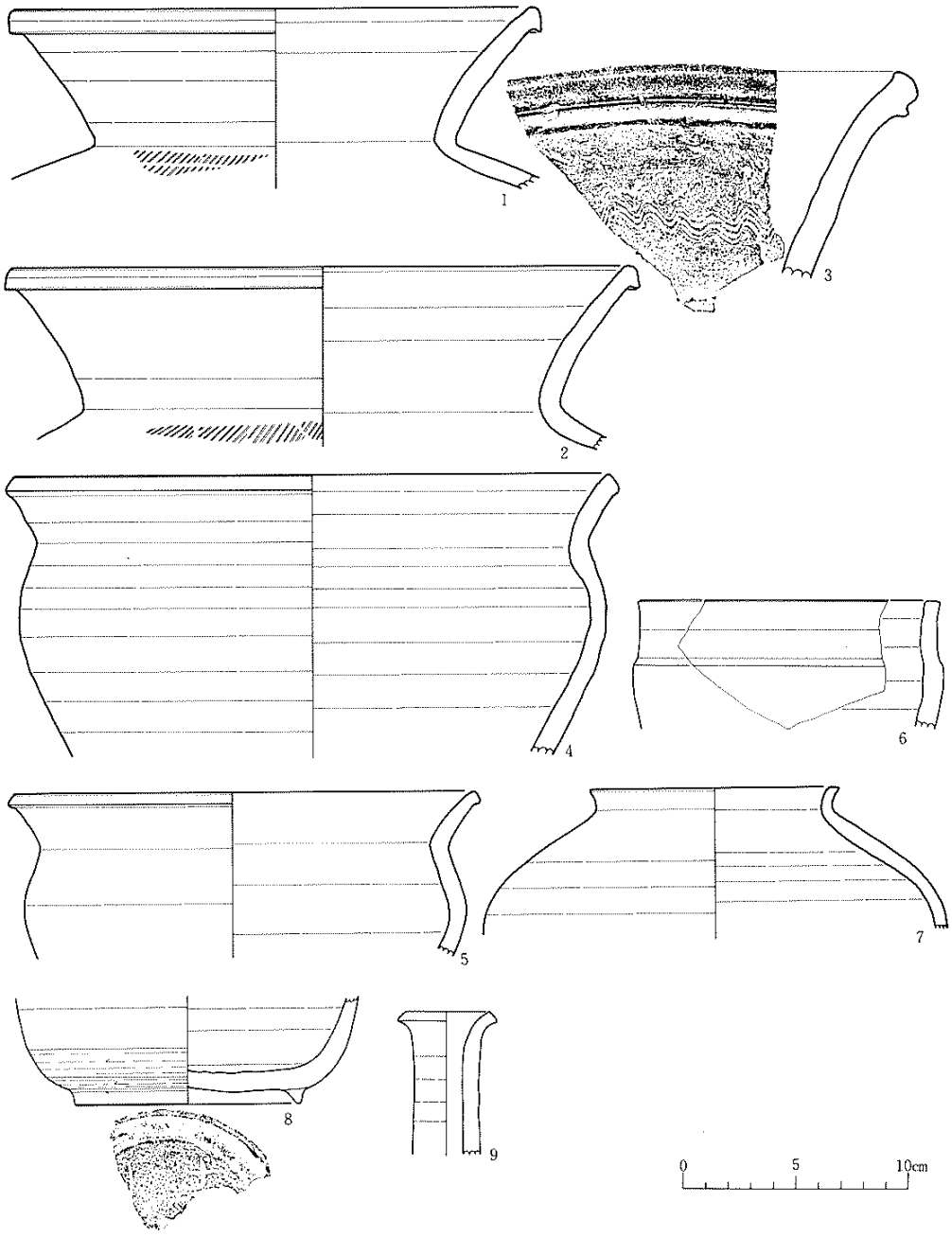
7 は短頸壷で、なだらかな丸みをもつ肩部から短い口縁部が外反ぎみに直立する。端部上端は平坦に仕上げられている。8 は高台の付く壷の底部破片である。外面の体部下端には回転ヘ



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器坏	ⅠB	16.0	——	3.9	B9-6	
2	灰原	須恵器坏	ⅠEi	16.7	9.0	4.2	B9-3	17-11
3	灰原	須恵器坏	ⅠAii	14.3	9.6	3.6	B9-9	
4	灰原	須恵器坏	ⅠHi	16.7	9.7	3.9	B9-4	
5	灰原	須恵器坏	ⅠFii	16.2	9.2	3.8	B9-1	17-9
6	灰原	須恵器坏	ⅠFii	16.4	9.6	4.1	B9-2	17-10
7	灰原	須恵器坏	ⅡE	13.9	9.6	3.9	B9-5	
8	床面直上	須恵器坏	ⅡA	14.3	——	(4.2)	B9-7	
9	床面直上	須恵器坏	ⅡA	15.2	——	4.7	B9-8	17-12

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
10	灰原	須恵器坏		——	10.1	——	B9-18	18-5
11	灰原	須恵器高台付坏	ⅠB	18.4	12.4	3.4	B9-13	18-1
12	床面直上	須恵器高台付坏	ⅠD	16.4	8.4	3.6	B9-14	18-2
13	灰原	須恵器盤？		——	——	——	B9-17	
14	灰原	須恵器蓋	ⅡA	14.4	——	3.3	B9-10	18-4
15	堆積土1層	須恵器蓋	ⅡB	19.4	——	2.7	B9-12	18-3
16	灰原	須恵器蓋	Ⅲ	13.0	——	——	B9-11	
17	灰原	須恵器甕	Ⅱ	18.4	——	——	B9-21	
18	灰原	須恵器甕	Ⅱ	20.2	——	——	B9-29	

第37図　B 9 号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器甕	II	23.0	------	------	B9-25	18-6
2	灰原	須恵器甕	II	27.0	------	------	B9-22	
3	灰原	須恵器甕	I	------	------	------	B9-26	18-8
4	堆積土1層	須恵器鉢	IA	26.4	26.0	------	B9-28	18-9
5	堆積土1層	須恵器鉢	IA	20.4	19.6	------	B9-23	18-7

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
6	灰原	須恵器鉢	III	13.4	------	------	B9-15	
7	灰原	須恵器短頸壺		11.0	------	------	B9-24	18-10
8		須恵器壺		------	10.0	------	B9-16	
9		須恵器水瓶		3.7	------	------	B9-19	18-11

第38図　B 9 号窯跡出土遺物(2)

ラケズリが施されている。底部には「土」のヘラ書きがある。

水瓶（第38図9）

細い頚部が垂直に立ち上がり、口縁部が短く外反する。端部外側に小さな口縁帯がつくり出されている。

B10号窯跡

B地区沢奥部の南斜面中腹、B9号の西側に位置する地下式窖窯である。前庭部がB16号窯煙道部の土壙を切っており、それより新しい。焼成室・燃焼室の天井部が崩落しているほかは保存良好である。

〔煙道〕　先端にあり、平面形は円形で、壁は内傾気味に立ち上がる。

〔焼成室〕　平面形は、中央やや下寄りに最大幅をもつ胴張り形である。先端部は幅が急に狭くなり、丸くおさまる。燃焼室に向かってくびれる。壁は内傾しながら立ち上がり、断面は半円形になる。還元され、硬化している。床は凹凸があり、約27°傾斜する。還元され、硬化している。先端部にのみ細い周溝が続き、他の部分では不明である。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁がほぼ平行する長方形である。焼成室との境はややくびれており、楕円形の舟底状ピット（深さ30㎝）がみられる。くびれ部壁面にはスサ入り粘土が貼り付けられている。これはいくぶん壁を掘り込んだ中に粘土を充填するかたちであり、外側厚さ5㎝程は還元され、硬化しているが、内部は炭化物を多く含むごく軟質の土が入っている。壁は斜めに開きぎみに立ち上がる。床はほぼ平坦であるが、焚口付近はややくぼんでいる。

〔焚口部〕　特に施設はない。

〔前庭部〕　平面形は焚口部から両側に広がる略方形である。壁は斜めに立ち上がり、床面は凹凸が激しく、中央が皿状にくぼむ。

〔中軸線の方向〕　N－18°－E

〔規模〕全体　－長さ9.1m　　確認面からの深さ　1.6m

煙道　－直径 45㎝　　残存高20㎝

焼成室－長さ4.7m　　幅1.3m　　残存高0.4m

燃焼室－長さ1.4m　　幅1.0m　　残存高0.7m

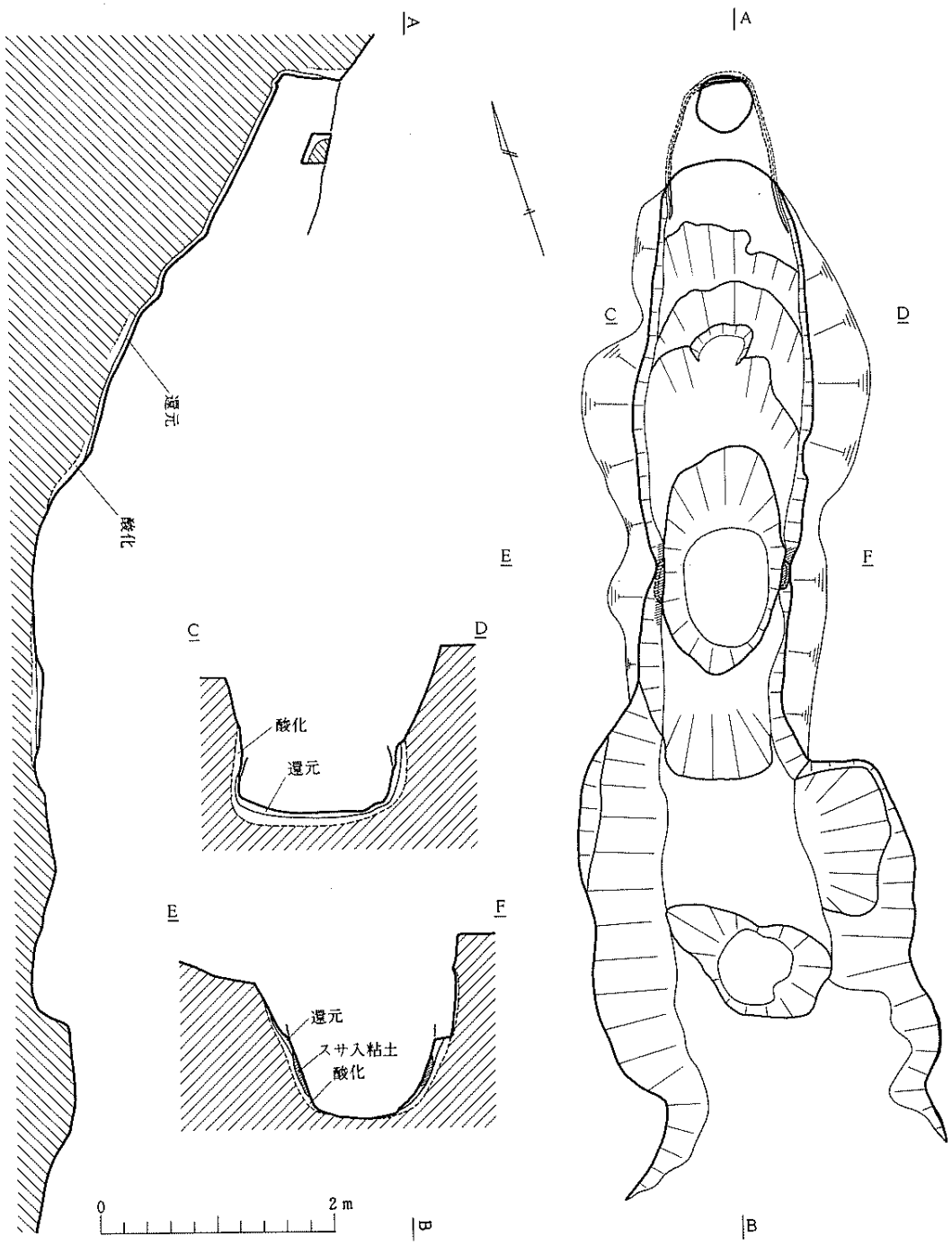
焚口部－　　幅0.9m

前庭部－長さ3.0m　　幅　上端2.8m、下端1.6m　　残存高1.0m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第40図1～11）



第39図　B10号窯跡

1〜7 は皿状を成すものである。このうち 1〜3・5・6 は、体部下位に再調整時に削り出された弱い稜をもつもので、稜から口縁部にかけて直線的に外傾する。4 は体部中位に再調整以前の段階につくり出された稜をもつもので、稜から下は丸みが強く、稜から上はやや外反ぎみになる。7 は体部下端から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する。いずれも底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。

8〜10 は椀状を成すもので、このうち 8・10 は体部下位に丸みをもち、中位から口縁部にかけて、9 は体部から口縁部にかけて直線的かつ急角度に外傾するもので、口径に比して底径が大きめである。いずれも底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されており、さらに 9 では底部中央にヘラ切り痕が残る。

11 は器形が明確でないが、底部に「＋」のヘラ書きがみられる。

高台付坏（第 40 図 12〜14）

12・13 は椀形のものである。体部下位に丸みをもち、体部上半から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部内面に 1 条の横位沈線が施される。高台は短く、断面は逆台形である。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施される。

14 は浅い皿状を呈する。体部中位に稜をもち、稜から上が短く外傾し、断面逆台形の短い高台が付く。底部に回転ヘラケズリが施されている。

盤（第 40 図 15）

体部に段をもつもので、段から上が直線的に外傾する。台部は失われているが、残存形からみて第 94 図 17 と同類のものと推定される。

蓋（第 40 図 16〜18）

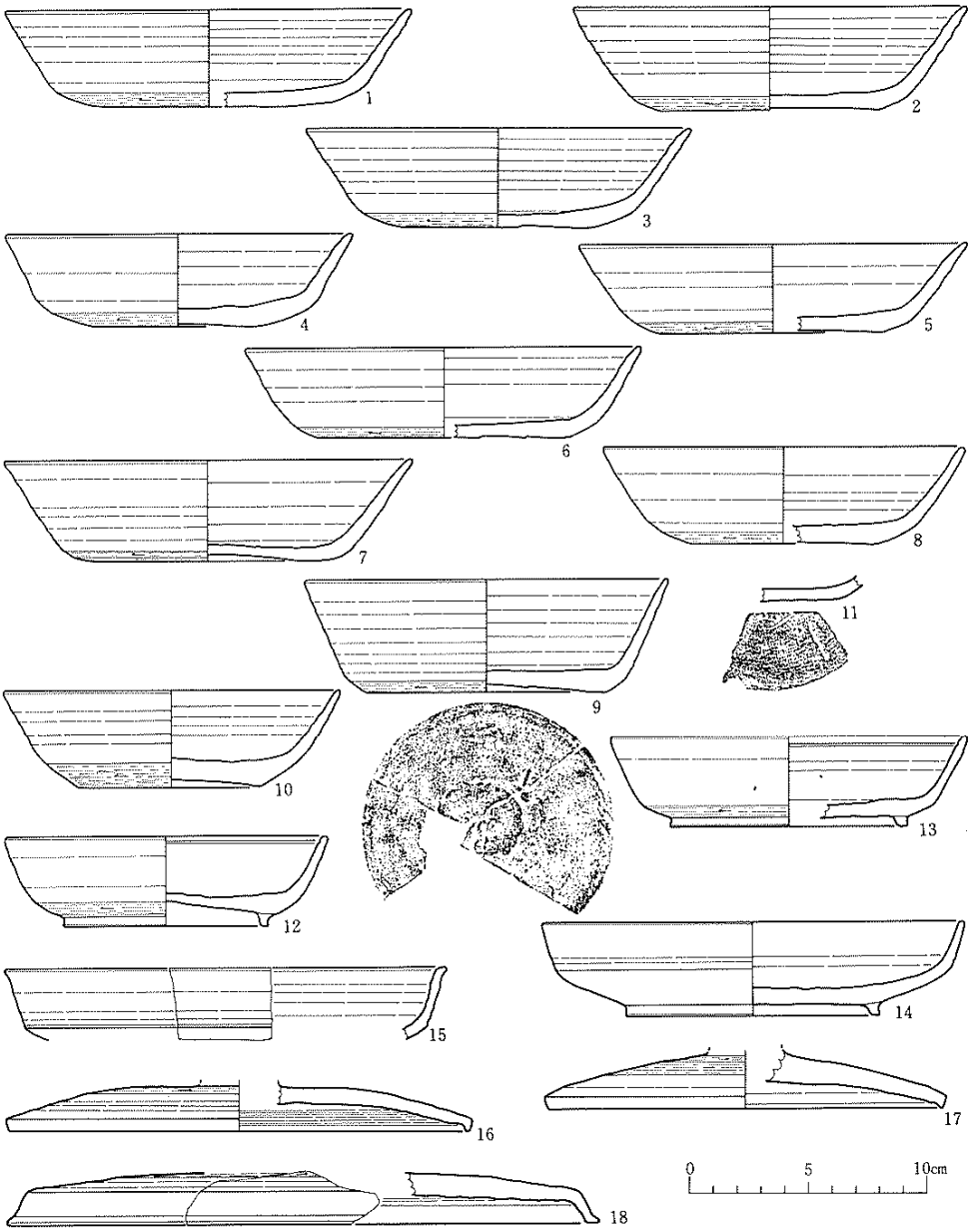
16 はつまみの周辺がほぼ平坦で、天井部の中ほどでゆるく内弯して口縁部に至るのに対し、17 は天井部が変化なく直線的である。口縁部はともに短く、下方に折れ曲がり、外面に縁帯をつくり出している。18 は大形のものである。天井部は中央がやや高いが、むしろ平坦に近く、口縁部は壷蓋の形状を示す。いずれも天井部上半に回転ヘラケズリが施されている。

甕（第 41 図 1〜7）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は 5 が上端、1〜4・6・7 が下端を引き出している。1〜6 は外面の口縁帯下に櫛描き波状文が描かれている。

短頸壷（第 41 図 8・9）

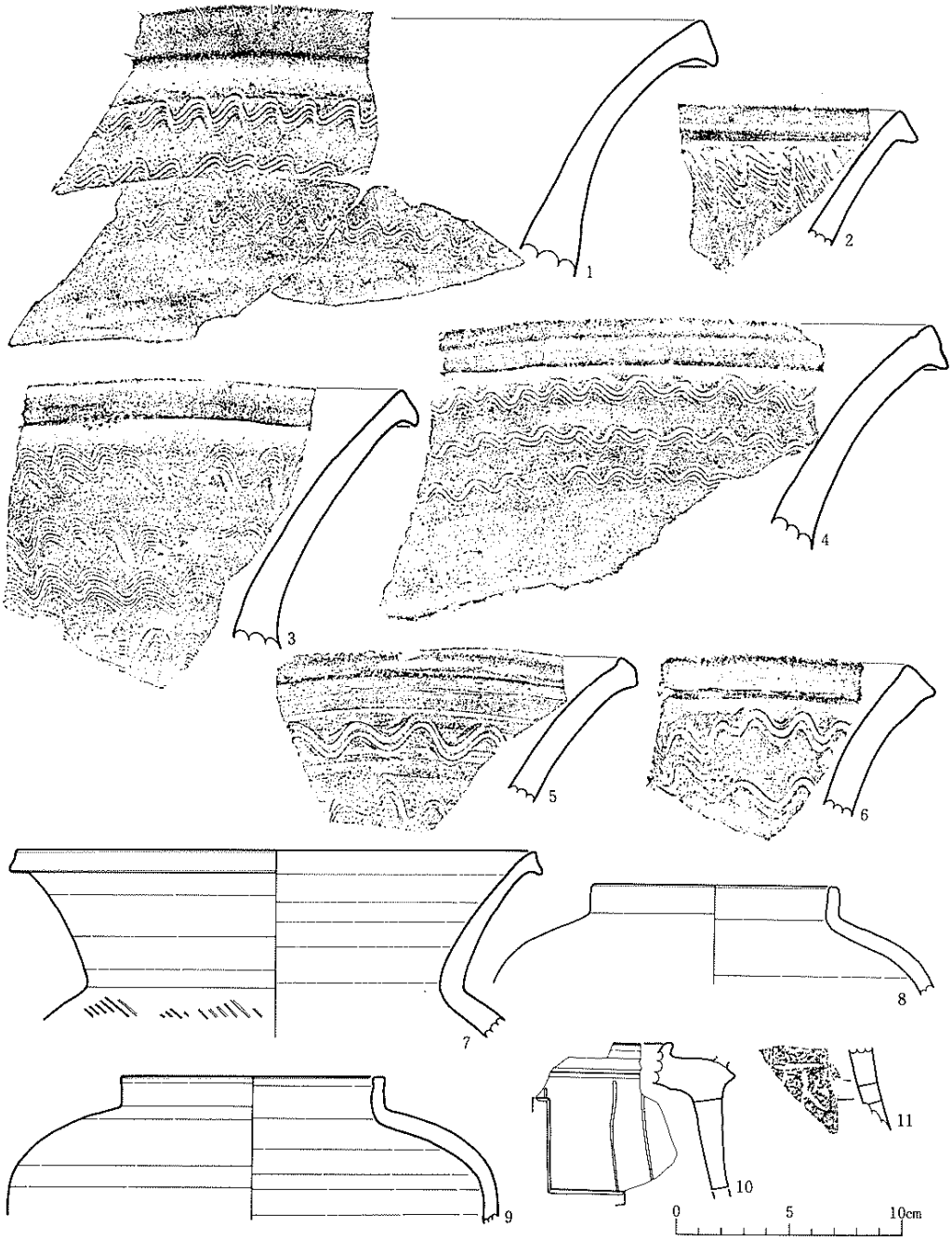
口縁部は短く直立し、上端が平坦に仕上げられている。8 は肩部がなだらかに丸みをもち、9 はやや肩が張る。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器坏	ⅠHⅰ	17.1	8.7	4.1	B10-7	
2	灰原	須恵器坏	ⅠHⅰ	16.5	9.2	4.4	B10-1	18-12
3	灰原	須恵器坏	ⅠHⅰ	16.2	8.0	4.2	B10-8	18-13
4	下方灰原	須恵器坏	ⅠGⅰ	14.6	7.1	3.9	B10-9	
5	灰原	須恵器坏	ⅠHⅰ	16.3	9.2	3.7	B10-3	19-1
6	床面直上	須恵器坏	ⅠHⅰ	16.6	10.5	3.8	B10-6	
7	灰原	須恵器坏	ⅠEⅰ	17.1	9.8	4.3	B10-5	
8	堆積土1層	須恵器坏	ⅡE	15.2	7.8	4.1	B10-23	
9	床面直上	須恵器坏	ⅡCⅱ	15.3	10.1	4.8	B10-4	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
10	灰原	須恵器坏	ⅡE	14.2	7.6	4.2	B10-2	19-2
11	下方灰原	須恵器坏		—	—	—	B10-21	
12	灰原	須恵器高台付坏	ⅡA	13.6	8.6	3.8	B10-11	
13	灰原	須恵器高台付坏	ⅡA	15.0	10.0	3.8	B10-13	
14	堆積土1層	須恵器高台付坏	ⅠD	17.8	8.6	3.8	B10-12	
15	堆積土1層	須恵器盤？		18.6	—	—	B10-22	
16	灰原	須恵器蓋	ⅡA	19.3	—	—	B10-14	
17	灰原	須恵器蓋	ⅡA	16.6	—	—	B10-15	
18	堆積土1層	須恵器蓋	1	25.0	—	—	B10-17	

第40図　B10号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B10-31	19-3
2	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B10-28	19-7
3	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B10-26	19-4
4	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B10-25	19-8
5	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B10-29	19-6
6	灰原	須恵器甕	I	——	——	——	B10-27	19-9

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
7	堆積土1層	須恵器甕	II	22.8	——	——	B10-30	19-11
8	堆積土1層	須恵器短頸壺		10.8	——	——	B10-32	19-10
9	堆積土1層	須恵器短頸壺		11.5	——	——	B10-33	19-5
10	堆積土	円面硯		——	——	——	B10-34	19-12
11	灰原	円面硯		——	——	——	B10-35	19-13

第41図　B10号窯跡出土遺物(2)

円面硯（第 41 図 10・11）

ともに断片資料であり、形状は明確でない。10 は上面外周に 2 条の突帯が巡るもので、やや外反する脚部には「＋」の透しを有する。11 は脚部に「取」のヘラ書きが認められる。両者とも脚部外面に縦の条線が施される。

土師器

坏（第 42 図 1）

製作にロクロを使用している。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって立ち上がる。内面にヘラミガキが施され、その方向は体部～口縁部が横、底部は不定である。外面底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。

甕（第 42 図 2・3）

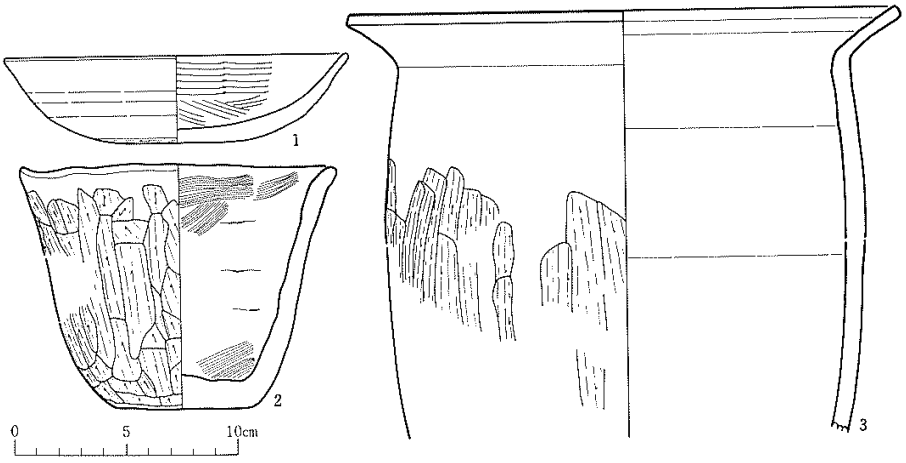
2 は小形のものである。体部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反し、鉢形に近い。外面は口縁下から体部下端までヘラケズリ、内面は部分的にナデ調整が施される。3 は製作にロクロを使用するもので、形状は体部がやや膨らみ、頚部でくびれ、口縁部が外傾する長胴形である。体部外面にヘラケズリが施されている。

B14 号窯跡

B地区西部、東斜面の中腹に位置する。地下式窖窯である。B4 号住居跡に切られている。天井部はすでに崩落し、また灰原は農道によって削平されたと思われる。

〔煙道〕　先端部に位置し、残存状況から円形と推定され、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔焼成室〕　平面形は左右対称の胴張り形で、奥壁は直線的で両端が角ばる。燃焼室近くで急



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	下方灰原	土師器坏	b 2	15.4	——	3.9	B10-24	
2	下方灰原	土師器甕	a	14.2	6.2	11.0	B10-20	19-14

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
3	下方灰原	土師器甕	a	24.3	21.5	——	B10-19	

第42図　B10号窯跡出土遺物(3)

にくびれる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、還元され、硬化している。床はほぼ平坦であり、約24°傾斜する。還元され、硬化している。床面から焼台と思われる須恵器甕の破片が出土しているが、いずれも元の位置から動いている。

〔燃焼室〕　平面形は両壁ともほぼ直線的に平行する長方形である。焼成室との境は焼成室側から明瞭にくびれている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、還元され、硬化している。床はほぼ平坦で、赤色化し、硬い。床面上に炭化物・灰が堆積している。

〔焚口部〕　特に施設はみられないが、左壁に接して方形のピット（24×23㎝、深さ30㎝）が検出されている。

〔前庭部〕　平面形は不整円形の土壙状を呈し、床は中央がくぼんだ皿状で、炭化物が堆積している。

〔中軸線の方向〕　N－54°－W

〔規模〕全体　－長さ7.7m　　確認面からの深さ2.1m

煙道　－直径0.4m

焼成室－長さ3.9m　　幅1.9m　　残存高0.3m

燃焼室－長さ2.1m　　幅1.2m　　残存高0.5m

焚口部－　　幅1.1m　　残存高0.4m

前庭部－長さ1.7m　　幅1.2m　　残存高0.4m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第45図1）

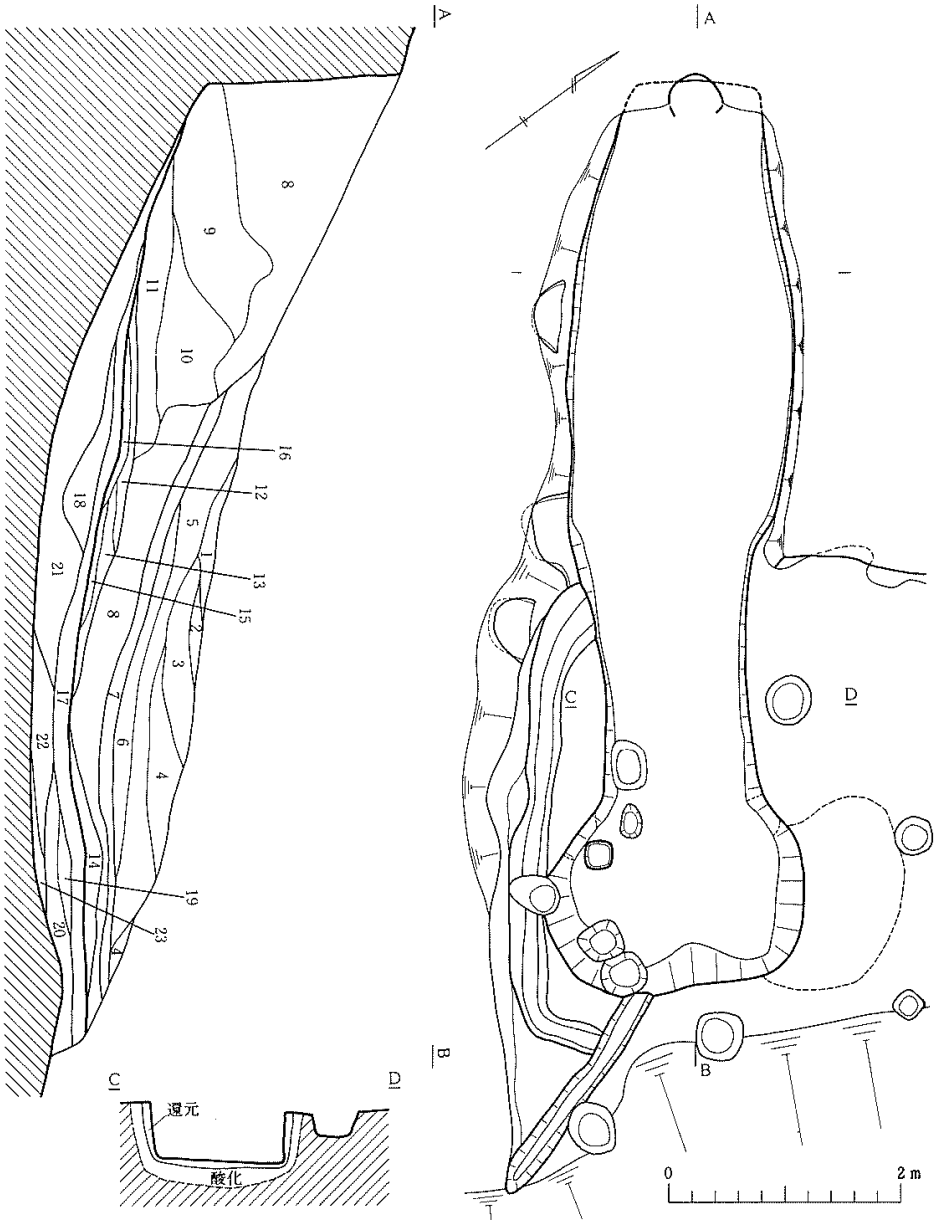
小形の坏である。体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり、底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施される。

甕（第45図2・3）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は2が上下端、3は下端を引き出している。口頸部に櫛描き波状文が描かれている。

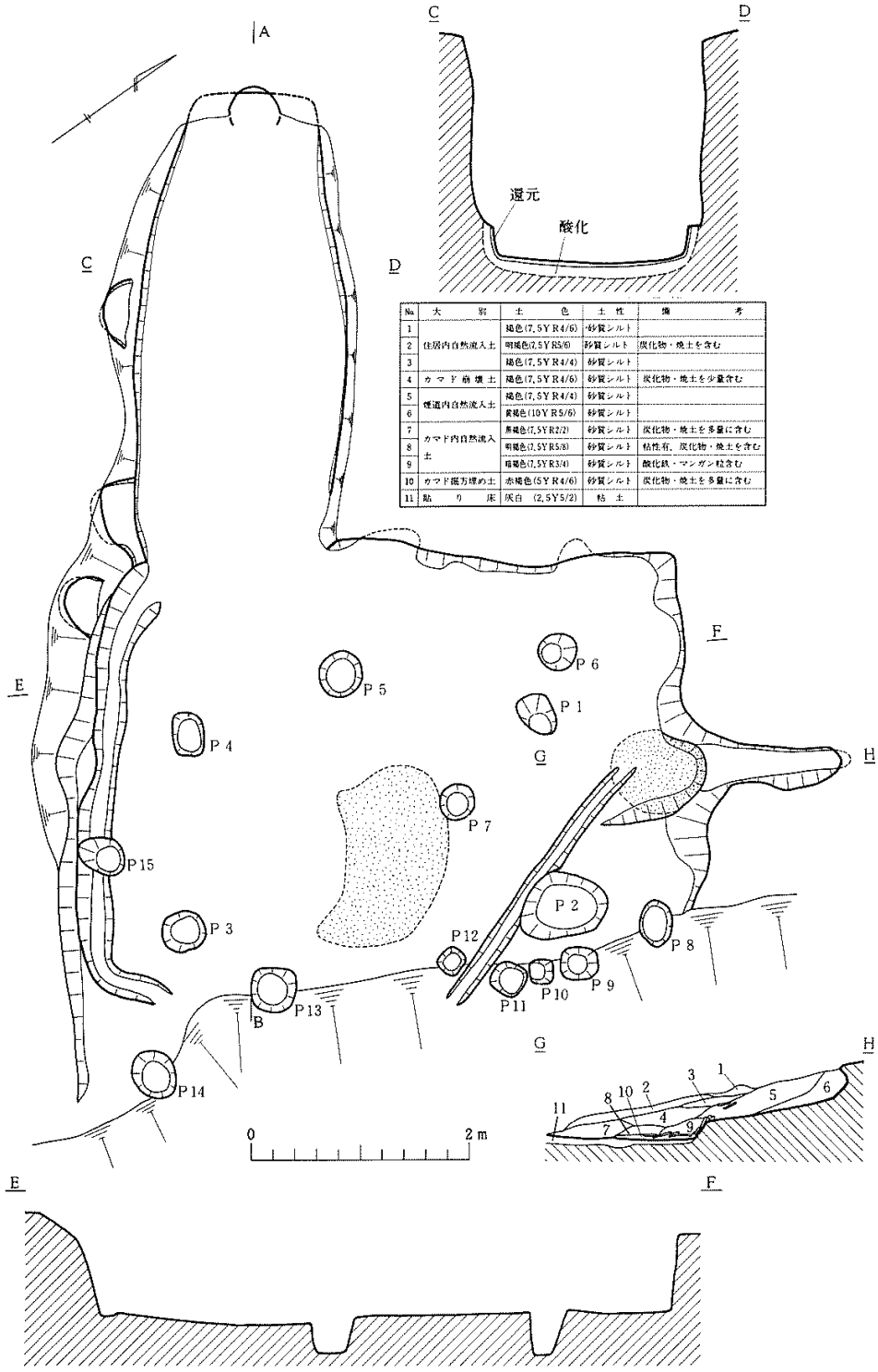
擂鉢（第45図4～6）

いずれも底部資料のため器形は明確でない。底部はかなり厚めで、その周縁は体部下端から外側に突出している。底部内面から下方に向けていくつかの小孔が穿たれており、貫通するものとしないものとがあって一様でない。器面調整として突出部分の側面にヘラケズリが施されている。



No.	大別	土色	土性	備考
1	自然流入	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	
2	地山・壁崩壊土	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	酸化・還元壁崩壊土の互層
3		黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	
4		黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	
5		褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	
6		にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
7	火山灰	灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	灰白火山灰
8	地山・壁崩壊土	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	
9		明褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	
10		橙色 (7.5YR6/8)	砂質シルト	
11		橙色 (7.5YR6/8)	砂質シルト	10層よりしまりあり
12	自然流入土	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	
13		黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	地山ブロックを含む
14		暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物を含む
15		黒色 (10YR1.7/1)		炭化物層
16		黄橙色 (10YR7/8)	砂質シルト	
17	貼り床	灰白色粘土		
18	地山崩壊	黄褐色 (10YR5/8)	砂質シルト	
19	自然流入土	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を含む
20		黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	
21	壁崩壊土	橙色 (7.5YR6/8)	砂質シルト	
22	炭化物層	黒色 (10YR2/1)		
23		褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	

第43図　B14号窯跡



No	大　　別	土　　色	土　性	備　　考
1	住居内自然流入土	褐色(7.5YR4/6)	砂質シルト	
2		明褐色(2.5YR5/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を含む
3		褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	
4	カマド崩壊土	褐色(7.5YR4/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む
5	煙道内自然流入土	褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	
6		黄褐色(10YR5/6)	砂質シルト	
7	カマド内自然流入土	黒褐色(7.5YR2/2)	砂質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
8		明褐色(7.5YR5/8)	砂質シルト	粘性有、炭化物・焼土を含む
9		暗褐色(7.5YR3/4)	砂質シルト	酸化鉄・マンガン粒含む
10	カマド掘方埋め土	赤褐色(5YR4/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
11	貼　り　床	灰白　(2.5Y5/2)	粘　土	

第44図　B14号窯跡・B4号住居跡

B4 号住居跡

〔重複〕　B14 号窯と重複しており、その燃焼室と前庭部の上部を壊しているが、削平した面から焼成室にかけて床を作り替えており、焼成室の空間を再利用している。

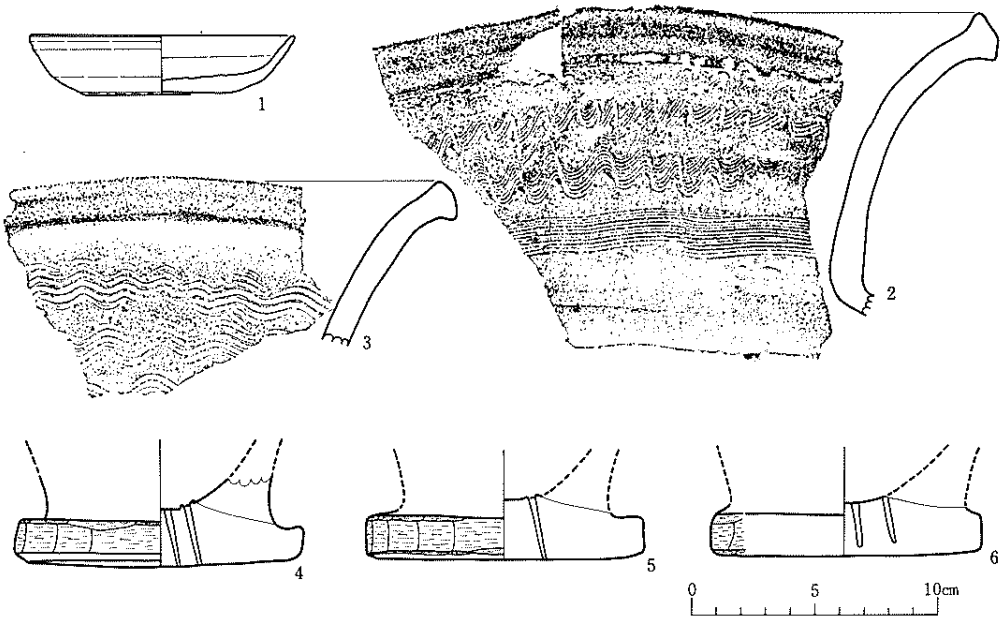
〔平面形・規模・方向〕　B14 号窯の焼成室部分を再利用しているので、平面形は紡錘形の張り出しをもつ長方形となる。規模は 5.8×4.1mで窯と直交する方向に長い。カマドの向く軸線の方向はN－36°－Eである。

〔堆積土〕　竪穴部の堆積土はおもに黄褐色の砂質シルトから成り、15 枚の層にわかれるが、全体に西側の斜面上方から自然流入した状態を示す。またB14 号窯焼成室部分には窯壁・天井部・地山崩壊土が堆積しており、本住居が使用されていた間はまだトンネル状になっていた可能性が強い。

〔壁〕　竪穴部は地山を壁としている。全体に凹凸がみられ、特に西壁において著しい。壁高は最も高い北西部で 80 ㎝である。

〔床面〕　白色の粘土を貼り付けて床としており、貼り付けは張り出し部まで及ぶ。全体に平坦である。

〔柱穴〕　貼床下から 16 個のピットが検出された。このうちP1～P4 は住居の対角線上にあって長方形を形づくることから柱穴の可能性が考えられる。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土6層	須恵器	坏	IIHi	10.8	6.0	2.4	B14-1	20-1
2	床面	須恵器	甕	I	—	—	—	B14-2	20-4
3	床面	須恵器	甕	I	—	—	—	B14-3	20-2

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
4	堆積土6層	須恵器	甑		—	11.6	—	B14-4	20-3
5	堆積土7層	須恵器	甑		—	11.3	—	B14-5	20-6
6	堆積土8層	須恵器	甑		—	10.9	—	B14-6	20-5

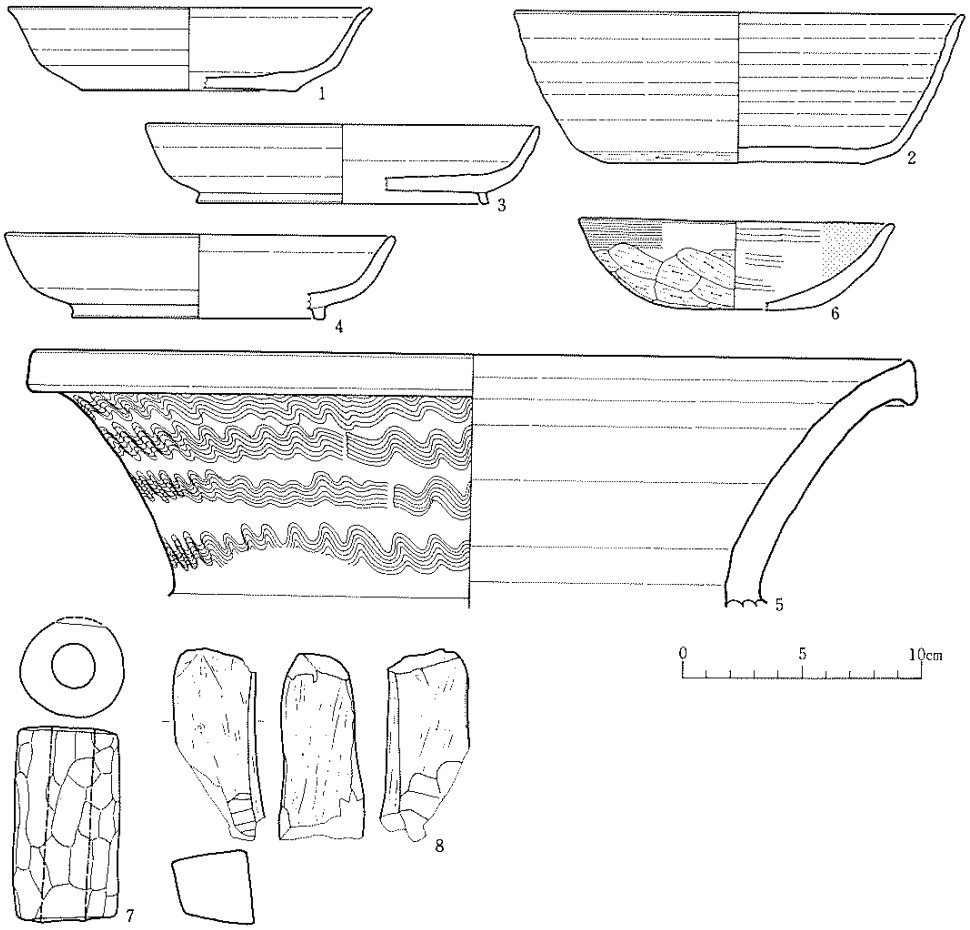
第45図　B14号窯跡出土遺物

(pit の深さ cm)

P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
48	47	59	53	20	48	15	22	62	26	37	37	44	50	16

〔周溝〕　住居の南辺に検出された。幅約 20～30 cm、深さ約 10cm である。

〔カマド〕　北壁中央に付設されている。本体は天井・側壁が失われているが、底面の焼けた部分から推定すると 80×80 cm程になる。内部の堆積土からみると、側壁や天井部は褐色土を貼り付けて構築したものと思われる。煙道は地山を掘り抜いており、本体底面より段が付いて 15cm 程高い。底面は先端に向かってゆるやかに上がる。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土3層	須恵器	IF	15.2	9.0	3.5	B4住-2	
2	堆積土4層	須恵器	IIA1	18.8	10.7	6.3	B4住-1	23-8
3	堆積土3層	須恵器高台付坏	IA	16.5	12.2	3.3	B4住-5	
4	堆積土5層	須恵器高台付坏	IA	16.3	10.6	3.5	B4住-3	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	煙道	須恵器甕	I	36.9	——	——	B4住-6	23-11
6	周溝	土師器坏	c3	13.2	——	3.7	B4住-4	23-9
7	堆積土4層	土錘					B4住-7	23-10
8	堆積土4層	砥石					B4住-8	

第46図　B4号住居跡出土遺物

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 46 図 1）

皿状を呈する。体部中位に稜をもつもので、口縁部は短く外反する。底部は磨滅しており、器面の状況は不明である。

高台付坏（第 46 図 3・4）

ともに皿状の器形である。体部下位に丸みをもち、口縁部にかけては直線的に立ち上がる。高台は短く、3 ではやや外方に開く。3 の底部には回転ヘラケズリが施されるが、4 は欠損して不明である。

椀（第 46 図 2）

体部から口縁部にかけてやや丸みをもって立ち上がる器形である。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。

甕（第 46 図 5）

口頸部が長く、大きく外反して端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上下端を引き出している。口頸部に櫛描き波状文が描かれている。

土師器

坏（第 46 図 6）

椀状の器形であり、体部から口縁部にかけてやや丸みをもって立ち上がる。外面は底部から体部にかけてヘラケズリ、口縁部に横ナデが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

土錘（第 46 図 7）

手づくねによる土師質のものである。長さ約 8㎝ の円柱状を呈し、太い貫通孔を有する。

砥石（第 46 図 8）

断面が方形の棒状で、3 側面を使用している。

B15 号窯跡

B地区西部、東斜面の中腹に位置する。地下式窖窯である。溝に焼成室上半が切られており、煙道は削平されている。天井部の全てと焼成部の壁の大部分が崩壊している。

〔焼成室〕　平面形は胴張り形で先端は丸く、奥壁から約 1mが明瞭にくびれており、煙道に移行する部分と思われる。燃焼部に向かってゆるやかにくびれる。床は平坦で、約 20°傾斜する。還元され、硬化している。

〔燃焼室〕　平面形は側辺がほぼ平行する長方形である。焼成室との境は焼成室側からゆるや

No	大別	土色	土性	備考
1	地山壁崩壊土	橙色 (7.5YR6/8)	砂	窯壁を含む，しまりなし
2		明赤褐色(2.5YR5/8)	砂	窯壁を多量に含む
3		明褐色(7.5YR5/8)	砂	しまりなし
4		赤褐色(7.5YR4/6)	砂	
5		明褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	窯壁・炭化物・スサ入り粘土を含む
6		明赤褐色(2.5YR3/6)	砂	窯壁を多量に含む
7		褐灰色 (10YR4/1)	シルト	スサ入り粘土を多量に含む
8	自然流入	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	窯壁・炭化物を含む
9	排水溝内堆積土	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	
10		明褐色(7.5YR5/8)	砂質シルト	
11	底面	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	炭化物を含む
12		褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	
13	地構	褐色 (10YR4/6)	砂	しまりあり，非常に固い
14		黄褐色 (10YR5/6)	砂	しまりあり，非常に固い
15	土	黒色 (10YR1.7/1)	砂質シルト	炭化物多量・焼土・スサ入り粘土含む

第47図　B15号窯跡

かに括れ、スサ入り粘土が貼り付けられている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。還元され、ごく硬い。床はほぼ平坦で、中央は壁同様に還元されて硬いが、壁沿いや焼成室近くは赤色化し、硬くない。堆積土中位にスサ入り粘土が少量ブロック状にみられる。

〔焚口部〕　特に施設はない。

〔前庭部〕　不整な平面形の掘り込みで、その手前には斜面を削り出した平坦面がある。排水溝が焚口部から右壁に沿って斜面下方に続く。幅約 30㎝、深さ約 30 ㎝である。

〔中軸線の方向〕　N－35°－W

〔規模〕全体　－長さ 9.2m　　確認面からの深さ 1.6m

焼成室－長さ 3.6m　　幅 1.7m　　残存高 0.5m

燃焼室－長さ 1.8m　　幅 1.0m　　残存高 0.5m

焚口部－　　幅 1.0m　　残存高 1.1m

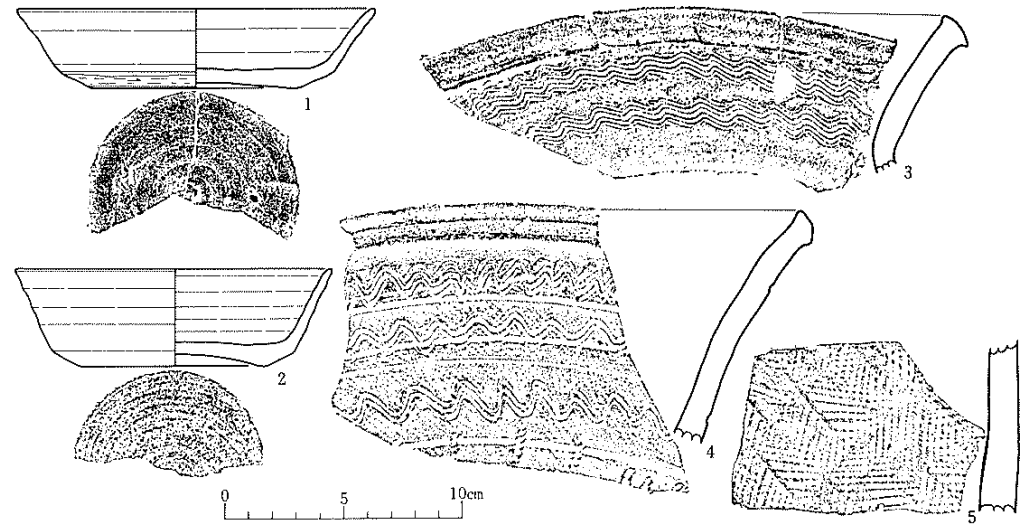
前庭部－長さ 3.8m　　幅 3.7m　　残存高 0.7m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 48 図 1・2）

1 は皿状の器形である。体部下位に稜をもち、稜から口縁部にかけて外反ぎみに立ち上がる。体部下位に弱い回転ヘラケズリが施されるが、底部には加えられず、糸切り痕を残す。2 は椀状の器形で、体部下位に稜をもち、稜から上は直線的に外傾する。再調整は施されず、回転糸



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土5層	須恵器 坏	I F iii	15.0	8.7	3.3	B15-1	
2	堆積土1層	須恵器 坏	II B iv	13.3	7.7	4.1	B15-2	
3	堆積土5層	須恵器 甕	1	——	——	——	B15-4	20-7

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
4	溝	須恵器 甕	1	——	——	——	B15-3	20-9
5	堆積土1層	須恵器 甕		——	——	——	B15-5	20-8

第48図　B15号窯跡出土遺物

切り痕を残す。

甕（第 48 図 3～5）

3・4 は口頸部が長く、大きく外反し、端部外側の上下端を引き出して口縁帯をつくり出している。口頸部に平行沈線・櫛描き波状文が描かれている。5 は体部破片で、矢羽根状の叩き目が施されている。

B16 号窯跡

沢奥部の南斜面下部、B9 号窯の斜面下に位置する。地下式窖窯である。B9 号窯の灰原に煙道が覆われており、また煙道の土壙状部がB9 号窯の前庭部に切られており、それらより古い。保存状況は良好である。

〔煙道〕　先端右寄りに位置し、平面形は不整な方形をしている。壁は垂直に立ち上がる。

〔焼成室〕　平面形は中央やや下寄りが膨らむ左右対称の胴張り形で、先端は丸みをもち、燃焼室との境はくびれる。壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形となる。還元され、硬化している。床はほぼ平坦であるが、還元面は右壁沿いにのみ残存し、他は崩れている。約 17°傾斜している。壁沿いに幅 20 ㎝、深さ約 10 ㎝の排水溝がめぐる。

〔燃焼室〕　平面形は側辺がほぼ平行する長方形である。焼成室との境は焼成室側から明瞭にくびれる。壁上部両側に打ち込みによる径 12 ㎝程の杭の痕跡がみられる。壁は還元部分が崩れている。床は焚口近くに酸化部分がわずかに残るだけで、還元面はみられない。

〔焚口部〕　特に施設はみられない。

〔前庭部〕　方形で焚口部から左右に広がり隅は角が付く。燃焼部前半分から左壁に沿って排水溝が前庭部まで続き、前庭奥部で構内から加工された木材（丸太材）が検出された。

〔中軸線の方向〕　N－6°－E

〔規模〕全体　－長さ 10.5m　　確認面からの深さ 2.5m

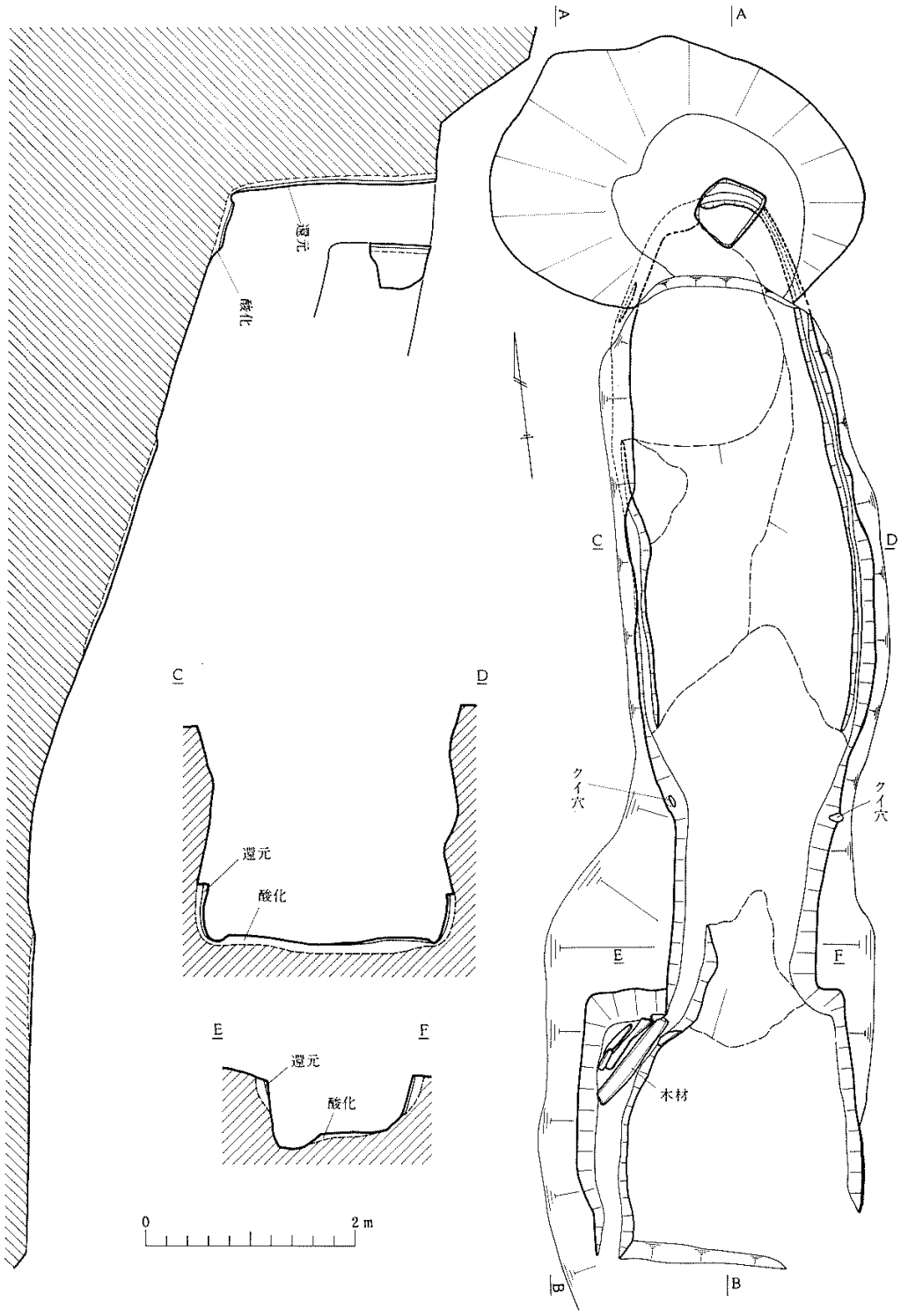
煙道	－0.6×0.5m		残存高 0.6m
焼成室	－長さ 6.2m	幅 2.3m	残存高 0.6m
燃焼室	－長さ 1.9m	幅 1.1m	残存高 0.6m
焚口部	－	幅 1.2m	残存高 0.5m
前庭部	－長さ 2.4m	幅 2.6m	残存高 0.5m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 50 図 1～7）

1・2・4 は浅く、皿状を呈する。1・4 は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、2 は



第49図　B 16号窯跡

やや丸みをもって立ち上がる。いずれも底部には回転ヘラケズリが施されている。

3・5〜7 は深く、椀状を呈する。このうち 5 は体部下位に稜をもつもので、稜から下はやや丸みをもち、稜から上は外反ぎみになる。3 は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、6 は体部に丸みをもって外傾する。7 は体部から口縁部にかけて直線的なものであるが、他に比して肉厚でやや小形である。また、3・5・6 の底部および体部下位に回転ヘラケズリが施されるのに対し、7 では手持ちヘラケズリである。

高台付坏（第 50 図 8〜10）

8 は浅い皿状の器形である。体部中位に弱い稜をもち、稜から上は短く直立ぎみに外傾する。高台は口径に比して小さく、断面は逆台形である。9・10 はやや深い椀状の器形で、体部下位が丸みをもち、口縁部は直線的になる。高台の断面は 9 が方形に近く、10 は逆台形である。いずれも底部に回転ヘラケズリが施され、10 では体部下位まで及ぶ。

椀（第 50 図 11・12）

11 は体部下位にやや丸みをもち、体部中位から口縁部にかけて直線的になる器形で、底部から体部下位に回転ヘラケズリが施されている。12 は高台が付くもので、椀部の形状は 11 に類似するが、それをさらに深めにしたものである。高台は薄手で、やや外に開く。底部から体部下半に回転ヘラケズリが施される。

盤（第 50 図 13〜15・第 51 図 1〜5）

15 はやや深めで、口径の割に小さい高台が付く器形である。体部から口縁部までやや丸みをもって立ち上がり、高台は「ハ」字状に開く。1〜5 は深めのもので、口径の割に大きい高台が付く。体部下位が丸みをもって外傾し、高台は前者より短く、垂直に近いものが多い。いずれも底部に回転ヘラケズリが施されており、15 では体部下位に及ぶ。

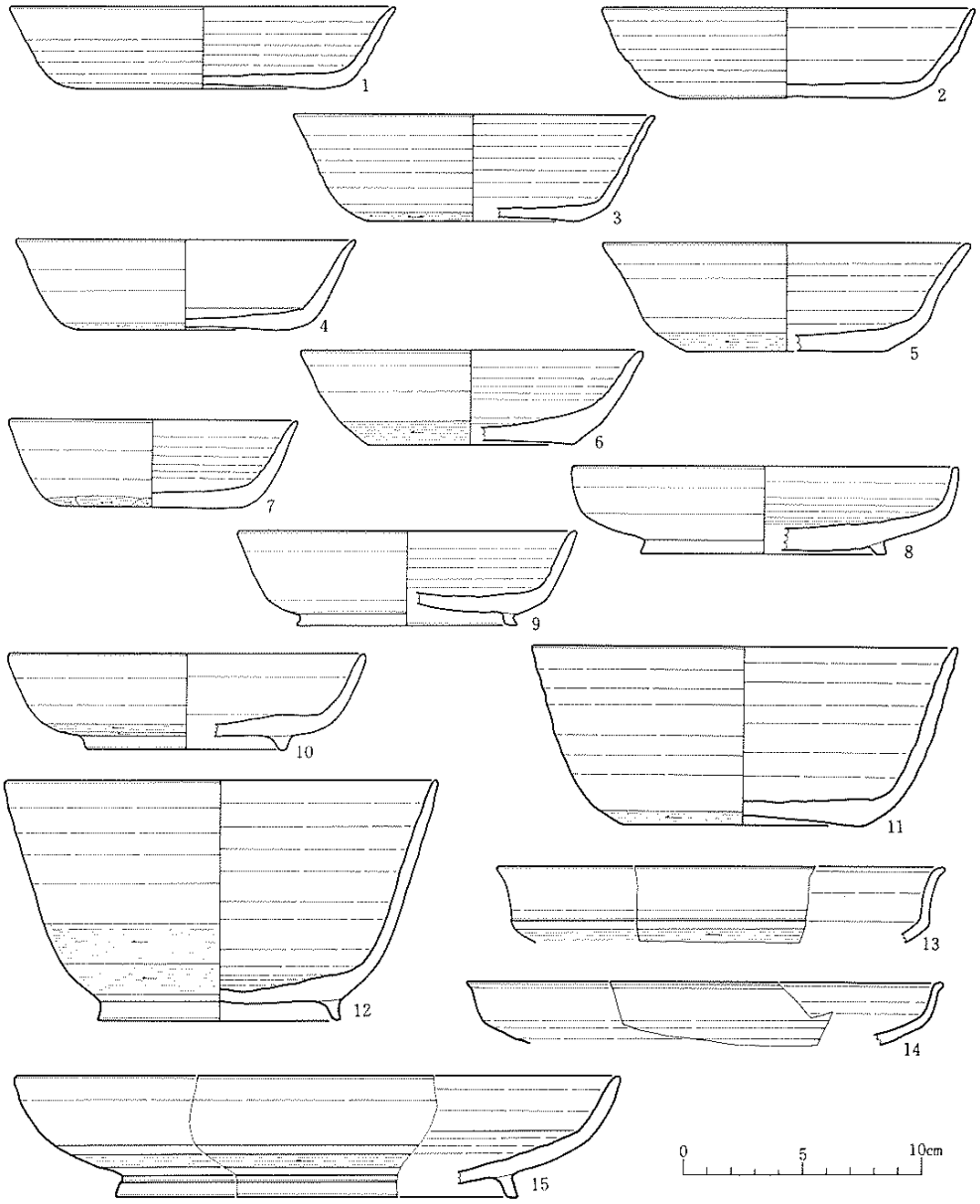
この他、盤とみられ、体部に段もしくは稜の付くものがある（13・14）が、体部下半が失われており、器形が明確でない。

高坏（第 51 図 7）

脚部のみが残存するもので、坏部の形状は不明である。脚部は中空で、上位から下位にかけて強く外反し、下端は下方に折れ曲がり、外面に縁帯をつくり出している。

蓋（第 51 図 6〜16）

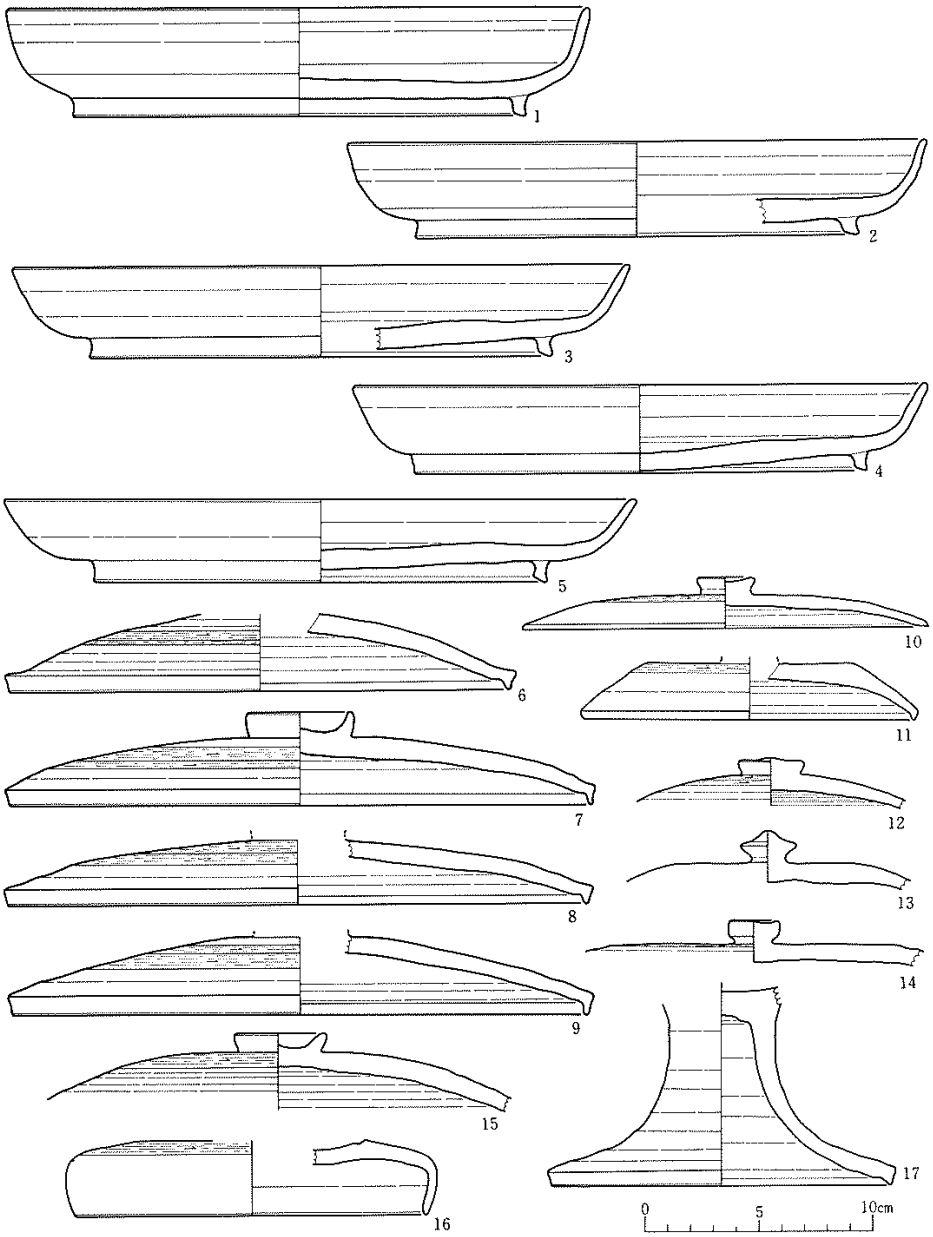
6〜9・15 は天井部がやや丸みをもつ器形で、口縁部の残存する 6〜9 はいずれも屈曲によってつくり出された縁帯を持つ。つまみは欠損しているものが多いが、7・15 では中央がくぼむ形態である。このほか 10 も天井部が丸みをもつが、天井部の縁がそのまま口縁部になり、縁帯がない。つまみは中央がややくぼむ。11 は天井部の中央に明瞭な平坦面をもつもので、口縁部にかけて「ハ」字状になる。口縁部はゆるく屈曲し、外面に弱い縁帯がつくり出される。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土1層	須恵器	坏	IAi	16.2	9.9	3.5	B16-4	
2	堆積土1層	須恵器	坏	ICi	15.7	9.1	3.8	B16-3	20-12
3	床面	須恵器	坏	IICi	15.1	8.8	4.5	B16-2	
4	床面	須恵器	坏	IAi	14.2	9.0	3.8	B16-1	20-11
5	堆積土1層	須恵器	坏	IIBi	15.4	8.4	4.6	B16-49	
6	灰原	須恵器	坏	IIE	14.3	8.6	4.0	B16-7	
7	堆積土1層	須恵器	坏	IIHii	12.2	7.6	3.7	B16-5	
8	堆積土1層	須恵器	高台付坏	ID	16.2	10.4	3.7	B16-8	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
9	堆積土1層	須恵器	高台付坏	IIA	14.2	9.2	4.0	B16-9	
10	堆積土1層	須恵器	高台付坏	IIA	15.0	8.4	4.1	B16-10	20-10
11	灰原	須恵器	椀	IIA1	17.8	10.2	7.6	B16-12	21-1
12	床面	須恵器	椀	IC	18.2	10.1	10.1	B16-11	20-14
13	堆積土1層	須恵器	盤		18.8	——	——	B16-32	
14	灰原	須恵器	盤		20.0	——	——	B16-33	
15	堆積土1層	須恵器	盤	IB3	25.4	16.8	5.1	B16-15	

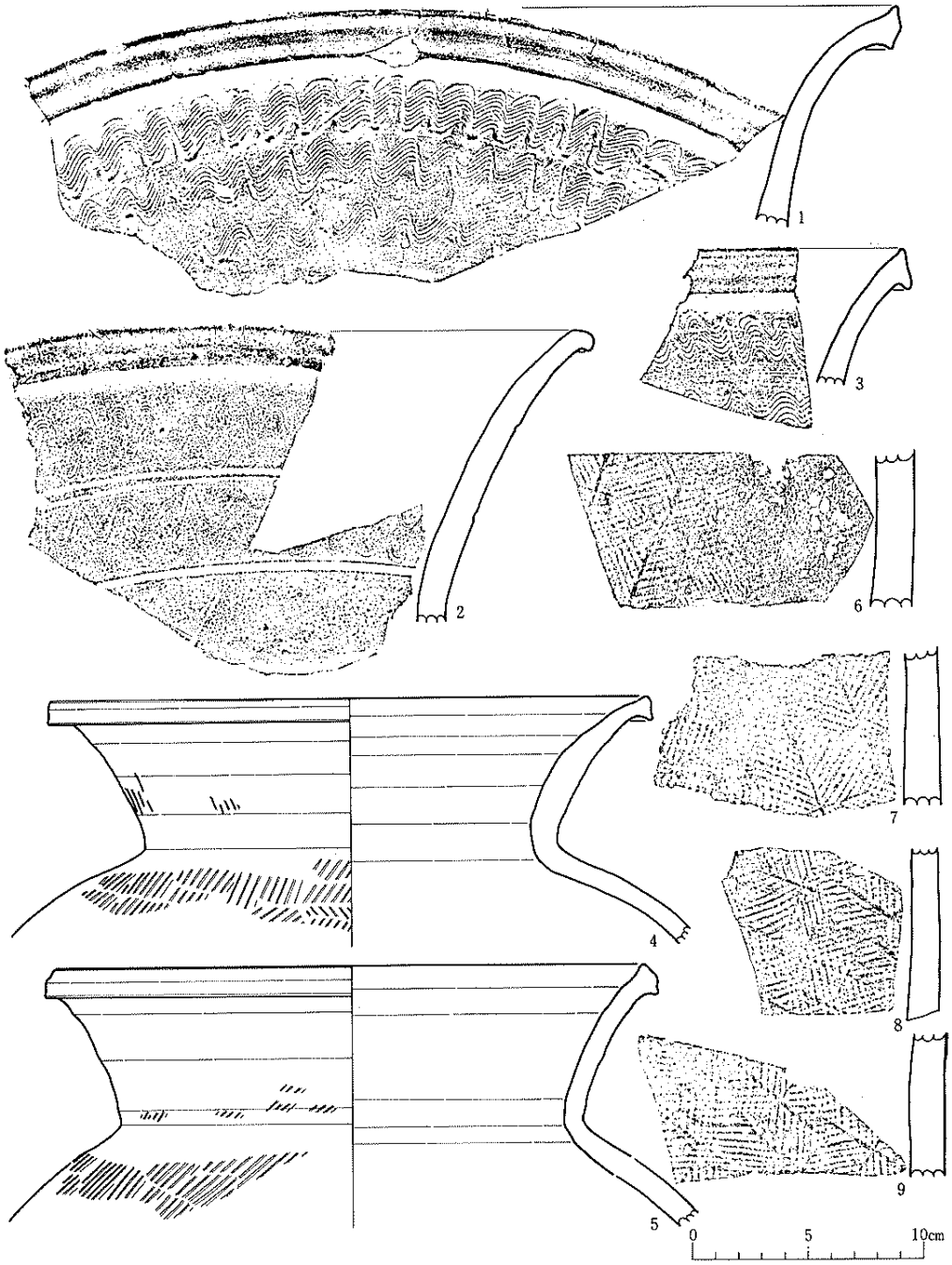
第50図　B16号窯跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	灰原	須恵器盤	ⅠA3	25.5	19.8	4.8	B16-13	21-4
2	床面	須恵器盤	ⅠA3	25.4	19.4	4.2	B16-14	
3	床面	須恵器盤	ⅠA3	27.0	20.2	4.0	B16-19	21-2
4	灰原	須恵器盤	ⅠA3	25.2	19.8	3.8	B16-23	21-3
5	灰原	須恵器盤	ⅠA3	27.6	19.8	3.7	B16-24	
6	灰原	須恵器蓋	Ⅰ	21.8	——	——	B16-6	
7	灰原	須恵器蓋	Ⅰ	25.0	——	4.2	B16-31	21-5
8	灰原	須恵器蓋	Ⅰ	25.4	——	——	B16-29	
9	灰原	須恵器蓋	Ⅰ	25.2	——	——	B16-30	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
10	堆積土1層	須恵器蓋	Ⅱ	17.8	——	2.3	B16-28	
11	堆積土1層	須恵器蓋	Ⅱ	14.6	——	——	B16-16	
12	灰原	須恵器蓋	Ⅱ?	——	——	——	B16-20	
13	堆積土1層	須恵器蓋	Ⅱ?	——	——	——	B16-22	
14	床面	須恵器蓋		——	——	——	B16-18	
15	堆積土1層	須恵器蓋		——	——	——	B16-21	
16	床面	須恵器蓋	Ⅲ	15.2	——	——	B16-17	
17	堆積土1層	須恵器高坏		——	14.9	——	B16-26	21-9

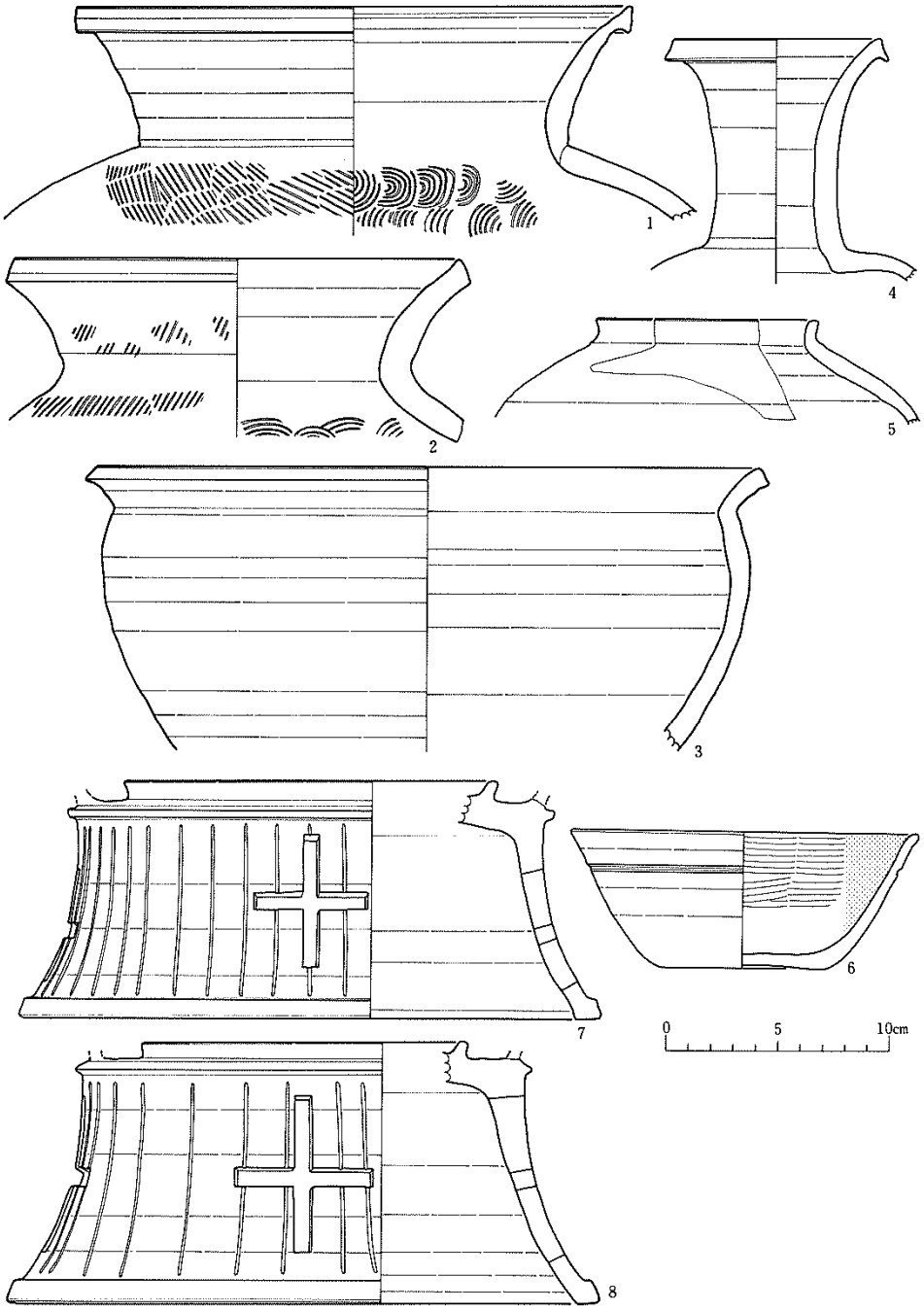
第51図　B16号窯跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器甕	I	——	——	——	B16-40	21-6
2	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B16-41	21-7
3	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B16-42	21-8
4	堆積土1層	須恵器甕	II	25.7	——	——	B16-36	22-1
5	堆積土1層	須恵器甕	II	25.4	——	——	B16-37	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
6	堆積土1層	須恵器甕		——	——	——	B16-45	22-3
7	堆積土1層	須恵器甕		——	——	——	B16-46	22-2
8	堆積土1層	須恵器甕		——	——	——	B16-43	22-6
9	床面	須恵器甕		——	——	——	B16-44	22-5

第52図　B16号窯跡出土遺物(3)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器甕	II	24.8	——	——	B16-39	
2	床面	須恵器甕	II	19.8	——	——	B16-38	
3	床面	須恵器鉢	IA	29.6	体28.9	——	B16-35	22-4
4	堆積土1層	須恵器長頸壺		9.2	——	——	B16-25	21-11

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	堆積土1層	須恵器短頸壺		9.9	——	——	B16-27	21-10
6	床面	土師器坏	a	15.6	7.4	6.1	B16-34	20-13
7	堆積土	須恵器円面硯		16.7	26.0	10.6	B16-48	22-7
8	堆積土1層	須恵器円面硯		14.5	24.4	11.7	B16-47	22-9

第53図　B16号窯跡出土遺物(4)

12〜14 はつまみ部の破片である。12・13 は中央が突出し、13 ではそれが顕著で宝珠形に近い。14 はほぼ平坦であるが、つまみの中央と周縁の間がややくぼんでいる。

16 は壷蓋で、天井部周縁から口縁部にかけて強い丸みをもつ。

甕（第 52 図 1〜9・第 53 図 1・2）

第 52 図 1〜5・第 53 図 1・2 は口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口頸部に平行沈線と櫛描き波状文・櫛描き波状文が描かれている。第 52 図 6〜9 は体部破片で、矢羽根状の叩き目がみられる。

鉢（第 53 図 3）

体部が丸みをもって立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が短く外反する。口縁端部に小さな縁帯がつくり出されている。

長頸壷（第 53 図 4）

肩の張る体部から頸部が直立ぎみに立ち上がり、口縁部が外反し、端部外側の下端を引き出して縁帯をつくり出している。

短頸壷（第 53 図 5）

なだらかな丸みをもつ肩部から口縁部が短く直立する。口縁端部上面は平坦に仕上げられている。

円面硯（第 53 図 7・8）

ともに上面に 2 条の突帯が巡るものであるが、硯面は欠損しており形状は明らかでない。脚部は外反ぎみに開き、下端において肥厚し、平坦な縁帯がつくり出されるもので、4 ケ所に「＋」字状の透しが配され、外面に縦位の条線が施される。

土師器

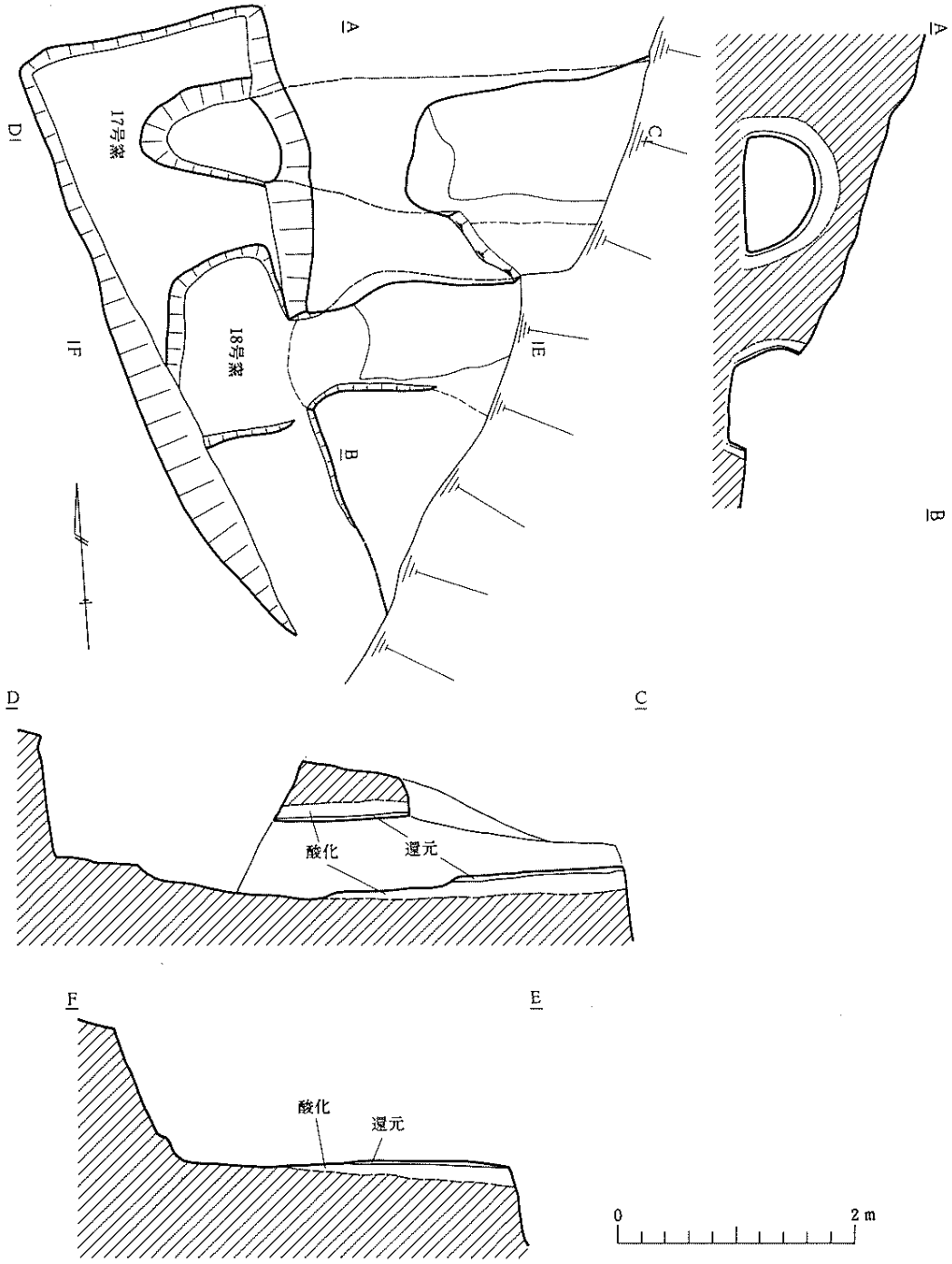
坏（第 53 図 6）

製作にロクロを使用するもので、底部に回転糸切り痕を残す。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部外面にロクロによる 1 条の沈線が認められる。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

B17 号窯跡

Ｂ地区中央部、沢奥部の南斜面中腹に位置する。地下式窖窯である。焼成室の中ほどから煙道にかけて農道により削平されている。

〔焼成室〕　全体形は不明であるが、燃焼室よりわずかに広がる。壁は丸みをもって立ち上がり、断面形は円に近いと推定される。床はごく平坦で、ほぼ水平である。壁床とも黄白色に変色し、硬いが他の須恵器窯ほどではない。



第54図　B17・18号窯跡

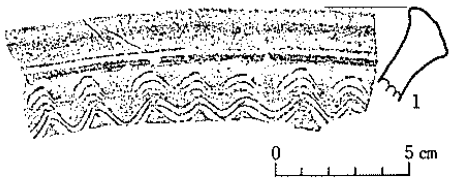
〔燃焼室〕　ごく短く形状は焼成室と同様で、床も焼成室からそのまま続く。壁・床は赤色に変化しているが、さほど硬くない。床面上に炭化物が堆積している。
〔焚口部〕　特に施設はない。
〔前庭部〕　窯本体より幅の広い、不整方形の土壙状を呈する。床はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。床面上に炭化物が堆積している。
〔その他の施設〕　この窯からB18号窯にかけての前庭部付近には長方形の大きな掘り込みがあり、両窯の前庭部はその底をさらに掘り下げた形で作られている。切り合い関係はなく両窯に伴った施設と思われる。
〔中軸線の方向〕　N－85°－E
〔規模〕全体　－長さ（1.9m）　確認面からの深さ0.6m
　　焼成室－長さ（1.3m）　幅1.0m　残存高0.5m
　　燃焼室－長さ0.6m　幅0.6m　残存高0.5m
　　焚口部－　幅0.7m　残存高0.6m
　　前庭部－長さ1.0m　幅1.4m　残存高0.2m
〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

B18号窯跡
B17号の北側に隣接している。地下式窖窯である。焼成室の中程から煙道にかけて農道により削平されている。
〔焼成室〕　全体形は不明であるが、燃焼室よりやや幅が広い長方形と推定される。壁は内弯して立ち上がり、断面は半円形を呈する。床はごく平坦で、水平である。壁・床ともに黄白色に変色し、あまり硬くない。
〔燃焼室〕　焼成室に向かって開く台形状をしている。焼成室との境は明瞭ではない。壁・床の形状は焼成室のそれと同様である。床面上に炭化物が堆積している。
〔焚口部〕　特に施設はみられない。
〔前庭部〕　不整の円形で、B17号窯で記述したように、長方形の掘り込み底面から掘り下げられている。床はほぼ平坦、壁はゆるやかに立ち上がる。床面上に炭化物が堆積している。
〔中軸線の方向〕　N－86°－E
〔規模〕全体　－長さ（3.9m）　確認面からの高さ　1.4m
　　焼成室－長さ（1.8m）　幅1.3m　残存高0.5m
　　燃焼室－長さ1.1m　幅1.1m　残存高0.6m
　　前庭部－長さ1.0m　幅0.9m　残存高0.3m

〔出土遺物〕

須恵器甕（第 55 図）

口縁部が長く、大きく外反するものと思われる。端部外側の上下端が引き出され、口縁部がつくり出されている。外面の口頸部には櫛描き波状文が描かれている。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B18-1	22-8

第55図　B18号窯跡出土遺物

3．瓦窯跡の特徴

瓦窯跡は調査区東部（A地区）の沢に沿って 4 基検出されている。以下、遺構の特徴について記述する。出土瓦については、各窯とも同様の特徴をもっており、また大沢窯跡の瓦窯跡についても同じことがいえるので、各図の注記におのおのの特徴を示すにとどめた。それらの観察結果の詳細及び分類は考察の項に一括して含めている。

A4 号窯跡

A地区沢奥部、東向き斜面裾部に位置する。半地下式窖窯である。外周溝が土壙に切られ、A7 号窯下方の掘り込み内堆積土を切っている。先端から 4mのところで削平され、それ以下は痕跡が若干残るだけである。煙道は残存していない。

〔焼成室〕　細長い長方形で、先端が丸くおさまる。壁は開きぎみに立ち上がり、床はほぼ平坦で、約 22°傾斜する。壁・床とも還元され、硬化している。

〔燃焼室～前庭部〕　削平のため不明である。燃焼室付近に焼けた痕跡がみられる。

〔外周溝〕　左半にのみ検出された。なお、右隣り（北側）のA5 号窯には右半にだけ認められていることから、本来は 2 基の窯を一本の周溝で囲んでいたと思われる。本窯の周溝は斜面上半部が細い溝状、下半部が土壙状になっている。

〔中軸線の方向〕　N－54°－W

〔規模〕全長　　－7.5m

残存焼成室－長さ 3.6m　　幅 1.0m　　残存高 0.4m

焼けた痕跡－長さ 1.9m　　幅 0.8m

外周溝　　－（溝状部）幅 0.6m　　深さ 0.3m

（土壙部）2.6×2.0m　　深さ 1.6m

〔出土遺物〕　窯内堆積土及び外周溝から平瓦・丸瓦が出土している。

A5 号窯跡

A地区沢奥部の東向き斜面裾部、A4 号窯の北側に位置する。半地下式窖窯である。焼成室の一部が削平されている。煙道は残存していない。

〔焼成室〕　平面形は両側壁が平行する長方形を呈する。壁は開きぎみに立ち上がる。床面は還元され、硬化しており、約 26°傾斜する。床は 2 面認められる。第一次床面は構築時面＝地山面がそのまま還元・硬化している。第二次床面は先端から 1.2mまでの範囲に褐色土が分布し、この部分だけ床面が作り変えられている。褐色土上面は還元・硬化がさほどでない。第二

次床面上には焼成室全体に瓦の破片で作った焼台がみられる。

〔燃焼室〕　平面形は両側壁がほぼ平行する長方形を呈する。壁は 2 面ある。第一次面は焼成室との境に角がついて若干幅が広がる。第二次面は褐色土が貼付けられ、焼成室からほぼそのまま平行する。2 面とも開きぎみに立ち上がり、瓦片を貼り付けている。床も 2 面あり、黒色土を貼り付けている。第二次面は第一次面より 10 ㎝高い。2 面ともほぼ平坦で、第一次面は還元され硬化しているが、第二次面はそれほど硬くない。

〔焚口部〕　特に施設はない。

〔前庭部〕　特に区画された施設はないが、燃焼室から地山土を多量に用いた整地層が延びており、平坦面を作り出している。これはA4 号窯まで続いており、両窯は同時に構築されたと考えられる。

〔灰原〕　燃焼部の両側に土壙が掘り込まれており、堆積土に炭化物を多量に含むので、これが灰原と思われる。

〔外周溝〕　窯の斜面上方から延びる部分では新旧 2 本ある。北のA6 号窯との間にある土壙に続く。なお、A6 号窯の周溝もこの土壙に続いている。

〔中軸線の方角〕　N－59°－W

〔規模〕全長　－7.9m

焼成室－長さ 5.9m　幅 0.8m　残存高 0.4m

燃焼室－長さ 2.0m　幅（第一次）1.0m　（第二次）0.7m　残存高 0.3m

外周溝－（溝状部）新　幅 0.5～1.0m　深さ 0.2m

旧　幅 0.4m　深さ 0.2m

（土壙部）　径 3.0m　深さ 1.0m

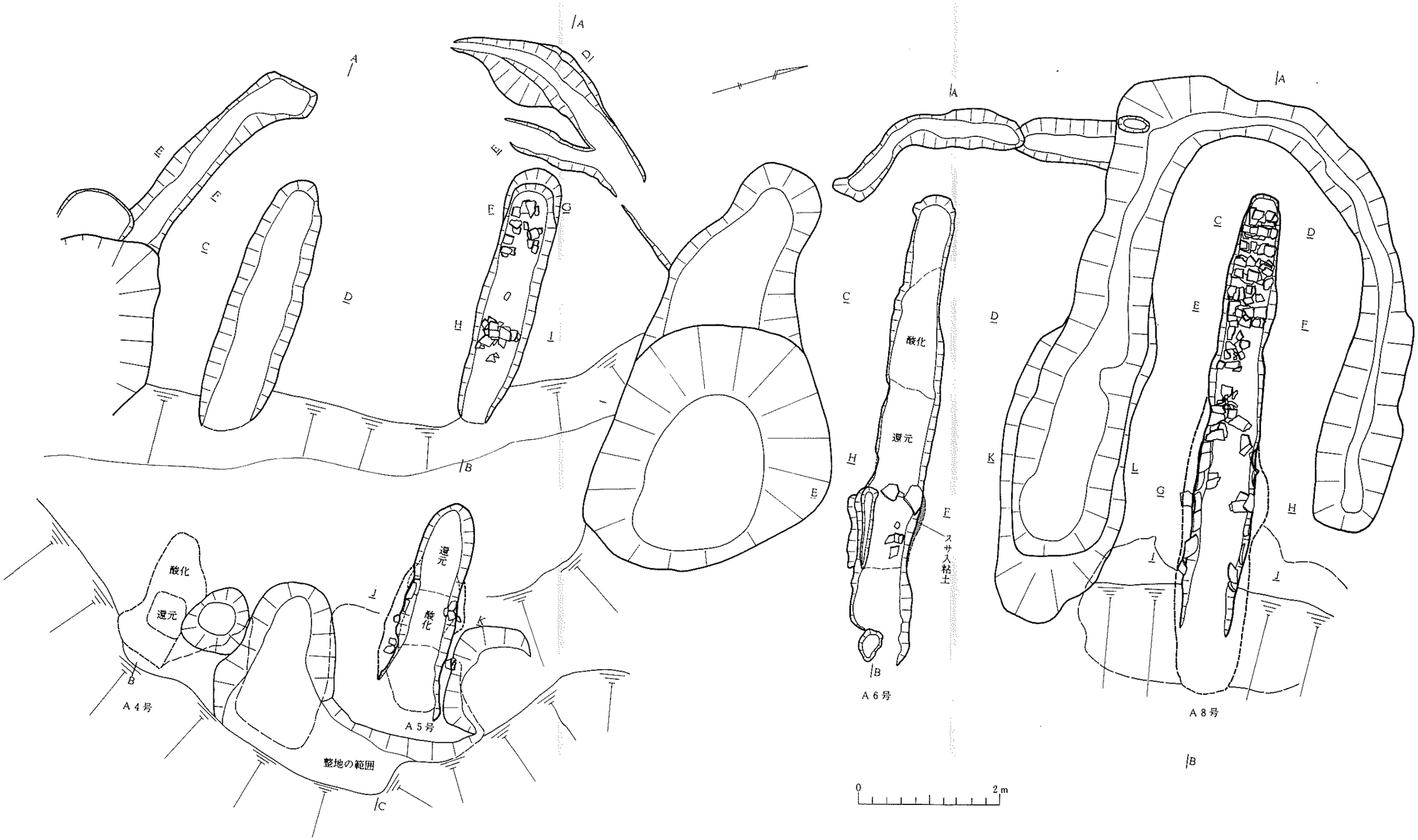
〔出土遺物〕　窯内堆積土・外周溝出土及び窯内施設に用いられた軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある。軒丸瓦はA6 号窯跡との間の周溝から出土している。

A6 号窯跡

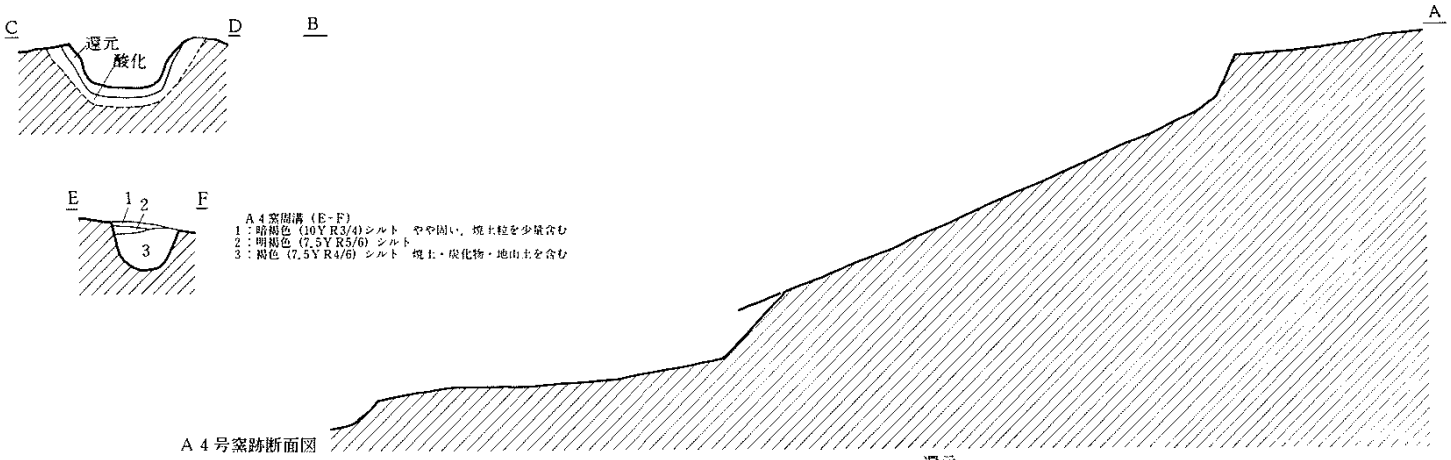
A地区沢奥部、東向き斜面裾部のA5 号窯北側に位置する。半地下式窖窯である。外周溝がA8 号窯の外周に続くが、切り合い関係はない。保存状態は良好であるが、煙道は検出されていない。

〔焼成室〕　平面形は両側辺が平行する長方形を呈する。壁は開きぎみに立ち上がり、床はほぼ平坦で、約 20°傾斜する。焼台などの施設はない。

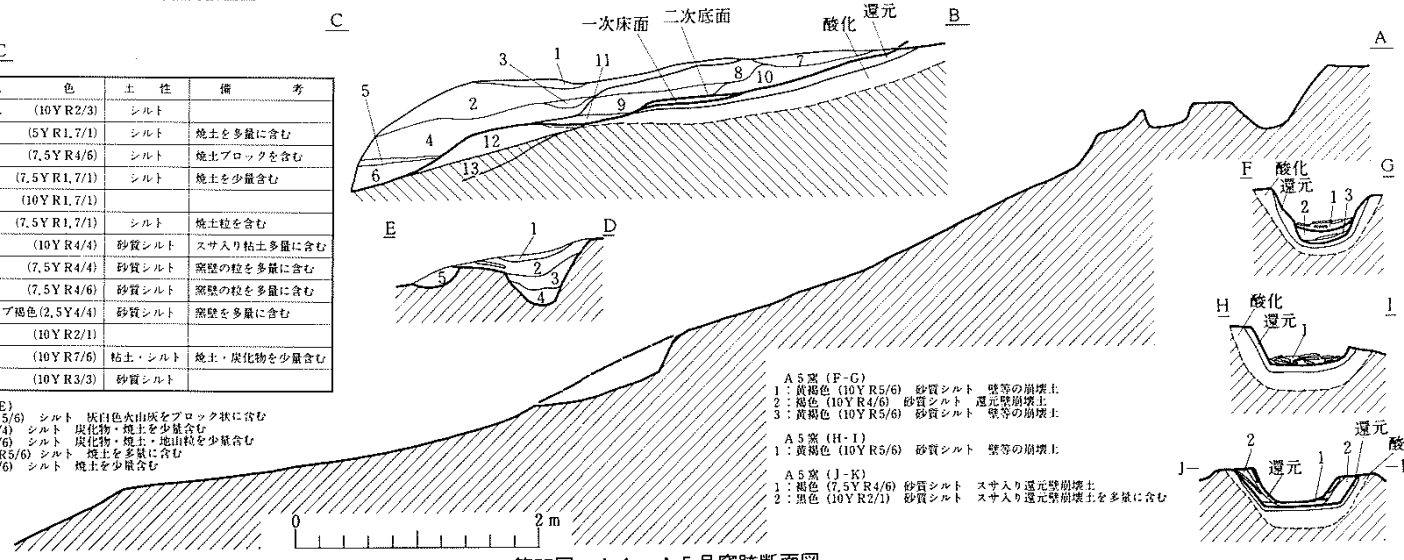
〔燃焼室〕　平面形は両側辺がほぼ平行する長方形で、焼成部との境から若干広がる。壁は開きぎみに立ち上がり、右壁奥手にスサ入り粘土を貼り付けている。床はほぼ平坦である。左壁



第56図　A 4・5・6・8号窯跡



A 4 号窯跡断面図



C

No	大　別	土　　色	土　性	備　　考
1	自然流入土	黒褐色　(10YR2/3)	シルト	
2		黒色　(5YR1.7/1)	シルト	焼土を多量に含む
3		褐色　(7.5YR4/6)	シルト	焼土ブロックを含む
4		黒色　(7.5YR1.7/1)	シルト	焼土を少量含む
5	炭化物層	黒色　(10YR1.7/1)		
6	自然流入	黒色　(7.5YR1.7/1)	シルト	焼土粒を含む
7	壁・地山崩壊土	褐色　(10YR4/4)	砂質シルト	スサ入り粘土多量に含む
8		褐色　(7.5YR4/4)	砂質シルト	窯壁の粒を多量に含む
9		褐色　(7.5YR4/6)	砂質シルト	窯壁の粒を多量に含む
10		オリーブ褐色(2.5Y4/4)	砂質シルト	窯壁を多量に含む
11	炭化物層	黒色　(10YR2/1)		
12	壁地層	明褐色　(10YR7/6)	粘土・シルト	焼土・炭化物を少量含む
13	旧表土	暗褐色　(10YR3/3)	砂質シルト	

第57図　A 4・A 5 号窯跡断面図

沿い奥半に細い溝がみられる。壁・床とも奥半を中心に還元され、硬化している。

〔外周溝〕　窯の斜面上方から続く。A5・8号の周溝を共用している。

〔中軸線の方向〕　N－65°－W

〔規模〕全長　－7.9m

焼成室－長さ3.9m　　幅0.8m　　残存高0.4m

燃焼室－長さ2.5m　　幅0.8m　　残存高0.4m

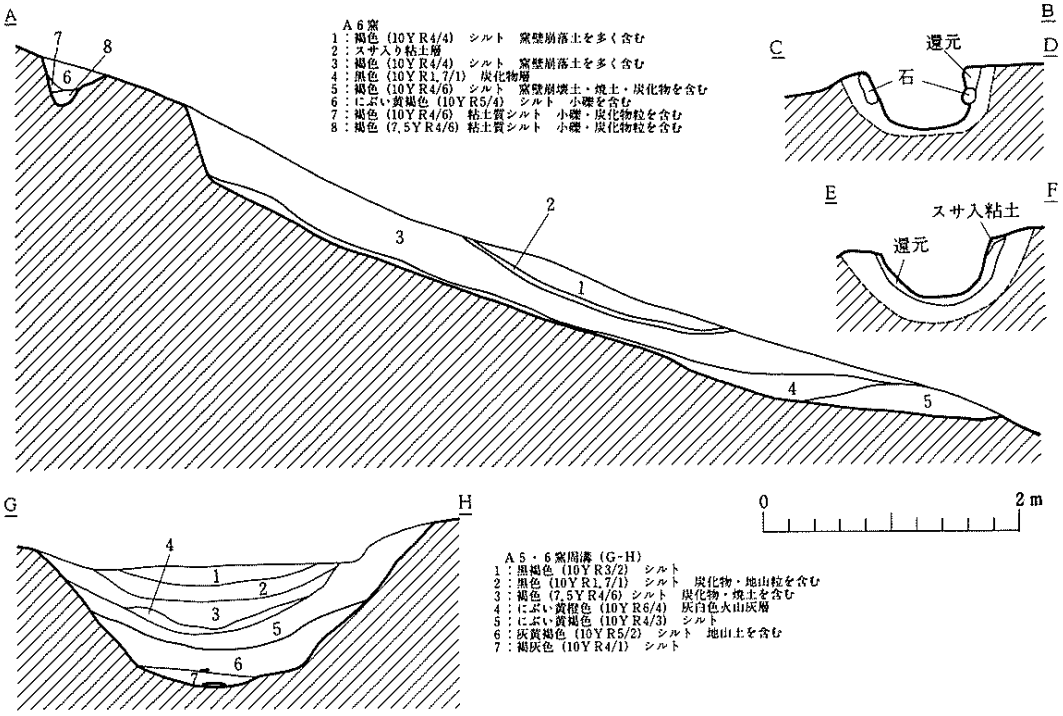
外周溝－（溝状部）　幅0.6m　　深さ0.3m

〔出土遺物〕　窯内堆積土と外周溝から平瓦・丸瓦が出土している。

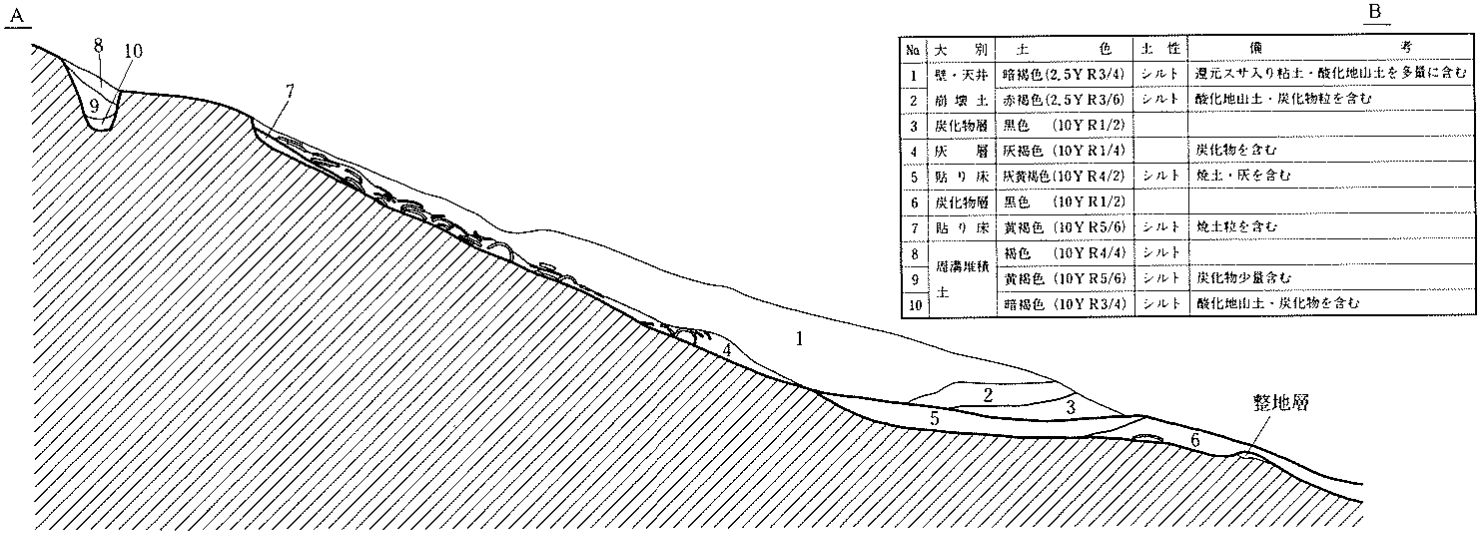
A8号窯跡

A地区沢奥部の東向き斜面裾部、A6号窯の北側に位置する。半地下式窖窯である。A6号窯と外周溝が重複する位置にあるが、切り合い関係はなく、両窯で間の溝を共有していたものと思われる。保存状態は良好であるが、煙道は検出されていない。

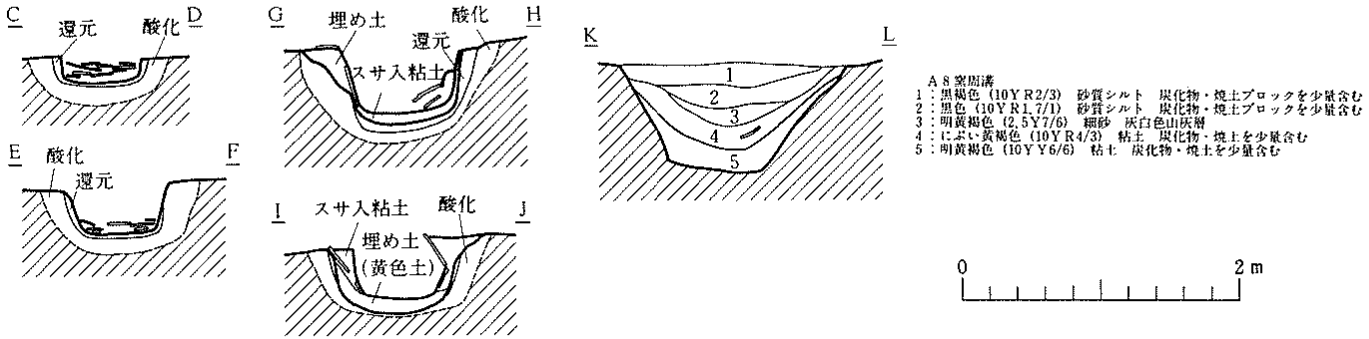
〔焼成室〕　平面形は両側辺が平行する長方形である。壁はほぼ垂直に近い立ち上がりを示し、奥壁を中心として還元され、硬い。床は約25°傾斜する。床面上には瓦片を横方向の列に積み重ねた焼台が8段以上認められる。先端から3段目以下は床面（第一次床面）に直接置かれて



第58図　A6号窯跡断面図



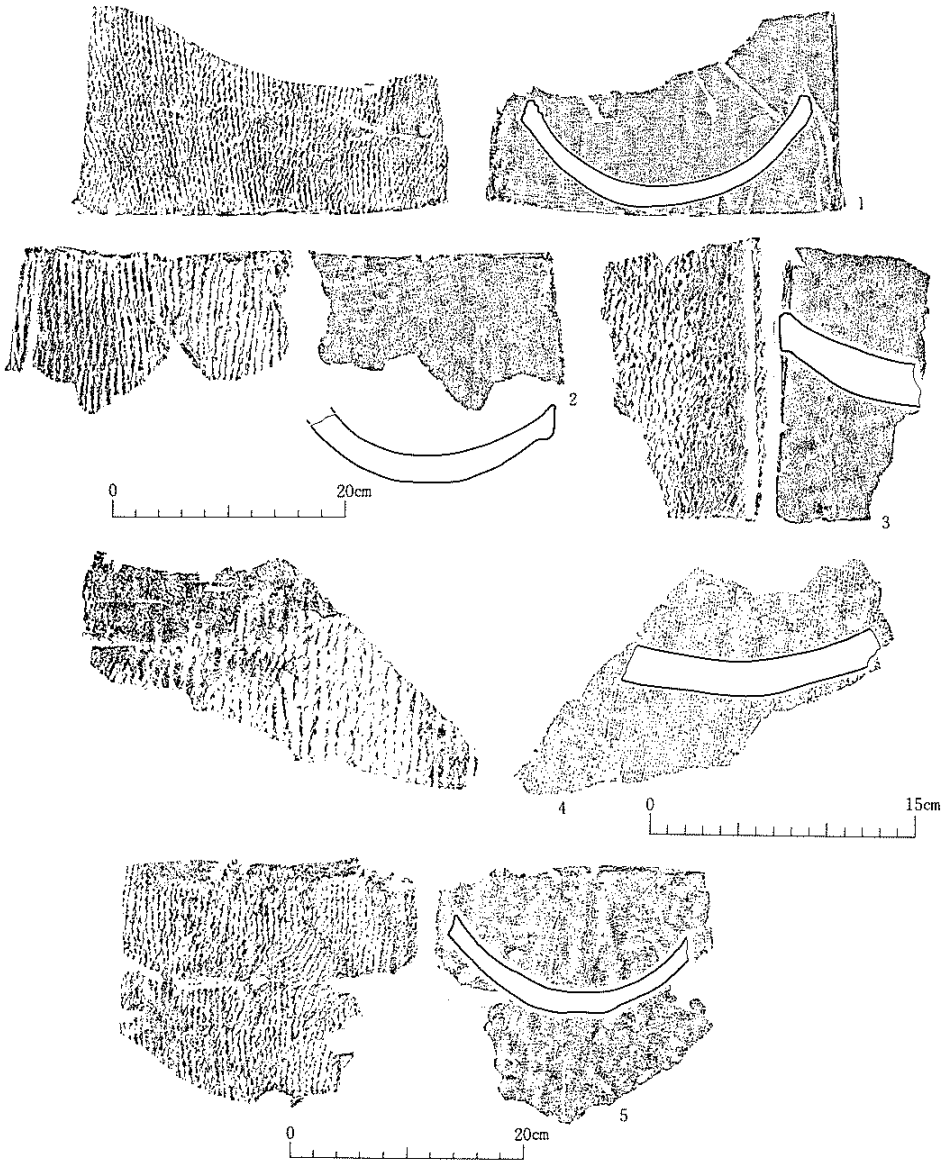
No	大　別	土　　色	土 性	備　　考
1	壁・天井	暗褐色(2.5YR3/4)	シルト	還元スサ入り粘土・酸化地山土を多量に含む
2	崩 壊 土	赤褐色(2.5YR3/6)	シルト	酸化地山土・炭化物粒を含む
3	炭化物層	黒色　(10YR1/2)		
4	灰　　層	灰褐色 (10YR1/4)		炭化物を含む
5	貼 り 床	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土・灰を含む
6	炭化物層	黒色　(10YR1/2)		
7	貼 り 床	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	焼土粒を含む
8	周溝堆積土	褐色　(10YR4/4)	シルト	
9		黄褐色 (10YR5/6)	シルト	炭化物少量含む
10		暗褐色 (10YR3/4)	シルト	酸化地山土・炭化物を含む



第59図　A 8 号断面図

いるが、1・2段目は床を貼った黄褐色土上（第二次床面）にある。第一次床面は還元され、硬化しており、貼り床上面はやや硬化している。

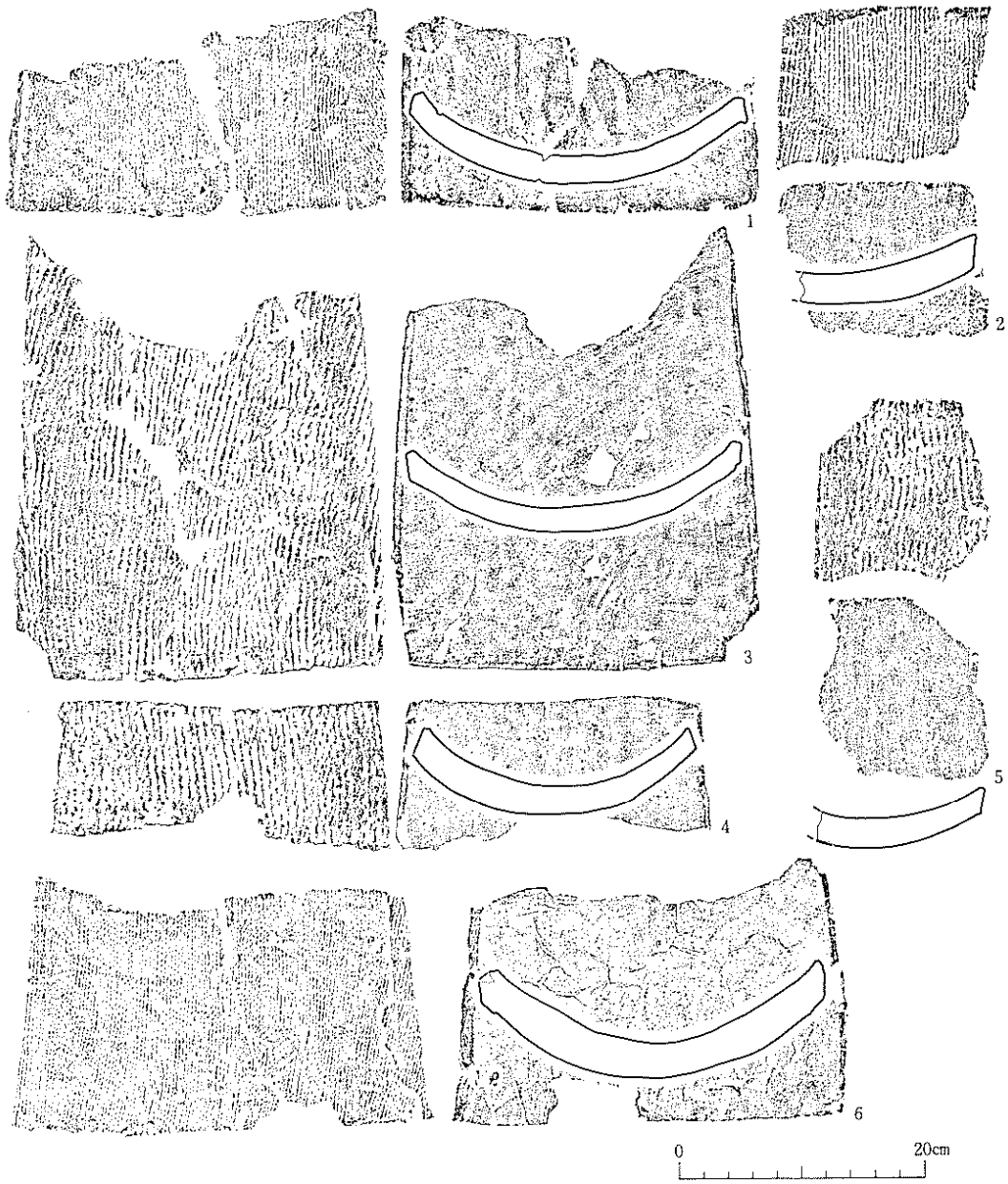
〔燃焼室〕　平面形は長方形を成す。焼成室との境は明確でないが、平面的には幅が広がる。



No	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No	図版
1	周溝堆積土	平瓦	1	――	広22.3	A4-1	28-3
2	床面直上	平瓦	2	――	――	A4-7	28-2
3	周溝堆積土	平瓦	4	――	――	A4-2	28-4

No	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No	図版
4	堆積土	軒平瓦	―	――	――	A4-12	28-1
5	周溝堆積土	平瓦	4	――	――	A4-3	

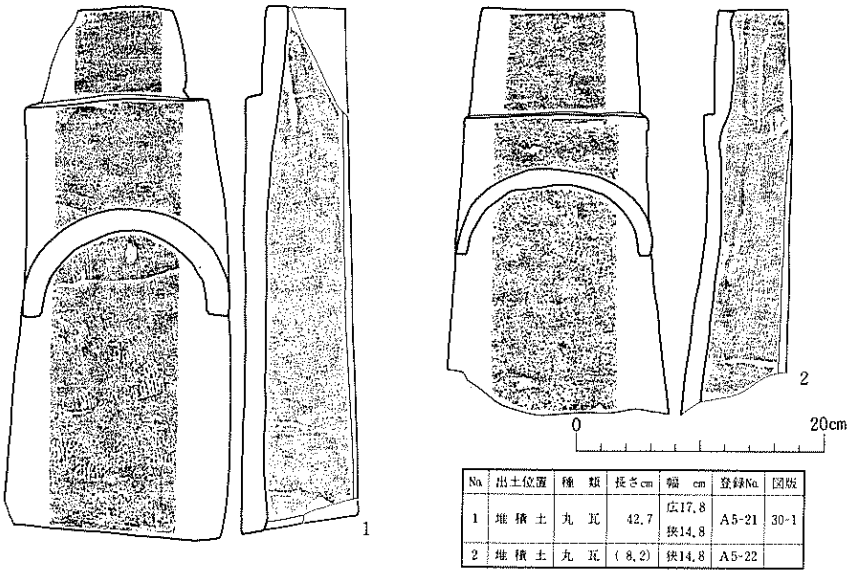
第60図　A 4号窯跡出土遺物



No	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No	図版
1	焼台	平瓦	5	——	広25.5	A5-10	
2	焼台	平瓦	1	——	——	A5-12	
3	側壁	平瓦	4	——	広26.9	A5-8	29-1

No	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No	図版
4	焚口部堆積土	平瓦	1	——	残21.3	A5-6	
5	焼台	平瓦	3	——	——	A5-13	
6	焼台	平瓦	4	——	広27.7	A5-11	

第61図　A 5 号窯跡出土遺物(1)



No.	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	堆 積 土	丸　瓦	42.7	広17.8 狭14.8	A5-21	30-1
2	堆 積 土	丸　瓦	(8.2)	狭14.8	A5-22	

第62図　A 5 号窯跡出土遺物(2)

下半から焚口部にかけては整地を行った後に作り出している。壁は2面ある。古い面を第一次、新しい面を第二次とする。壁の第一次面は地山をそのまま利用しており、青灰色に変色している。第二次面は灰黄褐色土を裏込めし、平瓦を立てて壁を補強している。瓦はスサ入り粘土で覆われている。床は地山をそのまま利用し、平坦で、淡い青灰色に変化している。

〔焚口部〕　新旧2面みられる。古い第一次面は整地層に作られている。新しい第二次面は粘土を貼っている。

〔外周溝〕　窯本体に沿って巡っている。左半はA6号窯と共用している。

〔中軸線の方向〕　N－65°－W

〔規模〕全長　－第一次7.1m　　第二次6.3m

焼成室－（第一次）長さ4.4m　　幅0.6m　　残存高0.2m

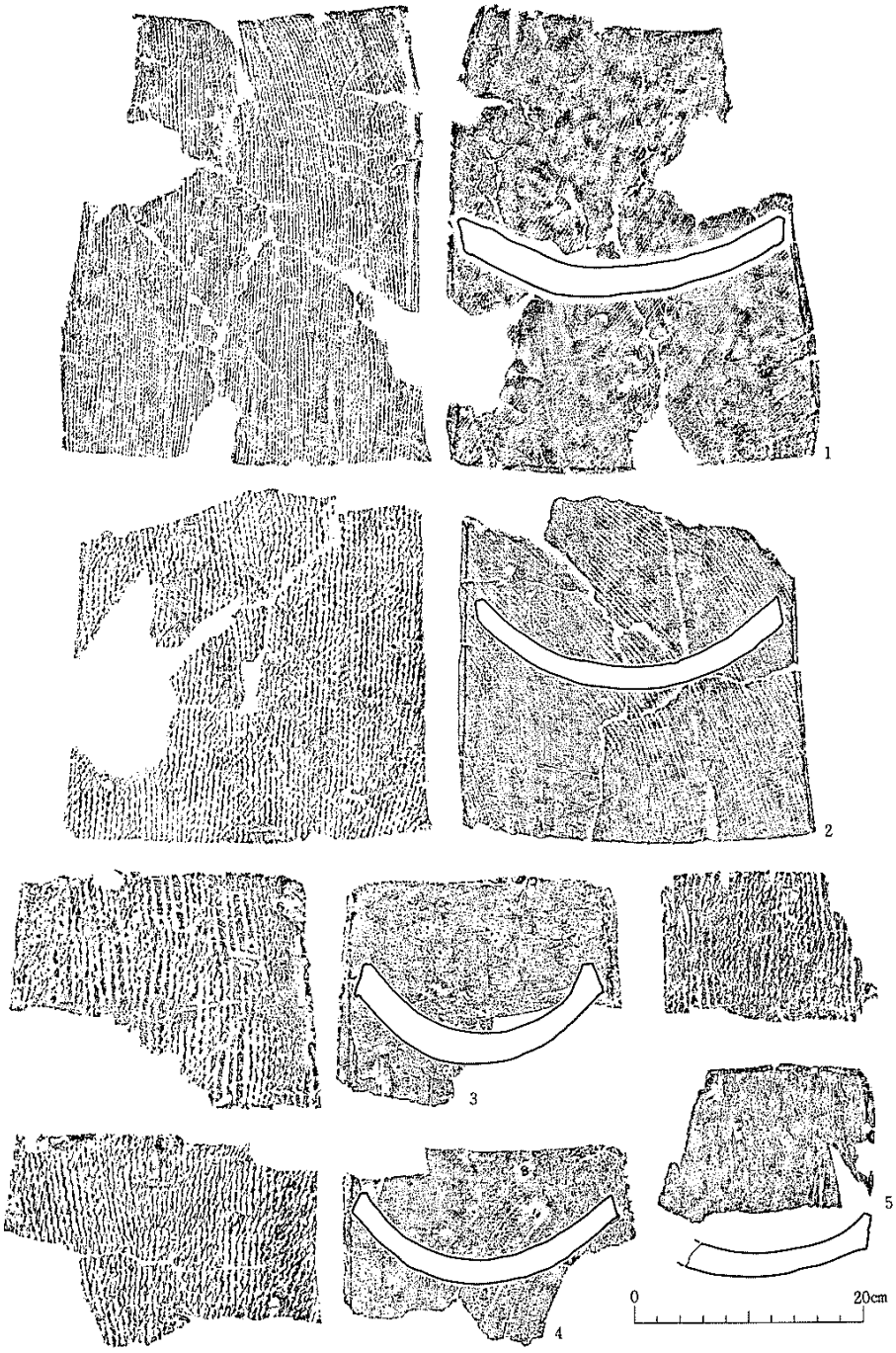
（第二次）長さ3.6m　　幅0.6m　　残存高0.2m

燃焼室－（第一次）長さ2.6m　　幅0.7m　　残存高0.5m

（第二次）長さ2.7m　　幅0.6m　　残存高0.5m

外周溝－幅0.6～1.7m　　深さ0.5～0.7m

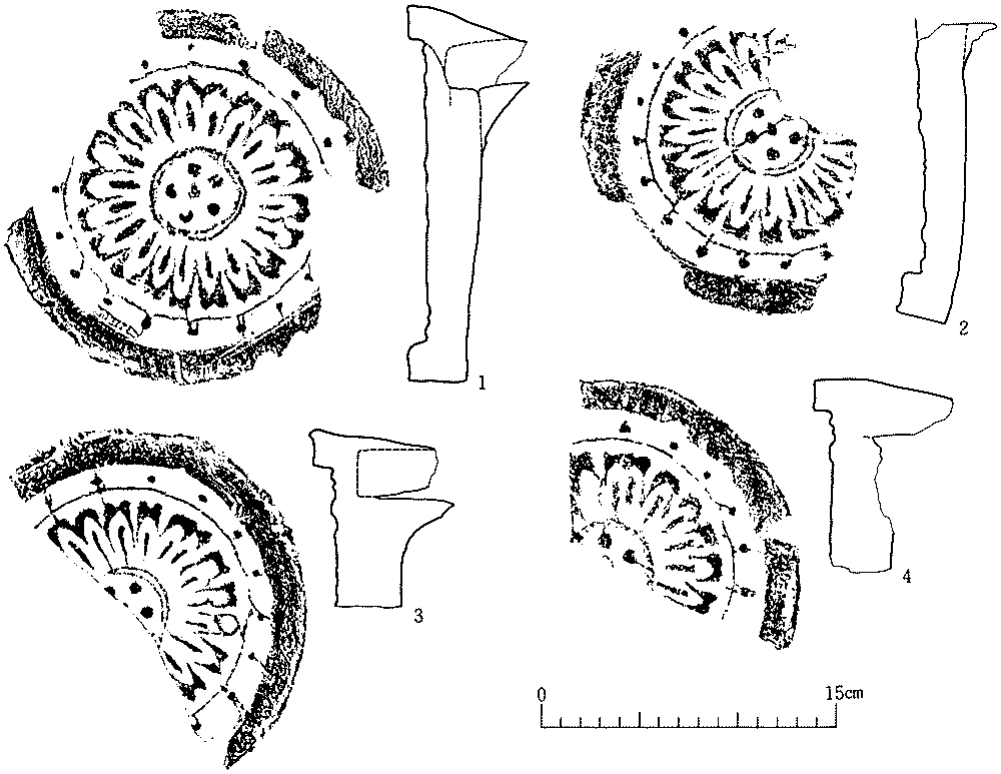
〔出土遺物〕　窯内堆積土・外周溝出土及び窯内施設に用いられた軒丸瓦・平瓦・丸瓦がある。軒丸瓦は窯内堆積土から出土している。



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登 録 No.	図版
1	周　溝	平　瓦	4	39.0	広29.9	A5-16	29-2
2	周溝7層	平　瓦	1	——	広27.0	A5.6-8	
3	周溝3層	平　瓦	5	——	狭18.7	A5.6-3	30-5

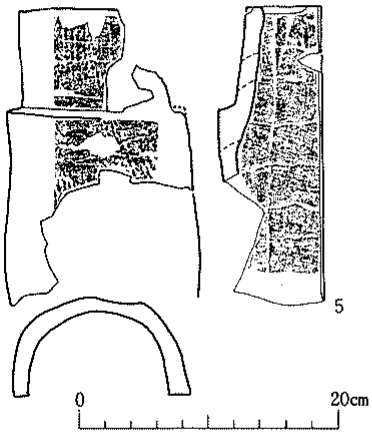
No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登 録 No.	図版
4	周溝3層	平　瓦	1	——	狭21.4	A5.6-2	
5	周溝5層	平　瓦	4	——	——	A5.6-2	

第63図　A 5 ・ 6 号窯跡周溝出土遺物(1)



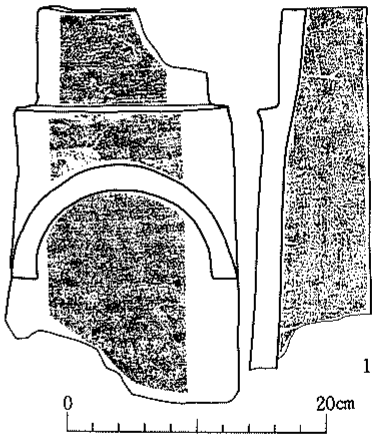
No.	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	堆積土7層	軒丸瓦	——	——	A5-27	31-2
2	堆積土1層	軒丸瓦	——	——	A5-28	31-4

No.	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
3	堆積土7層	軒丸瓦	——	——	A5-29	31-5
4	堆積土7層	軒丸瓦	——	——	A5-30	31-3



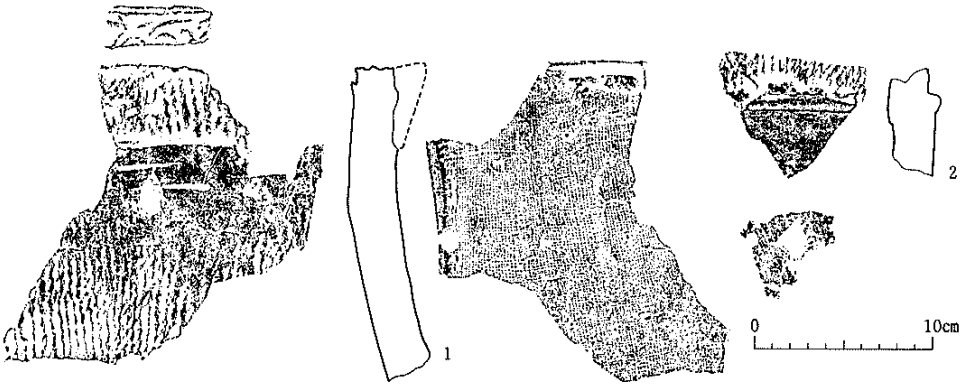
No.	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
5	周溝堆積土	丸瓦	(7.2)	狭16.7	A5-23	30-2

第64図　A5・6号窯跡周溝出土遺物(2)



No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	堆積土3層	丸瓦		(7.8)	狭13.9	A6-10	

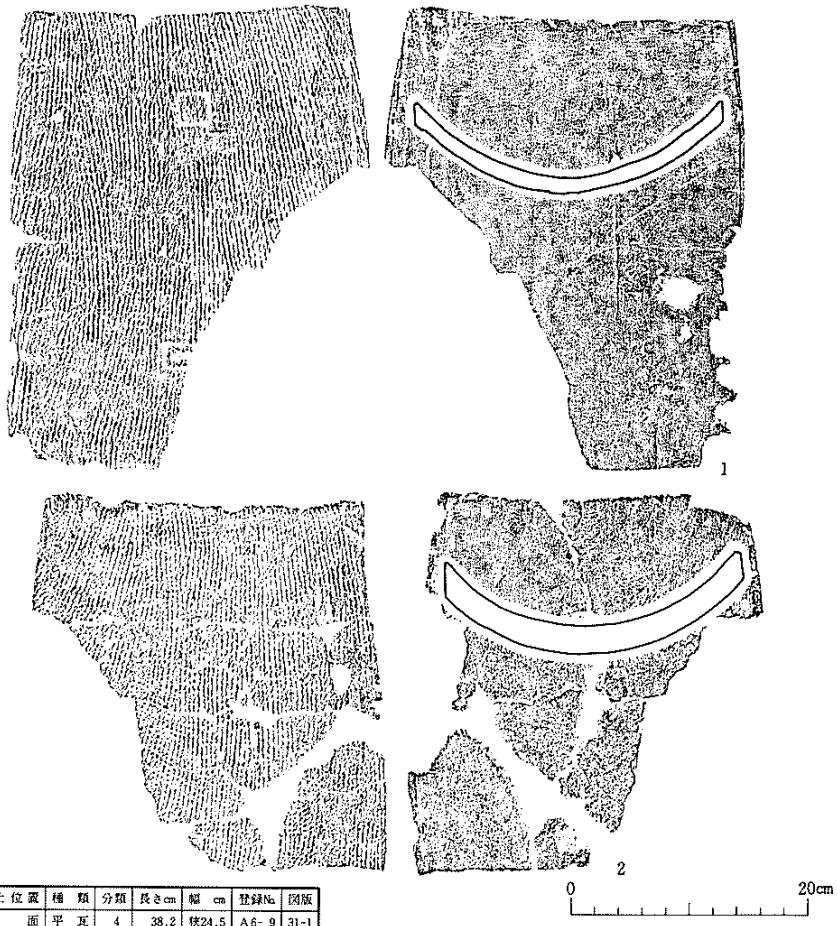
第65図　A6号窯跡出土遺物(1)



No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	灰　原	軒平瓦		——	——	A5-25	30-4

No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
2	灰　原	軒平瓦		——	——	A5-26	30-3

第66図　Ａ４・５号窯跡灰原出土遺物



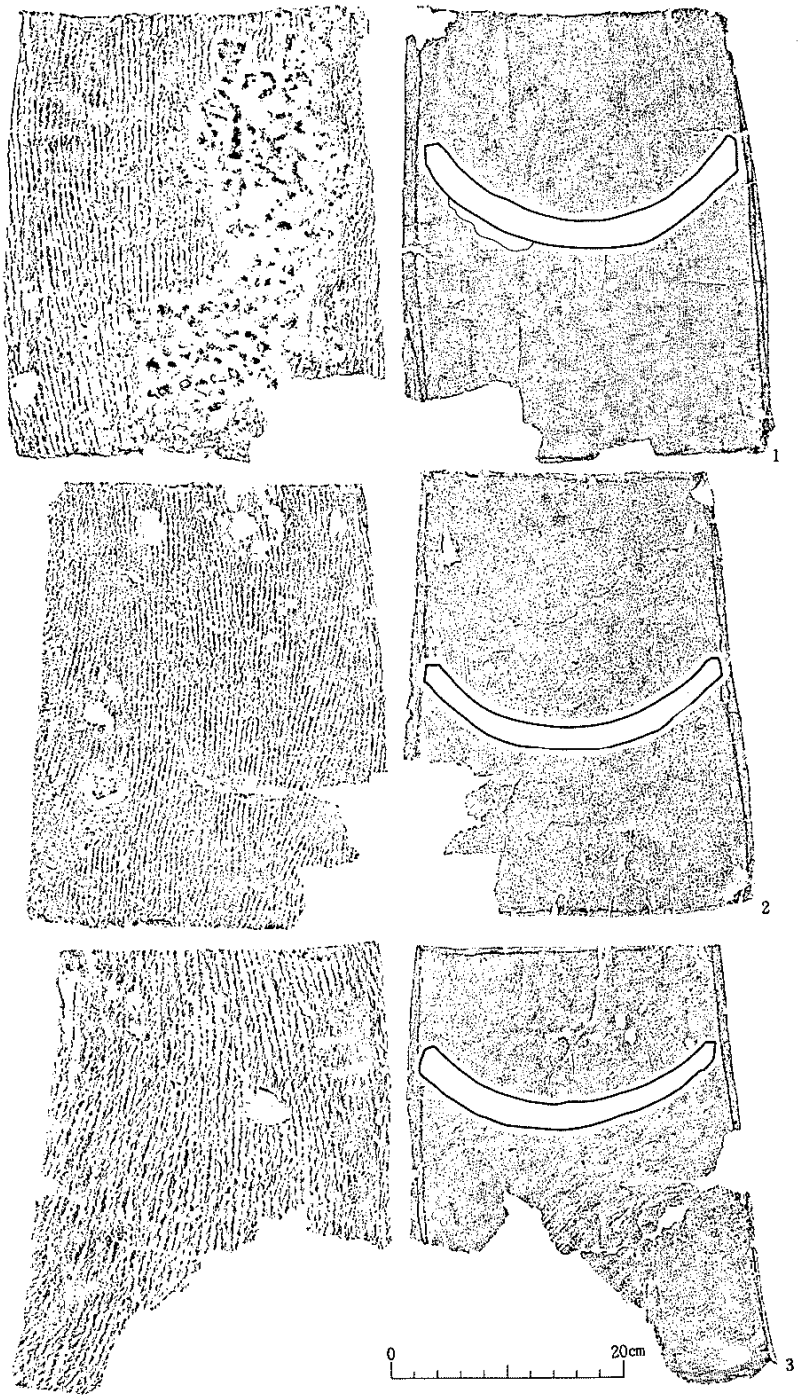
No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	床　面	平　瓦	4	38.2	狭24.5	A6- 9	31-1
2	周溝１層	平　瓦	2		狭23.8	A6- 7	

第67図　Ａ６号窯跡出土遺物（２）

No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	焼台	平瓦	4	39.8		A8-51	33-1
2	焼台	平瓦	4	36.6	狭23.7	A8-35	
3	焼台	平瓦	4	——	——	A8-54	

No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
4	焼台	平瓦	4	——	——	A8-39	
5	焼台	平瓦	4	——	——	A8-58	
6	焼台	平瓦	2	——	狭24.6	A8-55	

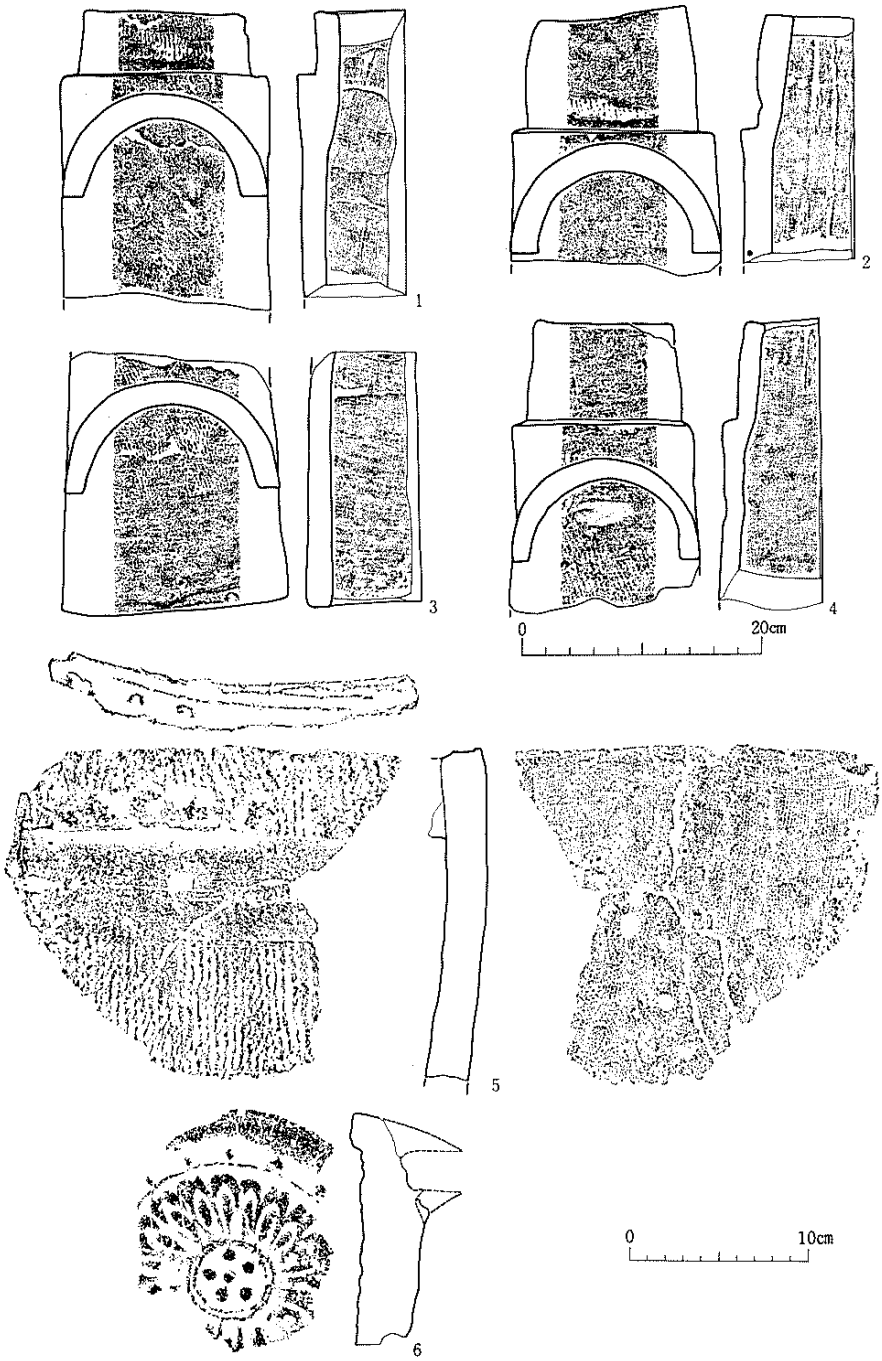
第68図　A 8 号窯跡出土遺物(1)



No	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	燃焼室側壁	平瓦	1	38.3	狭24.1	A8-59	34-1
2	燃焼室左側壁	平瓦	4	38.4	狭22.0	A8-41	33-2

No	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
3	右側壁	平瓦	4	——	狭23.8	A8-23	

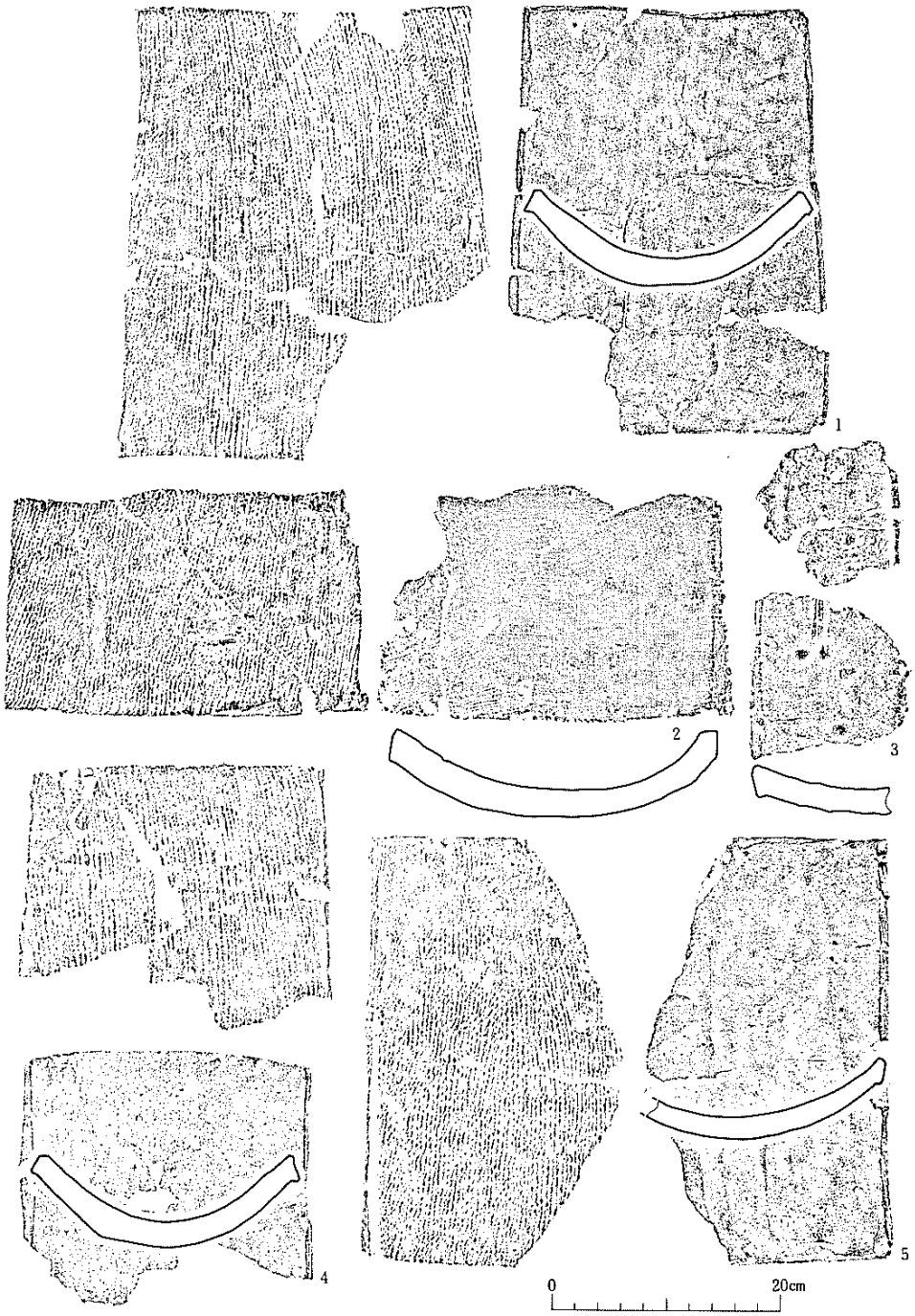
第69図　A 8 号窯跡出土遺物(2)



No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	焼　台	丸　瓦		(4.9)	狭17.3	A8-67	34-4
2	堆積土	丸　瓦		(9.4)	狭16.8	A8-63	
3	焼　台	丸　瓦		——	広19.0	A8-65	34-5

No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
4	床　面	丸　瓦		(8.0)	狭15.0	A8-64	
5	焼　台	軒平瓦		——	——	A8-53	32-4
6	堆積土	軒丸瓦		——	——	A8-69	32-5

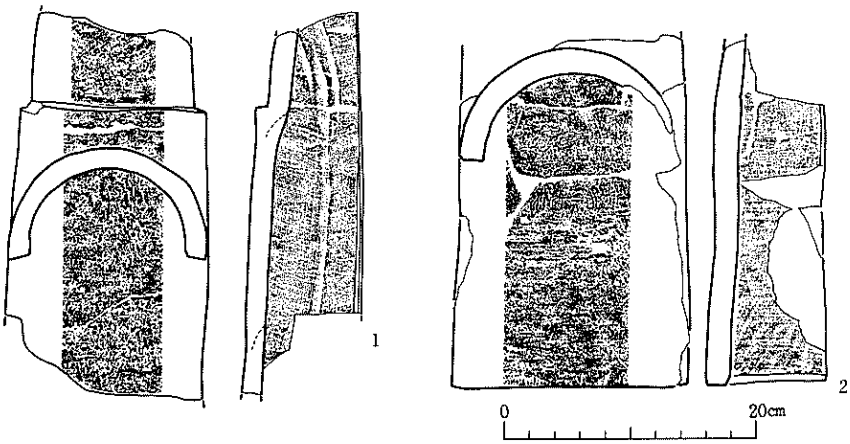
第70図　A 8 号窯跡出土遺物(3)



No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	南側周溝2層	平瓦	4	37.0	狭21.9	A8-30	
2	南側周溝1層	平瓦	1	——	広28.6	A8-72	
3	周溝 1 層	平瓦	6	——	——	A8-75	32-6

No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
4	北側周溝2層	平瓦	4	——	狭21.4	A8-29	
5	周溝 2 層	平瓦	4	36.6		A8-32	

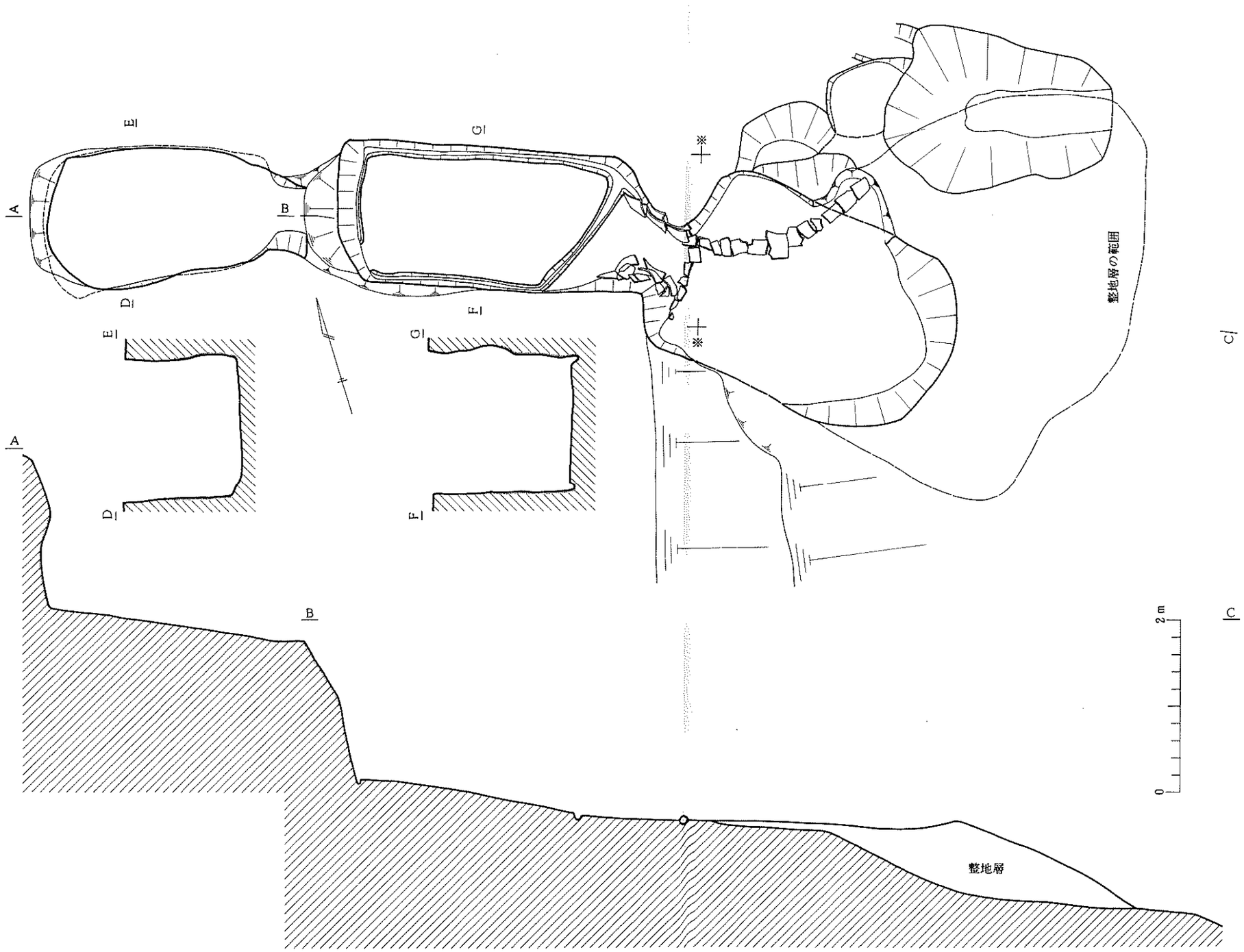
第71図　A 8 号窯跡周溝出土遺物(1)



No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	周溝２層	丸　瓦		——	狭14.8	A8-47	34-3

No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
2	周溝２層	丸　瓦		——	広18.6	A8-43	

第72図　Ａ８号窯跡周溝出土遺物(2)



第73図　A 3・7号窯跡

4．炭窯跡の特徴

A3 号窯跡

A地区東斜面中腹の急斜面に位置する。天井部の状況が不明なため地下式か半地下式か判然としない。A7 号窯を切っている。

〔炭化室〕　平面形はほぼ長方形であるが、奥壁はいくぶん張りだしており、側壁中央部がわずかに膨らんで焚口部に向かってゆるやかにすぼまる。側壁は垂直に立ち上がり、壁面は赤化して硬い。床面は平坦で奥壁に向かってゆるやかに上り、黒色化している。床面上に 30～40㎝の厚さで木炭・焼土が堆積している。

〔焚口部〕　炭化室との境がくびれて幅が狭くなっている。左右の壁は平行して続くが、手前は崩れのため残存しない。

〔中軸線の方向〕　N－78°－W

〔規模〕全長　3.0m　確認面からの深さ　1.8m

炭化室－長さ 2.5m　幅 1.5m　残存壁高　65 ㎝

焚口部－長さ 0.5m　幅 0.8m　残存壁高　35 ㎝

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

A7 号窯跡

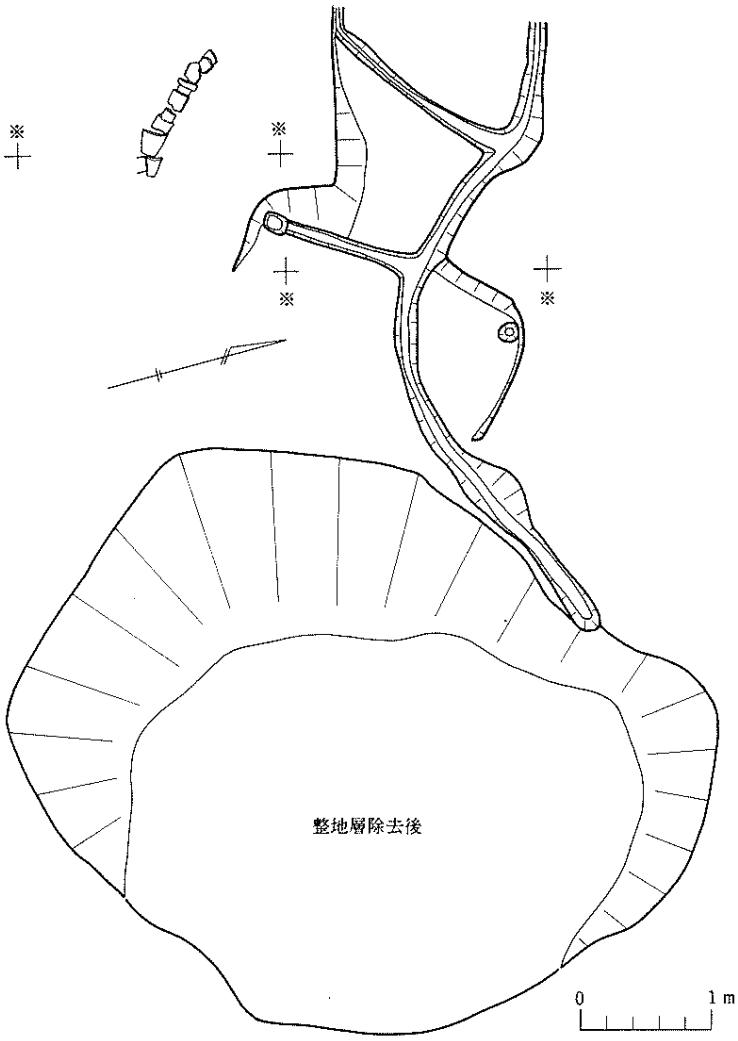
A3 号窯の斜面下方に位置する。地下式か半地下式か判然としない。A3 号窯とA4 号窯の外周溝に切られている。また前庭部構築に伴って大きな掘り込みを埋めている。煙道は残存していない。

〔炭化室〕　平面形は隅丸の長方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、赤化している。床面は平坦で硬い。奥壁に向かって 50 ㎝程上がる。床面上には厚さ 20 ㎝程の焼土を含む木炭が堆積している。壁沿いに幅 10 ㎝、深さ 8～10 ㎝の排水溝が巡り、焚口部から前庭部を通り遺構外に延びている。

〔焚口部〕　平面形は左右壁が平行する方形で、炭化室との境はくびれ、前庭部へは急に広がる。焚口部の中軸は炭化室より左にずれている。両壁には平瓦を積み上げている。その構築順は、左壁では前庭部側から奥に向かって、右壁では中央から脇の順である。

〔前庭部〕　長方形で中軸は焚口部と一致している。床は貼り床されており、その下に瓦を蓋にした暗渠排水溝が検出された。なお、この貼り床を除去すると前庭部下半から斜面下方にかけて 5.4×4.3mの大きな楕円形の掘り込みが検出された。

〔中軸線の方向〕　N－73°－W



第74図　A 7 号窯跡

〔規模〕全長　7.2m　　確認面からの深さ 1.9m

炭化室－長さ 3.0m　　幅 1.5m　　残存壁高 1.0m

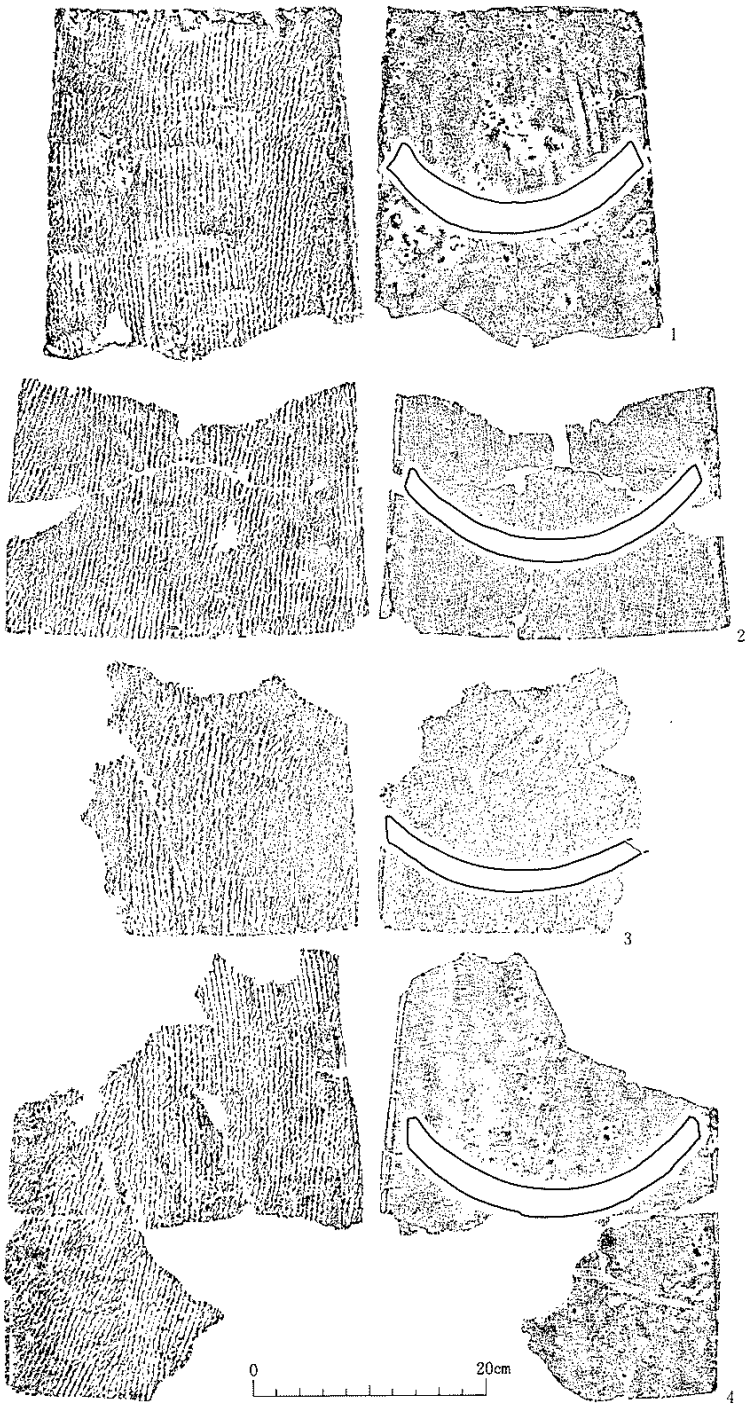
焚口部－長さ 0.8m　　幅 1.0m　　残存壁高 1.0m

前庭部－長さ 3.1m　　幅 2.1m　　残存壁高 0.4m

〔出土遺物〕　焚口部に用いられた平瓦がある。その特徴は表記した。

B11 号窯跡

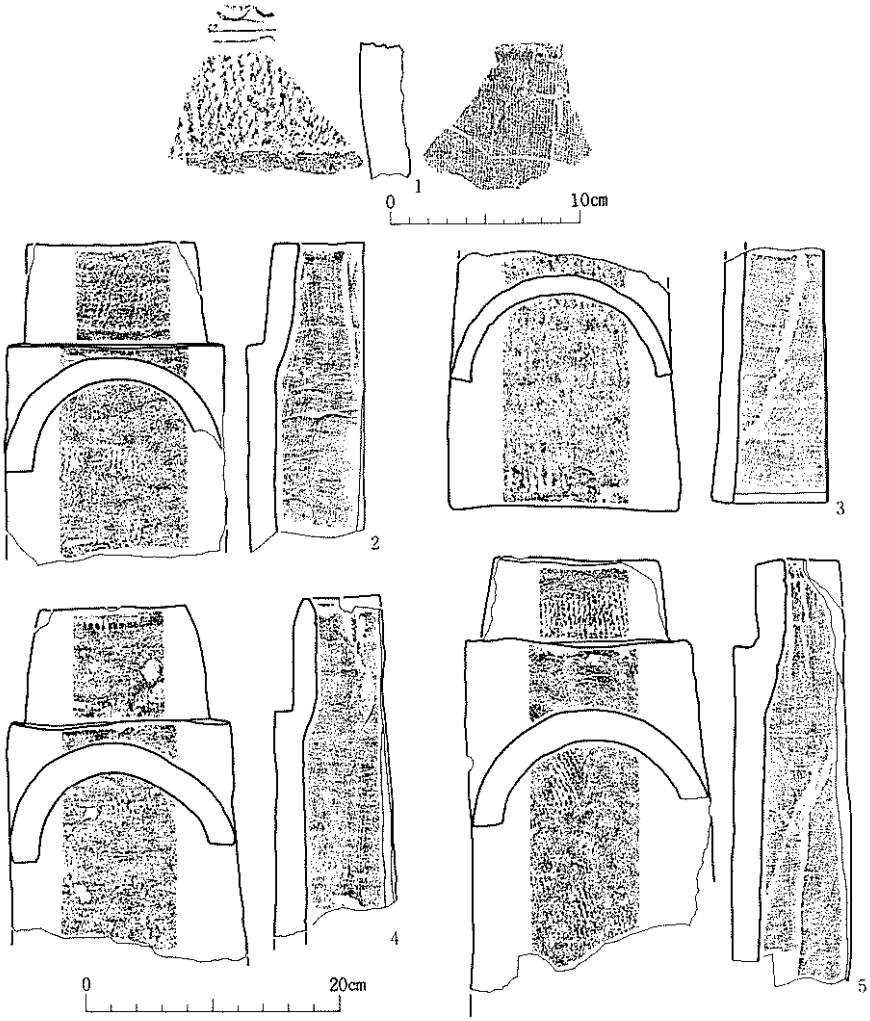
B地区沢奥部の斜面上位に位置する。炭化室の状況をみると地下式の可能性が強い。他の窯と異なって前庭部が斜面横方向の農道に向いて作られている。現在の農道には前庭部が一部壊



No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	側壁	平瓦	4	――	狭18.3	A7-26	32-1
2	側壁	平瓦	2	――	広24.7	A7-23	

No.	出土位置	種類	分類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
3	整地層	平瓦	2	――	――	A7-9	
4	側壁	平瓦	4	――		A7-41	

第75図　A 7 号窯跡出土遺物(1)



No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	整地層	軒平瓦		——	——	A7-36	32-2
2	木炭層下	丸　瓦		(7.9)	狭17.2	A7-17	
3	整地層	丸　瓦		——	広18.0	A7-34	

No.	出土位置	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
4	1　層	丸　瓦		(9.0)	狭17.2	A7-18	
5	1　層	丸　瓦		(6.0)	狭18.0	A7-19	32-3

第76図　A 7 号窯跡出土遺物(2)

されているが、比高はさほどなく、丘陵を切って道路が作られてからの遺構と考えられる。

〔煙道〕　窯の中軸線上にある。炭化室の床に接して高さ 8 cmの半円形の掘り込みとその上部に 50×10 cmの縦長の掘り込みを壁に施し、断面円形の煙道が炭化室の外を上にのびる。壁面は還元して硬い。

〔炭化室〕　平面形は円形で、壁は内弯しながら立ち上がる。床はごく平坦、ほぼ水平である。壁・床面は赤化しており、軟らかい。

〔焚口部〕　左右壁が平行する方形で、壁は垂直に立ち上がり、還元されて硬い。床は炭化室と同様である。

〔前庭部〕　農道に削平されているため全体は不明である。焚口部から急に広がる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床は平坦である。熱を受けた痕跡はない。

〔中軸線の方向〕　S－54°－E

〔規模〕全体長　2.8m　　確認面からの深さ 2.5m

炭化室－直径 1.8m　　残存壁高 0.8m

焚口部－長さ　40 ㎝　幅 46 ㎝　　残存壁高 43 ㎝

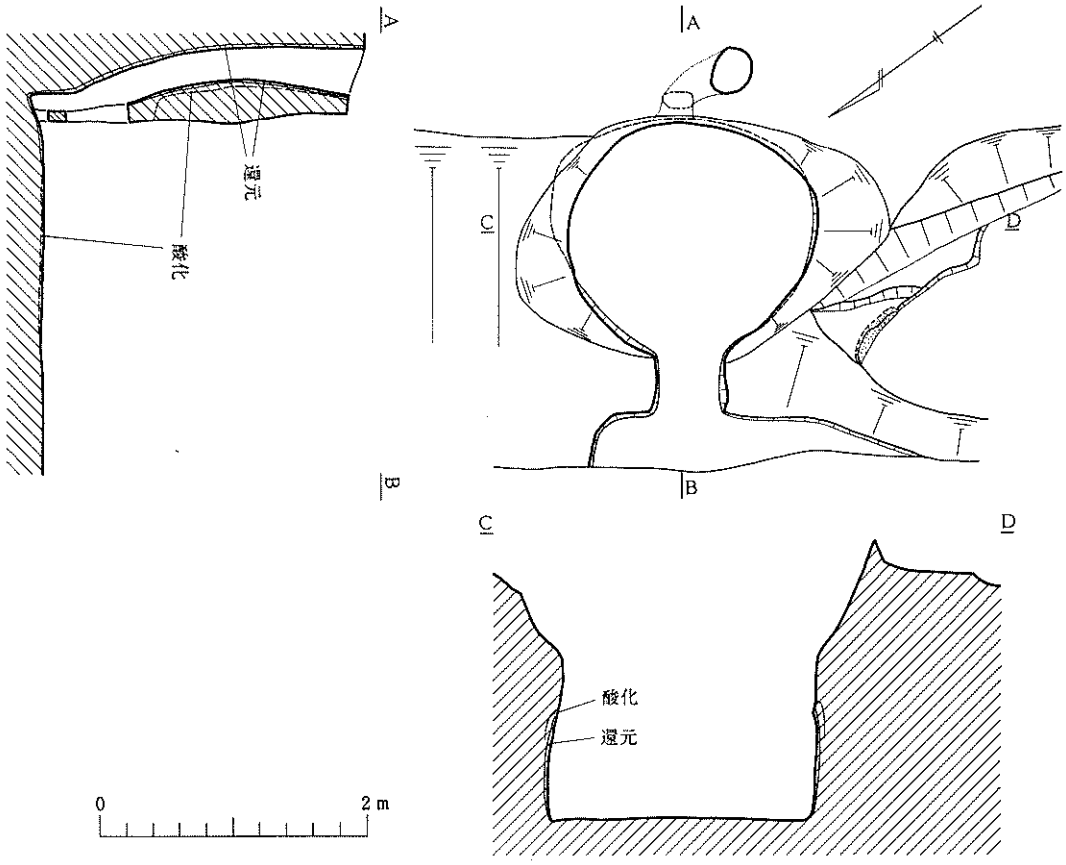
前庭部－長さ　45 ㎝　幅 2.8m　　残存壁高 20～40 ㎝

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

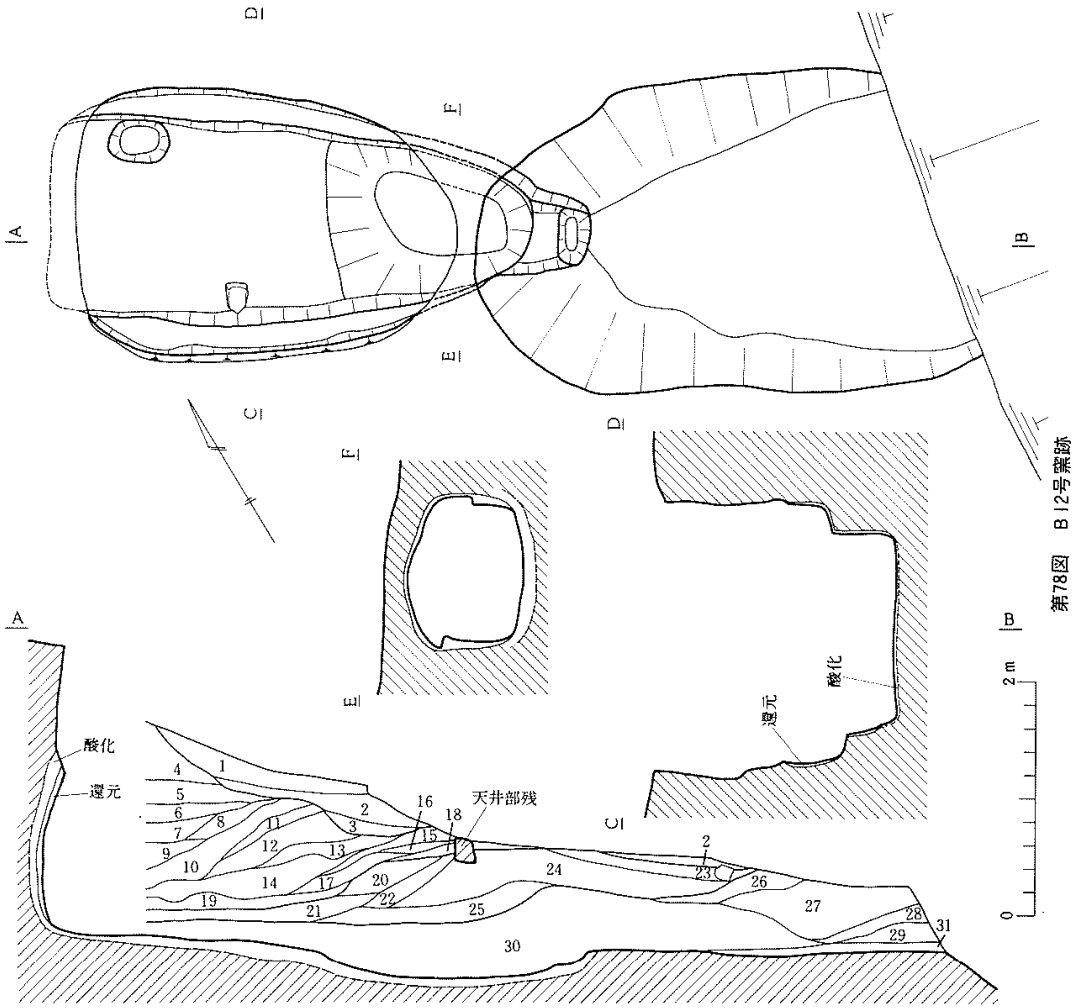
B12 号窯跡

B地区東斜面の北寄りに位置する。地下式窯である。B8 号住居跡を切っている。煙道は残存していない。前庭部の端は農道で削平されている。

〔炭化室〕　奥壁隅が丸みをもつ長方形で、焚口部寄りがすぼまる。天井の残存する焚口部近



第77図　B11号窯跡



第78図　B12号窯跡

No.	大　別	土　色	土 性	備　考
1	自然流入土	明黄褐色　(10YR6/6)	シルト	炭化物・地山土を少量含む
2		灰白色　(10YR7/1)	シルト	火山灰
3		にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物を少量含む
4	二次の窯壁崩壊土	黄橙色　(10YR6/8)	シルト	地山土
5		明黄褐色　(10YR6/8)	シルト	炭化物を少量含む
6		明黄褐色　(10YR6/6)	シルト	木炭を含む
7		明黄褐色　(10YR6/6)	シルト	地山土
8		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	炭化物を少量含む
9		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	地山土
10		黄褐色　(10YR5/8)	シルト	窯壁ブロック
11		暗赤褐色　(2.5YR3/6)	シルト	酸化ブロック
12		黄褐色　(10YR5/8)	シルト	酸化ブロック
13		黄褐色　(10YR5/8)	シルト	酸化ブロック
14		暗赤褐色　(2.5YR3/6)	シルト	天井崩壊土
15		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	炭化物を含む
16		赤褐色　(5YR4/8)	シルト	酸化ブロック
17		褐色　(10YR4/6)	シルト	炭化物を多く含む
18		褐色　(10YR4/6)	シルト	炭化物を多く含む
19	炭化物層	黒褐色　(10YR2/3)		
20	一次の窯壁堆積土	黄褐色　(10YR5/6)	シルト	地山土
21		褐色　(10YR4/6)	シルト	酸化ブロック
22		赤褐色　(2.5YR4/8)	シルト	酸化ブロック
23		褐色　(10YR4/4)	シルト	炭化物を多く含む
24		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	壁・酸化ブロック
25		赤褐色　(5YR4/6)	シルト	天井崩落土・炭化ブロック
26	窯廃棄前の堆積土	黒褐色　(10YR2/3)	シルト	木炭を多量に含む
27		赤褐色　(5YR3/6)	シルト	木炭・酸化ブロック多量に含む
28		黒褐色　(10YR2/3)	シルト	木炭を少量含む
29		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	地山崩壊土
30		黒褐色　(10YR2/3)	シルト	木炭・酸化ブロック多量に含む
31		黄褐色　(10YR5/6)	シルト	地山崩壊土

くでの断面形は円形に近い。壁は途中に段が付き、還元しているが黒ずんでいる。床はほぼ平坦で、奥壁に向かって若干上る。床面は赤化した酸化面で、木炭層が床面を覆う。

〔焚口部〕　平面形は方形で、壁は外傾する還元面である。床は酸化面で、前庭部の境に 50×26cm・深さ 6cm の窪みがある。

〔前庭部〕　平面形は楕円形で、壁・床面の大部分は第 8 号住居跡堆積土である。木炭層が厚く堆積している。

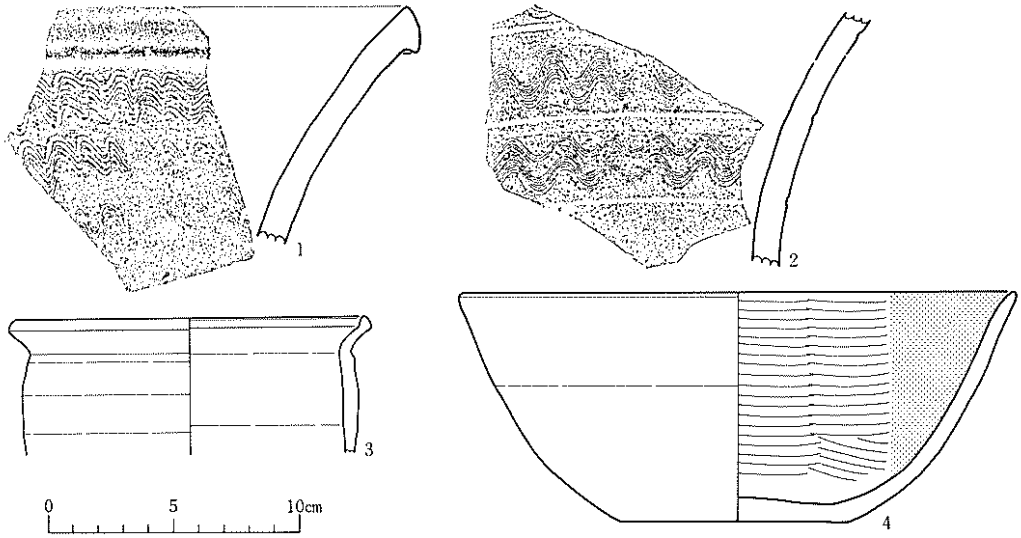
〔中軸線の方向〕　N－59°－W

〔規模〕全体長　7.6m　　確認面からの深さ 2.7m

炭化室－長さ 4.1m　　幅 2.1m　　残存壁高 0.9m

焚口部－長さ 0.4m　　幅 0.5m　　残存壁高 0.4m

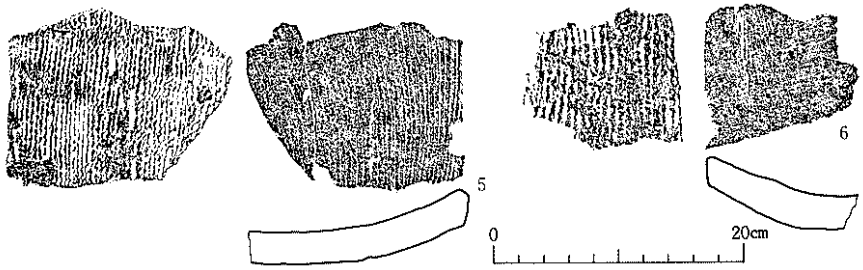
前庭部－長さ 3.0m　　幅 2.2m　　残存壁高 0.6m



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土2層	須恵器甕	I	——	——	——	B12-3	22-10
2	堆積土1層	須恵器甕	I	——	——	——	B12-4	22-11

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
3	堆積土3層	須恵器鉢	II？	13.8	体13.4	——	B12-1	
4	堆積土4層	土師器椀		22.2	9.0	9.2	B12-2	22-12

第79図　B12号窯跡出土遺物(1)



第80図　B12号窯跡出土遺物(2)

〔出土遺物〕

須恵器甕（第 79 図 1・2）

口頸部が長く、大きく外反する。1 は端部外側の下端を引き出して口縁帯をつくり出しており、その下部に櫛描き波状文が、2 は平行沈線と櫛描き波状文が描かれている。

須恵器鉢（第 79 図 3）

丸みをおびた体部が頸部でくびれ、口縁部が短く外反する。口縁上端は上方につまみ出されている。

土師器椀（第 79 図 4）

製作にロクロを使用するものである。体部が丸みをもってそのまま口縁部に重る器形で、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。底部に回転糸切り痕を残し、磨滅が著しいものの体部下位に手持ちヘラケズリが認められる。

B13 号窯跡

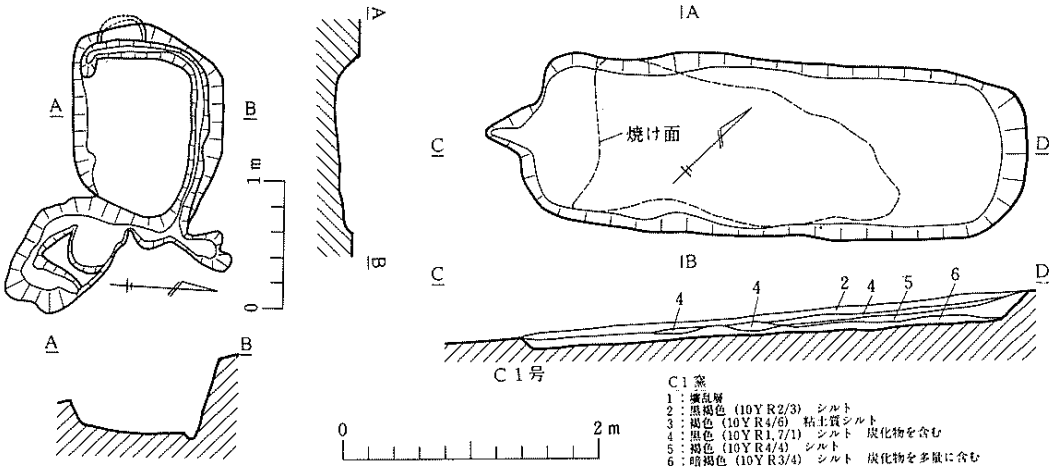
B地区東斜面、B12 号窯の南に位置する小形の窯である。天井の構造は判明しない。煙道は検出されなかった。

〔炭化室〕　平面形は長方形で、壁は外傾して立ち上がり、床は平坦である。壁面の一部が酸化して赤化、床は黒色に硬化している。排水溝が奥壁から右壁沿いにみられ、焚口・前庭部へと続く。木炭層が堆積している。

〔焚口部〕　排水溝が続き、特に施設は認られない。

〔前庭部〕　楕円形の土壙状である。壁は外傾しており、床には段が付く。

〔中軸線の方向〕　S－87.5°－W



第81図　B13号・C1号窯跡

〔規模〕全体長　1.9m　　確認面からの深さ 0.8m

炭化室－長さ 1.5m　　幅 1.2m　　壁高　40～60 ㎝

前庭部－長さ 1.0m　　幅 0.7m　　壁高　20 ㎝

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

C1 号窯跡

B地区西方の西斜面中腹から単独で検出された。炭化室と、焚口部と思われる小さな張り出しから成る。煙道は不明である。

〔炭化室〕　平面形は斜面の方向に沿った長方形で、壁は外傾して立ち上がる。床は平坦であるが、斜面の方向に沿って傾斜する。床・壁面の大部分が熱を受けて赤変し、木炭が堆積している。

〔焚口部〕　炭化室斜面下方の壁から三角形に張り出している。

〔中軸線の方向〕　N－34°－E

〔規模〕全体長　4.2m

炭化室－長さ 3.9m　　幅 1.4m　　深さ 5～20㎝

焚口部－長さ 0.3m　　幅 0.4m　　深さ 5 ㎝

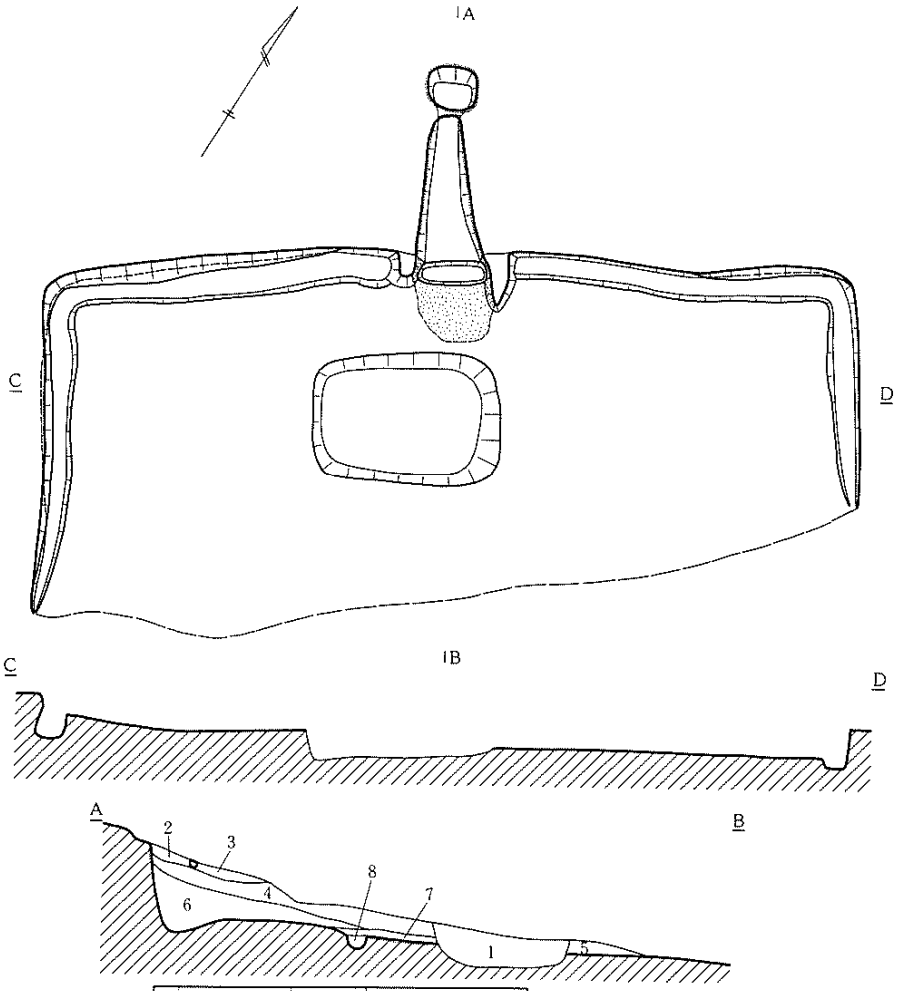
〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

5．竪穴住居跡の特徴

A1 号住居跡

〔位置・重複〕　A1 号窯跡のすぐ東に位置し、住居中央部を土壙に切られ、斜面下半はすでに削平されている。

〔平面形・規模・方向〕　平面形は隅丸の方形を基調としている。規模は北壁が 6.5m、東・



1	黒褐色(10Y R2/3)	砂質シルト	住居跡を切る土壙堆積土
2	褐色（10Y R3/4）	砂質シルト	
3	褐色（10Y R4/4）	砂質シルト	焼土を少量含む
4	褐色(7.5Y R4/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む
5	灰白色火山灰層		
6	褐色(7.5Y R4/4)	砂質シルト	炭化物多量・焼土少量含む
7	赤褐色　(5YR4/8)	砂質シルト	焼土多量・炭化物少量含む
8	明褐色(7.5Y R5/8)	砂質シルト	焼土を少量含む

0　2 m

第82図　A１号住居跡

西壁はそれぞれ1.9m・2.7m残存する。カマド煙道の軸線の方向はN－32°－Wである。

〔壁〕　壁面は凹凸がみられ、内弯して立ち上がる部分が多い。壁高は最も高い北壁で約30㎝である。

〔床面〕　斜面上半部が残存する。細かな凹凸がみられ、いくぶん斜面下方に傾斜する。

〔柱穴〕　住居内外にピットはなく、柱穴は不明である。

〔周溝〕　壁沿いに巡る。幅20～30㎝、深さ10㎝である。

〔カマド〕　北壁中央に付設されている。本体は側壁がわずかに残る。底面奥壁に沿って溝がみられる。内部は60×50㎝の範囲が焼けている。煙道は本体の底面と同じ高さからほぼ水平に地山を掘り抜いて構築され、煙出しピットはそれより10㎝深い。

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第83図1）

椀状を呈する。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって立ち上がる器形で、底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリが施される。

高台付坏（第83図2）

底部および高台が欠損している。坏部の形状は体部下端が強く屈曲し、口縁部にかけて急角度で立ち上がる。体部下位に回転ヘラケズリが施されている。

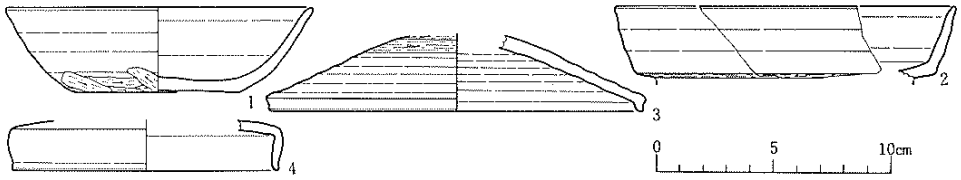
蓋（第83図3・4）

3は器高が高く、天井部が「ハ」字状になるもので、口縁部は下方に折れ曲がり、外面に縁帯が形成される。天井上位に回転ヘラケズリが施されている。4は壷蓋である。天井の縁が折れ曲がるもので、口縁端部が外方に反る。

B5号住居跡

〔位置〕　B地区東斜面の中腹、B15号窯跡の南側に位置する。

〔平面形・規模・方向〕　斜面上方部が残存し、平面形は方形を基調としている。規模は西壁



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器坏	IIHii	13.1	6.8	3.7	A1住-1	
2	床面	須恵器高台付坏	II?	14.6	——	——	A1住-4	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
3	周溝	須恵器蓋	IIA?	16.0	——	——	A1住-2	
4	床面	須恵器蓋	III	11.4	——	——	A1住-3	

第83図　A1号住居跡出土遺物

が5.5m、北・南壁がそれぞれ1.3m・0.6m残存している。カマドの向く軸線の方向はN－55°－Wである。

〔壁〕　壁面は凹凸があり、また内弯する部分があるなど立ち上がりは一様でない。

〔床面〕　黄灰褐色土・暗褐色土で床を貼っている。細かな凹凸がみられ、斜面に沿って若干傾斜する。

〔柱穴〕　住居内にピットが5個検出されている。このうちP1～P3はほぼ住居の対角線上に位置するので柱穴と思われる。北東部の残りの1個は残存していない。

（ピットの深さ㎝）	P1	P2	P3	P4	P5
	47	37	28	18	28

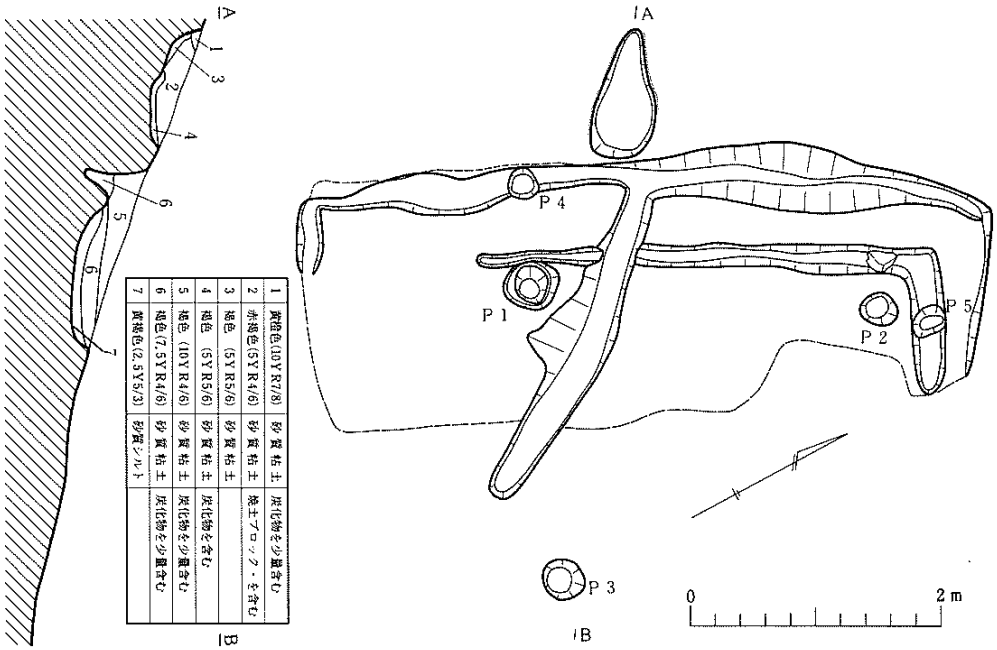
〔周溝〕　周溝は西壁沿いにみられる。また別にその中央から住居内に斜めに延びる溝があり、西辺から北辺にかけての壁より内側にも検出されている。いずれも切り合いはなく、同時に機能したものと思われる。深さは5～15㎝である。

〔カマド〕　西壁中央に付設されているが、本体はすでに失われ、煙道が溝状に残存する。底面は先端に向かっていくぶん上る。

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第85図1・2・4）



1	黄褐色(10YR7/8)	砂質粘土	炭化物を少量含む
2	赤褐色(5YR4/6)	砂質粘土	焼土ブロック・を含む
3	褐色 (5YR5/6)	砂質粘土	
4	褐色 (5YR5/6)	砂質粘土	炭化物を含む
5	褐色 (10YR4/6)	砂質粘土	炭化物を少量含む
6	褐色(7.5YR4/6)	砂質粘土	炭化物を少量含む
7	黄褐色(2.5Y5/3)	砂質シルト	

第84図　B５号住居跡

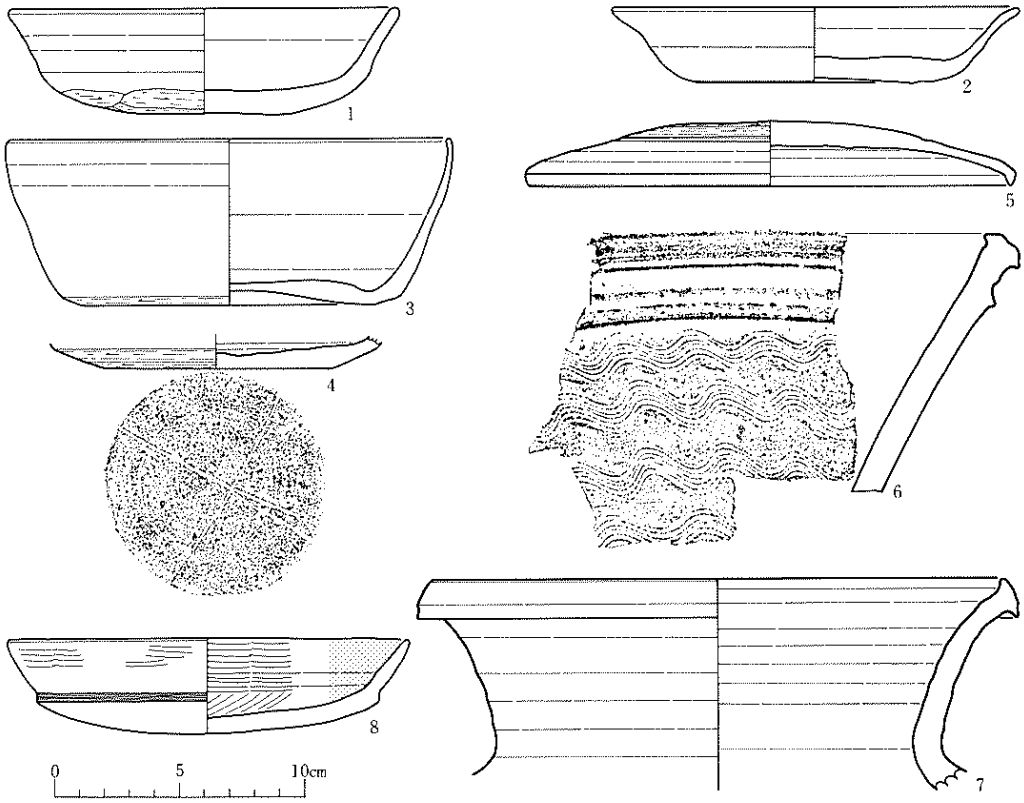
1・2は皿状を呈する。1は体部中位に弱い稜をもち、稜から下は丸みが強く、稜から上は外反ぎみになる。底部から体部下位に手持ちヘラケズリが施されている。2 は体部下半が丸みをもち、口縁部が外反するもので、底部にはナデが施されている。4 は破片資料で、底部に回転ヘラケズリの後、大きく「×」状のヘラ書きがなされている。

椀（第85図3）

体部が直線的に立ち上がり、口縁部がやや内弯するもので、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。

蓋（第85図5）

つまみをもたないものである。天井部はやや丸みをもち、端部がゆるく屈曲して口縁部に至る。外面に口縁帯をつくり出しているが、明瞭ではない。横位沈線を境とする天井部上半に回転ヘラケズリが施されている。



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	カマド掘方	須恵器坏	ⅠGⅱ	15.7	(6.5)	4.2	B5住-2	23-12
2	床面直上	須恵器坏	ⅠAⅲ	16.3	8.8	3.0	B5住-3	24-1
3	床面直上	須恵器椀	ⅡB	17.8	11.4	6.7	B5住-1	23-13
4	地横土1層	須恵器坏		——	8.9	——	B5住-4	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
5	周溝	須恵器蓋	ⅡB	19.4	——	——	B5住-6	
6	ピット4	須恵器甕	Ⅰ	——	——	——	B5住-7	24-4
7	掘方	須恵器甕	Ⅱ	22.7	——	——	B5住-5	24-3
8	カマド掘方	土師器坏	c1	16.0	——	3.8	B5住-8	24-2

第85図　B5号住居跡出土遺物

甕（第 85 図 6・7）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上下端を引き出している。6 は口縁帯下に 1 条の隆帯が巡り、その下部に櫛描き波状文が描かれている。7 は体部に平行叩き目がみられる。

土師器

坏（第 85 図 8）

丸底で、中位に段が付き、段から上は外傾する。外面は段から上にヘラミガキ、段の部分に横ナデ、段から下にヘラケズリがなされ、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

B6 号住居跡

〔位置〕 B地区東斜面の中腹、B5 号住居跡の南側に位置する。

〔平面形・規模・方向〕　東辺はすでに削平されているが、方形を基調としているものと思われる。西壁は 5.8m、床の残存する東西幅は 2.4mになる。カマドの向く軸線の方向はＳ－33.5°－Wである。

〔堆積土〕 主に砂質シルト層から成り、7 枚に分かれる。炭化物を多量に含む層が多い。

〔壁〕　壁面に小さな凹凸がみられるが、垂直に近い立ち上がりを示す。壁高は西壁で 65 ㎝程になる。部分的に焼けた痕跡が認められる。

〔床面〕　小さな凹凸はあるものの、ほぼ平坦・水平である。床面にはカマド以外にも焼けた部分があり、壁の焼けた痕跡、堆積土に炭化物が多量に混じることから、火災にあった可能性が考えられる。

〔柱穴〕　住居内で 16 個のピットが検出されている。このうちＰ1～Ｐ4 は対角線上に位置すると思われ、柱穴の可能性が強い。また周溝内にあるピットは壁柱穴の可能性がある。

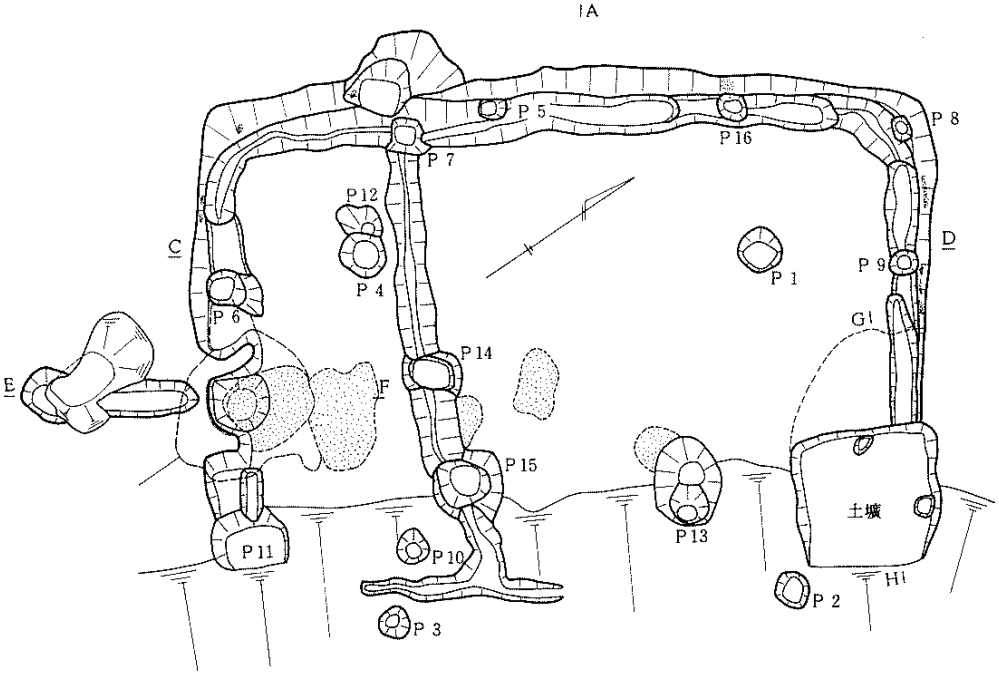
（ピットの深さ ㎝）

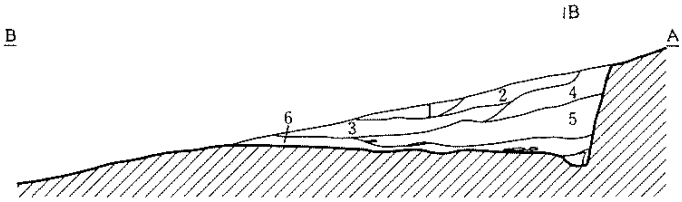
P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
35	19	9	44	30	28	16	22	14	28	20	21	53	21	47	20

〔周溝〕　壁沿いに巡る。また南西部から南辺の周溝に平行して溝が延び、削平部で直交する短い溝に接続する。深さは 5～10 ㎝である。

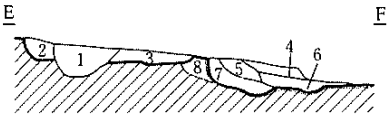
〔カマド〕　南壁に付設されている本体は側壁奥半が高さ 10～20 ㎝程残存している。底面はいくぶんくぼみ、全体に焼けて赤化している。本体より大きめの掘り方を施して構築している。煙道は深さ 10 ㎝の溝状に残存しており、一部撹乱を受けている。

〔土壙〕　北東部に一辺 1mの方形の土壙がある。深さは 20 ㎝で、内部から西側の住居床面上（点線の範囲）にかけて粘土が堆積している。粘土溜の土壙と思われる。



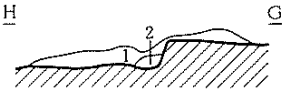


1	黒色 (10YR2/1)	砂質粘土	炭化物を多く含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質粘土	炭化物を多く含む
3	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	炭化物を含む
4	褐色 (10YR4/6)	細砂	炭化物を含む
5	明褐色(7.5YR5/6)	細砂	炭化物を含む
6	褐色 (7.5YR4/6)	細砂	炭化物を含む
7	黒褐色 (10YR2/2)	細砂	炭化物・焼土を含

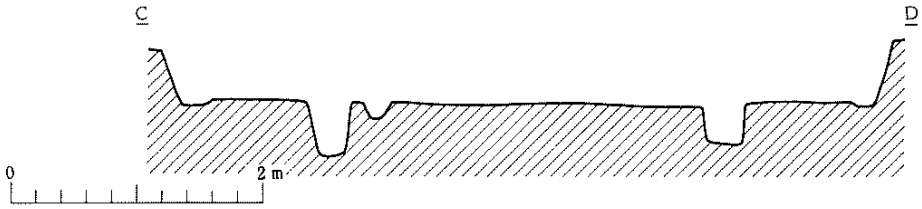


F

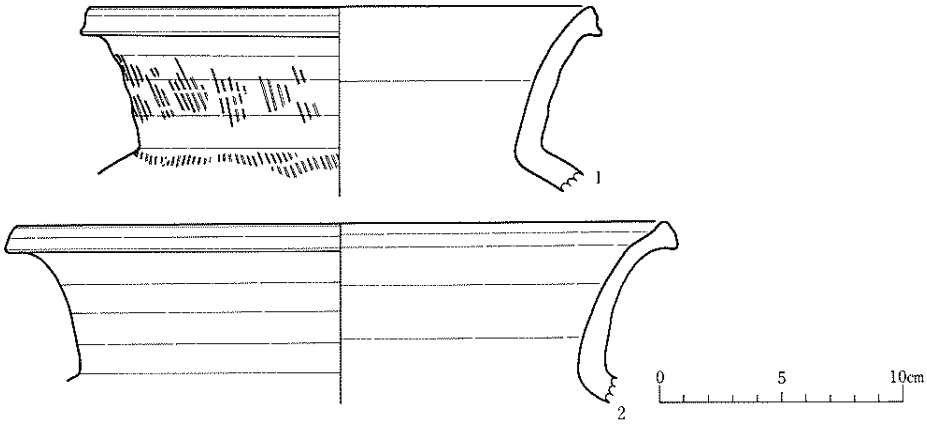
B 6住居跡カマド
1：壊乱
2：黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 炭化物を含む
3：褐色 (10YR4/4) 砂質シルト 炭化物・焼土を含む
4：褐色 (10YR4/6) 細砂 炭化物・焼土ブロックを含む
5：赤褐色 (5YR4/8) 砂質シルト 焼土ブロックが主体
6：褐色 (7.5YR4/6) 細砂 炭化物・焼土ブロックを含む
7：明褐色 (7.5YR5/6) 粘土 炭化物・焼土を含む
8：カマド掘り方埋め土 粗砂



B 6号住居跡土壙
1：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土
2：明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 炭化物を含む



第86図 B 6号住居跡



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	床面	須恵器甕	II	20.7	——	——	B6住-2	

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
2	堆積土5層	須恵器甕	II	26.7	——	——	B6住-1	24-5

第87図　B６号住居跡出土遺物

〔出土遺物〕

須恵器甕（第87図1・2）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は１が下端、2が上下端を引き出している。平行叩き目がみられる。

B7号住居跡

〔位置〕　B地区東斜面の中腹、B6号住居跡の南側に位置する。住居の大部分は路線外であり、その部分は調査していない。

〔平面形・規模・方向〕　平面形は方形を基調としている。調査した範囲は北壁 5.8m、西壁 2.8mである。カマドの軸線はN－0°－EWである。

〔壁〕　地山を壁としており、凹凸がなく平坦である。壁の途中まで内弯して立ち上がる部分が多い。壁高は北西隅で71㎝になる。

〔床面〕　掘り方の底面をそのまま床にしている。ごく平坦である。

〔柱穴〕　住居内で検出されたピットは2個である。P2がP1を切っている。P2は柱痕跡が確認された。位置的にも柱穴と思われる。

〔周溝〕　壁沿いに巡る。カマド本体を取り除いたところ、その下でも検出された。深さは20㎝程で、北西隅が最も浅く、東側がしだいに深くなる。

〔カマド〕　北壁中央に付設されている。本体は20～54㎝の高さで残存する。地山土を貼り付けて構築しており、奥壁には須恵器甕の口縁部を据えている。底面はわずかにくぼみ、全体が焼けている。煙道は本体底面より16㎝高く、ほぼ水平に延び、先端に煙道底面より5㎝深い煙

出ピットがある。

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 89 図 1・2）

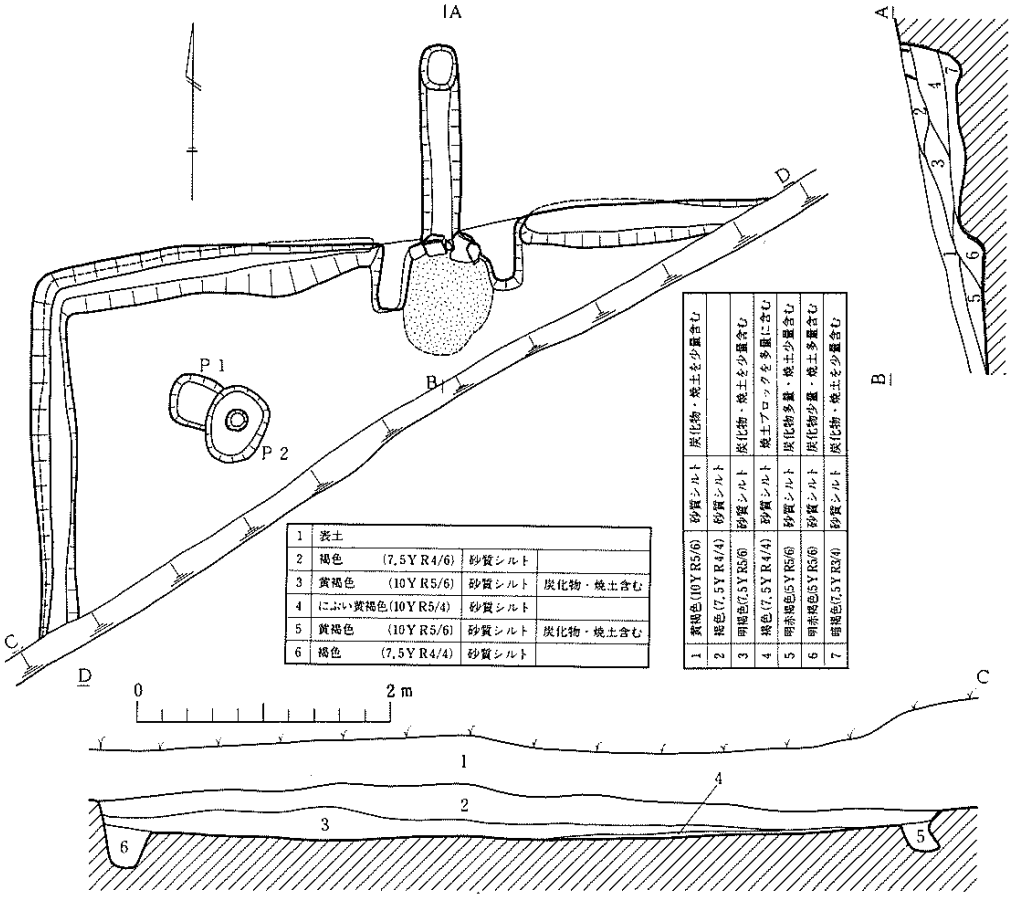
椀状を呈する。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって立ち上がる器形で、底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。

高台付坏（第 89 図 3）

浅い皿状を呈する。体部に弱い稜をもち、稜から上が外傾するもので、高台は厚手でやや長い。底部には回転ヘラケズリが施されている。

高坏（第 89 図 6）

坏部は体部から口縁部まで水平に近く、きわめて偏平なもので、わずかに口縁端部が上方につまみ出されている。脚部は中空で、上半が柱状を呈し、下半は強く開き、端部に至って短く



1	表土		
2	褐色 (7.5Y R4/6)	砂質シルト	
3	黄褐色 (10Y R5/6)	砂質シルト	炭化物・焼土含む
4	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	砂質シルト	
5	黄褐色 (10Y R5/6)	砂質シルト	炭化物・焼土含む
6	褐色 (7.5Y R4/4)	砂質シルト	

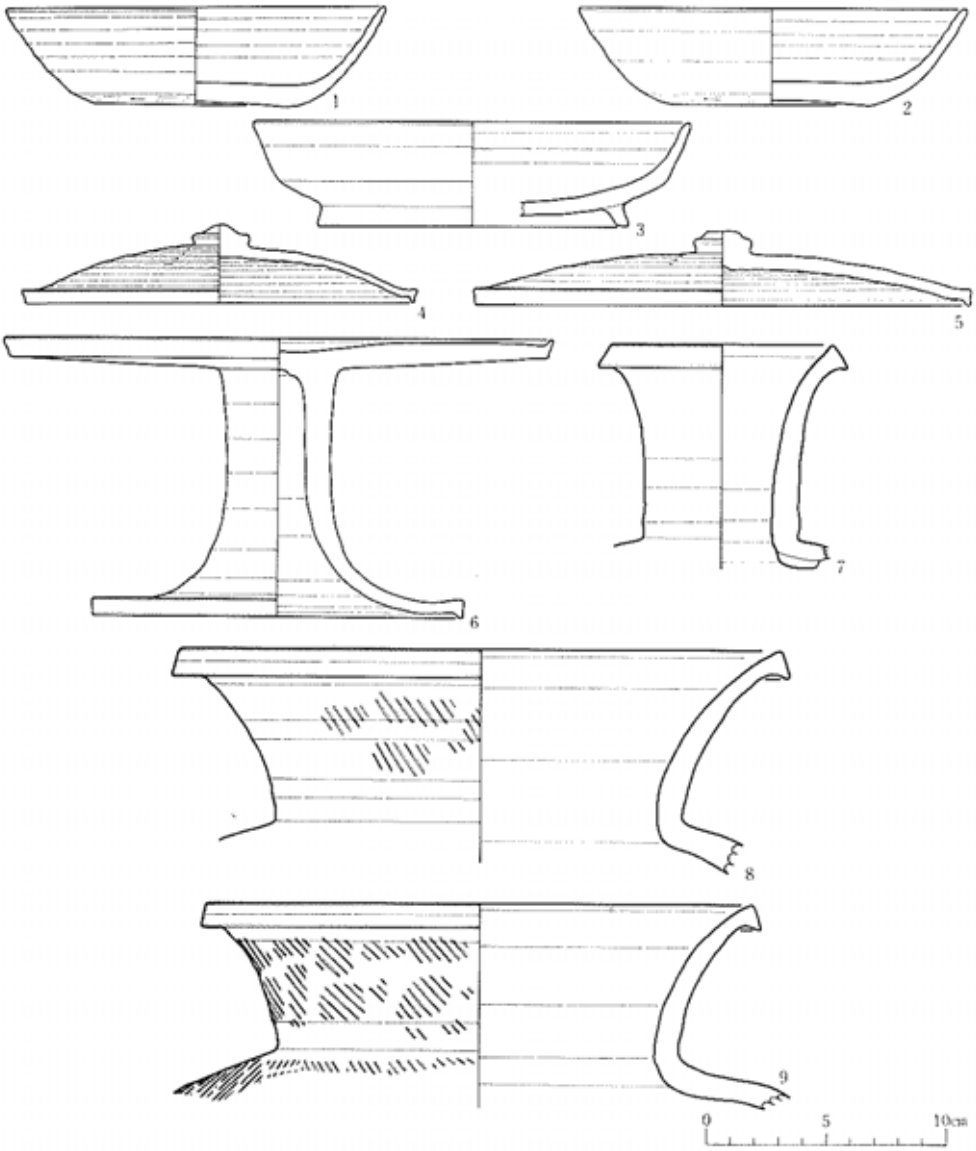
1	黄褐色(10Y R5/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む
2	褐色(7.5Y R4/4)	砂質シルト	
3	明褐色(7.5Y R5/6)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む
4	褐色(7.5Y R4/4)	砂質シルト	焼土ブロックを多量に含む
5	明赤褐色(5Y R5/6)	砂質シルト	炭化物多量・焼土少量含む
6	明赤褐色(5Y R5/6)	砂質シルト	炭化物少量・焼土多量含む
7	暗褐色(7.5Y R3/4)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む

第88図　Ｂ７号住居跡

下方に折れている。坏下部に回転ヘラケズリが施されている。

蓋（第 89 図 4・5）

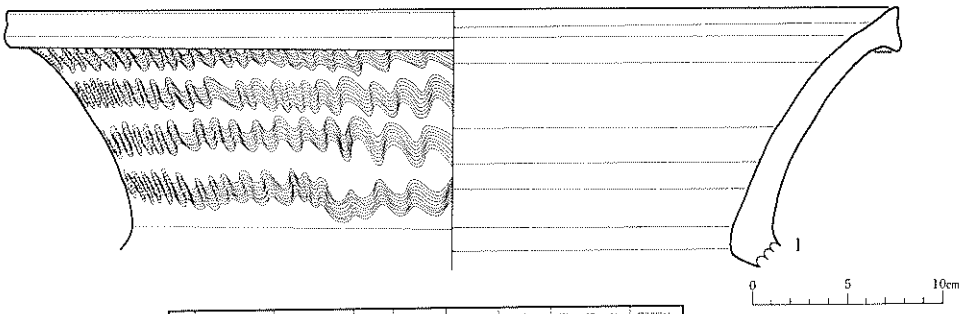
天井部はおおむね丸みをもつが、周縁においてわずかに反り返るもので、口縁部は下方に折れ、外面に縁帯がつくり出される。つまみは中央が突出し、つまみに近い天井部上半には回転



No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
1	周溝	須恵器坏	ⅡF	15.8	8.4	4.1	B 7住-1	24-6
2	周溝	須恵器坏	ⅡF	16.2	8.4	4.1	B 7住-2	24-7
3	周溝	須恵器高台付坏	ⅠC	18.2	12.9	4.4	B 7住-3	24-8
4	床面	須恵器蓋	ⅡA	16.2	——	3.3	B 7住-4	24-9
5	床面	須恵器蓋	ⅡA	20.6	——	3.1	B 7住-5	24-10

No	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No	図版No
6	周溝	須恵器高坏		22.8	15.4	11.6	B 7住-6	25-1
7	周溝	須恵器長頸壺		9.2	——	——	B 7住-8	25-2
8	床面	須恵器甕	Ⅱ	25.0	——	——	B 7住-9	
9	床面	須恵器甕	Ⅱ	22.8	——	——	B 7住-7	25-3

第89図　Ｂ７号住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	カマド奥壁	須恵器甕	I	47.0	——	——	B 7 住-10	25-4

第90図　B 7 号住居跡出土遺物(2)

ヘラケズリが施されている。

甕（第 89 図 8・9・第 90 図）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は下端を引き出している。第 90 図は口頸部に櫛描き波状文が施されている。

長頸壷（第 89 図 7）

頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。端部外側は下端を引き出して口縁帯をつくり出している。

B8 号住居跡

〔位置・重複〕　B12 号窯の下部に位置し、それと溝に切られている。また斜面下方は農道によって削平されている。

〔平面形・規模・方向〕　平面形は方形を基調とする。規模は南北が 4.2mで、東西は 3.1m残存する。カマド軸線の方向はＳ－32°－Wである。

〔堆積土〕　壁際及び床面は褐色土が覆う。ただし、南壁では褐色土の上に黄色砂層が分布しており、付近の地山とは異なることから人為的に埋められた可能性がある。

〔壁〕　南辺と北西隅が残存する。地山を壁とし、外傾して立ち上がる。高さは南壁で 15 ㎝、北西隅で 65 ㎝である。

〔床面〕　地山を床としており、平坦で硬い。

〔柱穴〕　住居内から 4 個のピットが検出されたが、柱痕跡が確認されたものはなく、配置に規則性もみられないため、柱穴がどうか不明である。

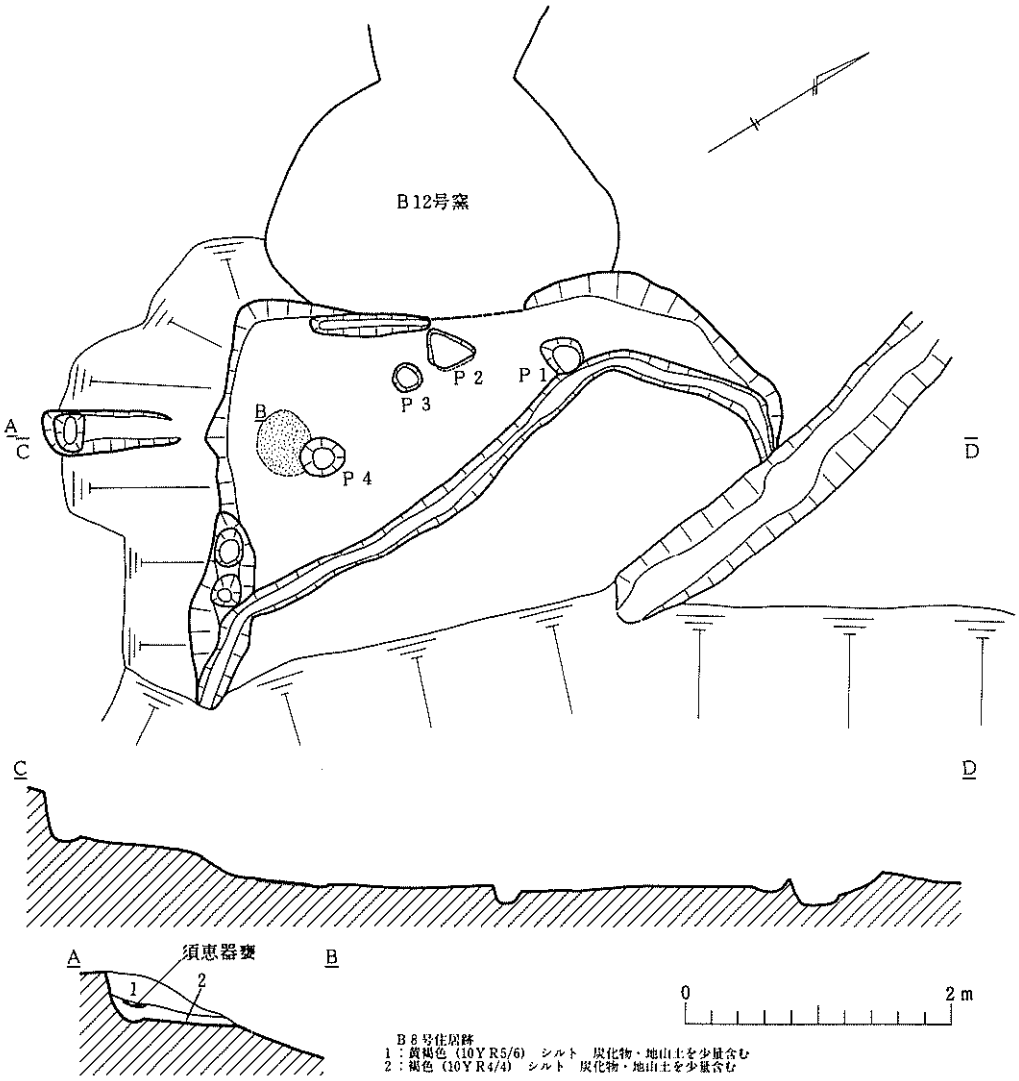
（ピットの深さ ㎝）	P1	P2	P3	P4
	10	15	8	9

〔周溝〕　西壁沿いには部分的にみられ、ほかに北西隅から南東隅にかけて住居を斜めに横切

る溝が走る。溝の深さは4～10㎝である。

〔カマド〕　南壁に付設されている。本体は底面の焼面だけが残る。煙道は溝状に残存し、深い部分で約30㎝、底面はほぼ水平で、先端に煙道底面より3㎝深い煙出しピットが付く。

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。



第91図　B8号住居跡

6．表土出土遺物

表土除去作業から遺構の輪郭を確認するまでに発見された遺物を一括して表土出土遺物として扱う。ただし、B11 号窯跡右側の焼け面から斜面下方にかけての部分からは、多くの遺物が集中して発見されており、この焼け面が須恵器窯の残痕の可能性があるので、その遺物は別に説明する。

〔焼け面付近出土遺物〕（第 92 図～第 93 図）

須恵器

坏（第 92 図 1～11）

1～4 は浅い皿状を呈する。1 は体部に弱い稜の付く器形で、稜から下は丸みをもち、稜から上は直線的に立ち上がる。2 は体部から口縁部にかけて変化なく外傾する器形である。3・4 は体部に稜が付くが、1 と異なり稜から下は丸みをもたず、稜から上は外反ぎみになる。1・2・4 は底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。3 は磨滅のため不明である。

5～10 は 1～4 に比して深めの器形である。体部中位から口縁部にかけて直線的になり、体部下位にやや丸みをもつものが多い。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施される。なお、8 と底部資料 11 の底部には「±」のへら書きがみられる。

高台付坏（第 92 図 13～19）

13～18 は皿状を呈する。13～16 は体部下位に丸みをもち、上半は直線的になるもので、短い高台が付く。17・18 は体部下位に稜がみられ、稜から上は直線的である。高台は口縁部径に較べて径が小さく、「ハ」字状に開く。19 は椀状の器形で、体部下位に丸みをもち、上半は直線的である。高台は薄手で短い。いずれも底部に回転ヘラケズリが施されており、19 では体部下位に及ぶ。

椀（第 92 図 12）

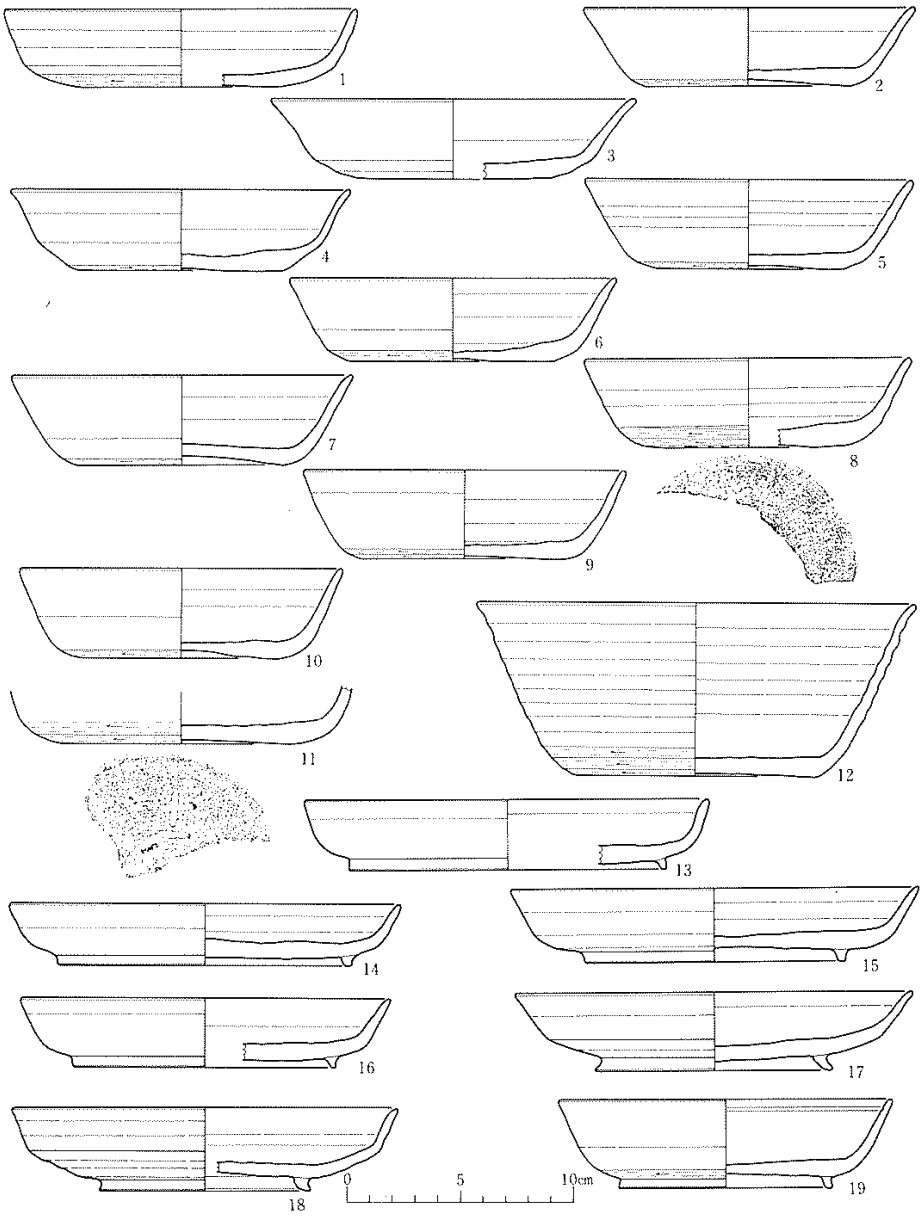
体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施されている。

甕（第 93 図 1～3）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上下端を引き出している。3 は縁帯下に隆帯が巡る。口頸部に櫛描き波状文や平行沈線文・櫛描き波状文が描かれている。

〔その他の表土出土遺物〕

焼け面付近以外の表土から出土した遺物を一括する。



No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	須恵器 坏	IGi	15.6	——	3.5	BX-25	25-5
2	須恵器 坏	IEi	14.7	9.2	3.5	BX-17	25-6
3	須恵器 坏	IF	16.1	8.4	3.6	BX-26	
4	須恵器 坏	IFi	15.0	8.8	3.6	BX-24	
5	須恵器 坏	IIE	14.5	8.3	4.0	BX-19	25-7
6	須恵器 坏	IIE	14.4	9.0	3.7	BX-15	26-1
7	須恵器 坏	IIE	15.0	9.0	4.0	BX-16	25-8
8	須恵器 坏	IIE	14.4	8.6	4.0	BX-23	26-12
9	須恵器 坏	IIE	14.2	9.0	3.9	BX-22	
10	須恵器 坏	IIE	14.3	8.9	4.0	BX-20	26-2

No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
11	須恵器 (坏)		——	9.8	——	BX-21	26-11
12	須恵器 椀	IIC	19.4	10.7	7.7	BX-27	
13	須恵器高台付坏	IA	17.8	14.0	3.2	BX-31	
14	須恵器高台付坏	IA	17.2	13.0	2.8	BX-32	26-9
15	須恵器高台付坏	IA	18.0	11.5	3.3	BX-34	26-10
16	須恵器高台付坏	IA	16.3	11.7	3.1	BX-33	
17	須恵器高台付坏	ID	17.6	10.5	3.5	BX-30	26-4
18	須恵器高台付坏	ID	17.0	9.3	3.7	BX-29	26-3
19	須恵器高台付坏	IIA	14.8	9.4	4.0	BX-28	

第92図　表土出土遺物(1)

須恵器

坏（第 94 図 1〜11・13）

1〜6 は皿状を呈する。このうち 1・3 は体部に弱い稜の付くもので、稜から下は丸みをもち、稜から上は 1 が直線的、3 が外反ぎみになる。2・5・6 は体部から口縁部にかけておおむね変化なく立ち上がるものであるが、2 は 5・6 に比して小形である。4 は体部下位に削り出しによる弱い稜をもち、中位から口縁部にかけて直線的になるものである。3 は底部に手持ちヘラケズリが施されるのに対し、他はいずれも回転ヘラケズリであり、3〜5 ではそれが体部下位に及ぶ。

7〜11 は椀状を呈する。このうち 7・8 は体部下位に丸みをもち、中位から口縁部にかけて直線的になり、また 9・10 も小形であるがほぼ同様な器形になる。11 は体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるもので、口径の割に底径がかなり小さめである。いずれも底部に回転ヘラケズリが施されており、8〜11 はそれが体部下位に及ぶ。

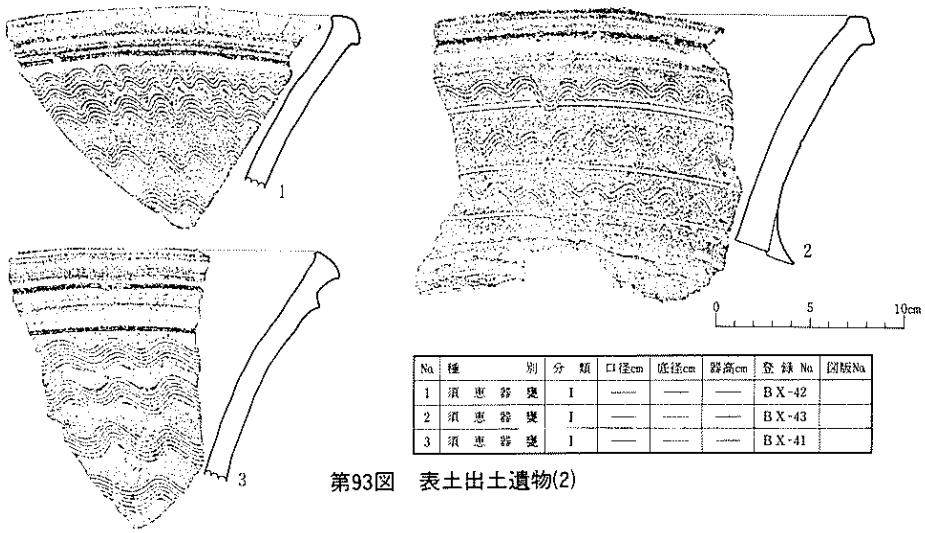
なお、2 と 13 の底部にはそれぞれ「×」「土」のへら書きがみられる。

高台付坏（第 94 図 15）

やや深めのもので、体部下位がゆるく屈曲し、口縁部にかけて直線的になる。高台は短く、その断面は方形である。底部及び体部下位に回転ヘラケズリが施されている。

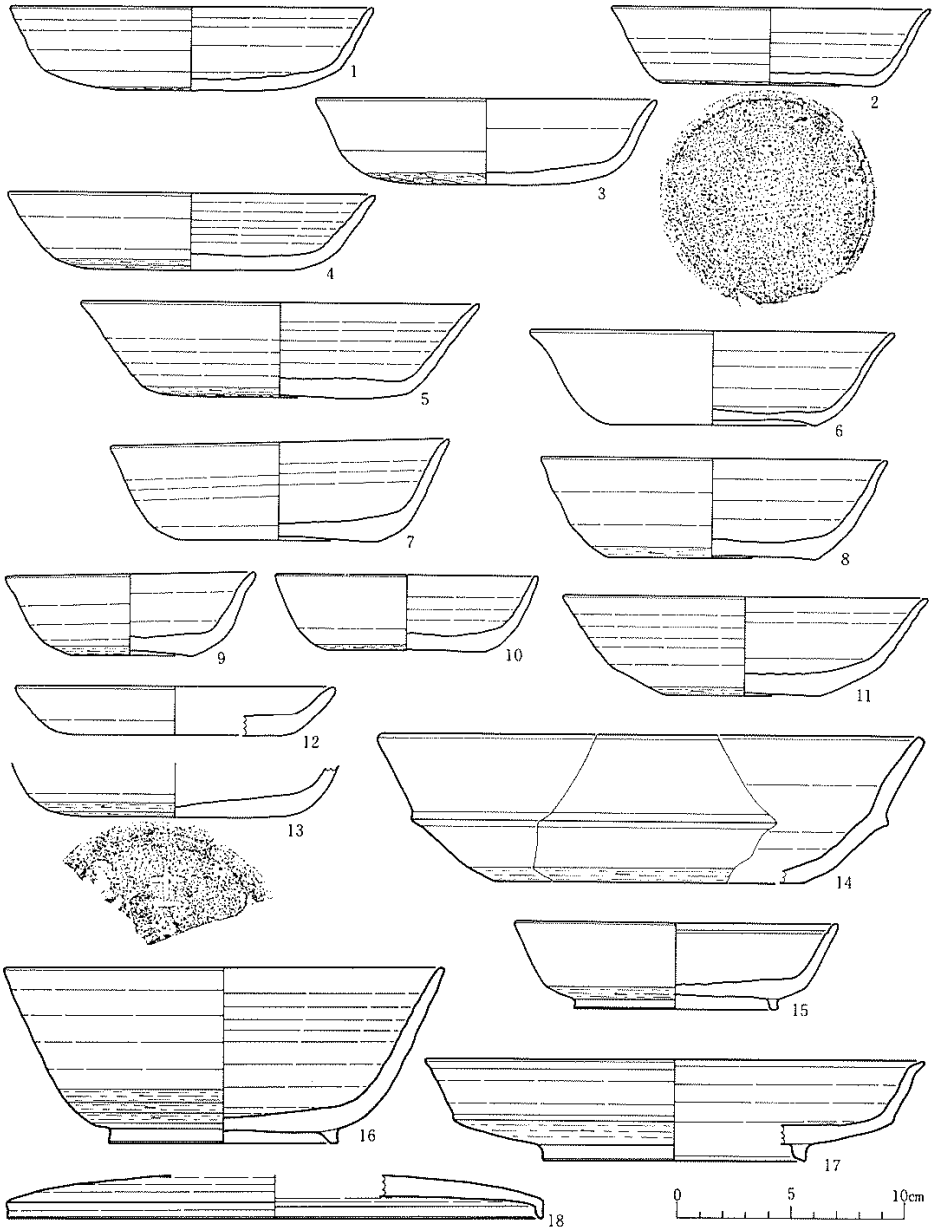
椀（第 94 図 14・16）

14 は体部中位に 1 条の横位隆線が巡るもので、隆線から下はやや丸みをもち、稜線から上は直線的である。底部から体部下位に回転ヘラケズリが施されている。16 は高台が付くものである。体部下位は丸みをもち、中位から口縁部にかけて直線的で、高台は短く、その断面は逆台形である。底部から体部下位に回転ヘラケズリが施されている。



No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	須恵器 甕	I	——	——	——	BX-42	
2	須恵器 甕	I	——	——	——	BX-43	
3	須恵器 甕	I	——	——	——	BX-41	

第93図　表土出土遺物(2)



No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	須恵器 坏	IGi	16.0	—	3.7	BX-13	26-5
2	須恵器 坏	IAi	14.0	9.2	3.4	BX-5	27-3
3	須恵器 坏	IGii	15.0	—	3.8	BX-12	26-7
4	須恵器 坏	IHi	16.2	9.4	3.4	BX-2	
5	須恵器 坏	IEi	17.4	8.4	4.2	BX-3	26-6
6	須恵器 坏	IEi	16.0	9.0	4.2	BX-1	
7	須恵器 坏	IIE	14.8	8.8	4.3	BX-4	26-8
8	須恵器 坏	IIE	15.2	9.3	4.4	BX-14	
9	須恵器 坏	IIHi	11.0	5.4	3.6	BX-9	

No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
10	須恵器 坏	IIHi	11.6	7.1	3.4	BX-8	
11	須恵器 坏	IIGi	16.0	6.7	4.4	BX-7	
12	須恵器 皿		14.0	9.0	2.2	BX-11	
13	須恵器 坏		—	—	—	BX-10	27-4
14	須恵器 椀	IID	23.5	13.5	6.5	BX-40	
15	須恵器高台付坏	IIA	14.2	9.0	3.9	BX-35	27-1
16	須恵器 椀	IC	19.4	10.1	7.7	BX-36	
17	須恵器 盤	IA5	22.0	11.6	4.4	BX-37	
18	須恵器 蓋	I	23.6	—	—	BX-38	

第94図　表土出土遺物(3)

皿（第 94 図 12）

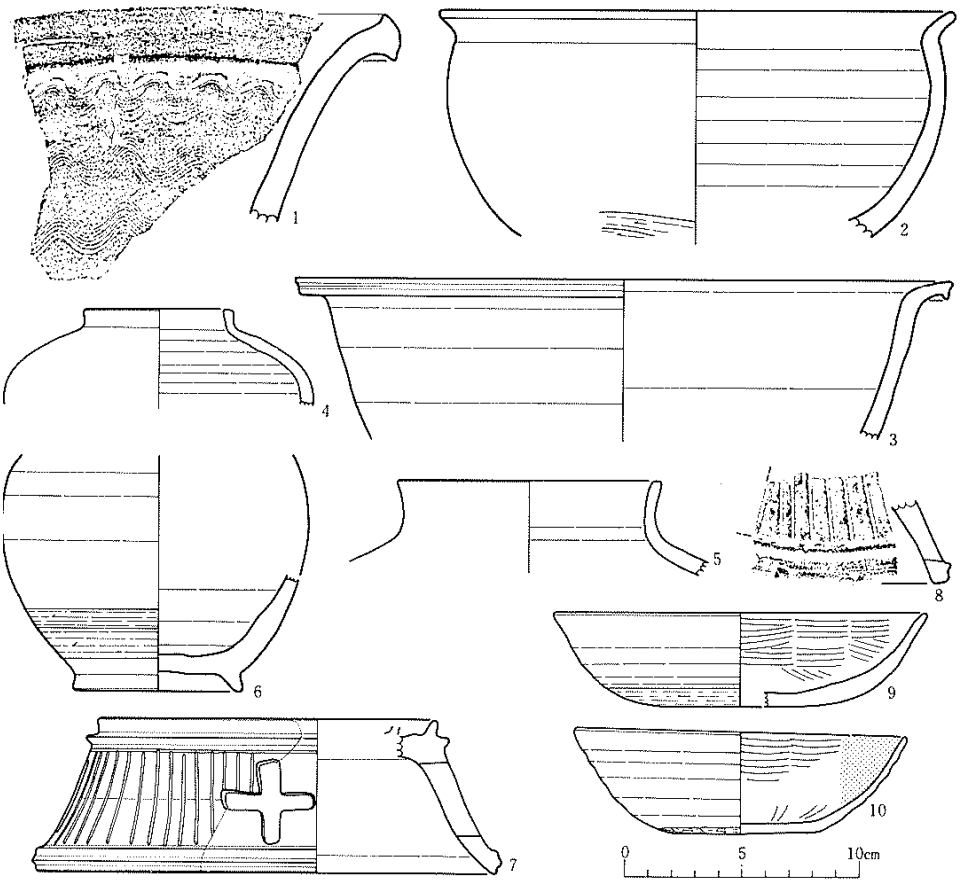
厚手のもので、体部から口縁部にかけて短く直線的に立ち上がる。底部はナデ調整されている。

盤（第 94 図 17）

体部に段の付くもので、段から上は直線的に外傾するが、口縁部で短く外反する。高台は口径の割に小さく、段のかなり内側に付く。断面は逆台形である。体部の段から下に回転ヘラケズリが施されるが、底部は欠損して不明である。

蓋（第 94 図 18）

天井上部が失われており、形状は明確でないが、器高が低いものと思われる。天井部の中ほ



No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	須恵器甕	I	—	—	—	BX-53	
2	須恵器鉢	IA	22.0	21.3	—	BX-47	
3	須恵器鉢	II	28.0	—	—	BX-44	
4	須恵器短頸壺		6.3	13.1	—	BX-49	
5	須恵器短頸壺		11.2	—	—	BX-48	

No.	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
6	須恵器壺		—	7.2	—	BX-45	
7	須恵器円面硯		—	19.4	6.6	BX-50	27-2
8	須恵器円面硯		—	—	—	BX-46	27-8
9	土師器坏		16.0	—	4.1	BX-39	27-5
10	土師器坏		14.2	6.3	4.4	B_2-4-4	27-6

第95図　表土出土遺物(4)

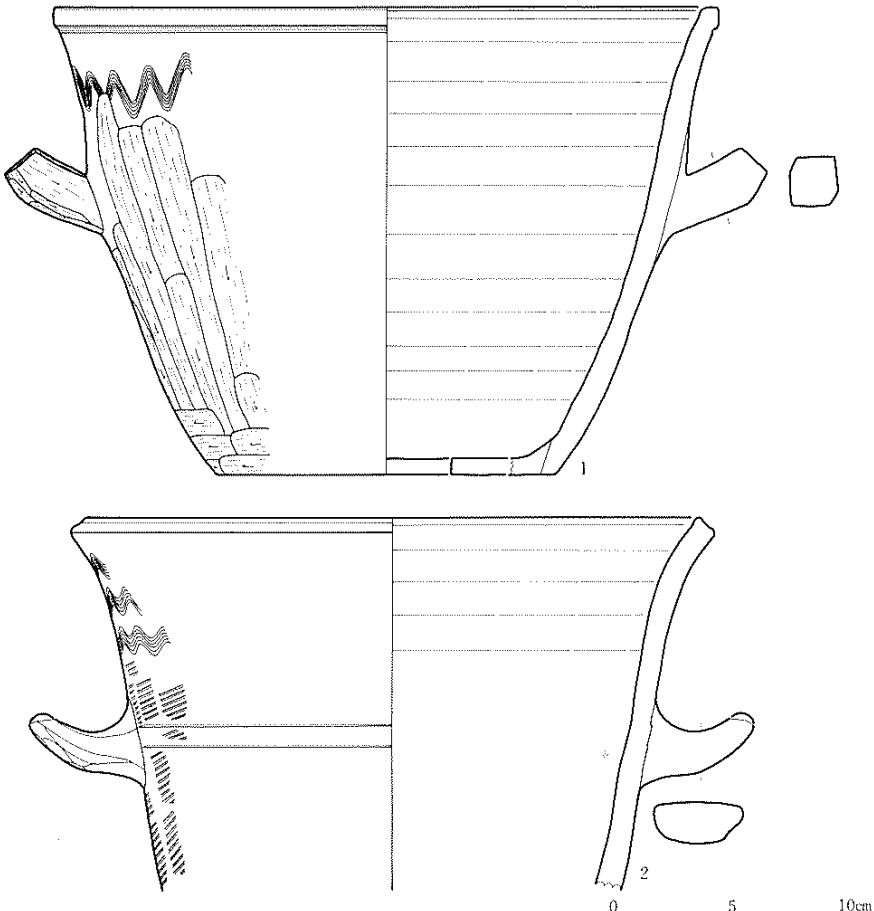
どから口縁部にかけてやや丸みを帯び、口縁部は下方に折れ曲がり、ややくびれる縁帯がつくり出される。

甑（第 96 図 1・2）

1 は底部から口縁部にかけて変化なく外傾する鉢状の器形である。休部中位やや上寄りに一対の把手が付く。外面は口縁下に波状文が描かれ、それ以下底部にかけてヘラケズリが加えられている。把手は断面が方形に近い棒状で、ヘラケズリ調整されている。2 は体部が直線的であるが、口縁部が外反気味になる。体部に一対の把手が付く。外面は口縁下に波状文が描かれ、その下に平行叩き目が加えられている。把手の位置には小さな段が巡る。

甕（第 95 図 1）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側の上下端を引き出して口縁帯をつくり出している。



No	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	須恵器 甑		27.8	14.2	19.7	BX-51	27-7

No	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
2	須恵器 甑		27.0	――	――	BX-52	27-9

第96図　表土出土遺物(5)

口頸部に数段の櫛描き波状文が描かれている。

鉢（第 95 図 2・3）

体部は丸みをもって立ち上がり、頸部で括れて口縁部が、短く外反するもの（2）と、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反するもの（3）とがある。2 は口縁端部が丸く仕上げられている。3 は端部外側の下端を引き出して口縁帯をつくり出している。2 は外面の体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。

壷（第 95 図 4〜6）

4・5 は短頸壷で、丸みをもつ肩部から口縁部が直立する。口縁端部は平坦に仕上げられている。6 は低い高台の付く壷の底部破片である。外面の体部下端に回転ヘラケズリが施されている。

円面硯（第 95 図 7・8）

7 は器高の低いもので、上面外周に二条の突帯が巡る。硯面は欠損しており不明である。脚部は外反気味に開き、4 ケ所に「＋」状と細長い透しが交互に配されており、ほかに縦位の条線が施されている。下端部には 1 条の隆線を伴う縁帯がつくり出されている。8 は脚部破片である。縦に細長い透しと条線がみられ、下端部はやや括れた縁帯がつくり出されている。

土師器

坏（第 95 図 9・10）

製作にロクロを使用するものである。9 は体部に丸みをもち、底部との境が明瞭でない。外面は底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施され、内面はヘラミガキされている。10 は口縁部の割に底部が小さく、薄手で、体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。外面は底部から体部下位に手持ちヘラケズリが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキは底部で放射状である。

Ⅴ．大 沢 窯 跡

1．遺構の概要（第６図）

調査区内の遺構は丘陵南斜面に位置するが、調査区南端の丘陵裾部に列を成すものと、西部の斜面中腹に集中するものとの２群がある。

裾部には窯跡群と竪穴住居跡・土壙が立地しており、窯跡はA1～（A7ａ・7ｂ）～A9 号の10 基、住居跡１軒（A1 号住居跡）、土壙２基（A2・A3 土壙）である。窯跡群の内訳は瓦窯跡が７基、須恵器窯跡が２基、炭窯跡が１基となる。これらの窯跡群は、多少の偏りがあるものの主軸線はほぼ南北方向で、焚口が谷底に近い場所に位置し、焼成室・煙道が斜面にのびている。焚口は一部谷底の砂礫層上に位置するが、窯体の大部分は黄灰色の粘土層に構築されている。瓦・須恵器窯はいずれも半地下式窖窯と思われる。

斜面中腹には炭窯跡（B10 窯）、瓦捨場（B1～B6 遺構）と土壙（B1～B16 号土壙）が立地しており、瓦捨場と土壙はほぼ東西に分かれて密集している。中腹に所在する遺構については、炭窯跡は個別に説明し、他は一括して概要を述べることにする。

2．窯跡の重複関係

窯跡が重複しているのはA2 号とA3 号窯跡、A7ａ号とA7ｂ号窯跡である。

A3 号窯跡はA2 号窯跡の西側灰原の一部を土盛り整地して焚口及び前庭部を築いている。したがって、A3 号窯跡はA2 号窯跡より新しい。

A7 号窯跡は焼成室が重複しており、それぞれA7ａ号窯跡、A7ｂ号窯跡とよびわけた。A7ａ号窯跡はA7ｂ号窯跡の天井部崩落後、埋まり切った段階で新たに築かれた窯で、両者の軸方向はいくぶん斜行している。したがって、A7ａ号窯跡はA7ｂ号窯跡より新しい。

また、A1～A8 号窯跡は斜面中位部分が水田・畑地などで削平されているので、煙道はすべて失われ、焼成室もかなりの部分が破壊されて残存していない。

3．須恵器窯跡の特徴

A2 号窯跡

焼成室下部と燃焼室・灰原が残存するが、焼成室の大部分は削平されている。また、燃焼室と焼成室の境付近の堆積土は撹乱を受け、床面近くまで及んでいる。

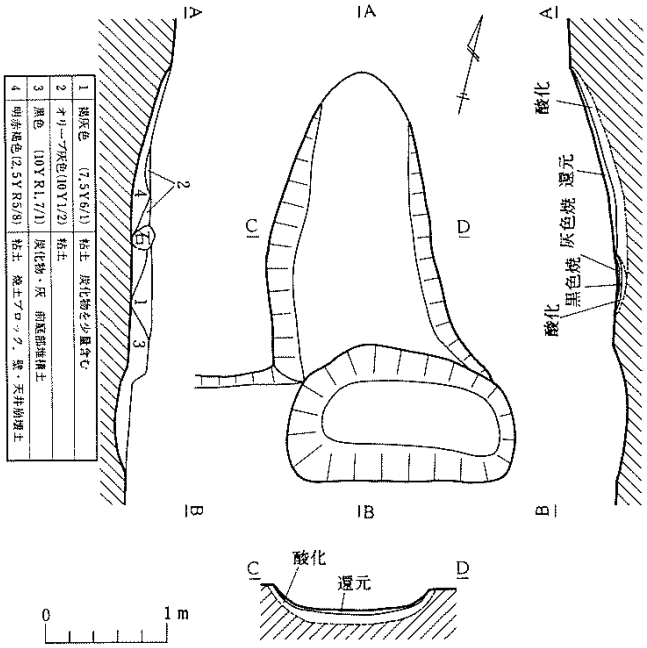
〔焼成室〕　床面は平坦であるが、上方に向かうにしたがってやや反り気味に傾斜が急になる。側壁は内弯気味に立ち上がる。床面は上面が青灰色に硬く焼け、内部が赤褐色に焼けている。

〔燃焼室〕　平面形は方形である。焼成室との境は平面的には明瞭でないが、床面の傾斜と焼

け方が異なる。床面は平坦・ほぼ水平であるが、わずかに皿状にくぼむ。燃焼室の手前には楕円形のくぼみ（190×90㎝、深さ 10㎝）がある。床面は青黒色に焼けているだけである。

〔灰原〕　燃焼室の手前とその周囲が灰原となっている。

〔堆積土〕　燃焼室から前庭にかけては黒色の炭化物・灰層（No.3）があり、燃料残滓とその掻きだされたものと考えられる。なお、燃焼室には天井部崩壊土は明瞭でない。



第97図　A 2 号窯跡

〔中軸線の方向〕　N－14°－W

〔残存規模〕　全体　－長さ 2.6m　　最大幅 1.3m　　最大深 0.2m

焼成室－長さ 1.6m　　床面幅 0.7～0.8m

燃焼室－長さ 1.0m　　床面幅 1.0m

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 99 図 1～4・6・7）

1～4 は皿状の器形である。1～3 は体部下位に稜をもち、稜から上は直線的に立ち上がる。いずれも底部に手持ちヘラケズリが施されており、2 ではそれが稜の部分まで及ぶことによって底部と体部の境が不明瞭になっている。4 は体部下端に弱いくびれをもち、その上は直線的である。底部及び体部下位に回転ヘラケズリが施されるが、底部中央の削り残し部分にヘラ切り痕が認められる。6・7 は底部破片で、6 は静止糸切り痕を残し、再調整が施されないもの、7 は底部中央に回転糸切り痕を残し、周縁が手持ちヘラケズリされるものである。

高台付坏（第 98 図 5）

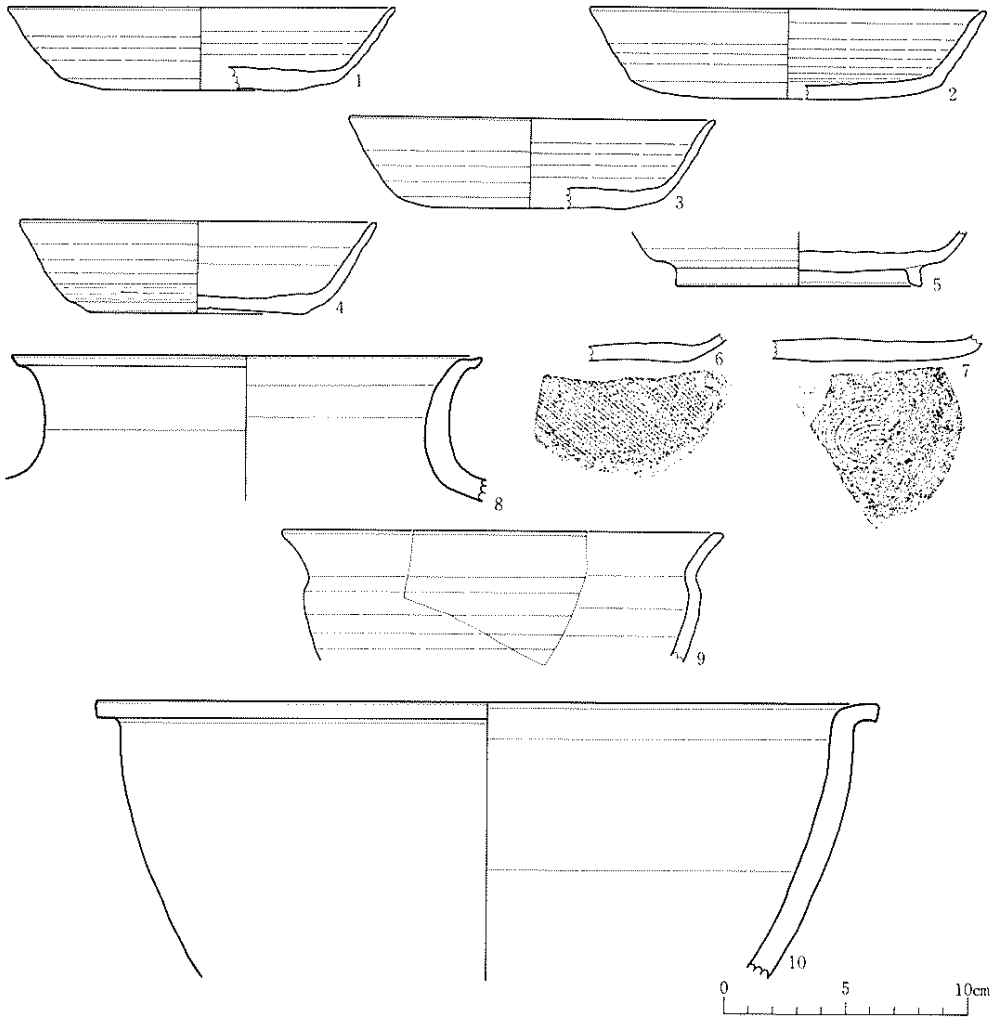
体部上半が欠損しており形状は明確でない。体部下端が弱く屈曲するもので、高台は断面が方形である。底部に回転ヘラケズリが施されている。

甕（第98図8）

口頸部が長く、大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上端をわずかに引き出している。

鉢（第98図9・10）

頸部でくびれて、口縁部が短く外傾するもの（9）と体部から頸部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反するもの（10）とがある。9は口縁端部上端が平坦に仕上げられ



No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	不明	須恵器	坏	ⅠHⅱ	15.8	――	3.4	A2-1	40-1
2	灰原	須恵器	坏	ⅠHⅱ	16.2	――	3.7	A2-3	40-2
3	灰原	須恵器	坏	ⅠHⅱ	15.0	――	3.7	A2-2	
4	不明	須恵器	坏	ⅠEⅱ	14.6	8.8	3.8	A2-4	40-3
5	灰原	須恵器高台付坏			――	10.2	――		

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
6	灰原	須恵器	坏		――	――	――	A2-5	
7	灰原	須恵器	坏		――	――	――	A2-6	
8	灰原	須恵器	甕	Ⅱ	19.3	――	――	A2-9	
9	灰原	須恵器	鉢	Ⅰ	18.0	――	――	A2-8	
10	灰原	須恵器	鉢	Ⅱ	32.1	――	――	A2-10	

第98図　A 2号窯跡出土遺物

ている。10 は小さな口縁帯がつくり出されている。

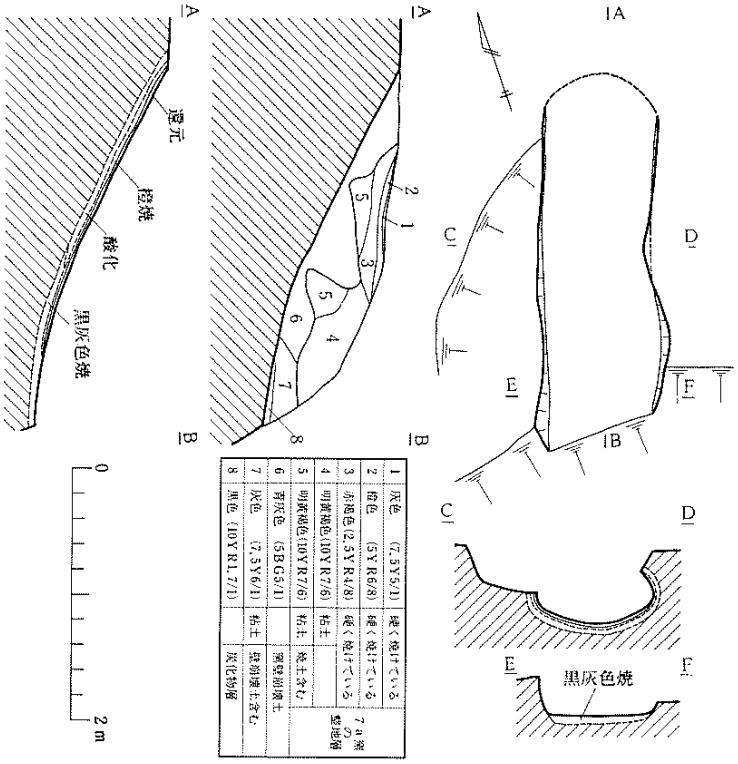
A7b号窯跡

A7a号窯跡の下部から軸方向をわずかに斜行した状態で発見された。燃焼室と焼成室の一部が残存する。

〔焼成室〕　床面は中央部がややくぼんでいるが、平坦で軽く弓なり状に湾曲しながら高くなり、その傾斜は 15～26°である。側壁は内弯している。床面・側壁とも青灰色もしくは橙色に硬く焼けている。

〔燃焼室〕　南半は削平されている。焼成室との境は平面的に違いはないが、床面の傾斜と焼け方が異なる。床面は水平に近く、平坦でわずかに浅く皿状にくぼんでいる。側壁は丸みをもって立ち上がり、その上方は直立気味である。床面は黒灰色に軟らかく、側壁は青灰色に硬く焼けている。

〔堆積土〕　床面上に厚さ 5 ㎝程の炭化物層が堆積しており（No.8）、燃料残滓と考えられる。窯跡内堆積土は 2 枚あるが（No.6・7）、いずれも窯壁の崩壊土をブロック状に含んでいる。



第99図　A7b号窯跡

窯壁ブロックは焼成室側に多く、燃焼室側に少ない。

〔中軸線の方向〕　N－19°－E

〔残存規模〕　全体　－長さ 2.8m　　最大幅 1.0m　　最大深 0.6m

焼成室－長さ 2.2m　　床面幅 0.9m

燃焼室－長さ 0.6m　　床面幅 0.8m

〔出土遺物〕　須恵器坏・甕が出土しているが、いずれも小破片で全体の器形が判明するものはない。

4．瓦窯跡の特徴

瓦窯跡は 7 基検出されている。以下その特徴を記述するが、出土瓦については各窯とも特徴が同様であり、ここでは観察結果を表記するにとどめ、詳細は硯沢窯跡のものとともに考察の項に含めている。

A1 号窯跡

煙道部分は削平されていたが、焼成室・燃焼室などが残存しており、窯跡群の中では最も保存が良好である。全体の形は砲弾状で、焼成室は上方に向かって幅が狭まる。

〔焼成室〕　床面は平坦で、直線的に先端に向かって延び、約 21°傾斜する。側壁は丸みをもちながら直立ぎみに立ち上がっている。上半部は不明である。床面には焼台と思われる丸瓦が中軸線に直交して整然と列を成して並べられている。一部ずりおちて原位置から動いているものもあるが、20～25 ㎝間隔で並べられ、確認できた焼台列は 9 列である。その上には平瓦が凸面を上にして数個体認められた。この平瓦は完形品に近いもの・破損品の両者がある。また、平瓦の大きさの 2 枚分がちょうど焼成室の幅と一致する。これが焼台の一部なのかあるいは製品の取り残されたものなのかについては確証を得られなかった。床・側壁全体に青灰色に還元して硬く、側壁がより顕著である。

〔燃焼室〕　平面形は前端の丸い長方形である。焼成室との境に段が付き、燃焼室の床面が 20 ㎝低い。床面はわずかにくぼんでいる。西壁沿いを中心にして幅 20 ㎝、深さ 5～10 ㎝、断面「U」字状の排水溝があり、前庭部まで延びている。排水溝上部には丸瓦が架構されている。その方法は瓦の葺き方と同じで、丸瓦の玉縁部に後端部を重ねて配列している。燃焼室床面全体には平瓦が凸面を上にして敷き並べられている。床・壁面とも青灰色に還元し、硬い。排水溝内は焼けていない。

〔堆積土〕　燃焼室床面・平瓦敷の上部には炭化物・灰の層が厚さ 5 ㎝程認められた（No.12）。その上には 11 枚の層が堆積しており、天井部・窯壁の崩壊土と自然流入土が互層あるいは混在

したかたちで認められる。数次にわたって壁・天井が崩落し、その過程で周囲の土砂が流入したものと思われる。崩落した窯壁をみると、焼成室に還元状態の硬いブロックや酸化状態のブロックが多量にみられるのに対し、燃焼室では窯壁のブロックは少ない。なお、窯壁ブロックにはスサ入り粘土の含まれる部分がある。

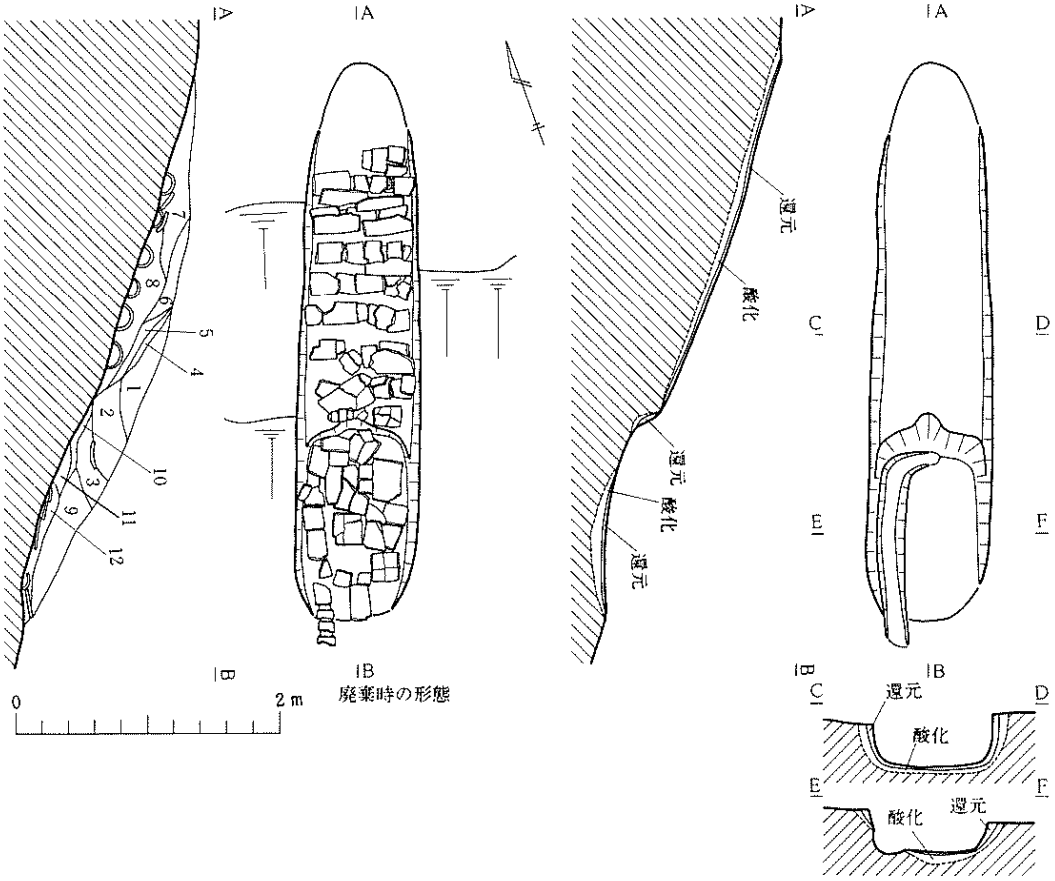
〔中軸線の方向〕　N－10°－W

〔残存規模〕　全体　－長さ 4.2m　　最大幅 0.9m　　最大深 0.6m

焼成室－長さ 2.8m　　床面幅 0.8m

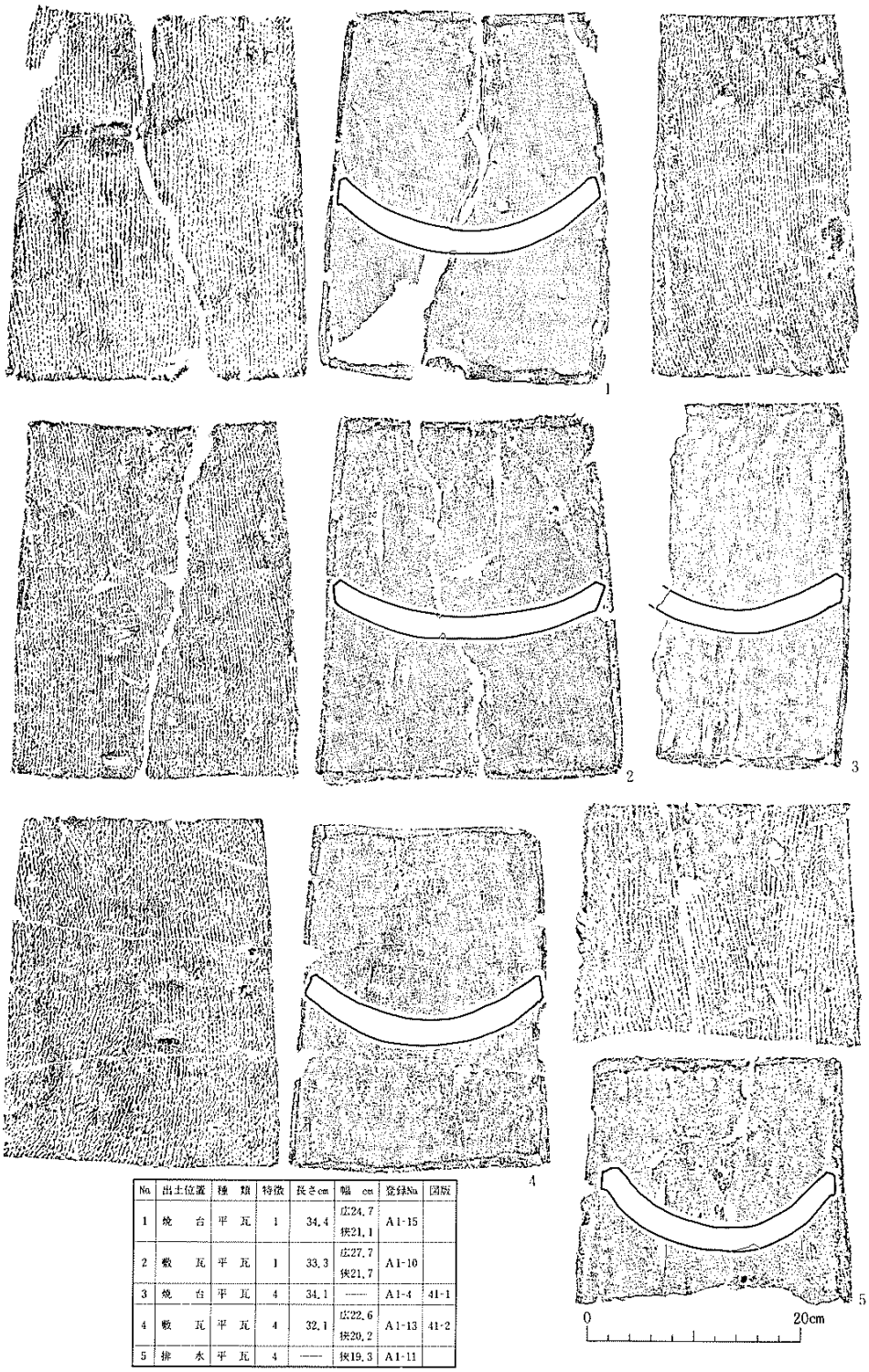
燃焼室－長さ 1.4m　　床面幅 0.8m

〔出土遺物〕　窯内堆積土出土及び内部施設に用いられた平瓦・丸瓦がある。



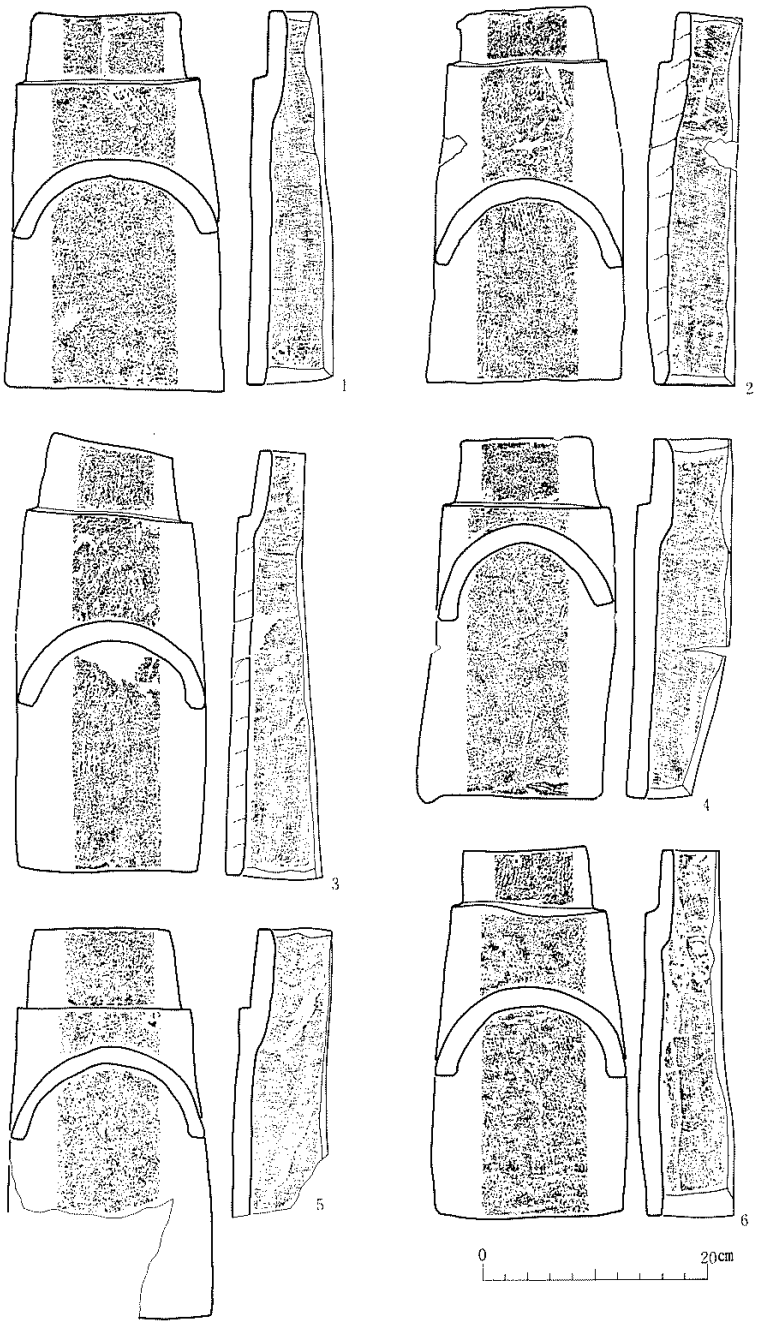
No	大別	土色	土性	備考
1	窯壁崩壊土	にぶい赤褐色(5YR4/3)		窯壁ブロックと流入土（シルト）
2		青灰色　(5B6/1)		窯壁ブロック
3		赤褐色　(5YR4/8)	粘土	
4		赤褐色　(5YR4/8)		焼土
5		明黄褐色 (10YR6/9)	粘土	窯壁の熱を受けない部分
6		赤褐色　(5YR4/8)		焼土
7	窯壁崩壊土	にぶい赤褐色(5YR4/4)		窯壁ブロックと堆積土（シルト）
8		にぶい赤褐色(5YR4/3)と青灰色(5B6/1) の窯壁ブロック		
9		暗褐色　(10YR3/3)	粘土	炭化物に焼土が混入
10		明赤褐色(2.5YR5/8)		焼土ブロック
11		青灰色　(5B6/1)		窯壁ブロック
12	炭化物・灰層			

第100図　A Ⅰ号窯跡



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	焼　台	平　瓦	1	34.4	広24.7 狭21.1	A1-15	
2	敷　瓦	平　瓦	1	33.3	広27.7 狭21.7	A1-10	
3	焼　台	平　瓦	4	34.1	——	A1-4	41-1
4	敷　瓦	平　瓦	4	32.1	広22.6 狭20.2	A1-13	41-2
5	排　水	平　瓦	4	——	狭19.3	A1-11	

第101図　A Ⅰ号窯跡出土遺物(1)



No.	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	焼成室1層	丸瓦	33.2	広19.5 狭16.4	A1-12	
2	焼台	丸瓦	33.0	広17.2 狭14.1	A1-20	
3	焼台	丸瓦	38.0	広15.8 狭14.8	A1-18	42-2

No.	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
4	焼台	丸瓦	32.1	広16.4 狭14.8	A1-21	
5	排水	丸瓦	34.6	狭15.4	A1-36	
6	排水	丸瓦	32.7	広16.7 狭13.8	A1-32	42-3

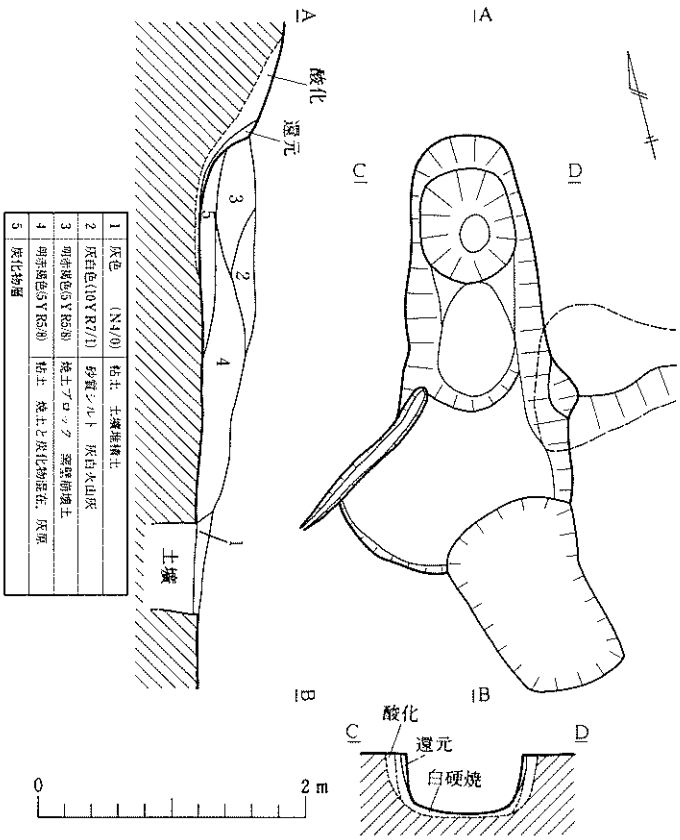
第102図　A1号窯跡出土遺物(2)

A3 号窯跡

焼成室の一部と燃焼室・前庭部が残存する。

〔焼成室〕　残存部はわずかで、床は約 21°傾斜しており、酸化して赤い。

〔燃焼室〕　前端の丸い長方形で、焼成室との境は高さ約 30 ㎝の段が付く。床面は奥壁側が楕円形の皿状にくぼんでおり（深さ 7 ㎝）、手前はほぼ平坦になっている。側壁は丸みをもって直立ぎみに立ち上がる。奥壁と奥壁に近い側壁上部は白色に焼け硬化している。他の部分は赤褐色に焼けている。



第103図　A 3 号窯跡

〔前庭部〕　「ハ」字状に開き、南側に傾斜している。前庭部の西端には焚口に始まり沢に向かって延びる排水溝がある（幅 10～15 ㎝、深さ 10 ㎝）。なお、東側の焚口部から前庭部にいたる部分はA2 号窯跡灰原の上に整地して築いている。

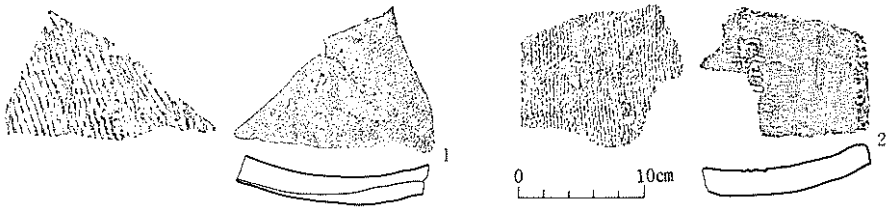
〔堆積土〕　燃焼室及び前庭部に残存する。燃焼室床面には厚さ 10～15 ㎝の炭化物層があり（No.5）、燃料残滓と考えられる。燃焼室から前庭部にかけては焼土と炭化物・灰が混在する明赤褐色土が堆積し（No.4）、窯壁のブロックはみられない。燃焼室奥壁寄りの部分には明赤褐色土の焼土ブロックが堆積し、窯壁・天井の崩壊したものと考えられる（No.3）。さらに、皿状にくぼんだ燃焼部堆積土最上部には灰白色火灰が堆積している（No.2）。この火山灰は鉄分を含み、いくぶん灰褐色化しているので、二次堆積したものかもしれない。

〔中軸線の方向〕　N－14°－E

〔残存規模〕　全体　－長さ 3.6m　　最大深 0.4m

焼成室－長さ 0.3m

燃焼室－長さ 2.1m　　床面幅 0.6～0.7m、最大幅 0.9m



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	焼成室	平　瓦	～	――	――	A3-2	
2	3・4号窯周辺	平瓦	1	――	――	A3-1	43-1

第104図　A 3 号窯跡出土遺物

前庭部－長さ 1.2m　幅 1.8m

〔出土遺物〕　窯内堆積土から平瓦・丸瓦が出土している。2 には凹面にヘラ書きの文字がみられる。

A4 号窯跡

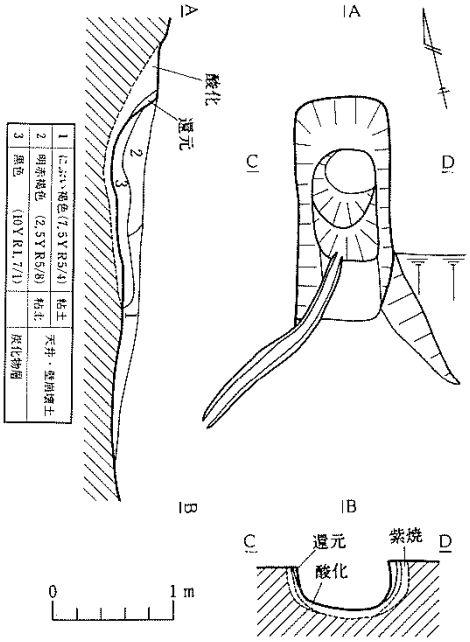
燃焼室・前庭部が残存し、その他は削平されて失われている。

〔燃焼室〕　端部の丸い長方形で、焼成室との境は床面に段が付いており、燃焼室が約 45 ㎝低い。床は全体にくぼんでいるが、奥側が特に深くなっている。側壁はわずかに内弯している。焚口に近い部分から前庭部左壁沿いに断面「U」字状の排水溝（幅 20 ㎝、深さ 6 ㎝）が走る。奥壁と側壁上半部は青灰色に焼け、硬化している。他は赤褐色に焼け、焚口に近い側壁は赤黒く焼けている。

〔前庭部〕　「ハ」字状に開いた平坦面で、わずかにくぼんでいる。

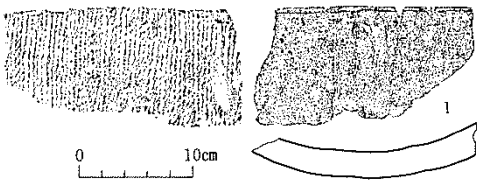
〔堆積土〕　3 層認められ、燃焼室床面上には炭化物層があり（No.3）、燃料残滓と考えられる。その上には天井・窯壁崩壊土が堆積している。

〔中軸線の方向〕　N－14°－E



1	にぶい褐色（7.5 Y R5/4）	粘土	
2	明赤褐色（2.5 Y R5/8）	粘土	天井・壁崩壊土
3	黒色（10 Y R1.7/1）		炭化物層

第105図　A 4 号窯跡



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	燃焼室	平　瓦	－	――	――	A4-3	

第106図　A 4 号窯跡出土遺物

〔残存規模〕　全体　－長さ 2.4m　　最大深 0.3m
　　燃焼室－長さ 1.8m　　床面幅 0.6～0.7m　　最大幅 0.8m
　　前庭部－長さ 0.6m　　幅 1.8m
〔出土遺物〕　窯内堆積土から平瓦・丸瓦が出土している。

A5 号窯跡

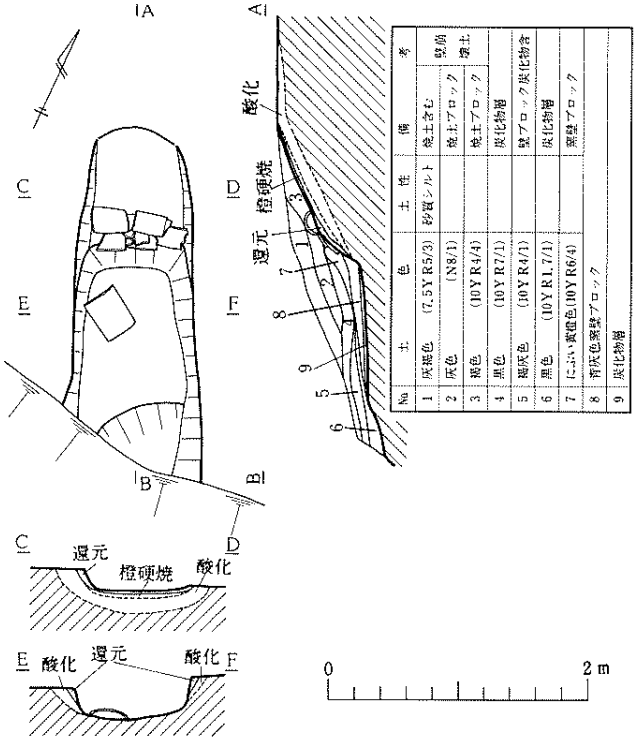
焼成室の一部と燃焼室・前庭部が残存している。

〔焼成室〕　床面は約 23°傾斜し、側壁は丸みをもちながら立ち上がる。前端には中軸と直交する焼台丸瓦列が確認された。その下方部は平瓦を支えに使用して固定している。床・側面とも青灰色に焼け、硬化している。

〔燃焼室〕　隅丸の長方形で、焚口の方向に開いている。焼成室との境は床面に段が付き、燃焼室が約 20 ㎝低い。床面は平坦で、中央左側に平瓦が一枚貼り付いている。側壁は丸みをもってほぼ垂直に立ち上がる。壁は青灰色に焼け、硬化しているが、焚口に近い部分では暗赤褐色になっており、床面は焼けた痕跡が明確でない。

〔前庭部〕　燃焼室から壁がそのまま延びている。床はくぼみ、壁は外傾している。

〔堆積土〕　堆積土は 9 枚に分かれ、崩壊窯壁ブロック層（No.1～3・5・7・8）と炭化物層（No4・6・9）が互層になっている。炭化物層が原位置のままの燃料残滓なのかどうか必ずしも明確でない。各炭化物層の下面が焼け面になっていないこと、また、均一な面を成していないことなど判断が難しい。No.9 層下の床面も硬い面を成しておらず、やや軟らかい。燃焼室の床面については疑問が多く、発掘調査の段階で解明することができなかった。



No	土色	土性	備考
1	灰褐色（7.5YR5/3）	砂質シルト	焼土含む
2	灰色（N8/1）	焼土ブロック	壁崩
3	橙色（10YR4/4）	焼土ブロック	焼土
4	黒色（10YR7/1）	炭化物層	
5	褐灰色（10YR4/1）	壁ブロック炭化物含	
6	黒色（10YR1.7/1）	炭化物層	
7	にぶい黄橙色（10YR6/4）	崩壊ブロック	
8	青灰色崩壊ブロック		
9	炭化物層		

第107図　A 5 号窯跡

No.	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
1	燃焼室底面	平瓦	1	33.3	広24.5 狭21.0	A5-1	43-3
2	焼台	平瓦	4	——	——	A5-18	

No.	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登録No.	図版
3	焼台	平瓦	4	——		A5-3	43-2
4	焼成室	平瓦	4	——	——	A5-2	

第108図　A 5 号窯跡出土遺物(1)

〔中軸線の方向〕　N－25°－W

〔残存規模〕　全体　－長さ 2.7m　　最大深 0.3m

焼成室－長さ 0.9m　　床面幅 0.6m、最大幅 0.9m

燃焼室－長さ 1.2m

床面幅 0.5～0.8m、最大幅 1.0m

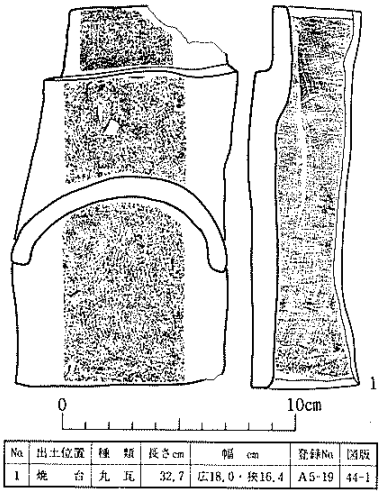
前庭部－長さ 0.6m　　幅 1.1m

〔出土遺物〕　窯内堆積土出土及び内部施設に用いられた平瓦・丸瓦がある。

A6 号窯跡

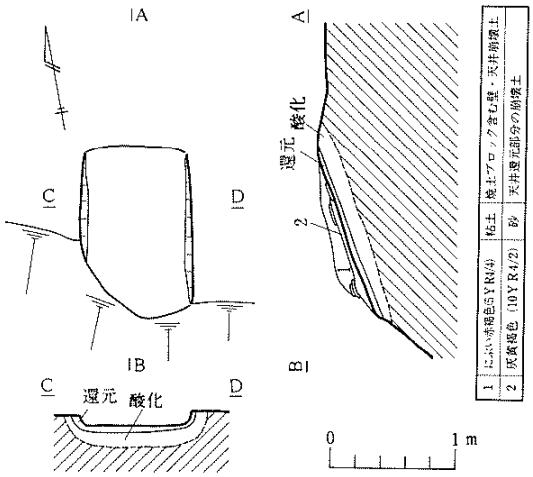
焼成室の一部のみ残存していた。

〔焼成室〕　床面は平坦で直線的に約 21°傾斜している。側壁は丸みをもって立ち上がる。床面・側壁は白っぽい橙色に硬く焼けている。



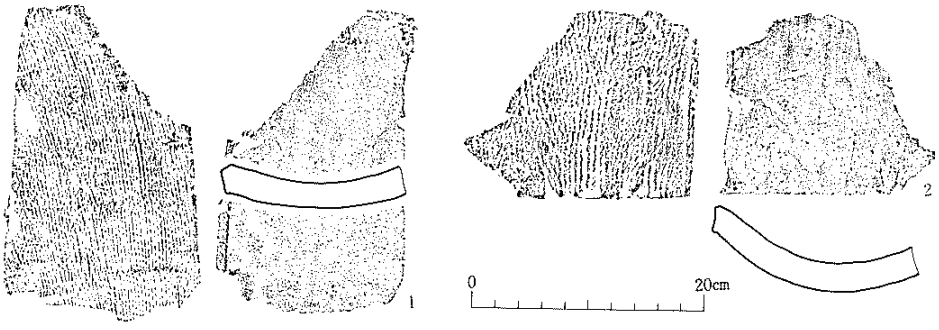
No	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	焼　台	丸　瓦	32.7	広18.0・狭16.4	A5-19	44-1

第109図　A 5 号窯跡出土遺物(2)



1	にぶい橙色5YR7/4	粘土ブロック含む壁・天井崩壊土
2	灰黄褐色（10YR4/2）	砂　粘土　天井壁部分の崩壊土

第110図　A 6 号窯跡



No	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	焼成室	平　瓦	4	――	――	A6-1	

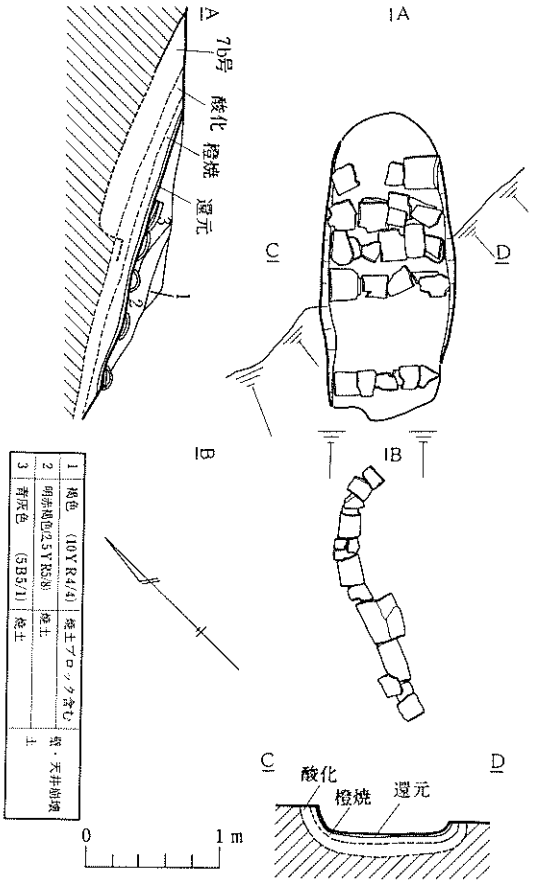
No	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	焼成室	平　瓦	3	――	――	A6-5	

第111図　A 6 号窯跡出土遺物

〔残存規模〕　長さ　　1.4m
　　床面幅　　0.8m
　　最大幅　　0.9m
　　最大深さ　0.2m
〔出土遺物〕　窯内堆積土から平瓦・丸瓦が出土している。

A7ａ号窯跡

焼成室と燃焼室の一部が残存する。焼成室と燃焼室との境付近は水田造成時の削平によって失われ、燃焼室も湧水のため排水溝上配列瓦の調査に止まった。燃焼室は粘土層に築かれ、極めて軟らかく、原形を留めていない。また、A7ｂ号窯跡と重複しており、その部分ではA7ｂ号窯跡のくぼみに土を入れ、整地してから築いている。



第112図　A7ａ号窯跡

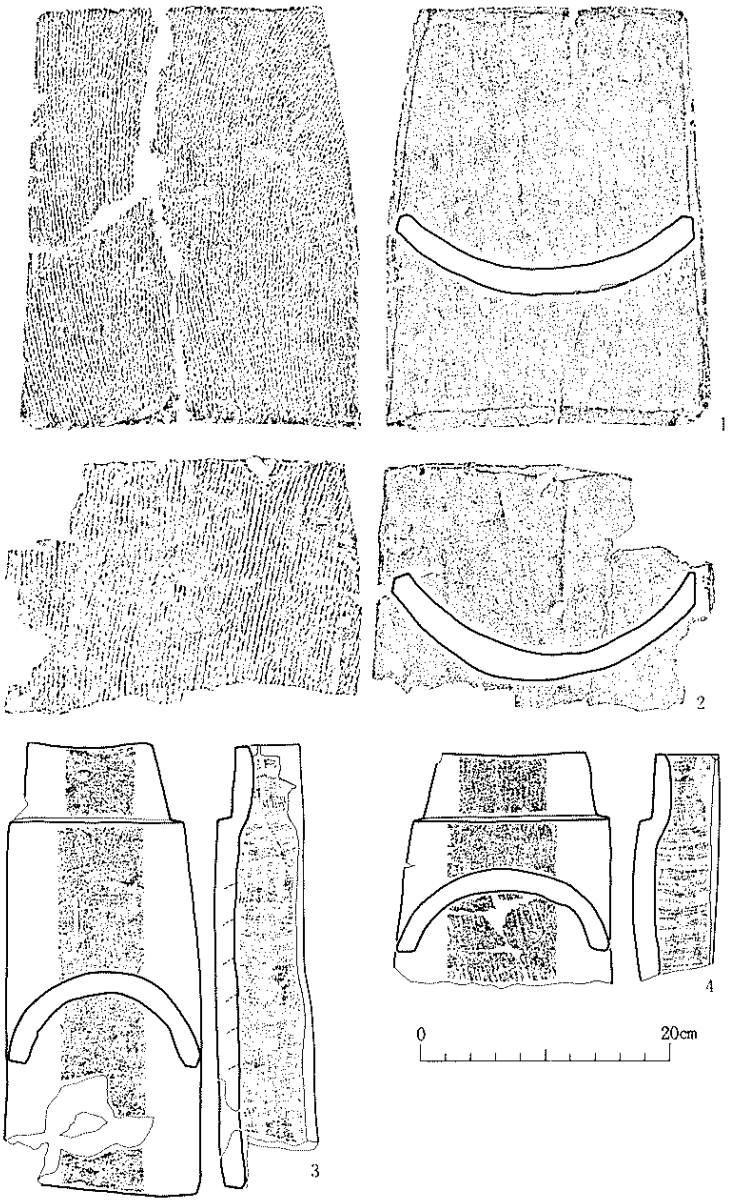
〔焼成室〕　床面は平坦で、直線的に約16°傾斜している。側壁は丸みをもって立ち上がる。床面には中軸と直交して瓦焼台列が並んでおり、5 列確認できた。各焼台列の間隔は20～25㎝である。使用されている瓦は平瓦と丸瓦の大小破片であり、いずれも堤状となるように単独もしくは重ね合わせて配列されている。しかし、A1 号窯跡ほど整然としたものではなかった。なお、焼台のなかには軒平瓦が一点含まれていた。床面・側壁は青灰色に硬く焼けている。

〔燃焼室〕　排水溝瓦列は燃焼室奥壁直下と推定される部分から始まり、前庭の方向に「S」字状に延びている。瓦列は丸瓦を主体とし、一部平瓦も使用している。丸瓦の玉縁部分に後端部分や平瓦の凹面を重ね合わせることによって配列している。

〔中軸線の方向〕　N－41.5°－E

〔残存規模〕　焼成室－長さ 2.3m　　床面幅 0.9m、最大幅 1.0m　　深さ　15㎝

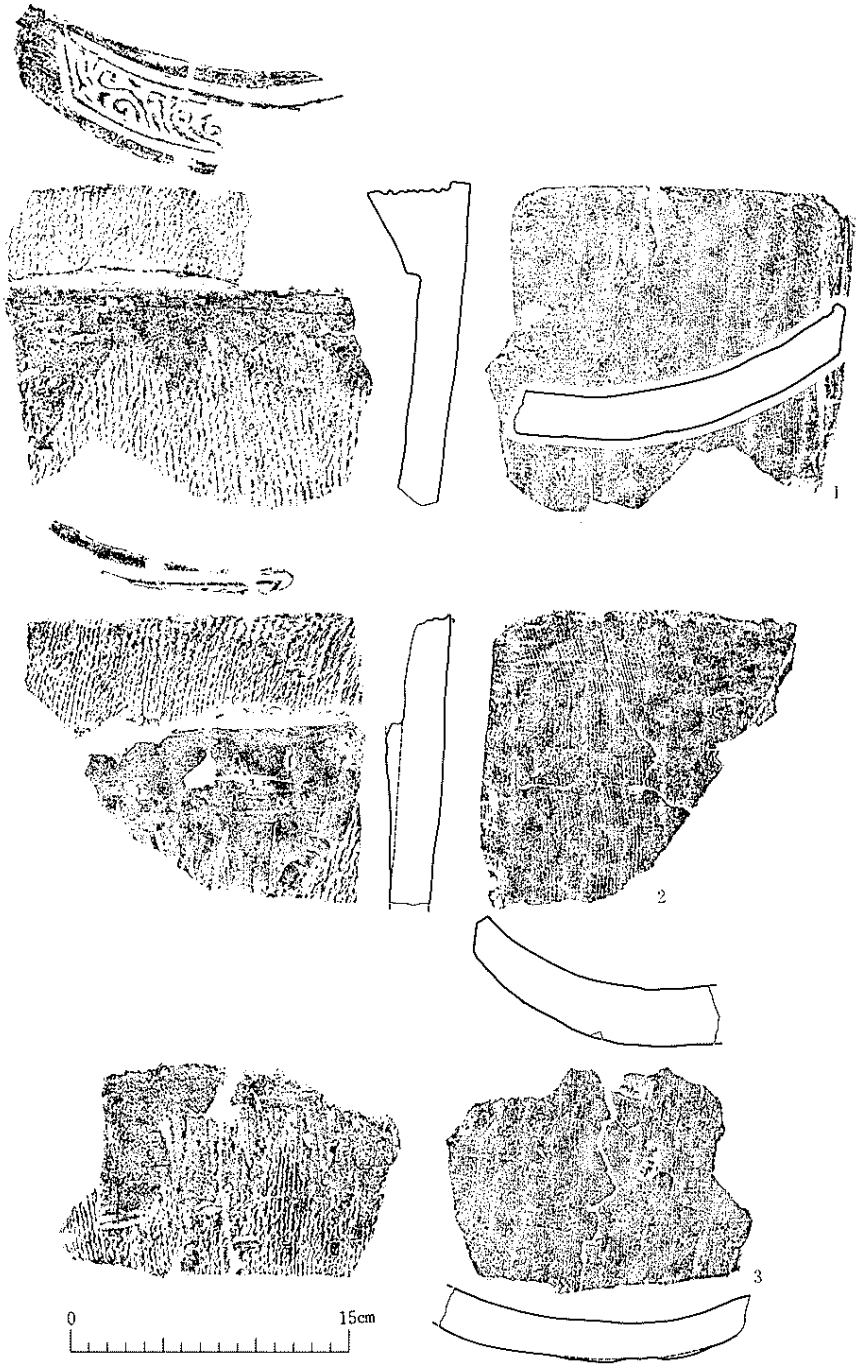
〔出土遺物〕　窯内堆積土出土及び内部施設に用いられた軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	排　水	平　瓦	2	33.4	広24.5 狭20.5	A7-3	44-5
2	焼　台	平　瓦	2	——	狭22.5	A7-5	

No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
3	排　水	丸　瓦	—	35.4	狭14.0	A7-42	45-1
4	焼成室	丸　瓦	—	——	狭16.0	A7-41	

第113図　A7a号窯跡出土遺物(1)



No	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	焼　台	軒平瓦	――	――	A7-47	44-2
2	焼　台	軒平瓦	――	――	A7-2	44-4

No	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
3	排　水	軒平瓦	――	――	A7-6	44-3

第114図　A7a号窯跡出土遺物(2)

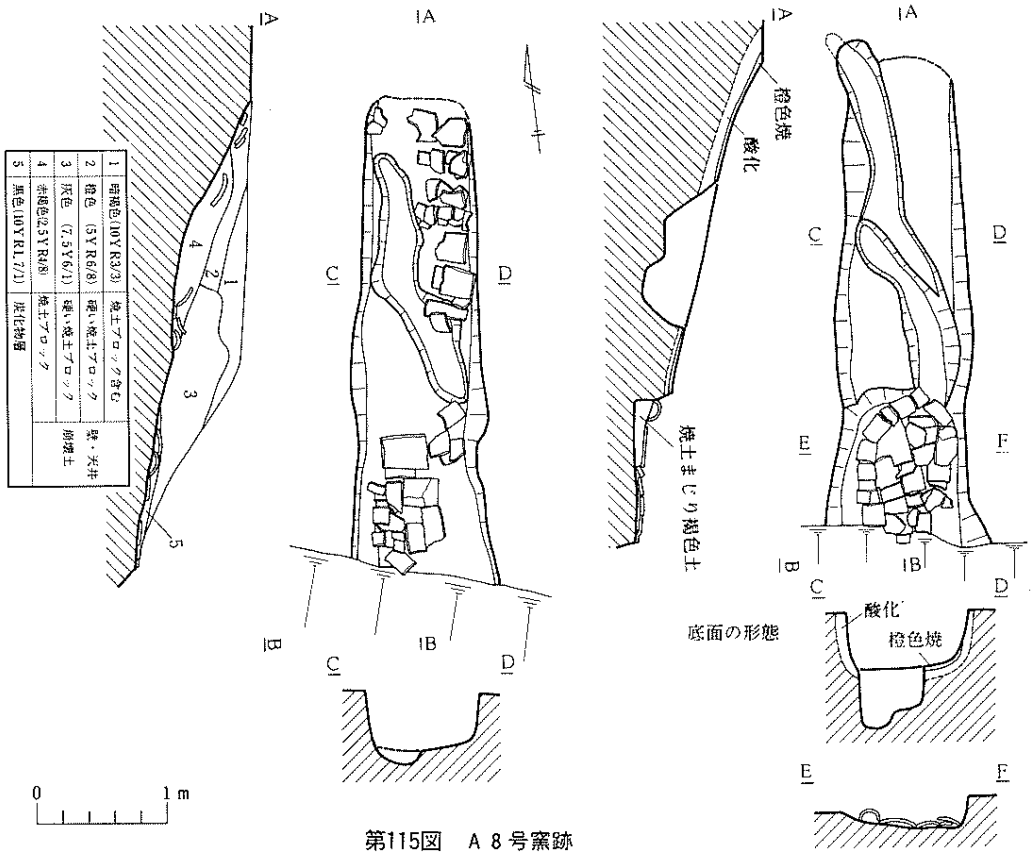
A8 号窯跡

焼成室と燃焼室が残存し、前庭部・焼成室上部は削平されている。

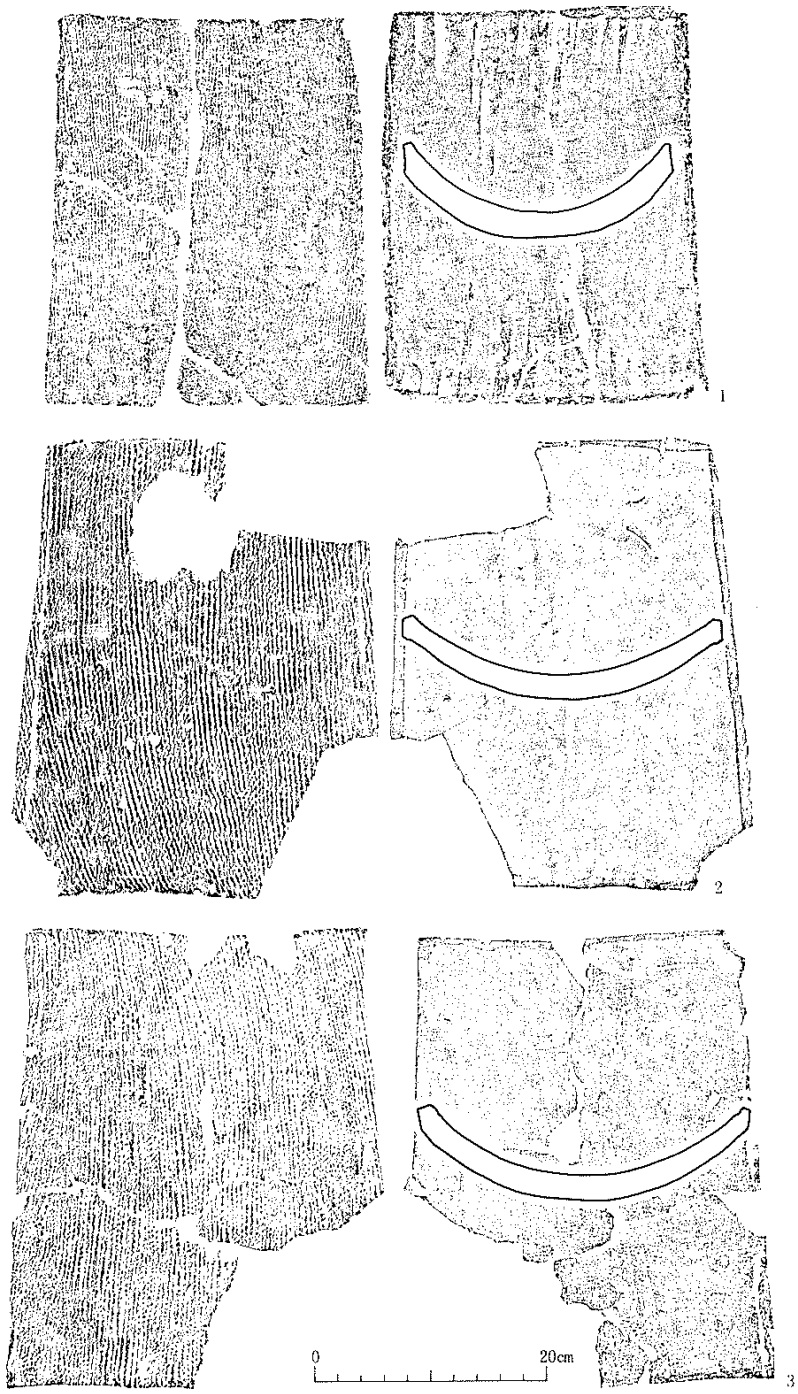
〔焼成室〕　床面は平坦で、直線的に約 13 ° 傾斜する。側壁は丸みをもって立ち上がり、上方は直立ぎみである。床面には焼古瓦列が 7 列残っている。この焼古瓦列は丸瓦と平瓦を使用し、中軸に直交させる形で並べ、列の間隔は 20～30 cmとなっている。床面・側壁とも橙色に、一部青灰色に硬く焼けている。

〔燃焼室〕　床面は上下 2 枚の面がある。両面とも瓦敷きである。焼成室との境はわずかにくびれ、前庭に向かって開く。下の床面では高さ 15 cmの段が付く。上の床面は平坦で、上下床面ともわずかに傾斜する。側壁は丸みをもって立ち上がり、上方は直立ぎみである。敷かれている瓦は両床面とも平瓦が大部分で、下の床面の方が密接して整然としている。床面・側壁とも焼けた痕跡は顕著でない。

〔排水溝〕　焼成室・燃焼室の床面下には断面「U」字状の排水溝がある。幅 20～40 cm、深さ 20～40 cmで、焼成室を曲折しながら走り、燃焼室左側壁を経て前庭方向に至る。焼成室ではこ



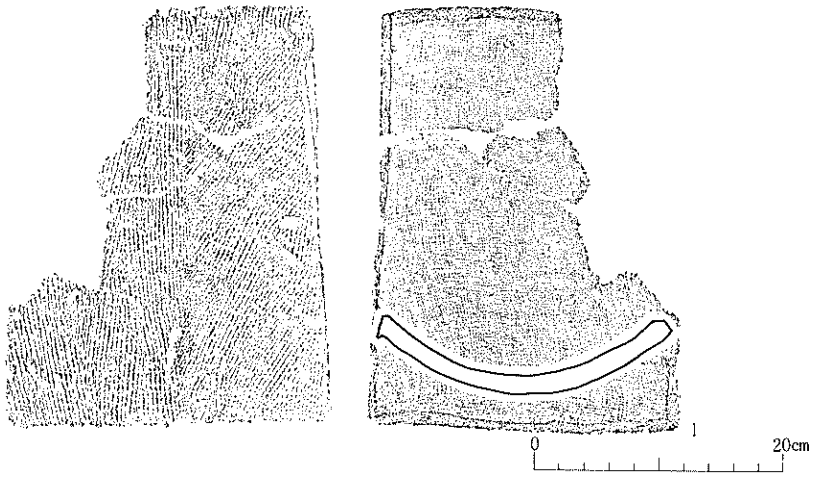
第115図　A 8 号窯跡



No	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	焼　台	平　瓦	2	34.0	広22.0 狭20.5	A8-17	46-1
2	焼　台	平　瓦	4	38.7		A8-20	46-2

No	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No	図版
3	暗渠＋焼台	平　瓦	1	39.1	狭25.0	A8-15	47-1

第116図　A 8 号窯跡出土遺物(1)



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	焼成室	平　瓦	3	34.1	広22.6	A8-12	

第117図　A 8 号窯跡出土遺物(2)

の溝底面に段の付くところもあり、これが燃焼室の上下床面と対応するものと考えられるが、確証は得られなかった。また、焼成室の排水溝の上には焼台瓦列の一部が残っていること、また、溝中から焼台に使用されたと確定される瓦が出土したことから、天井は崩れているものの、暗渠であったものと考えられる。燃焼室では天井として丸瓦が架けられている。主に玉縁部分に後端部を重ね合わせて整然としている。燃焼室の暗渠排水溝は上下 2 面の床面に共用されている。

〔堆積土〕　燃焼室の上の床面には約 5 ㎝の厚さで炭化物層が認められる。燃料残滓と考えられる。その上には窯壁・天井崩壊土ブロックが堆積している。

〔中軸線の方向〕　N－6°－E

〔残存規模〕　全体　－長さ 3.7m　　最大深 0.4m

焼成室－長さ 2.5m　　床面幅 0.8m、最大幅 1.1m

燃焼室－長さ 1.2m　　床面幅 0.7～0.9m、最大幅 1.2m

〔出土遺物〕　窯内堆積土出土及び内部施設に用いられた軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。

5．炭窯跡の特徴

A9 号窯跡

前庭部の一部が削平されているがその他は残存している。

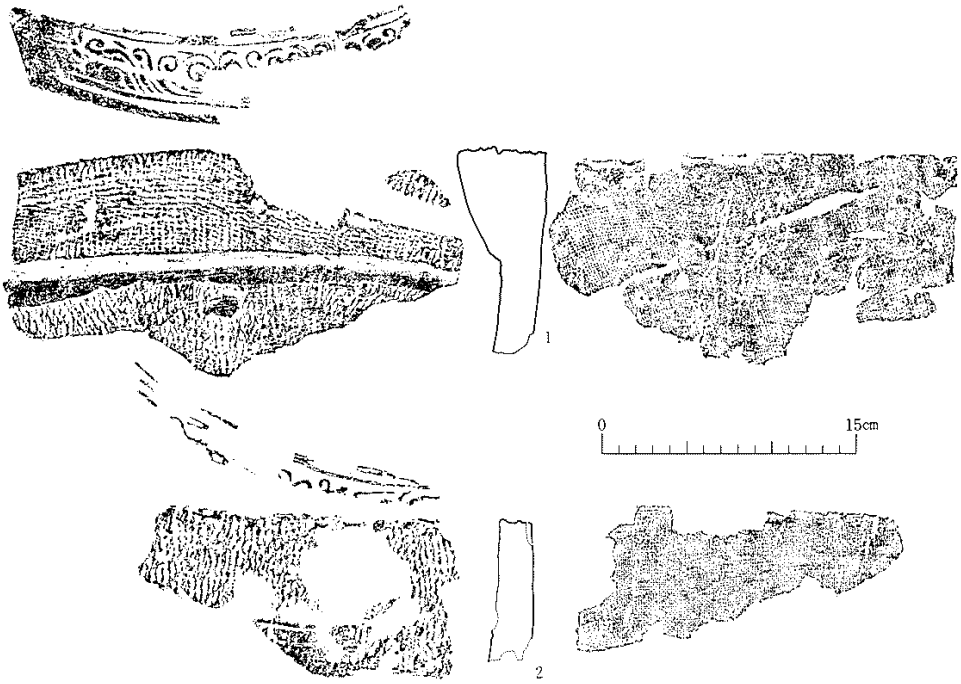
〔炭化室〕　平面形は円形に近いが奥壁は直線的で、焚口に向かってすぼまる。床は平坦で、

焚口に向かっていくぶん傾斜する。壁は垂直に立ち上がる。上部が内弯する部分もあり、地下

No	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No	図版
1	暗渠	丸瓦	32,7	広18,0 狭16,0	A8-9	45-5
2	焼成室	丸瓦	——	広16,2 狭14,7	A8-11	
3	焼成室	丸瓦	34,0	——	A8-24	

No	出土位置	種類	長さcm	幅 cm	登録No	図版
4	焼台＋暗渠	丸瓦	——	狭14,6	A8-13	
5	焼台	丸瓦	——	広17,0	A8-69	
6	暗渠	丸瓦	——	広16,2	A8-8	
7	盤	丸瓦	——	広20,6	A8-1	45-6
8	焼成室	丸瓦	——	広15,6	A8-23	

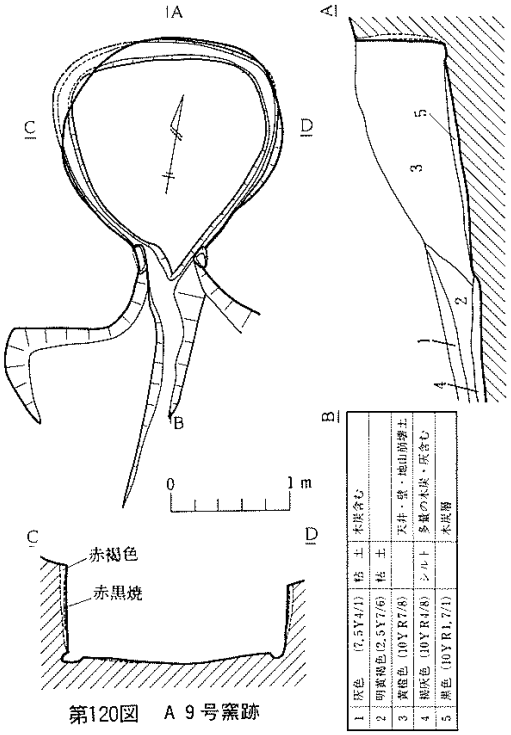
第118図　A 8 号窯跡出土遺物(3)



No.	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	戦　　瓦	軒平瓦	——	——	A8-79	45-2

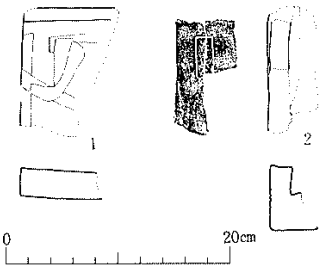
No.	出土位置	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
2	焼　　台	軒平瓦	——	——	A8-2	45-3

第119図　A 8 号窯跡出土遺物(4)



1	灰色　(2.5Y4/1)	粘　土	木炭含む
2	明黄褐色(2.5Y7/6)	粘　土	
3	黄橙色 (10YR7/8)		天井・壁・地山崩壊土
4	褐灰色 (10YR4/8)	シルト	多量の木炭・灰含む
5	黒色 (10YR1.7/1)		木炭層

第120図　A 9 号窯跡



No.	出土位置	種　類	特徴	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	1　層	平　瓦	−	——	——	A9-2	47-2
2	1　層	不　明	−	——	——	A9-2	47-3

第121図　A 9 号窯跡出土遺物

式の構造と考えられる。壁面は赤黒色に焼けているが、床は顕著でない。壁沿いに排水溝が巡り、焚口部で１本となって前庭部外まで続く。幅 10～30 ㎝、深さ 5～10 ㎝である。

〔焚口部〕　平面形は「ハ」字状に開いており、両壁に食い込んでピットが認められる。

〔前庭部〕　焚口部手前から広がっている。床はほぼ平坦・水平で、壁は外傾している。

〔堆積土〕　炭化室床面上には木炭がみられ、その上に窯壁・天井・地山崩壊土が堆積している。

〔中軸線の方向〕　N－9.5°－W

〔規模〕　全体長　3.2m

炭化室－長さ 1.7m　幅 1.9m　深さ 0.7m

焚口部－長さ 0.7m　幅 1.2m　深さ 0.4m

前庭部－長さ 0.8m　現存幅 2.2m　深さ 0.3m

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。

B10 号窯跡

炭化室と焚口部から成る半地下式の炭窯と考えられる。

〔炭化室〕　隅丸の長方形で、床面は平坦であるが、若干焚口に向かって傾斜する。壁は外傾して低い。部分的に焼面が認められる。床面上に炭化物が堆積している。

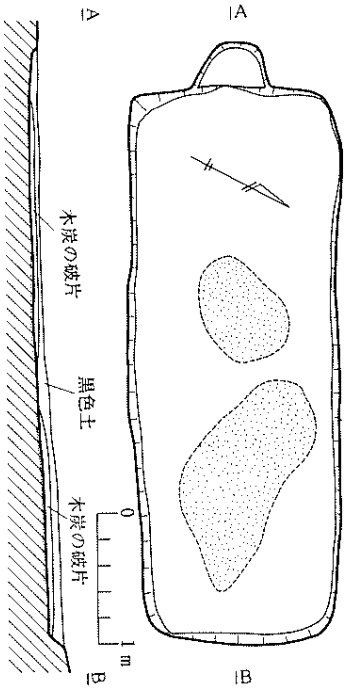
〔焚口部〕　小さな方形に張り出している。焼けた痕跡は顕著でない。

〔中軸線の方向〕　N－71.5°－E

〔規模〕　炭化室－長さ 4.3m　幅 1.6m　深さ 15 ㎝

焚口部－長さ 0.3m　幅 0.6m　深さ　7 ㎝

〔出土遺物〕　遺物は出土していない。



第122図　B 10号窯跡

6．竪穴住居跡の特徴

A1 号住居跡（A1 号土壙）

〔平面形・規模・方向〕　平面形は 3.5×2.7mの長方形で、カマドの向く長軸の方向はN－62°－Eである。

〔堆積土〕　壁沿いに地山崩壊土がみられ、その上に炭化物・焼土層と褐色土が互層になって堆積しており、中位に灰白色火山灰層が認められる。

〔壁〕　地山を壁としており、全体に平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は 20～35cm である。

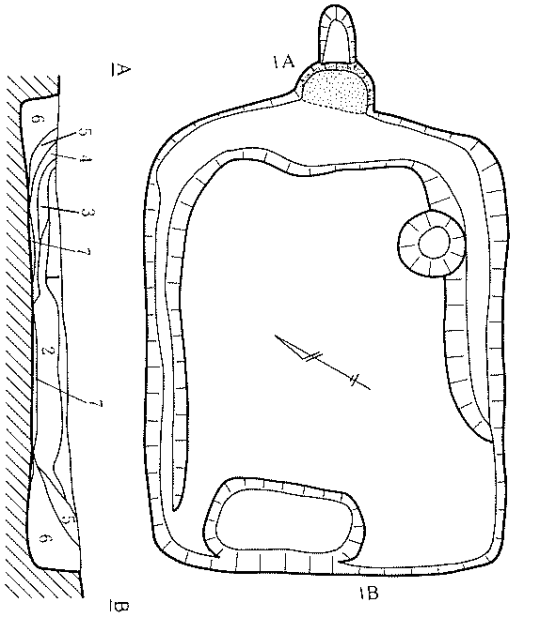
〔床面〕　平坦で、ほぼ水平である。床面上に粘土が貼り付いている。

〔柱穴〕　住居内のピットは周溝と重複する位置に１個検出されているだけで、柱穴は不明である。

〔周溝〕　西辺を除き、壁沿いに続く。幅は 30～40 cmと広いが、深さは 5～10 cmと浅い。

〔カマド〕　東壁中央に付設されている。本体は壁外に張り出している。半円状であり全体に焼けている。奥壁から 10cm の段が付いて煙道が短く延びる。

〔土壙〕　西壁に接して土壙が検出されている。貯蔵穴の可能性が考えられる。



1	褐色　(10Y R4/4)	シルト	
2	炭化物・焼土層と褐色土層の互層		
3	灰白色　(10Y R7/1)	シルト	灰白火山灰
4	にぶい黄褐色(10Y R5/4)	シルト	
5	褐色　(10Y R4/4)	シルト	凝灰岩粒含む
6	明黄褐色　(10Y R7/6)	シルト	地山崩壊土
7	灰白色　(5G Y8/1)	粘　土	

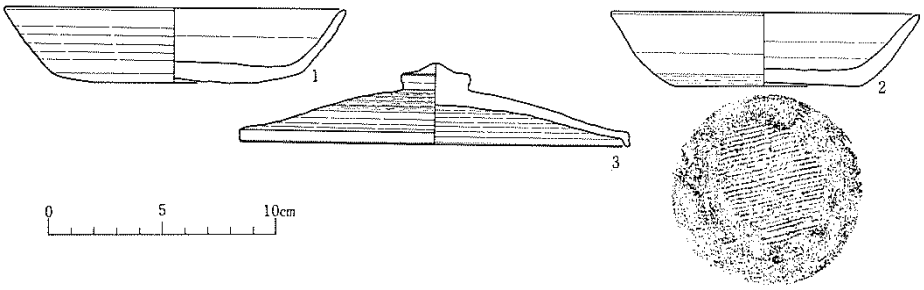
第123図　Ａ１号住居跡

〔出土遺物〕

須恵器

坏（第 124 図１・2）

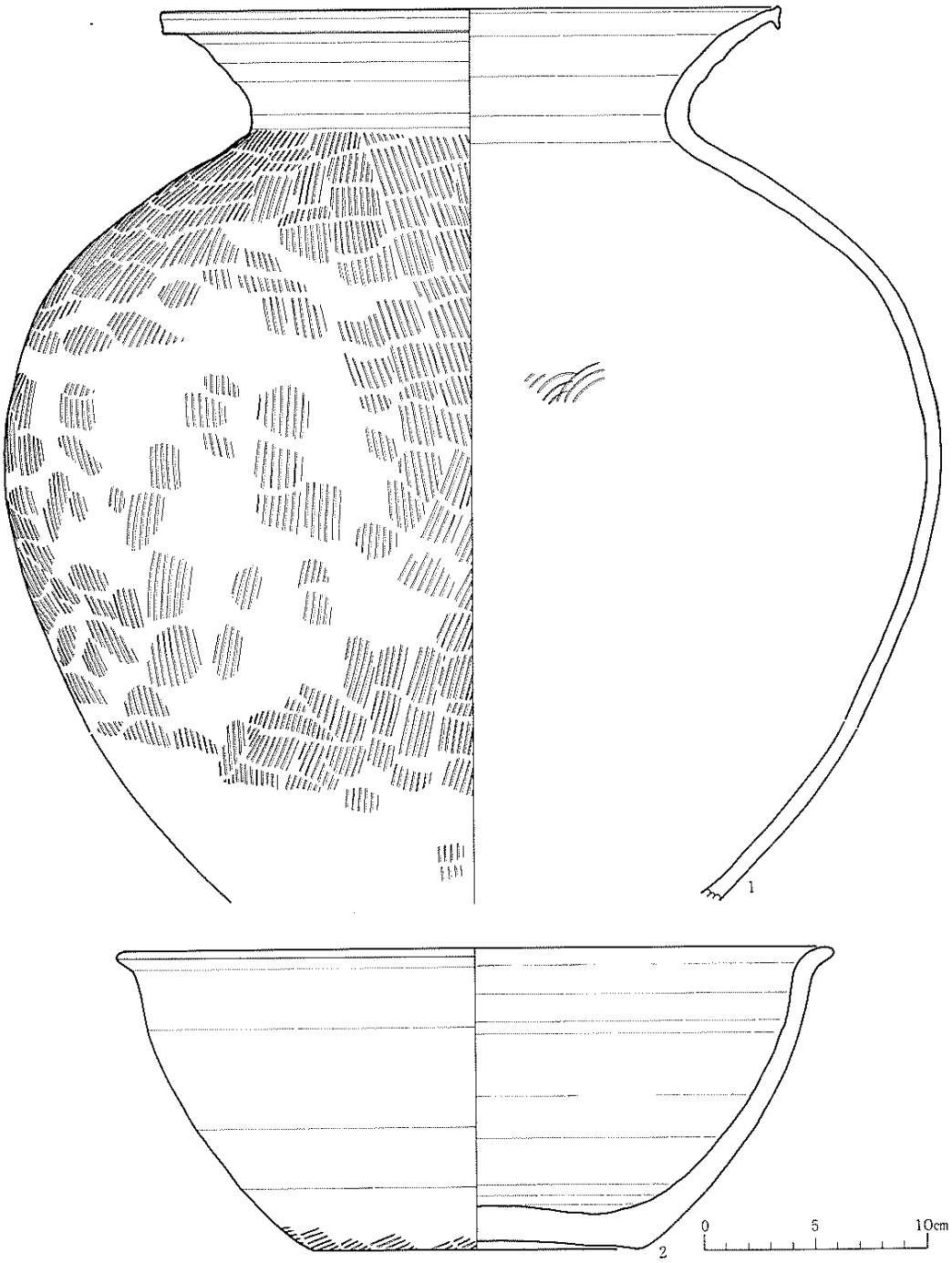
皿状のものである。1 は体部下位に稜をもち、稜から上は直線的になる。底部に手持ちヘラケズリが施される。2 は体部から口縁部まで変化なく直線的に立ち上がるもので、底部中央に静止糸切り痕を残し、底部周縁から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施される。



No.	層　位	種　別	分　類	口径cm	底径cm	器高cm	登 録 No.	図版No.
1	堆積土６層	須 恵 器 坏	ⅠEⅲ	15.0	——	3.3	Ａ１住-2	40-4
2	堆積土６層	須 恵 器 坏	ⅠHⅱ	13.6	8.4	3.2	Ａ１住-1	40-5

No.	層　位	種　別	分　類	口径cm	底径cm	器高cm	登 録 No.	図版No.
3	カ マ ド 脇	須 恵 器 蓋	ⅡA	17.2	——	3.6	Ａ１住-3	40-6

第124図　Ａ１号住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	分類	口径cm	体径cm	器高cm	登録No.	図版No.
1	堆積土6層	須恵器甕	II	27.8	42.1	——	A1住-5	40-8

No.	層位	種別	分類	口径cm	底径cm	器高cm	登録No.	図版No.
2		須恵器鉢	II	32.2	14.5	13.6	A1住-4	40-7

第125図　A1号住居跡出土遺物(2)

蓋（第 124 図 3）

天井部上半はやや丸みをもつが、下半はやや外反ぎみになるもので、口縁部は折れ曲がり、外面に縁帯がつくり出される。つまみは中央が突出する。天井部上半には回転ヘラケズリが施されている。

甕（第 125 図 1）

球形の体部から、口頸部が長く大きく外反し、端部外側に口縁帯をつくり出している。口縁帯は上下端を引き出している。

鉢（第 125 図 2）

体部下端から頸部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く仕上げられている。

7．瓦捨場と土壙群、溝の特徴

調査区西側の標高 61m以下の緩斜面で 24 基の土壙が検出された。土壙群の北半は流入した近世瓦と焼土の下部で確認された。

他の土壙と重複して形状・規模の不明なものもあるが、平面形は長方形・円形・楕円形とがあり、楕円形が多い。規模は特にまとまりがない。出土遺物の点で、近世瓦が多量に出土して瓦捨場と考えられる土壙群と遺物がほとんど出土しないものの 2 者がある。

① 瓦捨場－近世瓦が多量に出土する土壙－5 基（B1～5 遺構）

西側隅に集中している。平面形は楕円形と推定される。特にB1～3 遺構は重複しているため、個々の形状は判明しにくく、全体として 12×6mの土壙状になっている。壁は地山であり、急角度で立ち上がり、深さは 40～60 ㎝になる。

B1～5 遺構は壁から底面の北半にかけて比較的大きな平瓦が斜めに流れ込み、その上層には瓦片・窯壁・炭化物・焼土が混在して多量にみられる。なお、土壙内に熱を受けた痕跡は認められない。

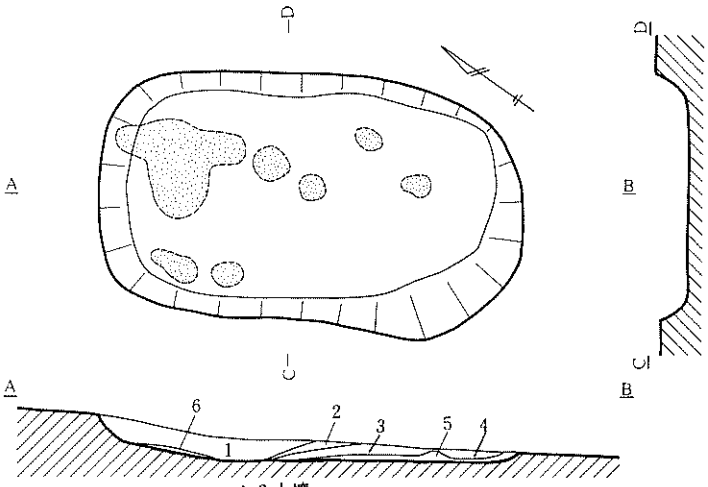
② 遺物がほとんど出土しない土壙－18 基（土壙 1～17、B5 遺構）

西斜面全体に分布する。平面形は楕円形のものが多い。深さは 10～60 ㎝で、20～40 ㎝のものが主である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面は皿状を呈する。このうち土壙 2 は底面に焼けた部分があり、木炭が堆積していることから、炭窯の可能性が考えられる。

③ 溝

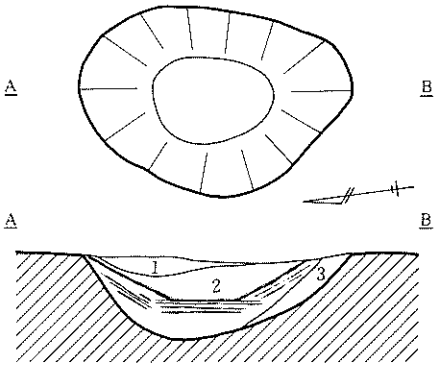
溝は 2 条検出されている。溝 1 は南に開いており、土壙 14・16 より新しく、炭窯（B10 号窯跡）・土壙 7 より古い。幅 1m、深さ 20 ㎝である。溝 2 は南北方向に延び、南側が削平されている。土壙 1 を切っている。幅 1.2m、深さ 35 ㎝である。いずれも性格は判断しがたい。

No	平面規模m	深さcm	平面形	備　　考
B1遺構	5 ×4.2	55	楕円形	B5遺構を切っている
B2遺構	5 ×3.2	60	楕円形	土壙14を切っている
B3遺構	3 ×2.9	55	円　形	B4遺構を切っている
B4遺構	2.2× ?	50	円　形	
B5遺構	2.6×2.2	25	楕円形	
土壙 1	3 × ?	55	?	灰白色火山灰が堆積
土壙 2	2.2×1.8	20	楕円形	B4遺構に切られている
土壙 3	2.4×2	60	楕円形	灰白色火山灰が堆積
土壙 4	2.8×2.3	30	楕円形	灰白色火山灰が堆積
土壙 5	3 ×2.6	85	楕円形	灰白色火山灰が堆積
土壙 6	2.6×1.7	10	楕円形	土壙5 に切られている
土壙 7	5.1×3.5	45	長方形	B10号窯に切られている、灰白色火山灰
土壙 8	1.9×1.7	45	円　形	
土壙 9	1.9×1.4	15	楕円形	土壙13を切っている
土壙10	2.2×2.2	20	円　形	土壙11に切られている
土壙11	2.4×1.8	20	楕円形	
土壙12	4.7×1.7	45	長方形	
土壙13	2.5×1.3	20	楕円形	
土壙14	3 ×2	12	楕円形	灰白色火山灰が堆積
土壙15	1.6×1.6	40	円　形	灰白色火山灰が堆積
土壙16	2.4×1.5	15	楕円形	灰白色火山灰が堆積
土壙17	? ×2.2	40	楕円形	
B6遺構	3.8×3.2	40	楕円形	土壙16を切り、B1遺構に切られている



A 2 土壙

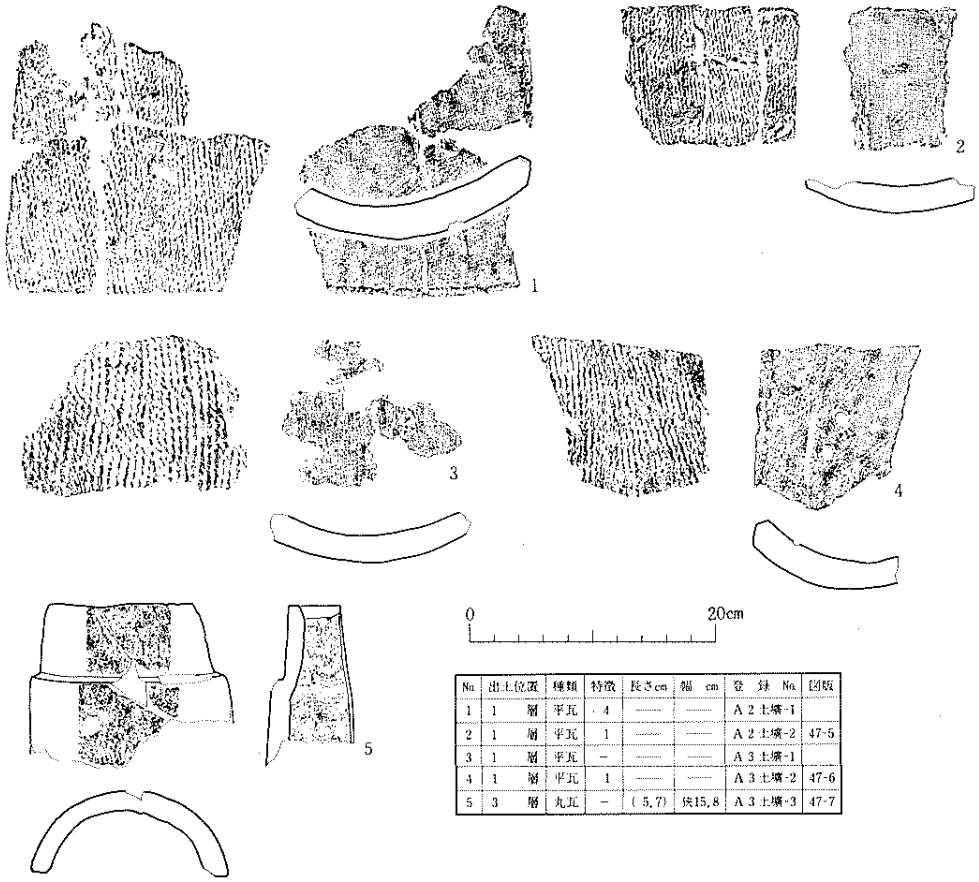
1：明黄褐色(10YR7/6)粘土　木炭を含む
2：木炭層
3：明黄褐色(10YR7/6)粘土
4：明黄褐色(10YR7/6)粘土　焼土木炭含む
5：木炭層
6：木炭層



A 3 土壙

1：黒褐色(10YR3/2)シルト　木炭含む
2：灰白色(7.5YR8/2)シルト　灰白火山灰
3：褐色(7.5YR5/6)シルト　焼土木灰含む

第126図　土壙



No	出土位置	種類	特徴	長さcm	幅 cm	登 録 No.	図版
1	1 層	平瓦	4	——	——	A 2 土壙-1	
2	1 層	平瓦	1	——	——	A 2 土壙-2	47-5
3	1 層	平瓦	−	——	——	A 3 土壙-1	
4	1 層	平瓦	1	——	——	A 3 土壙-2	47-6
5	3 層	丸瓦	−	(5.7)	広15.8	A 3 土壙-3	47-7

第127図　A 2・3号土壙出土遺物

〔瓦捨場出土遺物〕

大沢窯跡から出土した近世瓦には、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦があり、他に道具瓦として隅切瓦・熨斗瓦・面戸瓦・棟込瓦・鬼瓦などがある。色調は黒色・銀色・青灰色などを呈し、燻し焼きによるものである。各層出土の瓦が互いに接合する資料が多い。量的には整理用コンテナで423箱あり、平瓦・丸瓦が大部分を占める。以下、種類ごとに述べる。

(1)　軒平瓦

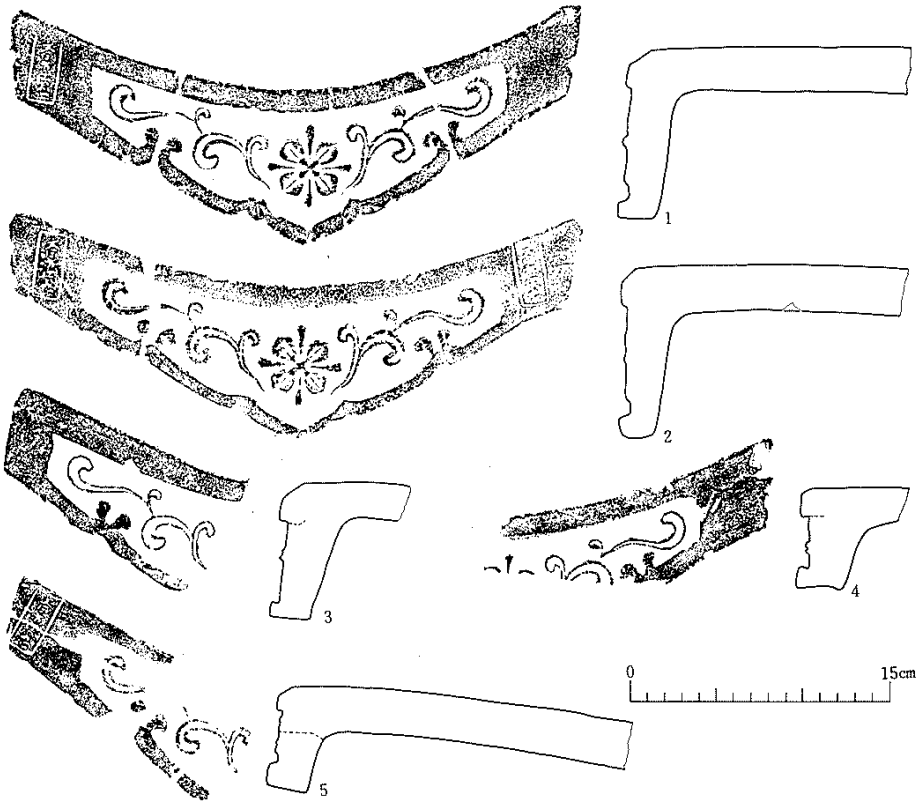
軒平瓦は94点(分類可能なものは54点)出土している。これらはすべて中央に花文を配した均整唐草文で、笵によるものである。花文や唐草のあり方に相違がみられ、A～Fの6種類がある。一方、瓦当面の形態には、五角形状で左右の斜辺にそれぞれ2個所のくびれがつけられた、いわゆる「雲頭形」のものと、長方形状のものとがみられる。また法量では幅が32㎝のも

の、30 ㎝のもの、25 ㎝のものとの三者がある。ここでは軒平瓦を瓦当文様によって分類して記述するが、これに先立ち、製作工程についてみてみたい。

軒平瓦の製作時の痕跡についてみると、瓦当面の周縁部、瓦当側・裏面はナデ調整されており、瓦当部上辺は面取りされている。また、平瓦部の瓦当部との接合部には、櫛歯状の工具による波状文風の連続する刻み（第 130 図 11、図版 50－1・2）がみられるものもある。したがって、軒平瓦は基本的には①平瓦の端部に刻みを施し、瓦当部を接合する、②瓦当部周辺をナデ調整する、③瓦当面に笵を押しつけ施文し、瓦当部上辺を面取りする、という手順で製作されていたことがわかる。瓦当面が雲頭形を呈するものは、この後に棒状の工具の抑圧によって「くびれ」部などを整えている。

以下、分類ごとに説明することとする。

A類（第 128 図）：中央に剣花菱を配したもので、唐草は凸線で表現され、外側の「くびれ」部に双葉状の突起がつけられている。瓦当面の形態は雲頭形を呈する。また、瓦当面端部には



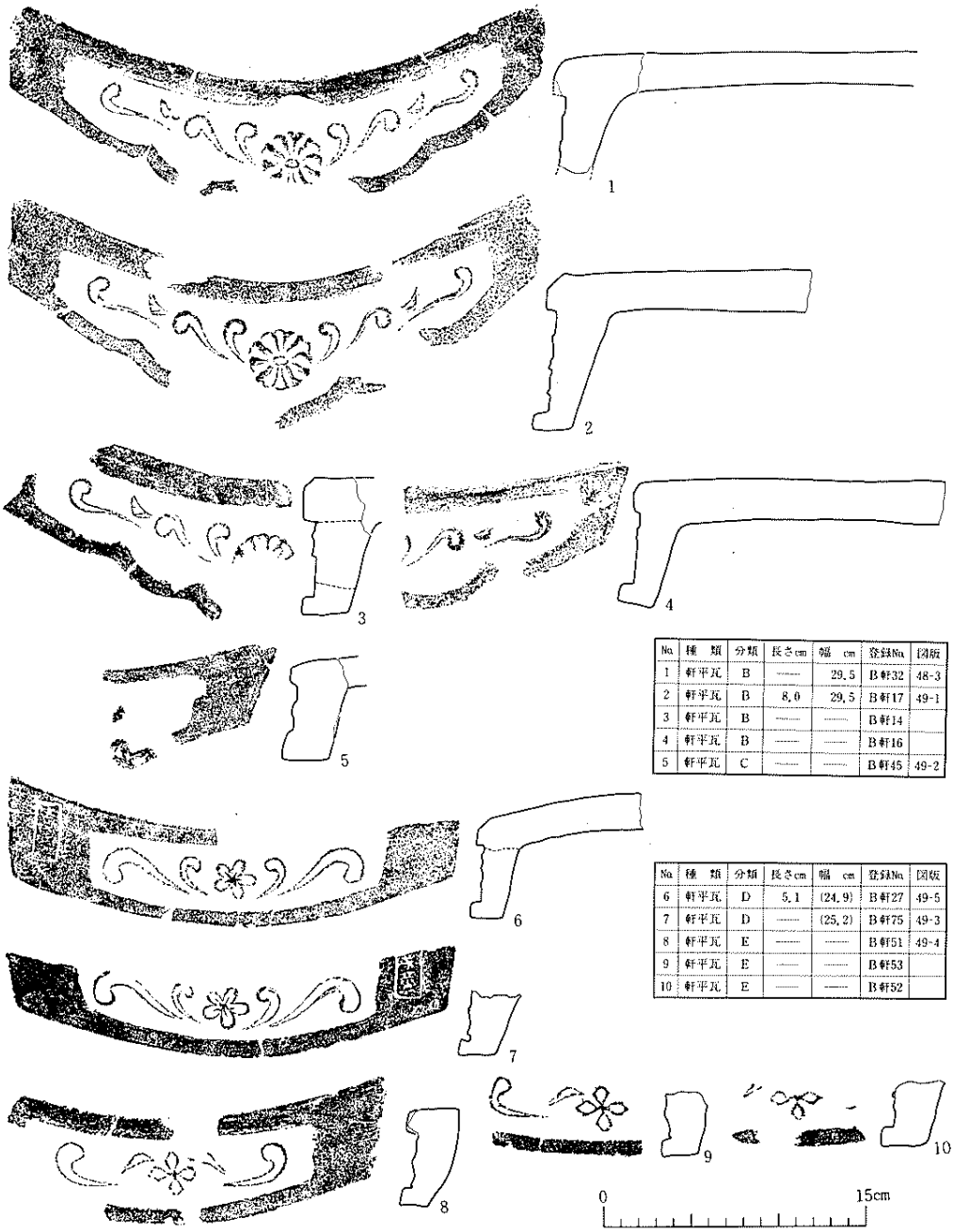
No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	軒平瓦	A	8.8	32.0	B軒15	48-1
2	軒平瓦	A	8.8	32.6	B軒22	48-2
3	軒平瓦	A	——	——	B軒39	

No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
4	軒平瓦	A	——	——	B軒36	
5	軒平瓦	A	——	——	B軒18	

第128図　瓦捨場出土遺物(1)

「太田市兵衛」(b)の刻印がみられるものが多い（1・2・5）。瓦当面の幅は32㎝、高さは中央部で9㎝である。12点出土している。

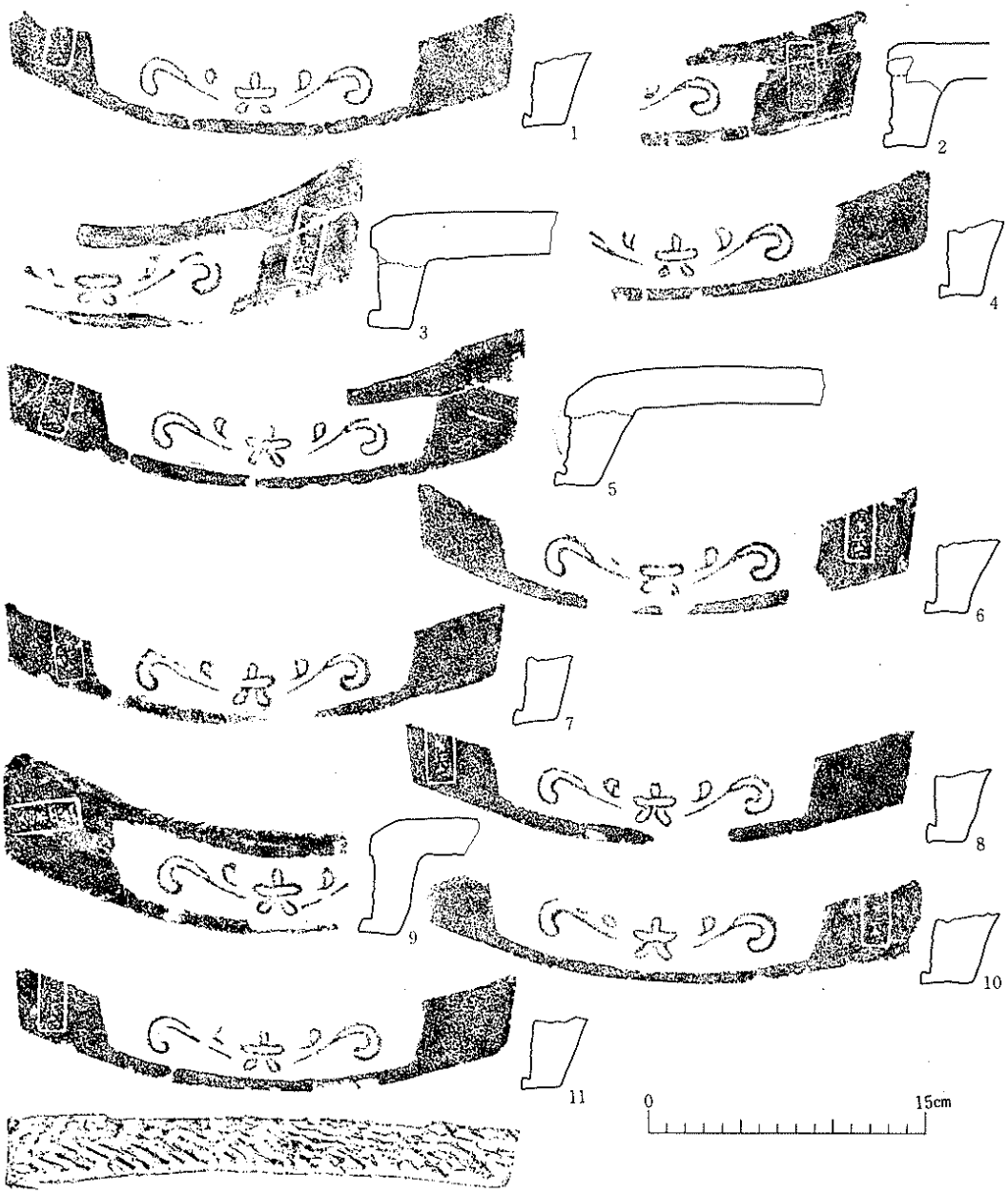
B類（第129図1～4）：中央に10弁の「菊花」を配したもので、唐草と葉は凸線で表現されている。瓦当面の形態は雲頭形を呈する。刻印のみられるものはない。幅は30㎝で、高さは



No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	軒平瓦	B	――	29.5	B軒32	48-3
2	軒平瓦	B	8.0	29.5	B軒17	49-1
3	軒平瓦	B	――	――	B軒14	
4	軒平瓦	B	――	――	B軒16	
5	軒平瓦	C	――	――	B軒45	49-2

No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
6	軒平瓦	D	5.1	(24.9)	B軒27	49-5
7	軒平瓦	D	――	(25.2)	B軒75	49-3
8	軒平瓦	E	――	――	B軒51	49-4
9	軒平瓦	E	――	――	B軒53	
10	軒平瓦	E	――	――	B軒52	

第129図　瓦捨場出土遺物(2)



No	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	軒平瓦	F	——	(26.6)	B軒28	
2	軒平瓦	F	——	——	B軒44	
3	軒平瓦	F	5.4	——	B軒31	
4	軒平瓦	F	——	——	B軒47	
5	軒平瓦	F	——	27.2	B軒37	49-6
6	軒平瓦	F	——	26.3	B軒	

No	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
7	軒平瓦	F	——	(26.5)	B軒76	
8	軒平瓦	F	——	(26.9)	B軒74	
9	軒平瓦	F	(5.2)	——	B軒77	
10	軒平瓦	F	——	(27.0)	B軒29	
11	軒平瓦	F	——	(26.6)	B軒73	50-1

第130図　瓦捨場出土遺物(3)

中央部で 9 ㎝である。9 点出土している。

C類（第 129 図 5）：端部の小片で、全体の文様は不明であるが、瓦当部の形態は雲頭形を呈し、A類と同様に外側のくびれ部に双葉状の突起がつけられると思われる。1 点出土している。

D類（第 129 図 6・7）：中央に「梅花」を配したもので、唐草は凸線で表現される。瓦当面の形態は長方形を呈し、瓦当面端部に「太田市兵衛」(b)の刻印がみられる。瓦当面の幅 25 ㎝で、高さは 55 ㎝である。2 点出土している。

E類（第 129 図 8～10）：中央にいくぶん丸みをおびた「剣菱」を配したもので、これと唐草・葉は凸線で表現される。瓦当面の形態は長方形状を呈し、瓦当面の幅はおよそ 25 ㎝で、高さは 5.5 ㎝である。3 点出土している。なお、8 は平瓦部が削り取られており、別の用途のものと思われる。

F類（第 130 図）：中央に「桔梗」を配したもので、これと唐草は凸線で表現される。笵への文様の掘り込みが浅いためか、全体に文様が不鮮明である。瓦当面の形態は長方形状を呈し、大部分の瓦当面端部には「太田市兵衛」(b)の刻印がみられる。瓦当面の幅は 6.5 ㎝で、高さは 5.5 ㎝である。他の類に比べ、平瓦部から剥落した瓦当部が多い。27 点と最も多く出土している。

なお、分類不可能な 40 点は、瓦当部の形態や大きさからD・E・F類のいずれかに属するものが大部分である。

(2)　軒丸瓦

軒丸瓦は 64 点（分類可能なもの 38 点）出土している。瓦当文様には三ツ巴文と九曜文がみられ、巴の巻く方向や連珠の有無などの相違により、A～Fの 6 種類がある。
これらはいずれも笵によるものである。法量では、直径は 19.5 ㎝のもの、18 ㎝のもの、16 ㎝のものとの三者がある。ここでは瓦当文様によって軒丸瓦を分類し、記述するが、これに先立ち軒丸瓦の製作工程についてみてみたい。

製作時の痕跡についてみると、瓦当面の周縁部、瓦当側・裏面はナデ調整されている。また、丸瓦の瓦当部と接合する部分の端部と小口面には櫛歯状の工具による波状文風の連続する刻みがみられる（図版 51－4）。したがって、軒丸瓦は基本的には、①笵に粘土を詰める、②瓦当裏面に丸瓦挿入溝を掘る、③端部と小口に刻みを施した丸瓦を差し込み、瓦当側・裏面をナデ調整して接合するという手順で製作されていることがわかる。

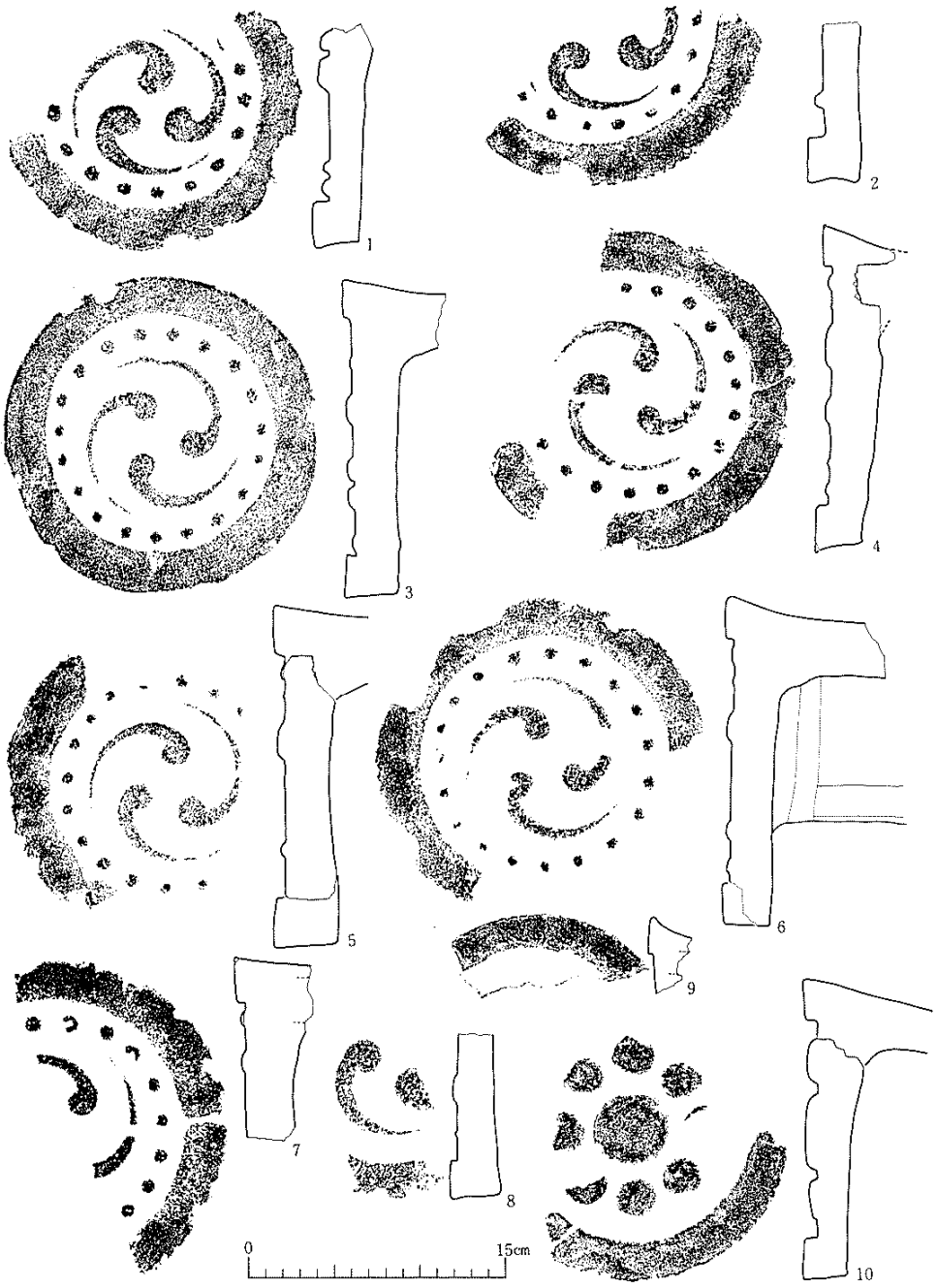
以下、分類ごとに説明する。

A類（第 131 図 1～4）：右巻きの三ツ巴文で、周囲にやや大きめの 16 個の連珠が巡る。巴

No.	種　類	分類	面径cm	登録No.	図版
1	軒丸瓦	A	19.3	B軒2	50-3
2	軒丸瓦	A	――	B軒41	
3	軒丸瓦	A	20.0	B軒12	50-4
4	軒丸瓦	A	19.2	B軒9	

No.	種　類	分類	長さcm	登録No.	図版
5	軒丸瓦	B	17.7	B軒81	50-5
6	軒丸瓦	B	――	B軒42	
7	軒丸瓦	C	――	B軒82	
8	軒丸瓦	C	17.1	B軒34	

第131図　瓦捨場出土遺物(4)



No	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
1	軒丸瓦	C	17.3	(12.5)	B軒6	50-6
2	軒丸瓦	C	18.0	(12.6)	B軒40	
3	軒丸瓦	D	19.0	(14.0)	B軒79	51-1
4	軒丸瓦	D	19.5	(14.3)	B軒7	50-7
5	軒丸瓦	D	19.5	(14.1)	B軒8	

No	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No	図版
6	軒丸瓦	D	19.7	(14.3)	B軒3	
7	軒丸瓦	D	——	——	B軒35	
8	軒丸瓦	E	(16.2)	(12.0)	B軒5	51-2
9	軒丸瓦	E	(16.0)	(12.0)	B軒43	51-3
10	軒丸瓦	F	16.6)	(11.8)	B軒4	51-5

第132図　瓦捨場出土遺物(5)

文がつぶれ気味のものもある（4）。直径は 19.5 ㎝である。5 点出土している。

B類（第 131 図 5・6）：右巻きの三ツ巴文で、周囲に 17 個の連珠が巡る。直径は 16㎝ である。3 点出土している。

C類（第 131 図 7・8、第 132 図 1・2）：左巻きの三ツ巴文で、周囲に 17 個の連珠が巡る。直径は 18 ㎝である。13 点出土している。

D類（第 132 図 3〜7）：左巻きの三ツ巴文で、周囲にやや小さめの 19 個の連珠が巡る。直径は 19.5 ㎝である。6 の丸瓦部凸面には「太田市兵衛」(b)の刻印がみられる。14 点出土している。

E類（第 132 図 8・9）：右巻きの三ツ巴文で、連珠はない。直径 16 ㎝である。9 には巴文がみられないが、連珠がないことや、周縁までの無文部が広いことなどから本類に含めた。同様の破片がもう 1 点あり、計 3 点出土している。

E類（第 132 図 10）：九曜文軒丸瓦である。直径は 16 ㎝である。1 点出土している。

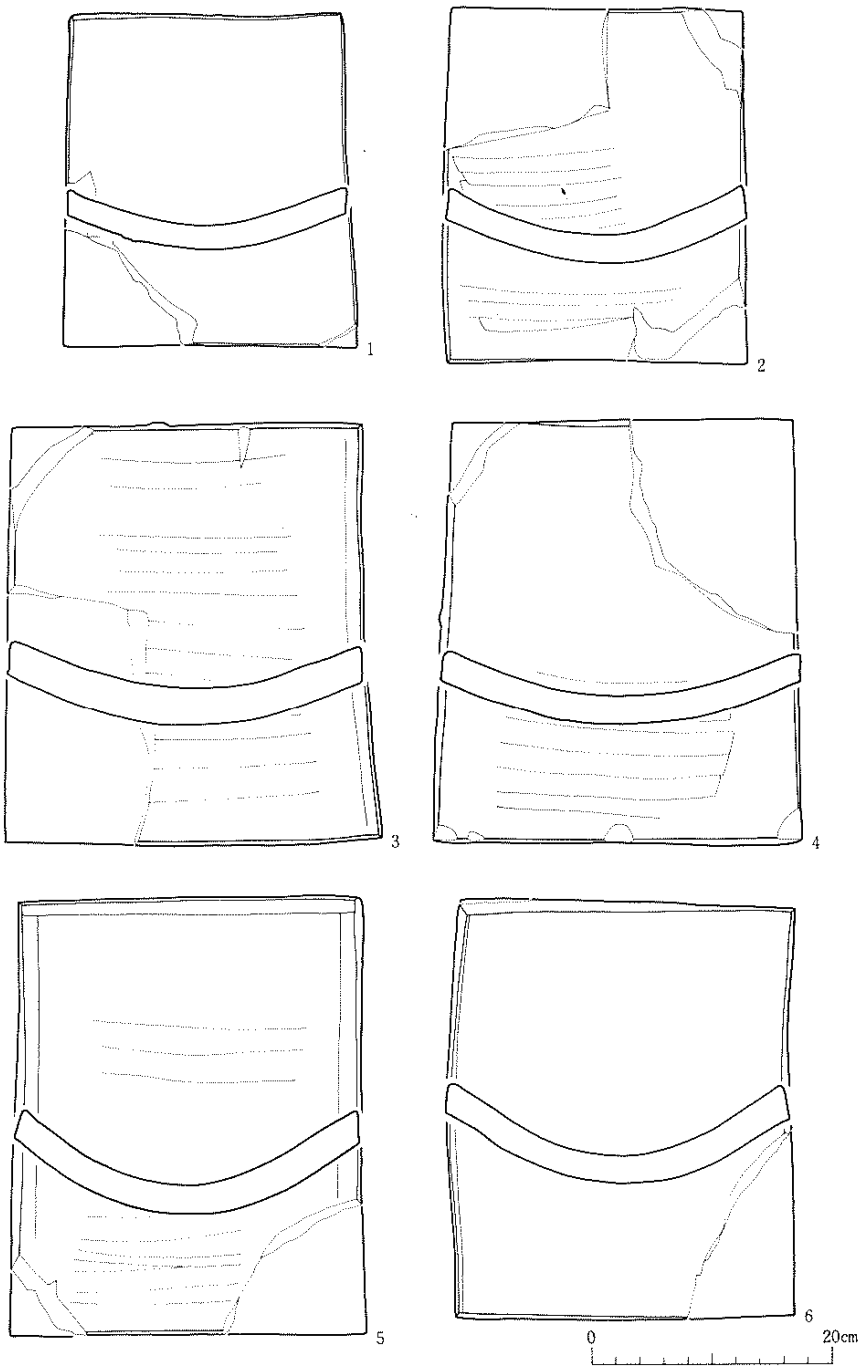
(3)　平瓦（第 133 図）

〔形態〕　形態は広端部と狭端部の差が小さな長方形状を呈するものが大部分である。

〔法量〕　法量は長さ約 27.5〜36.9 ㎝、広端幅 24.5〜30.2 ㎝、狭端幅 23.5〜29.7 ㎝である。長さと幅のわかるものをみてみると、長さ 27.5 ㎝で狭端幅 23.5 ㎝のもの、長さ 35.4 ㎝で狭端幅 27.3 ㎝のもの、長さ 36.9 ㎝で狭端幅 27.6 ㎝のものがある。これらをみると、法量では前者と後者との 2 種類があったことがわかる。

さらに細かくみると、長さのわかる 17 点では、27,5 ㎝のもの（1 点）、28.5 ㎝前後のもの（5 点）、30.2㎝ のもの（1 点）、34.5㎝ 前後のもの（7 点）、36㎝ 前後のもの（3 点）とに分かれる。また、底端幅のわかる 9 点は、24.7㎝ のもの（1 点）、28.5㎝ 前後のもの（6 点）、30.1㎝ のもの（2 点）とにわけられ、狭端幅のわかる 21 点は、23.5㎝ 前後のもの（5 点）、27 ㎝前後のもの（3 点）、28.5 ㎝前後のもの（7 点）、30 ㎝前後のもの（6 点）とに分けられる。これらの対応関係は既述の 3 点を除いて不明であるが、法量にはかなりのバラエティがあったと思われる。

〔製作方法〕　製作時の痕跡についてみると、凸面には糸切り痕・軽いナデ調整・砂粒の付着・凹型台の圧痕がみられる。糸切り痕はナデ調整の及ばない部分にみられる最も古い痕跡で、粘土板を素材としていることがわかる。ナデ調整は粗く縦方向に施され、端部ではさらに横方向に施される。砂粒は中央部にまとまって付着しており、ナデ調整より新しい。凹型台の圧痕は側端部にみられる型の端部の庄痕と、木目痕と思われる微細な線条痕で、最も新しい痕跡である。叩きの痕跡は全くみられない。



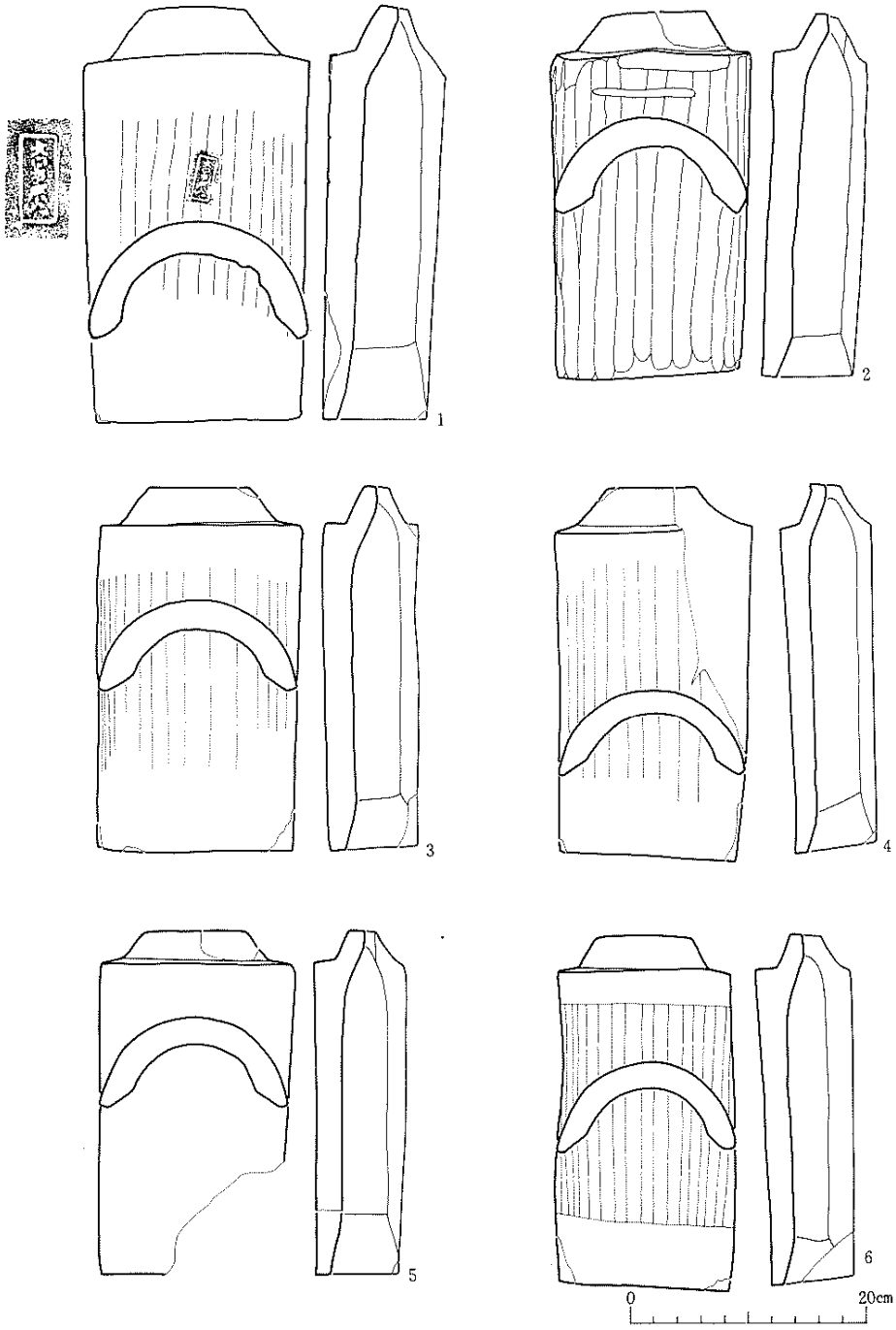
No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	平　瓦	27.5	狭23.5	B平2	52-1
2	平　瓦	29.1	――	B平1	52-2
3	平　瓦	34.5	――	B平4	

No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
4	平　瓦	34.6	広30.1	B平3	53-1
5	平　瓦	36.9	狭27.6	B平5	53-2
6	平　瓦	35.4	狭27.3	B平6	

第133図　瓦捨場出土遺物(6)

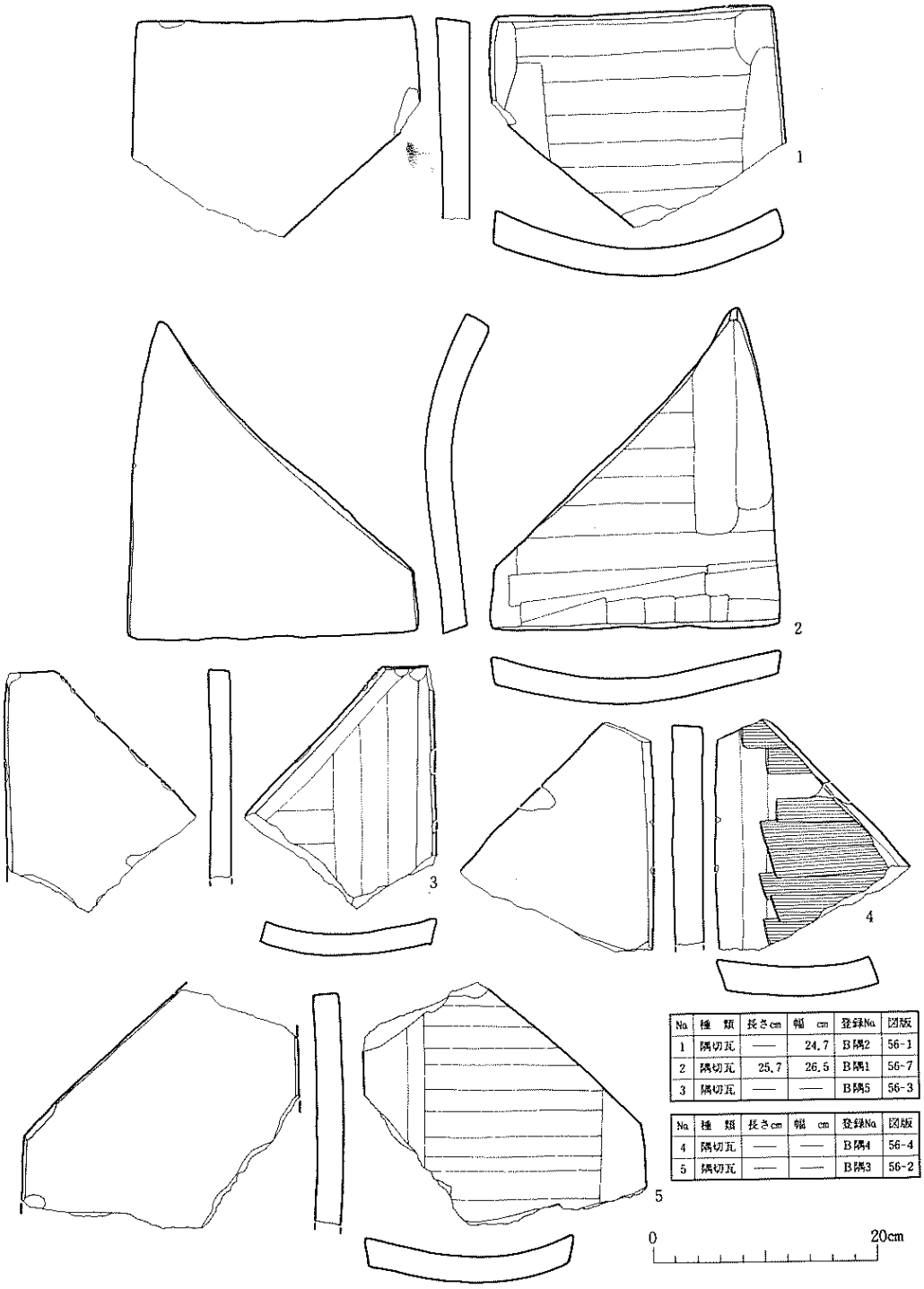
凹面には粗いミガキ調整とナデ調整がみられる。ミガキ調整は平滑に施され、全面に横方向に施した後、側端部には縦方向に施している。ナデ調整は側面・小口面にみられ、広端部のナデ調整は他の部分に比して雑で、全面に及ばない場合が多い。また、砂や植物の圧痕、指頭痕がみられるものもある。なお、側面・小口面の面取りは全く行われていない。
以上のことから、平瓦は、①粘土板を切り離す、②凸面をナデ調整する、③凹型台上で凹面や小口面を粗いミガキ調整するという手順で製作されたものと思われる。砂粒は凹型台からはずしやすくするためのものであろう。
なお、狭端部の小口面には種々の刻印がみられるが、これらについては後述する。

(4)　丸瓦（第 134 図）
〔形態〕　すべて玉縁の付く有段丸瓦である。玉縁部は先端が幅の狭くなる台形状に整形されている。
〔法量〕　長さ 26.8～30.3 ㎝、幅 14.6～18.5 ㎝である。完形品でみると、長さ 27.2 ㎝で幅 14.6 ㎝のもの、長さ 26.8 ㎝で幅 16.4 ㎝のもの、長さ 28 ㎝で幅 17 ㎝程のもの、長さ 30.3 ㎝で幅 18.5 ㎝のものとの 4 種類がある。
さらに細かくみると、幅のわかる 36 点は、14 ㎝のもの（1 点）、15 ㎝前後のもの（13 点）、16.5 ㎝前後のもの（19 点）、18 ㎝前後のもの（2 点）、19.1 ㎝のもの（1 点）とに分かれる。平瓦と同様法量にはかなりのバラエティがあったものと思われる。
玉縁部の長さは 3 ㎝前後のものが多い。
〔製作方法〕　製作時の痕跡についてみると、凸面には体部に縦方向のナデ調整が施され、表面が平滑になっている。玉縁部には横方向のナデ調整が施されている。また、玉縁部の段はヘラケズリ調整の後、ナデ調整されている。凹面には糸切り痕・布目・縄の圧痕・刺突痕がみられる。糸切り痕は最も古い痕跡で、粘土板を素材としたことがわかる。布目は不鮮明なものが多く、部分的である。縄の圧痕は結び目を有するもので、比較的多くの個体にみられる（図版 54－1）。これは布目と同時につけられており、型にかぶせた布をすぼませるためのものと思われる。刺突痕は玉縁方向へ先端が角張った工具を差し込んだ痕跡で（図版 54－1）、最も新しい。側面・小口面は幅広く面取りされる。
　以上のことから丸瓦は、①粘土板を切り離す、②円錐台状の型に粘土板を巻き、玉縁部を作り出し、成形する、③凸面をナデ調整する、④型からはずして二分割する、⑤側面・小口面を面取りし、玉縁部を整形するという手順で製作されたものと思われる。このうち、③と④は順序が逆になる可能性もある。なお、凹面の刺突痕は④の型からはずす際のものと思われる。
　丸瓦の凸面には「太田市兵衛」の刻印がみられるもの（1）がある。また、玉縁部付近に釘



No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版	No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	丸　瓦	30.3	18.5	B丸4	54-1	4	丸　瓦	28.0	——	B丸5	
2	丸　瓦	27.9	16.9	B丸6	54-2	5	丸　瓦	26.8	16.4	B丸1	
3	丸　瓦	27.9	17.0	B丸3	54-3	6	丸　瓦	27.2	14.6	B丸2	54-4

第134図　瓦捨場出土遺物(7)



No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	隅切瓦	——	24.7	B隅2	56-1
2	隅切瓦	25.7	26.5	B隅1	56-7
3	隅切瓦	——	——	B隅5	56-3

No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
4	隅切瓦	——	——	B隅4	56-4
5	隅切瓦	——	——	B隅3	56-2

第135図　瓦捨場出土遺物（8）

穴が穿たれているものもある。

(5)　道具瓦

ａ．隅切瓦（第 135 図）

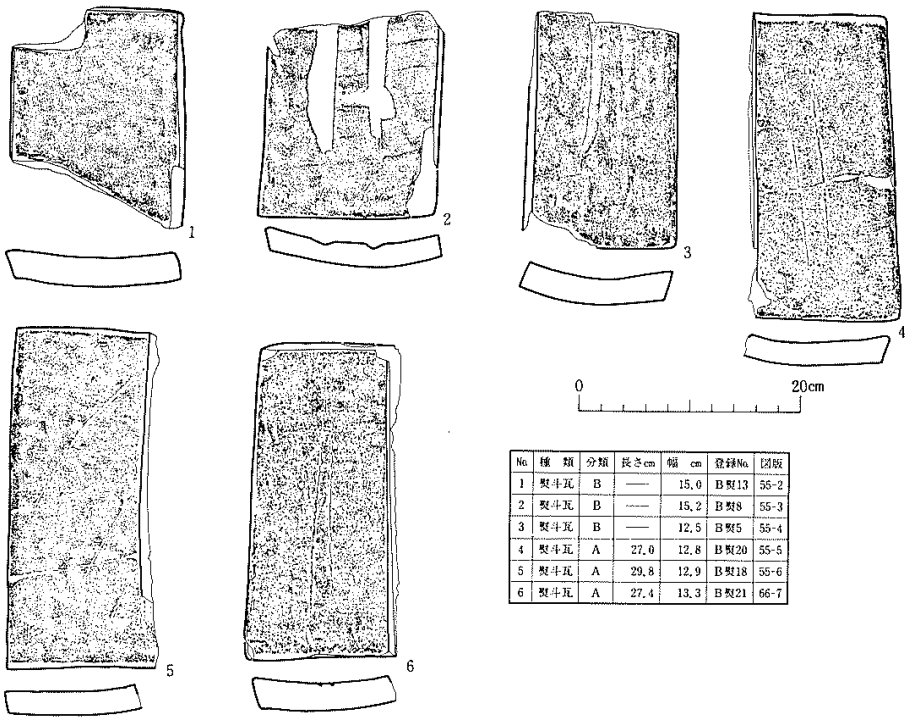
平瓦の一角を焼成前に斜めに切り取ったもので、28 点ある。使用される場所により切り取られる大きさや部位が異なっている。完成形が 1 点あり、長さ 25.7 ㎝、幅 26.5 ㎝である。

ｂ．熨斗瓦（第 136 図）

平瓦を縦に半割したもので、116 点ある。あらかじめ分割線を入れておき、焼成後分割するもの(Ａ)と、焼成前に分割し、分割面をヘラケズリ調整するもの(Ｂ)があり、Ａが 101 点で圧倒的に多い。法量は、Ａでは長さ 27.0～29.8 ㎝、幅 11.8～16.2 ㎝である。完形品では長さ 27.0㎝で幅 12.8 ㎝のもの、長さ 27.4 ㎝で幅 13.3 ㎝のもの、長さ 29.8 ㎝で幅 12.9 ㎝のものがある。これらをみると、法量では前二者と後者の二種類があったことがわかる。Ｂでは幅 11.8～15.1 ㎝で、長さのわかるものはない。幅だけをみるとでは 12 ㎝前後のもの（5 点）、13.5 ㎝前後のもの（9 点）、15 ㎝前後のもの（8 点）、16 ㎝程のもの（3 点）とにわかれ、Ｂでは 12 ㎝前後のもの（5 点）、13.2 ㎝のもの（1 点）、15 ㎝前後のもの（8 点）に分かれる。これらの凹面にはしばしば 1～3 本の沈線がみられる。

ｃ．面戸瓦（第 137 図）

丸瓦を焼成前に分割し整形したもので、197 点ある。横方向に分割して平面形が長方形の



No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	熨斗瓦	B	——	15.0	B熨13	55-2
2	熨斗瓦	B	——	15.2	B熨8	55-3
3	熨斗瓦	B	——	12.5	B熨5	55-4
4	熨斗瓦	A	27.0	12.8	B熨20	55-5
5	熨斗瓦	A	29.8	12.9	B熨18	55-6
6	熨斗瓦	A	27.4	13.3	B熨21	66-7

第136図　瓦捨場出土遺物(9)

もの（A）と、斜めに分割して平面形が平行四辺形のもの（B）とがある。Bには右下がりのものと左下がりのものとがある。量的にはAは173点、Bは24点である。Aは凹面の四辺を大きく面取りし、さらに上・下辺の角を除去し、弧状に整形している。完形品でみると、長さ14.4～18.3㎝、幅8.2～11.0㎝であり、長さ15㎝、幅9㎝程のものが多い。Bは凹面の四辺を大きく面取りはするが、上・下辺は直線的である。完形品でみると、右下がりのものは長さ15.8㎝で幅10.6㎝のものと、長さ15.8㎝で幅11.1㎝のものがあり、左下がりには長さ15.3㎝で幅10.8㎝のものがあり、ほぼ同じ大きさである。

d．棟込瓦（第138図）

丸瓦を横に半割し、側辺を切り取って平面形を台形にしたもので、186 点ある。各辺の凹面は大きく面取りされている。完形品でみると、長さ13～16.5㎝、広端幅12～16㎝、狭端幅7.5～12㎝であり、長さ15㎝、広端幅15㎝、狭端幅11㎝程のものが大部分である。大棟に組み込まれ、輪違いを構成するものである。

e．鬼瓦（図版64）

大棟に用いられる大型のものと、降り棟等に用いられる比較的小型のものとがある。前者は頚部の右半部で、鼻や目は剥落しているが、牙が残っている。全体を頭部と左右の脚部に三分割して製作されている。裏面には形状保持のための太い粘土柱が格子状に貼り付けられている。「太田市兵衛」(a)の刻印がみられる。他に別個体の破片がある。小型のものは頭部と脚部の破片である。

f．鳥伏間瓦（第139図）

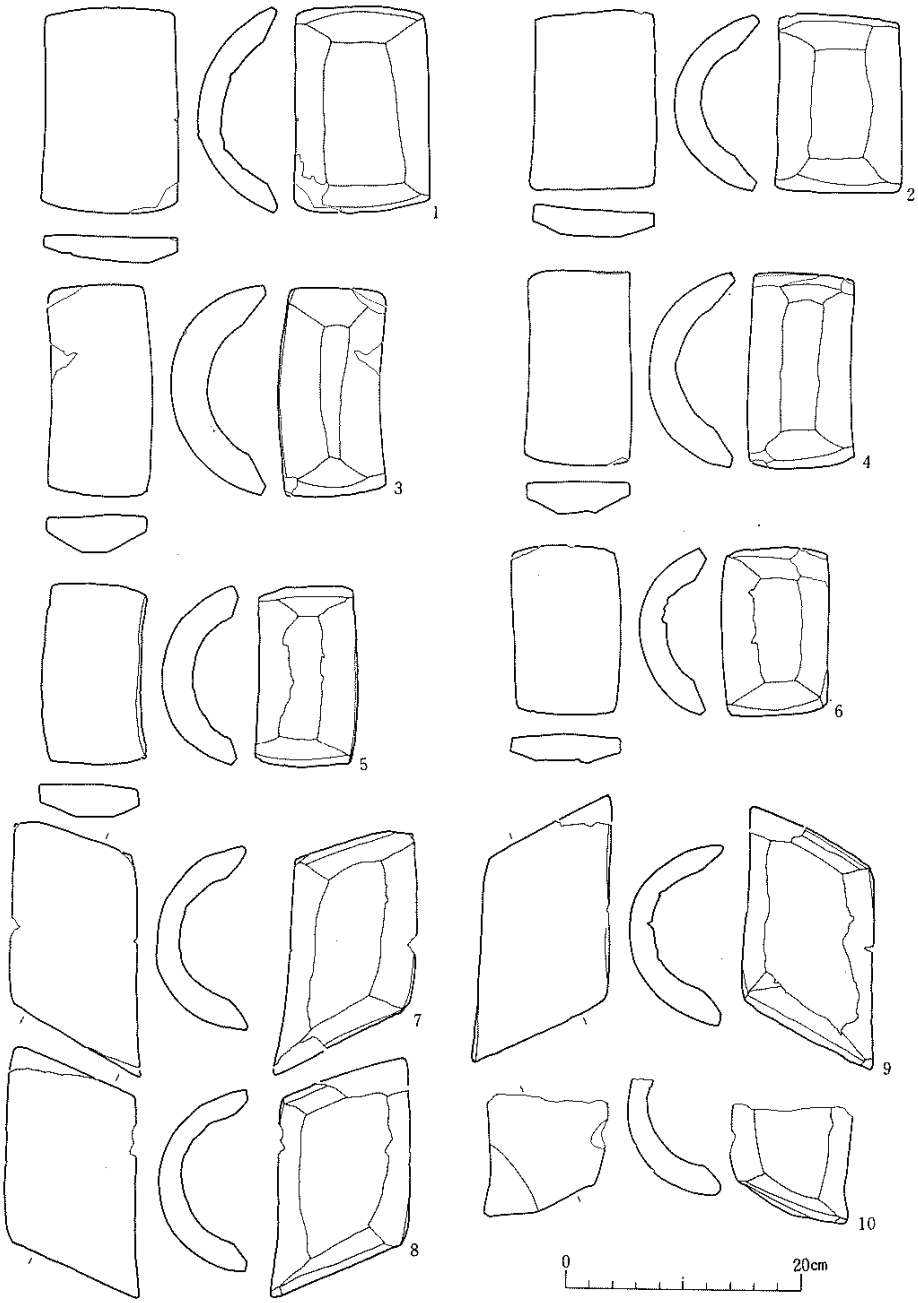
軒丸瓦部の瓦当面で、瓦当文様は軒丸瓦B類と同笵の三ツ巴文である。

(6)　刻印瓦（第140・141図）

瓦にみられる刻印には「太田市兵衛」が2種類、（大小）が2種類、記号4種類の計8種類がある。量的には「太田市兵衛」が大部分で、他は数点ずつである。また、「太田市兵衛」は軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦にみられ、他は平瓦にのみ押印される。これらは、軒平瓦が瓦当面の側端部、平瓦が狭端部小口面、軒丸瓦と丸瓦が凸面胴部中央に例外なく押印されている。鬼瓦は正面と側面の数箇所に押印されている。（註）

「太田市兵衛」は長方形の枠の中に陰刻されたもので、「衛」の字の違いによりA（2）、B（1）の2種類がある。Bは中央の縦の直線が切れており、右下の点がないことでAと異なっている。しかし、他の文字は同一であるため、BはAが破損したものと思われる。

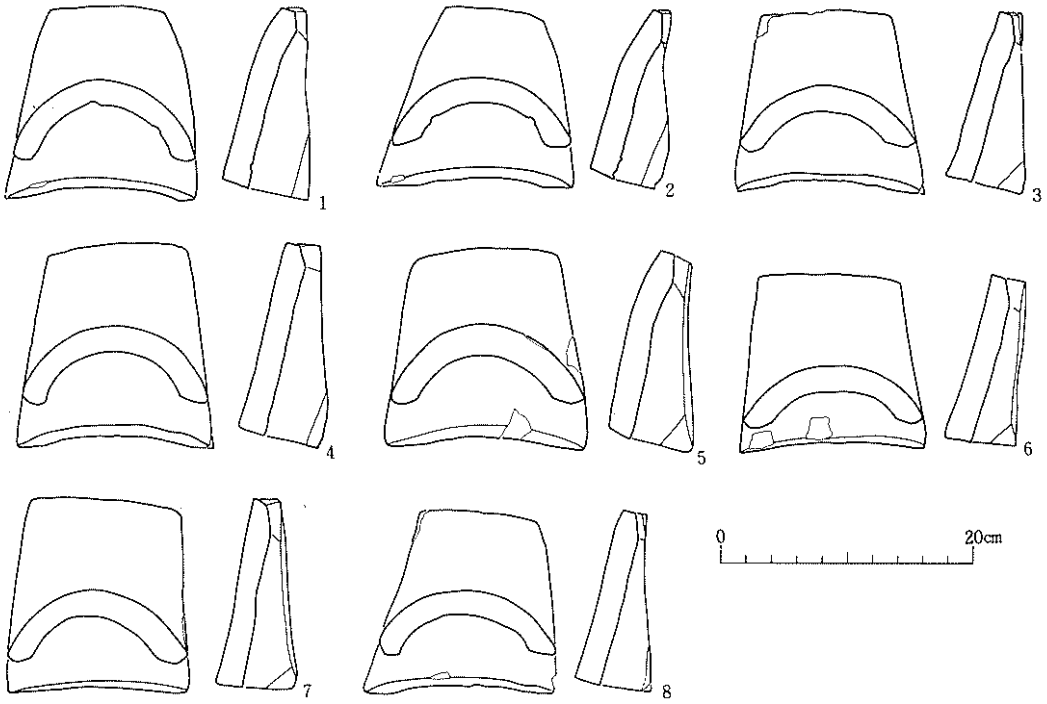
（大小）は楕円形の粋の中に陽刻されたもので、形状の違いによりA（3）、B（6）の2種類がある。Aは楕円形の粋の中に比較的太い文字がみられる。Bは楕円形の枠の中央がくび



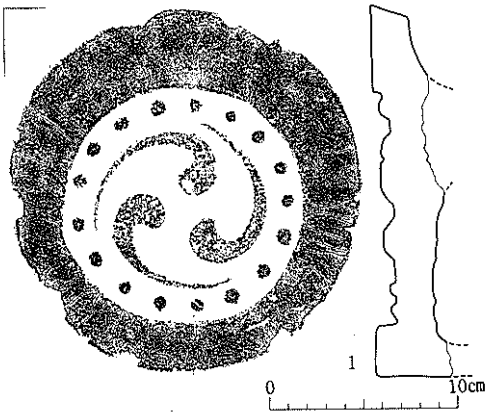
No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	面戸瓦	A	17.5	11.2	B面6	
2	面戸瓦	A	15.1	10.2	B面2	56-6
3	面戸瓦	A	18.0	8.6	B面5	
4	面戸瓦	A	16.5	8.6	B面7	56-5
5	面戸瓦	A	15.4	8.2	B面3	

No.	種　類	分類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
6	面戸瓦	A	14.3	9.1	B面1	
7	面戸瓦	B	15.8	10.6	B不②1	58-2
8	面戸瓦	B	15.6	11.0	B不②2	58-1
9	面戸瓦	B	15.4	10.8	B不②3	58-3
10	面戸瓦	B	——	10.1	B不②4	58-4

第137図　瓦捨場出土遺物(10)



第138図　瓦捨場出土遺物 (11)



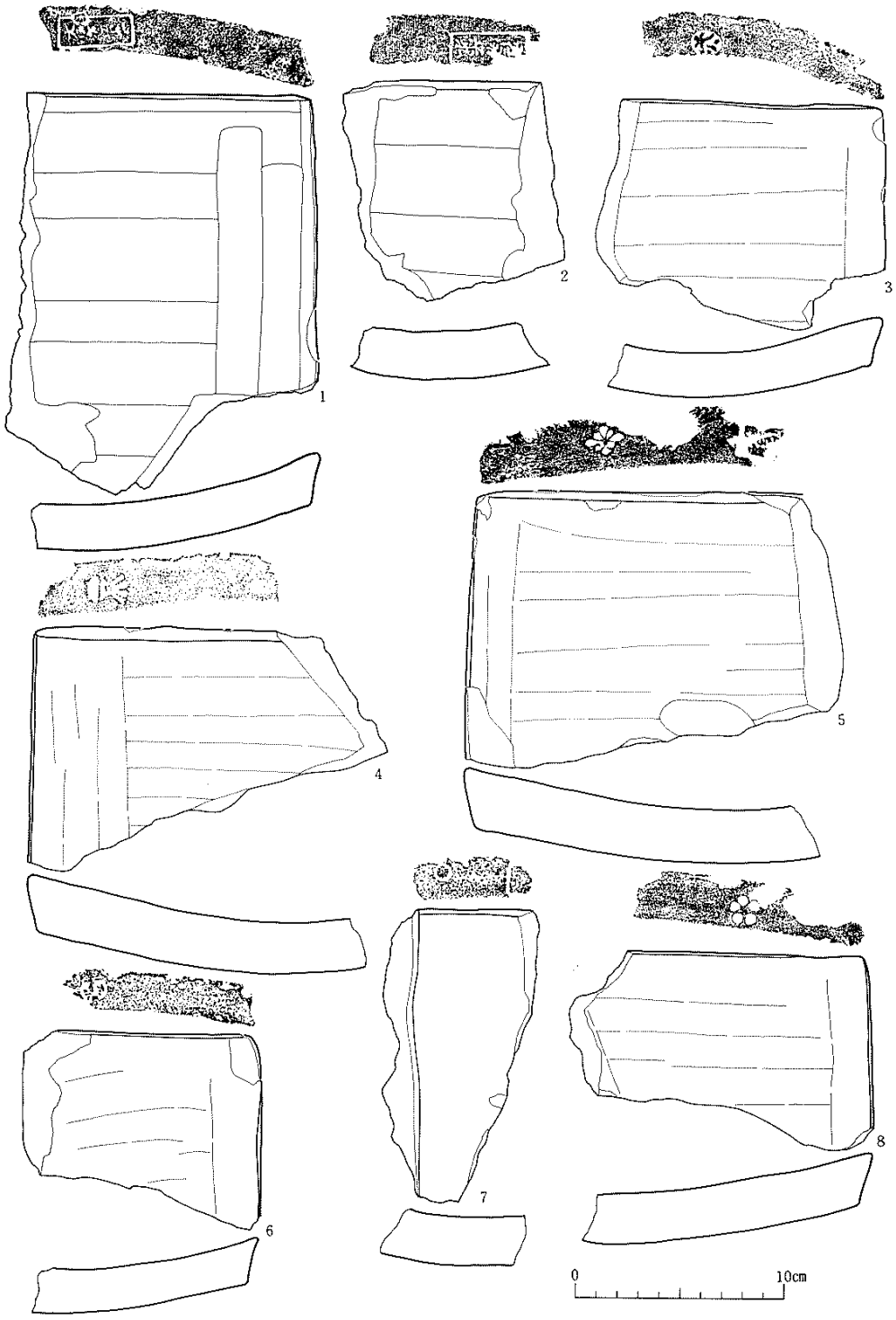
(第１３８図の表)

No	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	棟込瓦	13.6	広15.0・狭9.0	B棟3	
2	棟込瓦	12.6	広15.6・狭8.0	B棟4	57-2
3	棟込瓦	13.0	広15.0・狭10.4	B棟14	
4	棟込瓦	14.4	広15.2・狭11.0	B棟7	57-3
5	棟込瓦	14.0	広15.6・狭11.5	B棟12	
6	棟込瓦	13.0	広14.6・狭11.3	B棟16	57-1
7	棟込瓦	14.4	広14.1・狭12.0	B棟5	
8	棟込瓦	13.2	広15.3・狭9.4	B棟10	

(第１３９図の表)

No	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	鳥伏間瓦	——	19.7	B鳥1	55-1

第139図　瓦捨場出土遺物 (12)

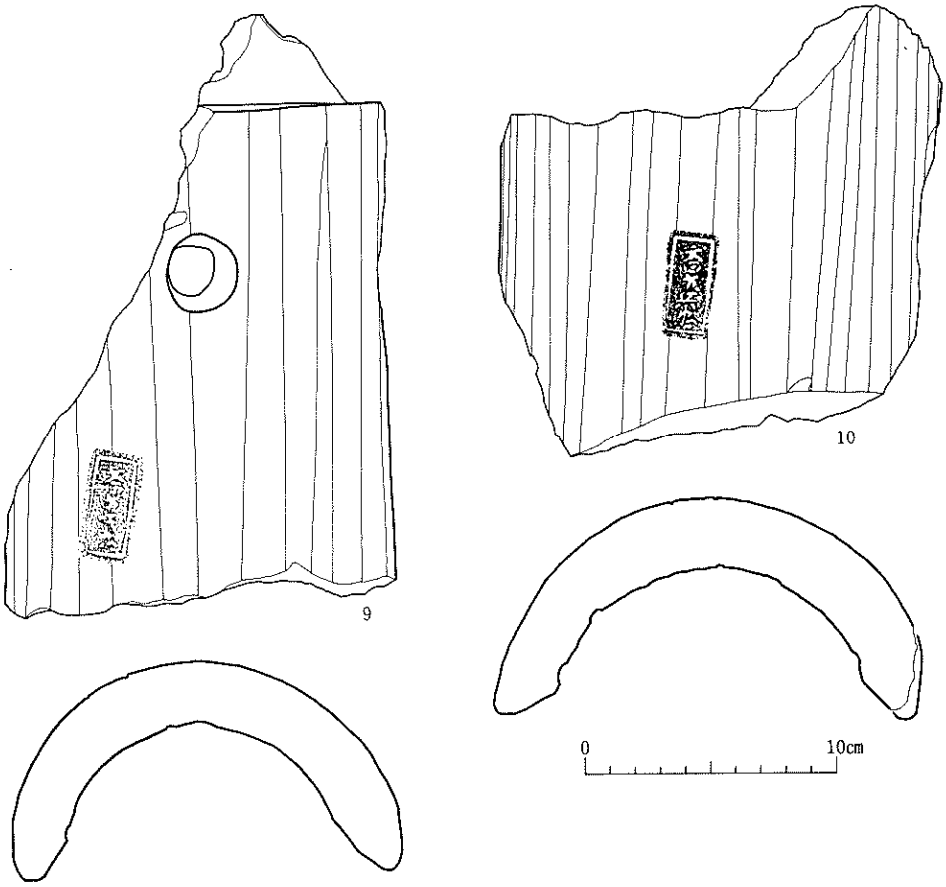


第140図　瓦捨場出土遺物 (13)

れ、独鈷状になっており、文字も小さく細い。

記号のものには、大きめの４枚の花弁とその間に小さめの花弁？を配したもの、扇形に半円形を組み合わせたもの、五ツ星がある。このうち、前二者は「太田市兵衛」の刻印と共に押印されている。

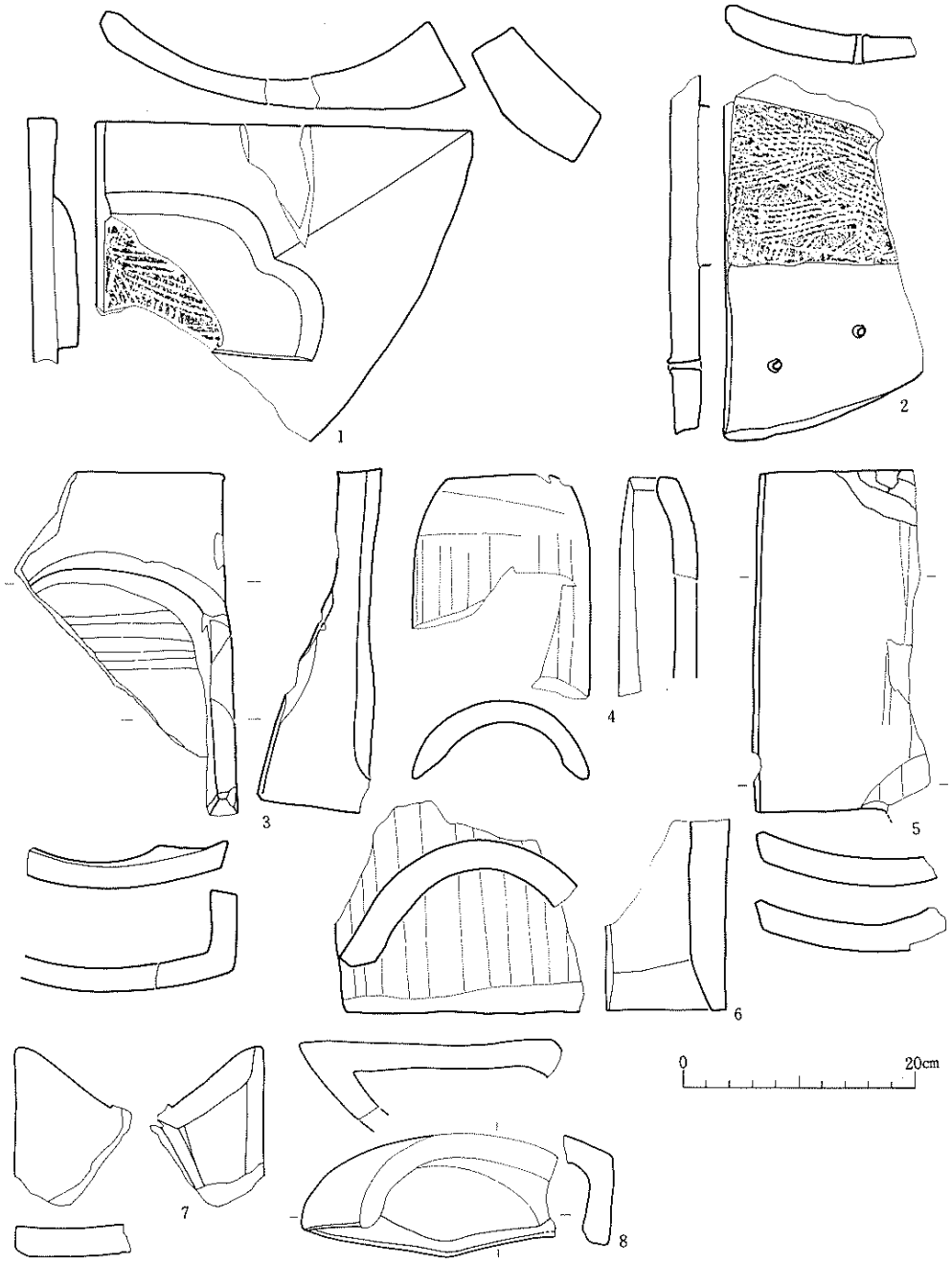
（註）本遺跡から供給されたとみられる瑞厳寺の鬼瓦をみると、本地区出土の鬼瓦と同じ部位に刻印がみられ、鬼瓦についても押印部位は決まっていたものと思われる。



No	種　類	刻　　印	登録No	図版
1	平　瓦	（大小）(b)	B刻9	61-5
2	平　瓦	記号	B刻5	61-4
3	平　瓦	記号	B刻4	61-2
4	丸　瓦	「太田市兵衛」(b)	B刻15	62-4
5	丸　瓦	「太田市兵衛」(a)	B刻16	62-5

No	種　類	刻　　印	登録No	図版
1	平　瓦	「太田市兵衛」(b)	B刻13	
2	平　瓦	「太田市兵衛」(a)	B刻14	
3	平　瓦	（大小）(a)	B刻7	
4	平　瓦	記号	B刻2	61-3
5	平　瓦	記号	B刻1	61-1

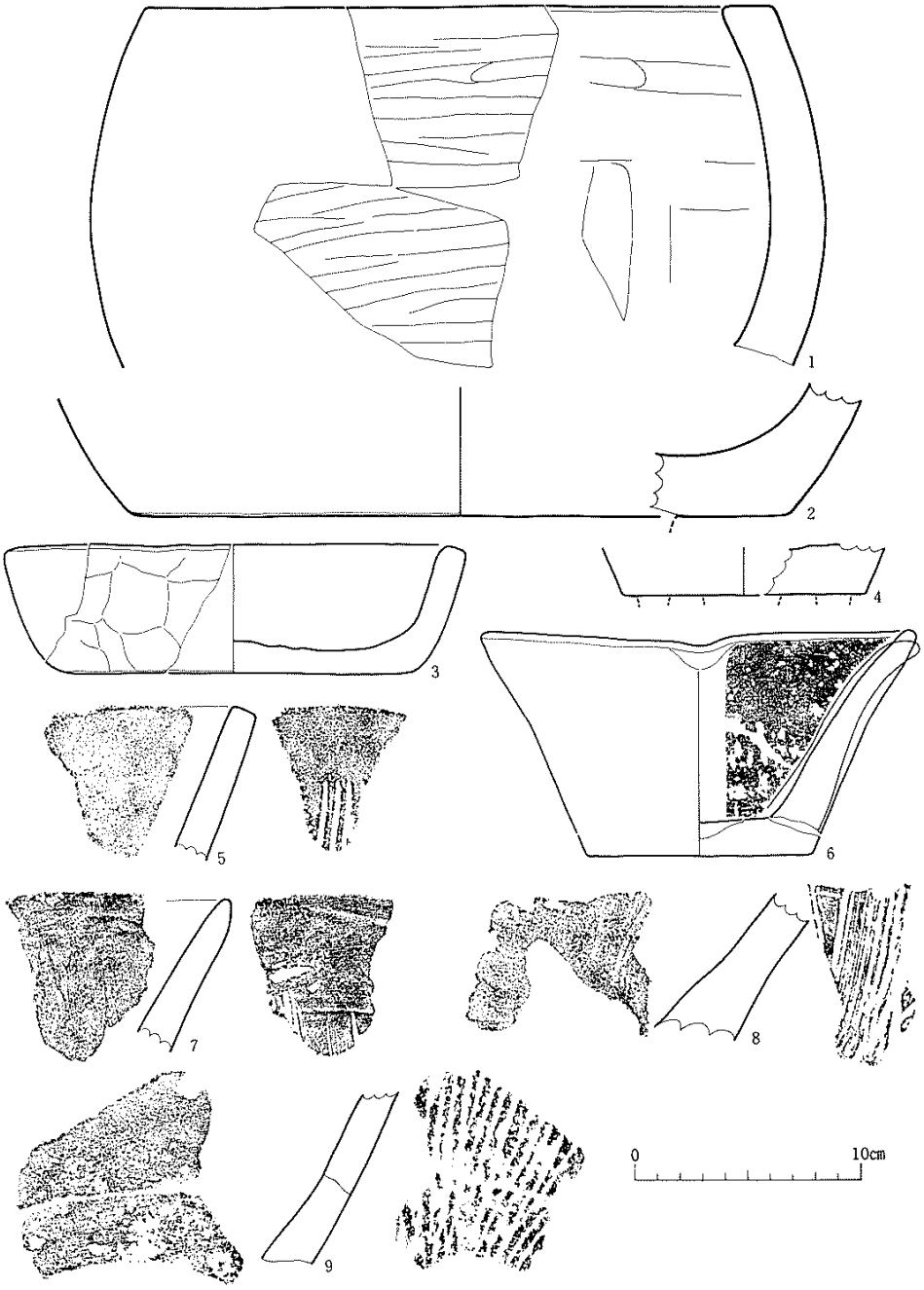
第141図　瓦捨場出土遺物（14）



No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
1	不　明	——	28.0	B不①1	59-1
2	不　明	——	——	B不①2	60-1
3	不　明	——	——	B他1	59-2
4	不　明	——	14.2	B他2	60-3

No.	種　類	長さcm	幅　cm	登録No.	図版
5	不　明	(29.4)	——	B他3	60-2
6	雁振瓦？	——	——	B他4	59-3
7	不　明	——	——	B他5	59-4
8	不　明	——	——	B他6	59-5

第142図　瓦捨場出土遺物(15)



No.	種　類	直径cm	高さcm	登録No.	図版
1	火鉢？	(27.7)	——		
2	火鉢？	(28.8)	——		63-5
3	鉢	(20.4)	5.6		63-1
4	足付鉢	(10.8)	——		
5	擂　鉢	——	——		63-3

No.	種　類	直径cm	高さcm	登録No.	図版
6	擂　鉢	19.2	(10.0)		63-2
7	擂　鉢	——	——		63-4
8	擂　鉢	——	——		63-6
9	擂　鉢	——	——		63-7

第143図　瓦捨場出土遺物 (16)

(7)　その他の瓦（第 142 図）

名称、使用場所等が不明なものを一括した。

1・2 は同種のもので、10 点出土している。円を 1/4 に分割した扇形であると思われる。凸面には中央部から左側辺にかけて粘土を貼り付け、盛り上がり部を作り出しており、また中央から右上端部にかけても粘土を付加し、徐々に厚みを増している。左下部には 2 ケ所に釘穴がみられる。凹面はナデ調整されている。

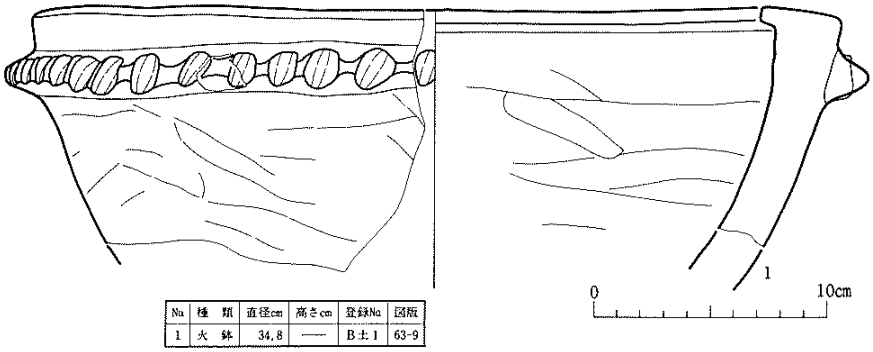
3 は平瓦凹面の狭端部側に弧状に断面三角形の隆帯を貼り付け、それに接続するように側辺に縁を付けたもので、凸面の広端部側には脚が付けられていたものと思われる。

4 は丸瓦と同様のものであるが、玉縁がなく、上部がすぼまっている。5 は平瓦凹面中央部になんらかのものが貼り付けられていたもので、剥落の痕跡がみられる。6 は丸瓦の側端部を大きく開いた形で、雁振瓦かと思われる。7 は先端が三角形状に整形された破片である。8 は半円形の底部の弧状の部分に「縁」あるいは「覆い」を付けたものである。3〜7 は各 1 点ずつ、8 は 2 点出土している。

(8)　その他の遺物（第 143・144 図）

瓦以外の出土遺物を一括した。瓦質土器、陶磁器がある。瓦質土器には鉢・火鉢・擂鉢・脚付鉢がある。この他に図示しなかったが、方形の鉢になると思われるものも出土している。

1・2・第 144 図は火鉢で、1 の外面は平滑な幅広のナデ調整、内面にはやや粗いナデ調整が施されている。2 は底部で、脚が付けられていた痕跡がみられる。第 144 図は口縁に刻み目のつく縁帯が巡っている。調整は 1 と同様である。3 は皿状の鉢で、外面は軽いオサエ、内面はナデ調整が施されている。4 は底部で、3 本の脚が付けられている。5〜9 は擂鉢である。内面に筋目のみられるもの（5・7・8）と刺突がみられるもの（6）とがある。いずれも外面はナデ調整されている。6 には片口が付き、内面は使用により磨滅している。



No	種　類	直径cm	高さcm	登録No.	図版
1	火　鉢	34.8	——	B土1	63-9

第144図　瓦捨場出土遺物(17)

これらの瓦質土器の生産地は明らかでないが、5 の擂鉢以外には使用痕が認められず、焼きや胎土も類似しているため、本遺跡で瓦と共に焼かれた可能性も考えられる。6 はこれらより以前に製作されており、搬入品の可能性がある。

陶磁器は各１点ずつで、陶器は(ハ)の底部付近の小片で、呉須で文様が描かれている。磁器は青磁の小片である。

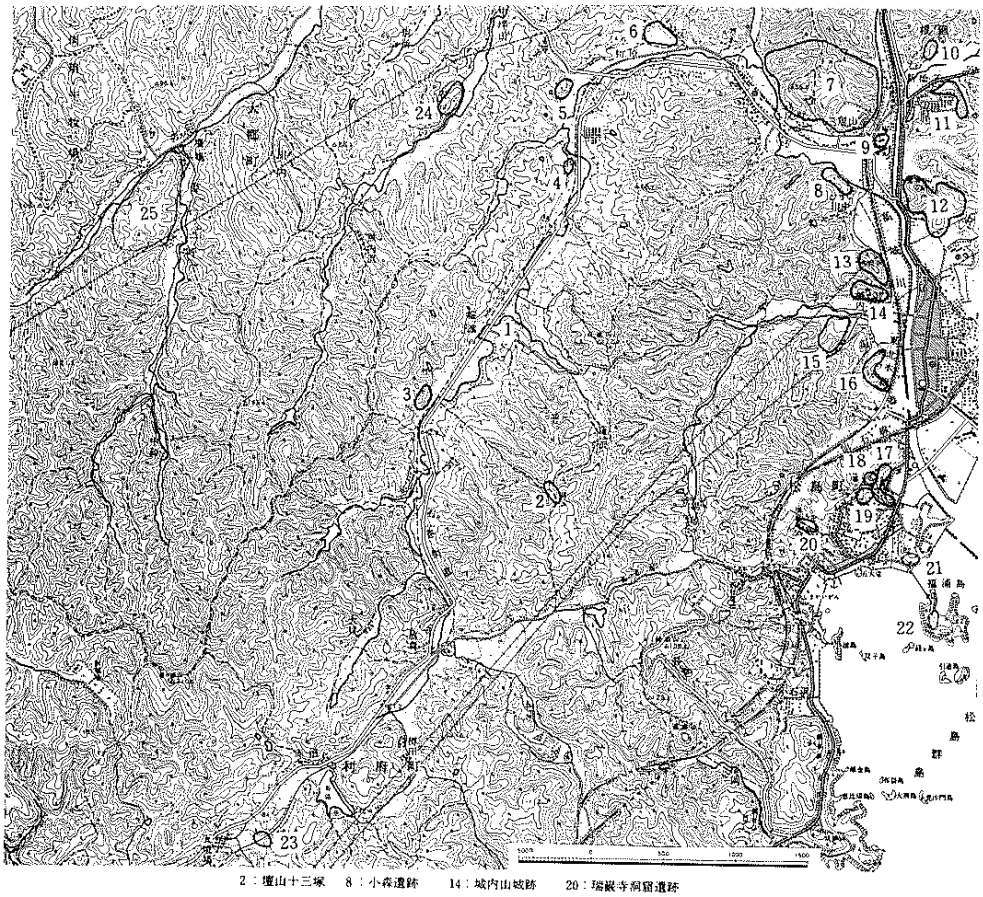
Ⅵ. 壇 山 A 遺 跡

1. 遺跡の位置

壇山A遺跡は松島町桜渡戸字壇山に所在し、松島町高城駅から西へ 2.5mの県道仙台－松島線の東側に位置する。

遺跡の所在する桜渡戸地区は松島町の南西部にあり、利府町との町境に近接している。周辺の地形をみると、松島丘陵から派生する小丘陵と沢が入り組んで複雑な地形を成しており、遺跡は田中川の右岸、丘陵に接した段丘上に立地している。

遺跡の周辺は背後に丘陵斜面をひかえ、沢に区切られたなだらかな台地状の地形である。今回の調査対象は遺跡の東部にあたる。

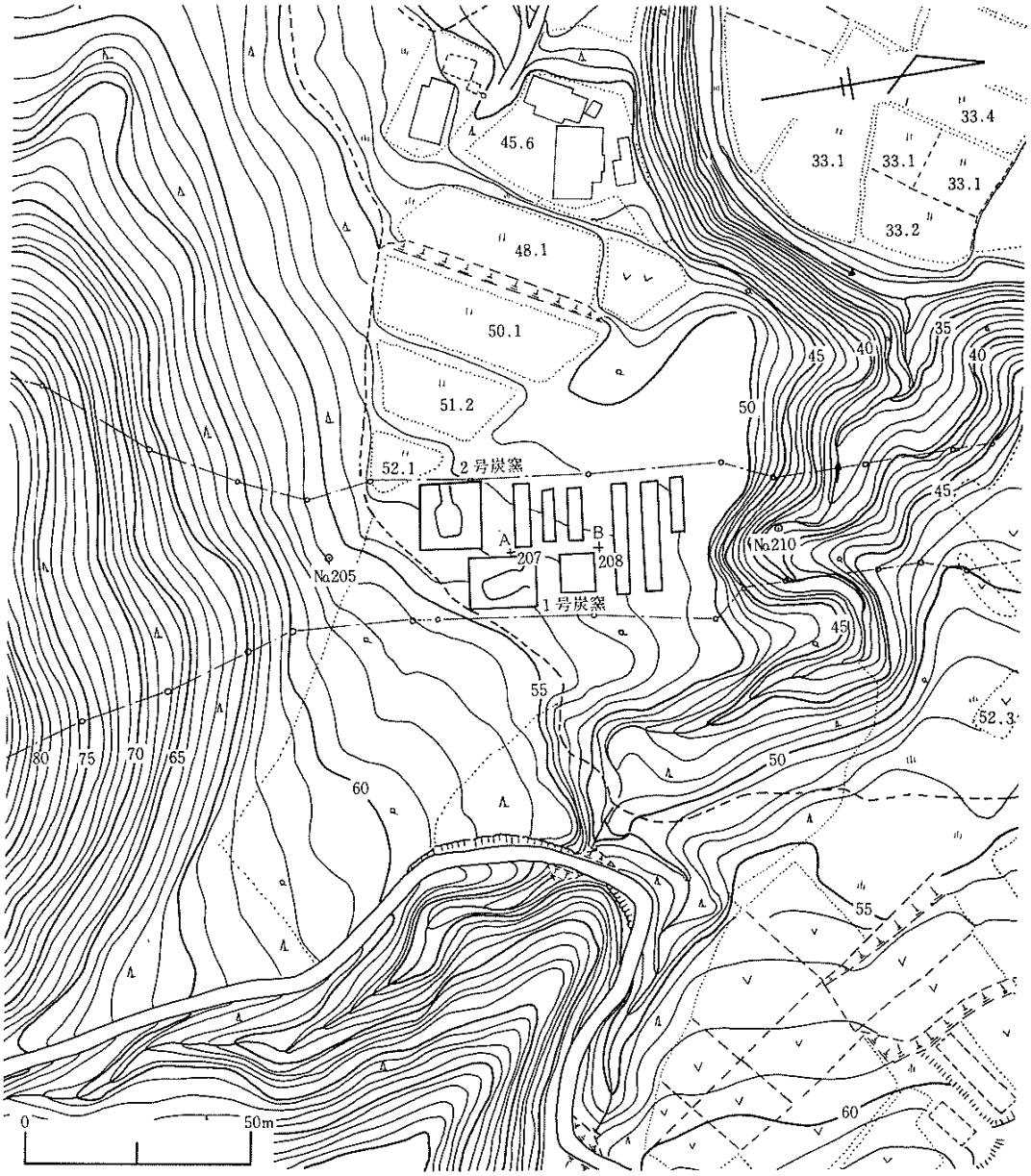


2：壇山十三塚　8：小森遺跡　14：城内山城跡　20：瑞巌寺洞窟遺跡
3：紫原遺跡　9：諏訪古墳　15：延命寺跡　21：通河崎遺跡
4：真宮遺跡　10：桐田遺跡　16：福命院下貝塚　22：福浦島貝塚
5：山下遺跡　11：音無遺跡　17：道珍浜貝塚　23：大沢窯跡
6：金井神遺跡　12：愛宕館跡　18：松島寺跡　24：大谷館跡
7：館山城跡　13：大日山遺跡　19：新富山貝塚　25：川内小屋館跡

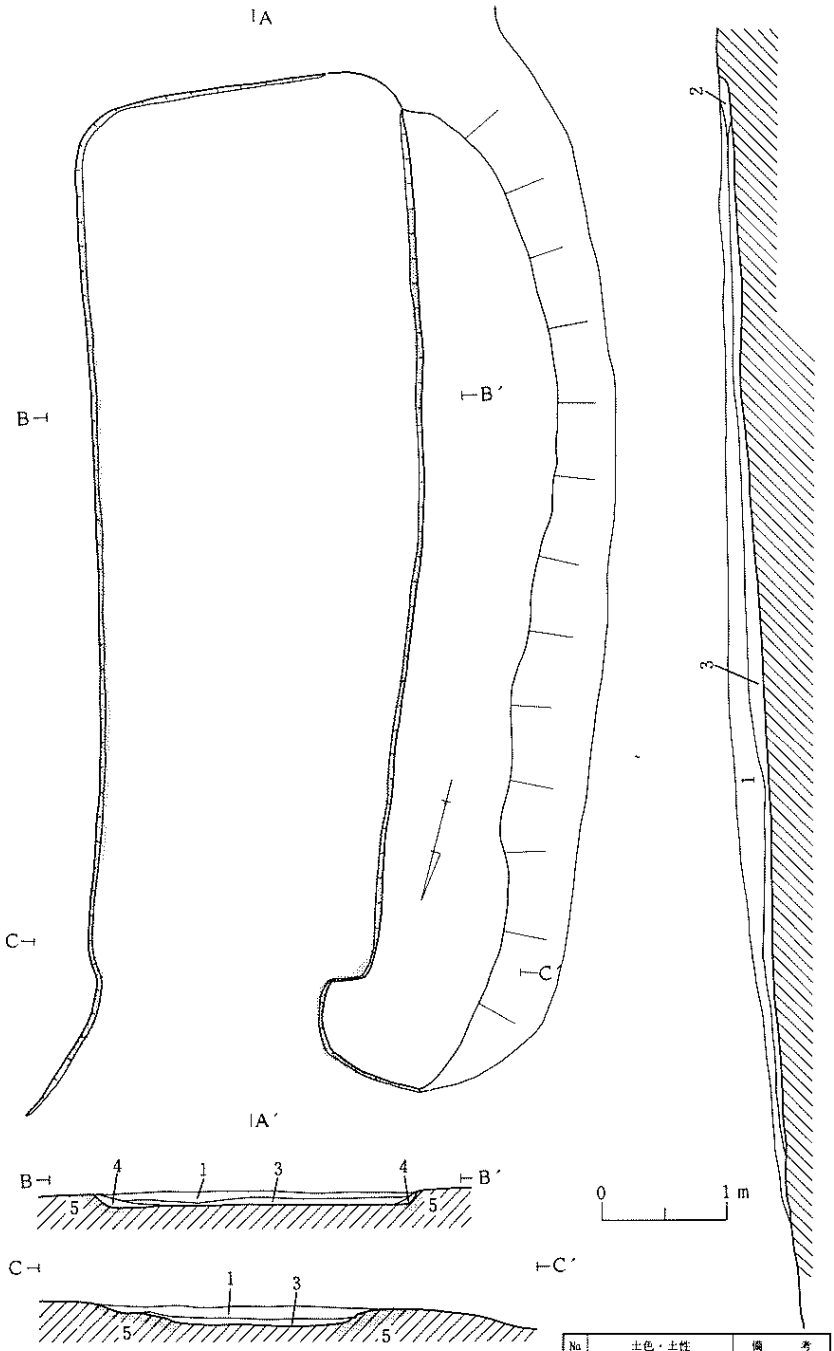
第145図　位置と周辺の遺跡

2. 調査の成果

調査は道路敷のセンター杭を基準としたトレンチによって遺構の確認作業を進め、炭窯2基が検出された部分を拡張・精査した。確認面は表土（極暗褐色シルト）下の地山（褐色シルト）面である。

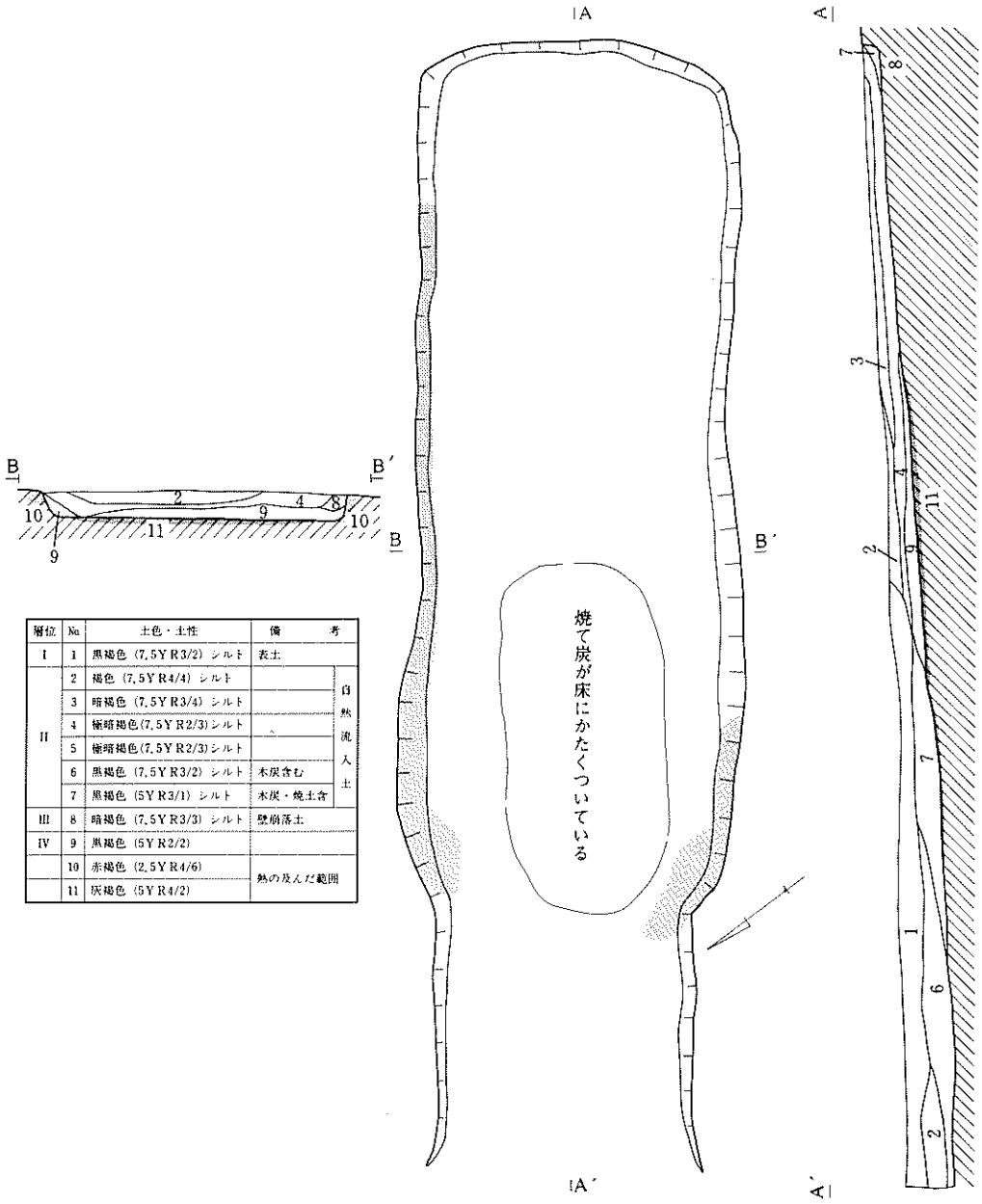


第146図　遺構配図



No	土色・土性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/4)シルト	
2		焼土・壁崩壊土
3	黒褐色 (5YR2/1)	木炭層
4		焼土・壁崩壊土
5	赤褐色 (2.5YR3/6)	熱の及んだ範囲

第147図　1号窯跡



層位	No	土色・土性	備考	
I	1	黒褐色（7.5YR3/2）シルト	表土	
II	2	褐色（7.5YR4/4）シルト		自然流入土
	3	暗褐色（7.5YR3/4）シルト		
	4	極暗褐色(7.5YR2/3)シルト		
	5	極暗褐色(7.5YR2/3)シルト		
	6	黒褐色（7.5YR3/2）シルト	木炭含む	
	7	黒褐色（5YR3/1）シルト	木炭・焼土含	
III	8	暗褐色（7.5YR3/3）シルト	壁崩落土	
IV	9	黒褐色（5YR2/2）		
	10	赤褐色（2.5YR4/6）	熱の及んだ範囲	
	11	灰褐色（5YR4/2）		

第148図　2号炭窯跡

1号炭窯跡

〔平面形・規模〕　炭化室・焚口部・前庭部から成る。平面形は炭化室から焚口部までの形が羽子板状であり、前庭部は「ハ」字状に開く。長さ約 8.2m、中軸線の方向はS－13°－Eである。

〔堆積土〕　3 枚認められる。壁際に焼土と地山崩壊土の混じった土がみられ、その上に木炭層が前庭部まで及び、さらに自然流入土が堆積している。

〔炭化室〕　長方形で、東側に若干湾曲している。長さ約 7m、幅は 2.2～2.5m、壁高約 15 ㎝で、側壁が焼けて赤変している。

〔焚口部〕　床面は平坦で、長さ約 60 ㎝、幅約 1.7mである。

〔前庭部〕　「ハ」字状に開く。残存長約 50 ㎝、幅 2.2mである。

2 号炭窯跡

〔平面形・規模〕　炭化室・焚口部・前庭部から成る。平面形は「羽子板状」を成す。長さは 8.4m、中軸線の方向はＳ－52.5°－Ｅである。

〔堆積土〕　5 層に大別される。Ⅳ層は木炭層、Ⅲ層は窯壁の崩壊土、Ⅱ層は自然流入土、Ⅰ層は表土である。炭化室の手前半分と前庭部には木炭層は分布しておらず、掻き出された結果であると思われる。

〔炭化室〕　長方形で、長さは約 7m、幅 2.2～2.3m、壁高約 20 ㎝である。側壁・床面とも中央部から焚口まで熱を受け、壁は赤化、床は灰褐色になっている。

〔焚口部〕　床は平坦であるが、前庭部に向かってやや傾斜している。長さ約 40 ㎝、幅約 1.2 m、壁高約 10 ㎝である。

〔前庭部〕　焚口部から連続した面で、床は若干窪んでいる。長さ約 1.2m、幅約 1.2m、壁高約 10 ㎝である。

硯沢・大沢窯跡　須恵器窯跡集計表

（注　→印は矢印の向く方向の遺構が新しい）

窯No	位置	重複	構造	煙道		焼成室		焼成室と燃焼室の境	燃焼室		前庭部	全体	煙道	焼成室	燃焼室	前庭部	方向
				平面形	壁	平面形	床面		平面形	床面	平面形	長・深m	径m	長×幅m・斜度	長×幅m	長×幅m	
A1a	A区斜面上	←A1b窯	半地下	——		長方形	皿状	徐々に狭くなる	長方形	平坦	不明	8.8・0.6		5.4×1.2・23	3.4×1.1		S-79°-E
A1b	A区斜面上	→A1a窯	半地下	——		長方形	皿状	徐々に狭くなる	長方形	平坦	長方形	6.2・1.2		2.5×1.3・35	2.4×1.4	1.3×2.0	S-79°-W
A2	A区斜面中	——	地下	長方形	垂直	長方形	平坦	——	——	—	——	(3.5・1.5)	0.8	(2.7×1.2)・19			N-24°-W
B2	B区斜面中	→土壙・溝	地下	——		対称胴張形	平坦	徐々に括れる	長方形	平坦	長方形	11.0・2.3		5.5×2.5・25	2.7×1.2	3.3×2.0	N-74°-E
B3	B区斜面中	←B2窯	地下	——		胴張形	階段	括れる	長方形	平坦	不整方形	9.3・1.7		5.4×1.9・35	1.9×1.1	2.0×2.6	N-62°-E
B4	B区斜面中	——	地下	不明	内傾	胴張形	平坦	括れ，スサ入粘土，pit	長方形	平坦	不整土壙状	9.6・1.8		4.6×1.8・15	1.6×0.8	3.4×2.2	N-50°-E
B5	B区斜面上	——	地下	——		胴張形	平坦	括れる	長方形	平坦	円形土壙状	9.3・2.0		4.0×1.7・25	1.8×0.9	3.5×3.8	N-9°-E
B7	B区斜面上	——	半地下	——		長方形		——	——	—	——			2.0×0.8			N-10°-E
B8	B区斜面中	→B2住→B9窯	地下	推定円	内傾	対称胴張形	平坦	括れ，スサ入粘土，pit	長方形	平坦	不整方形	10.5・1.6	0.4	5.3×2.3・14	2.2×1.0	3.0×2.5	N-3°-E
B9	B区斜面中	←B2住	地下	——		不整長方形	窪む	括れ，スサ入粘土，pit	長方形	平坦	不整形	12.7・2.1		6.0×1.4・24	3.1×0.8	3.6×1.4	N-12°-E
B10	B区斜面中	←B16窯	地下	円形	内傾	下膨胴張形	凹凸	括れ，スサ入粘土，pit	長方形	平坦	不整方形	9.1・1.6	0.4	4.7×1.3・27	1.4×1.0	3.0×2.8	N-18°-E
B14	B区斜面中	→B2住	地下	推定円	直立	対称胴張形	平坦	明瞭に括れる	長方形	平坦	円形土壙状	7.7×2.1	0.4	3.9×1.9・24	2.1×1.2	1.7×1.2	N-54°-W
B15	B区斜面中	→溝	地下	——		胴張形	平坦	徐々に括れる	長方形	平坦	不整形	9.2×1.6		3.6×1.7・20	1.8×1.0	3.8×3.7	N-35°-W
B16	B区斜面下	→B9，B10窯	地下	方形	直立	対称胴張形	平坦	括れる	長方形		方形	10.5×2.5	0.6	6.2×2.3・17	1.9×1.1	2.4×2.6	N-6°-E
B17	B区斜面下	前庭部に共通	地下	——		全体不明	平坦	変化なし，境は不明瞭	略方形	平坦	略方形土壙	(1.9×0.6)		(1.3×1.0)・0	0.6×0.6	1.0×1.4	N-85°-E
B18	B区斜面下	の掘り込み	地下	——		全体不明	平坦	変化なし，境は不明瞭	略方形	平坦	略円形土壙	(3.9×1.4)		(1.8×1.3)・0	1.1×1.1	1.0×0.9	N-86°-E
A2	斜面下位	→A2窯	半地下	——		全体不明	平坦	傾斜・焼け方が異なる	略方形	平坦	——	(2.6×1.3)		(1.6×0.8)・—	1.0×1.1	——	N-14°-W
A7b	斜面下位	→A7a窯	半地下	——		長方形	平坦	傾斜・焼け方が異なる	略方形	皿状	——	(2.8×1.0)		(2.2×0.9)・26	0.6×0.8	——	N-19°-E

硯沢・大沢窯跡　瓦窯跡集計表

（注　→印は矢印の向く方向の遺構が新しい）

窯No	位置	重複	構造	煙道		焼成室		焼成室と燃焼室の境	燃焼室		前庭部	全体	煙道	焼成室	燃焼室	前庭部	方向
				平面形	壁	平面形	床面		平面形	床面	平面形	長・深m	径m	長×幅m・斜度	長×幅m	長×幅m	
硯沢窯跡																	
A4	A区斜面裾	←A7窯	半地下	——	—	長方形	平坦	——	——	—	——	(7.5・0.4)		(3.6×1.0)・22			N-54°-W
A5	A区斜面裾		半地下	——	—	長方形	瓦敷	若干広がる	長方形	平坦	平坦面	(7.9・0.4)		(5.9×0.8)・26	2.0×1.0		N-59°-W
A6	A区斜面裾		半地下	——	—	長方形	平坦	若干広がる	長方形	平坦	——	7.9・0.4		3.9×0.8・20	2.5×0.8		N-65°-W
A8	A区斜面裾		半地下	——	—	長方形	瓦敷	若干広がる	長方形	平坦	——	7.1・0.5		4.4×0.6・25	2.7×0.7		N-65°-W
大沢窯跡																	
A1	斜面下位	——	半地下	——	—	長方形	瓦敷	段が付く	長方形	窪む	——	(4.2・0.6)		(2.8×0.8)・21	1.4×0.8		N-10°-W
A3	斜面下位	←A2窯	半地下	——	—	——	—	段が付く	長方形	平坦	ハ字状	(3.6・0.4)		(0.3×？)・21	2.1×0.9	1.2×1.8	N-14°-E
A4	斜面下位	——	半地下	——	—	——	—	段が付く	長方形	窪む	ハ字状	(2.4・0.3)			1.8×0.8	0.6×1.8	N-14°-E
A5	斜面下位	——	半地下	——	—	——	瓦敷	段が付く	長方形	平坦	長方形	(2.7・0.3)		(0.9×0.9)・23	1.2×1.0	0.6×1.1	N-25°-W
A6	斜面下位	——	半地下	——	—	——	平坦	——	——	—	——	(1.4・0.2)		(1.4×0.9)・21			
A7a	斜面下位	←A7a窯	半地下	——	—	長方形	瓦敷	——	——	—	——			(2.3×1.0)・16			
A8	斜面下位	——	半地下	——	—	長方形	瓦敷	括れ，段が付く	長方形	平坦	——	(3.7・0.4)		(2.5×1.1)・13	1.2×1.2		

Ⅶ. 考　　察

今回の調査で硯沢・大沢窯跡から発見された遺構は、須恵器窯跡18基、瓦窯跡11基、炭窯8基、窯跡9基、竪穴住居跡8軒、瓦捨場、土壙などがある。

これらの遺構を、その出土遺物を含めて検討すると、奈良時代・平安時代・近世の3時期に大別される。したがって、以下各時期ごとに考察する。なお、炭窯跡等のなかには時期を限定できる遺物が出土していないものがあり、それらは別に扱うことにする。

1．奈良時代の遺構について

(1)　硯沢窯跡の遺構

奈良時代に属する遺構は16基の須恵器窯跡と7軒の竪穴住居跡である。炭窯のB12号窯跡は厳密には奈良・平安時代のいずれに属するか不明であるが、便宜上平安時代の項にふくめる。

須恵器窯跡

〔遺構の分布〕　遺構の分布状況をみると、A地区の沢に沿った斜面上方に2基（A1a・A1b号）、A地区とB地区との中間の舌状地形の斜面上部に1基（A2号）、B地区の沢に沿って13基所在する。

A地区の2基は重複しているが、形状の類似性と、他の窯跡と違って半地下式窖窯であることから、時間的にはほぼ連続して構築使用されたものと考えられる。また周囲に窯跡が検出されておらず、単独で営まれた窯である。

A・B地区の中間に位置する1基は、その一部しか精査していないが、地下式窖窯であり、標高がB地区の大部分とほぼ同じであること、B地区の東端にあるB2号窯跡のさらに東側にも窯跡の存在する可能性が強いことから、B地区から並列する窯跡群の一部になることも考えられる。

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">硯　沢　窯　跡</th><th colspan="2">大　沢　窯　跡</th></tr>
<tr><td rowspan="2">奈良時代</td><td>須恵器窯跡16基</td><td rowspan="4">炭窯跡1基
（B12号）</td><td>須恵器窯跡2基</td><td rowspan="4">土壙群</td></tr>
<tr><td>竪穴住居跡7軒</td><td>竪穴住居跡1軒</td></tr>
<tr><td rowspan="2">平安時代</td><td>瓦窯跡4基</td><td rowspan="2">瓦窯跡7基</td></tr>
<tr><td>炭窯跡2基（A3・7号</td></tr>
<tr><td>近　　世</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">瓦捨場</td></tr>
<tr><td>時期不明</td><td colspan="2">炭窯跡3（B11・13・C1号）</td><td colspan="2">炭窯跡2基</td></tr>
</table>

Ｂ地区の 13 基は 3 箇所に集中しており、その他単独で 1 基（B5 号）、共通する掘り込みを伴う 2 基（B17・18 号）がある。

〔形態・構遺の特徴〕　16 基の窯跡を基本的な構造で分けると半地下式窖窯と地下式窖窯とがある。前者はA地区の 2 基（A1ａ・A1ｂ号）とＢ地区の小形の窯（B7 号）の合計 3 基だけで、他の 13 基はすべて後者の地下式である。また地下式窖窯は、構築されている位置・形態・構築方法等でいくつかの種類に分かれる。

半地下式窖窯－Ａ地区のA1ａ窯跡とA1ｂ号窯跡は平面形が短冊形で、断面が半円形、焼成室と燃焼室の区別が明瞭でなく、わずかに燃焼室は幅が狭まり、床の傾斜が異なる点で区別される。壁はスサ入り粘土で構築され、天井部も同様と考えられるなど、共通する特徴をもつ。これに対し、Ｂ地区のＢ7 号窯跡は基本的な構築方法や形態は類似すると思われるが、前者に較べてかなり小さい。

地下式窖窯－Ｂ地区とＡ・Ｂ地区の間に構築されており、Ａ地区の沢周囲には検出されていない。前述した集中箇所のほか、斜面上の位置、焼成室の平面形態、焼成室床面の構造、ほかの遺構との重複関係など次のような特徴がみられる。

①　斜面上の位置

ａ．斜面中位－11 基（A2・B2・3・4・8・9・10・14・15・17・18 号）

ｂ．斜面下位－1 基（B16 号）

ｃ．斜面上位－1 基（B5 号）

②　焼成室の平面形態－左右の側壁が対称になる胴張り形と、ほぼ胴張り形ではあるが対称にならないもの、不整の短冊形となるものがあるが、大きくは前者と後者との 2 種類に分けることが可能である。

ａ．左右対称の胴張り形－4 基（B2・8・14・16 号）

ｂ．その他　　－9 基

この 2 種類では他の部分でも違いが認められ、左右対称の胴張り形の窯跡はその他のものより焼成室と燃続室との境、燃焼室と前庭部の境が明瞭につくり出され、焼成室・燃焼室の床面がごく平坦で、全体として整った形態であるといえる。

③　焼成室床面の構造－多くは平坦で煙道方向に上るが、なかに特異なものがある。燃焼室中・奥部に溝が掘られて階段状になるものと、床面が全く傾斜しないものとである。

ａ．階段状の床－1 基（B3 号）　　－床面の傾斜約 35°

ｂ．水平な床　－2 基（B17・18 号）

ｃ．平坦な床　－10 基　　－床面の傾斜約 14～27°

床面の傾斜の点では階段状の床は段のないものよりかなり急になっている。また細かな特徴

としては、B9 号窯跡のように床に軽い段や浅い落ち込みのみられるものがある。

④　燃焼室と焼成室の境一括れた壁面にスサ入り粘土が貼付されているもの、小ピットがあるもの、床が舟底状に窪むものがある。

ａ．スサ入り粘土貼付、小ピット－4 基（B4・8・9・10 号）

ｂ．スサ入り粘土貼付－1 基（B15 号）

ｃ．小ピット　　－1 基（B16 号）

ｄ．舟底状窪み　　－4 基（B2・4・9・10 号）

ａとｂの場合は壁を抉って粘土を貼るもの、ピットに粘土を被せるもの、ピットだけが残って粘土は確認されていないものなどがあり、いずれも結果的に壁を張り出させている。Ｃは壁上部に斜めのピットが検出されており、ａ・ｂとは構築方法に違いがある。またｄの舟底状窪みはａと共通する窯が多く、燃焼室と焼成室との境が狭められて床が若干掘り窪められる結果となっている。

⑤　窯の構築－斜面上における窯の位置関係と対応して、B5 号窯跡は構築過程の特徴が異なっている。現状では斜面ではなく平坦面に位置しているが、付近が畑地造成に際して削平されているため、本来は傾斜地であったことも考えられるが、いずれにしても他の窯より傾斜はゆるやかであったと思われる。窯の構築は、前庭部分を深く掘り込んだのち、横に燃焼室・焼成室を掘り抜いているので、窯の外と前庭部・焚口部に高い段差が生じており、窯内の排水溝も窯外に抜けていかない結果となっている。

⑥　他遺構との重複関係(1)－他の遺構と重複している窯跡でも、相互に新旧関係があるものと、一定期間同時に存在している場合とがあり、ここでは後者について検討する。

この例に該当するのは、B2 号窯跡と B8 号窯跡、B14 号窯跡である。

・B2 号窯跡－窯として機能した最終床面を切って窯の軸線に直交する溝と土壙・ピットが掘られている。これら小遺構内や堆積土上面は熱を受けておらず、遺構を覆って窯壁・天井・地山崩壊土が堆積しており、窯として使用されなくなってから天井を残したまま再利用されていたと思われる。

・B8・B14 号窯跡－この 2 基は窯廃棄後、燃焼室から前庭部にかけて削平し、竪穴住居を構築している。窯内堆積土との切り合いはなく、住居の床は窯焼成室部分まで区別なく延びており、一部貼床している。焼成室部分はその上に窯壁・天井・地山崩壊土が堆積しており、前例と同様に窯の天井を残したまま住居に伴う掘り出し部として利用されている。

⑦　他遺構との重複関係(2)－上記以外に新旧関係の認められる重複をまとめると次のようになる。いずれの場合も窯本体の重複ではなく、窯内から掻きだした土や、前庭部端、煙道部分灰原など相互の切り合い・重複関係である。

・B3 号窯跡（古）→B2 号窯跡（新）
・B9 号窯跡（古）→（B2 号住居跡）→B9 号窯跡（新）
・B16 号窯跡（古）→B9 号窯跡（新）
・B16 号窯跡（古）→B10 号窯跡（新）

⑧　規模ー地下式窖窯の規模は第　表に一覧を示すとおり、窯全体・部位別の長さ・幅ともごく多様な数値となっている。B17・18 号窯をのぞいて、全体の長さは 7.7〜12.7m、焼成室と燃焼室を合わせた窯本体の長さは 5.4〜9.1m、焼成室は長さ 3.6〜6.2m、幅 1.3〜2.5m、燃焼室は長さ 1.4〜3.1m、幅 0.8〜1.2mで、確認面からの最大深さは 1.6〜2.5mと深い。

なお、半地下式窖窯からは筒状の焼台が若干出土しているが、地下式窖窯では床面にみられた須恵器甕破片や河原石が焼台として使用された可能性がある。

以上のように、須恵器窯跡は個々に検討すると、ごく多様な特徴をもっている。しかし、それらを大きくまとめて変遷を検討すると次のようになる。

〔窯跡群の変遷〕　B地区の須恵器窯跡群はその多くが 3 箇所に集中していることは前述のとおりである。それと個々の集中箇所での重複関係から窯跡群の変遷を検討する。

集中箇所はそれぞれ①3 基、②5 基、③2 基の窯跡で構成される。①の 3 基のうちB2 号とB3 号、②の 5 基のうちB8 号と（B2 号住）・B9 号、B16 号とB9・B10 号とが重複している。③には重複関係は認められていない。したがって、①と②の集中箇所については窯跡の変遷が想定される。

集中箇所　①B2・3・4 号　　②B7・8・9・10・16+号　　③B14・15 号窯跡

また各集中箇所にはそれぞれに形態・構造的特徴の類似した窯跡がある。それは①のB2 号窯跡、②のB16・B8 号窯跡、③のB14 号窯跡である。焼成室は左右対称の胴張形であり、燃焼室の形態、焼成室・燃焼室の床がごく平坦なことなど全体にほかの窯跡に較べて整った形態をしている。さらにこのうちB16 号を除く 3 基は窯として使用されなくなってから焼成室の天井が崩落する以前に住居跡の張り出し部として、あるいは溝・土壙等の施設が加えられて再利用されている。ほかの窯跡と重複しているB2 号とB16・B8 号が各箇所で時間的に古い窯ととらえられることからすると、B14 号窯跡を含め、この 4 基は各集中箇所のなかで最も初期に構築され、機能したと考えられる。また重複関係がB2 号では前庭部を、B16 号では煙道を覆われる、B8 号では窯を再利用しているB2 号住居跡の堆積土が切られているという状況であることから、ほかの窯はこの 4 基の窯が廃棄された後に構築されたことになる。

このように、須恵器窯跡の集中箇所は時期的に違いがあるのではなく、ほぼ同期間に機能し、その初期には特徴に共通点が多く形態の整ったB2・B16・B8・B14 号の 4 基が同時に存在

し、その後ほかの多様な特徴をもった窯が3つの集中箇所ごとに作られていき、そのうち3基はほかの用途に転用されたとみることが妥当であろう。また、②の集中箇所は基数が多く、重複関係から変遷する段階も他より多いので、窯が存続した時間的幅が他より長い可能性が考えられる。

出土遺物の特徴からみると、③箇所は遺物量が少なく比較しにくいが、①と②箇所では須恵器の特に坏類で、大筋では一致するが、細部形態に相違点がみられ、各箇所ごとに窯が変遷していることから工人の違いに起因することが考えられる。また、時期的には全体をほぼ同時期ととらえているが、②箇所は他より若干後的要素おも含んでいるという、遺構の変遷から指摘されたことと同様な結果が得られている。

このほか、B5号・B7号とB17・18号がある。B5号は出土遺物の特徴からみると②箇所の窯跡群に近い。B7号は須恵器窯としては地下式窖窯しか作られていないB地区に1基だけの半地下式窯であり、半地下式の須恵器窯はA地区でも同一時点では1基で存在しており、当遺跡での半地下式窯の在りかたを示していると思われる。B17・18号窯跡はほかの窯跡との違いが大きく、須恵器が出土してはいるものの時期・性格とも判断しがたい点を残している。

A地区の2基は半地下式の構造で、B地区の窯跡群とは位置する沢・構造とも異なっている。時期的には出土遺物からみてB地区の地下式窖窯より後出的な特徴をもつ。

竪穴住居跡

A2号窯跡の近くに1軒とB地区に6軒検出されている。方形を基調とする平面形と内部の床の状況やカマド・4本の柱穴・周溝など同時期の類例と基本的な構造は共通している。しかし、B2号とB4号が重複する窯跡を遺構の一部として再利用していること、B6号住居跡には粘土を貯蔵したらしい土壙が検出さていること、住居の配置が窯跡と同様な標高に並び、平面的な広がりがみられないことなど、一般的な集落とは異なっており、窯跡群と一体となった遺構と思われる。住居としての普遍的な施設を備えていることから、須恵器製作工人の住居及び作業場を兼ねたものであろう。ただし、窯と重複するB2号とB4号住居跡はB地区窯跡群の初期ではなく次の段階に構築されたことが判明しているが、ほかの住居跡については変遷するどの窯と同時に存在したかはわからない。

(2)　大沢窯跡の遺構について

大沢窯跡の2基の須恵器窯跡は保存状態は良くないが、沢に面した斜面裾部に構築され、いずれも半地下式窖窯で、焼成室から燃焼室にかけての形は長方形と推定される。焼成室と燃焼室との境は平面的には明確でないが、床面の傾斜は燃焼室が水平に近く、焼成室は先端に向か

って上がることにより傾斜が異なっており、また床の焼け方が焼成室のほうが著しいという点で区別される。

これらの特徴を同じ半地下式窖窯である硯沢窯跡A1a・A1b号窯跡と比較すると、形態では硯沢窯跡の2基が燃焼室より焼成室の幅が若干広がるのに対し、大沢窯跡はそのような変化はみられない。規模の点では、燃焼室の幅は大沢窯跡のほうがやや大きく、焼成室の幅は硯沢窯跡のほうが大きいという形態の違いを反映した差が生じている。燃焼室の長さは硯沢窯跡が長い。つまり、大沢窯跡の2基は全体が長方形で燃焼室が短くほぼ方形、硯沢窯跡では焼成室が若干膨らんで燃焼室が長いという違いがある。焼成室全体の規模はいずれも不明で比較できない。位置する場所が沢に面した斜面裾部、多数の群を成さない点、補修の痕跡がみられないことなどは共通している。

出土遺物を検討した結果によると、硯沢窯跡の地下式窖窯群とほぼ共通する時期に比定され、形態を比較した前述の半地下式窖窯より若干古いこととなった。

2．奈良時代の遺物について

奈良時代の遺物は須恵器窯跡・竪穴住居跡などから須恵器と土師器が出土している。出土量は須恵器が大半を占める。ほかに焼台・砥石があるが、考察は省略する。

(1)　須恵器の特徴と分類

須恵器には、坏・高台付坏・椀・皿・盤・蓋・甕・鉢・壷・甑・水瓶の11種類の器種がある。ここでは、それらの各器種について、主に形態的側面から検討を加え、坏についてはさらに製作技法からも観察していくことにする。

〈坏〉

坏は概して浅めな皿状のものと、深めの椀状のものとに大別することができる。以下、前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。また、両者はさらに細部の形態の違いから、それぞれいくつかに分類される。

坏Ⅰ類（皿状坏）

ⅠA類．体部から口縁部にかけて、直線的もしくは外反ぎみに立ち上がるものである。製作技法からみると、底部の全面に回転ヘラケズリされるもの（I）、同じく手持ちヘラケズリ（ii）・ナデ調整されるもの（iii）のほか、ヘラ切り痕を残して再調整が施されないもの（iv）などの種類がある。

ⅠB類．体部から口縁部にかけての形態はA類と同様であるが、底部の周縁がやや浮き上が

るため、かるい丸底風になるものである。いずれも底部は全面が回転ヘラケズリされる。

ＩＣ類．体部がやや丸みをもって立ち上がるものである。製作技法によって、底部が全面回転ヘラケズリされるもの（I）と、手持ちヘラケズリされるもの（ii）とに分かれる。

ＩＤ類．体部がやや丸みをもつ点ではC類とさして異ならないが、底部の周縁がやや浮き上がり、かるい丸底風になるものである。いずれも底部は全面に回転ヘラケズリされる。

ＩＥ類．体部が直線的、口縁部が外反ぎみになるものである。立ち上がりはA類的であるが、より深めで、その分底部が小さめになる。底部全面が回転ヘラケズリされるもの（I）と、底部中央にヘラ切り痕を残して周縁が回転ヘラケズリされるもの（ii）、中央に静止糸切り痕を残して周縁が回転ヘラケズリされるもの（iii）とがある。

ＩＦ類．主に体部中位に稜をもち、体部下端から稜にかけて直線的で、稜から口縁部にかけてはやや外反ぎみに立ち上がるものである。製作技法によって、底部が全面回転ヘラケズリされるもの（I）、底部中央にヘラ切り痕を残してその周縁が回転ヘラケズリされるもの（ii）、ヘラ切り痕を残して再調整が施されないもの（iii）の三者に分かれる。

ＩＧ類．体部中位に稜をもち、体部下端から稜にかけて丸みをもって立ち上がり、稜から口縁部にかけて外反ぎみもしくは直線的に外傾するものである。底部は全面が回転ヘラケズリされるもの（ｉ）と、手持ちヘラケズリされるもの（ii）とがある。

ＩＨ類．体部下位に稜をもち、稜から下・上とも直線的に外傾するものである。製作技法では底部全面が回転ヘラケズリされるもの（ｉ）と、手持ちヘラケズリされるもの（ii）とがあり、この再調整は体部下位まで及び、稜から下を削り出している場合が多い。なおiiでは底部中央に糸切り痕を残す。

坏Ⅱ類（椀状坏）

ⅡＡ類．体部下位が丸みをもち、上位から口縁部にかけて外反するもので、いずれも底部全面がナデ調整される。なお、一部にナデによって半ば消されかけた状態でヘラ切り痕の認められるものがあり、これによって本類の底部切り離し技法がほぼ判明している。

ⅡＢ類．体部中・下位に稜をもち、稜から下は概ね直線的、稜から上は外反ぎみになるものである。製作技法によって、底部が全面回転ヘラケズリされるもの（I）、同じくナデ調整されるもの（ii）、静止糸切り痕を残して再調整が施されないもの（iii）、回転糸切り痕を残して再調整が施されないもの（iv）に分かれる。

ⅡＣ類．体部から口縁部かけて直線的に立ち上がるものである。底部が全面に回転ヘラケズリされるもの（ｉ）と、底部中央にヘラ切り痕を残して周縁が回転ヘラケズリされるもの（ii）とがある。

ⅡＤ類．体部から口縁部にかけて直線的かつ急角度で立ち上がる、かなり直立に近い形態の

〈須恵器坏分類表〉

坏Ⅰ類（R皿状坏S）	ⅠA．外傾 or 外反・平底	底部全面再調整	回転ケズリ（ⅰ）	
			手持ちケズリ（ⅱ）	
			ナデ（ⅲ）	
		底部周縁回転ケズリ	中央ヘラ切り痕（ⅳ）	
			中央静止糸切り痕（ⅴ）	
		底部ヘラ切り・調整なし（ⅵ）		
	ⅠB．外傾 or 外反・丸底風	底部全面回転ケズリ		
	ⅠC．丸み外傾	底部全面再調整	回転ケズリ（ⅰ）	
			手持ちケズリ（ⅱ）	
	ⅠD．丸み外傾・丸底風	底部全面回転ケズリ		
	ⅠE．体部直線的 口縁部外反ぎみ	底部全体回転ケズリ（ⅰ）		
		底部周縁回転ケズリ・中央ヘラ切り痕（ⅱ）		
	ⅠF．体部中位に稜 稜以下直線的 稜以上外反ぎみ	底部全面回転ケズリ（ⅰ）		
		底部周縁回転ケズリ・中央ヘラ切り痕（ⅱ）		
		底部ヘラ切り・調整なし（ⅲ）		
	ⅠG．体部中位に稜．以下 丸み．以上外反ぎみ	底部全面再調整	回転ケズリ（ⅰ）	
			手持ちケズリ（ⅱ）	
	ⅠH．体部下位に稜． 以上・以上直線的	底部全面～体下端再調整（体下端ケズリ出し）	回転ケズリ（ⅰ）	
			手持ちケズリ（ⅱ）	
坏Ⅱ類（R椀状坏S）	ⅡA．体下位丸み．上位～外反	底部ヘラ切り後全面ナデ		
	ⅡB．体部中・下位稜 稜以下直線的 稜以上外反ぎみ	底部全面再調整	回転ケズリ（ⅰ）	
			ナデ（ⅱ）	
		底部静止糸切り・調整なし（ⅲ）		
		底部回転糸切り・調整なし（ⅳ）		
	ⅡC．直線的外傾	底部全面回転ケズリ（ⅰ）		
		底部周縁回転ケズリ・中央ヘラ切り痕（ⅱ）		
	ⅡD．直線・直立的	底部回転ケズリ		
	ⅡE．体下位丸み．上位～直線的	底部全面回転ケズリ		
	ⅡF．丸み外傾．底部小さめ	底部全面回転ケズリ		
	ⅡG．丸み外傾 底径ⅠFより小	底部全面回転ケズリ（ⅰ）		
		回転糸切り・調整なし（ⅱ）		
	ⅡH．小形品を一括 器形はⅡE類似	底部全面再調整	回転ケズリ（ⅰ）	
			手持ちケズリ（ⅱ）	

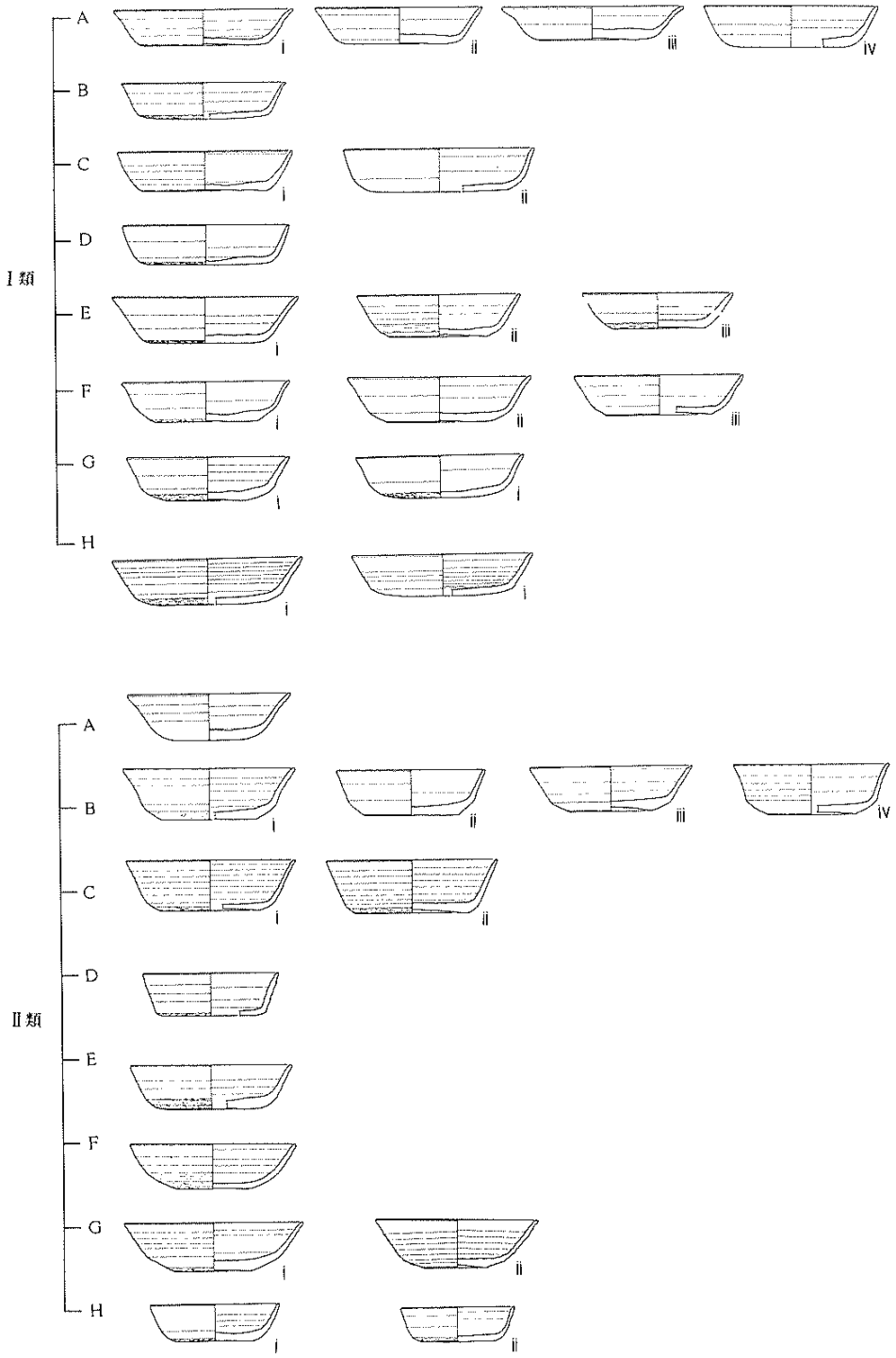
ものである。底部は中央が欠損するが、残存する周縁は回転ヘラケズリされている。

ⅡE類．主に体部下位に丸みをもち、稜から上が直線的になるものである。なかには丸みが弱く、かるい稜を成すものもある。底部はいずれも全面が回転ヘラケズリされている。

ⅡF類．全体に丸みをもって立ち上がり、口縁部に比して底部がいくぶん小さめになるものである。いずれも底部は全面が回転ヘラケズリされる。

ⅡG類．F類と同様全体に丸みをもって立ち上がる形態であるが、底部の口径比はそれよりかなり小さくなる。底部は全面回転ヘラケズリされるもの（ⅰ）と、回転糸切り痕を残して再調整が施されないもの（ⅱ）とがある。

ⅡH類．主に体部が丸みをもつE類に類似した器形の小形品を一括したものである。底部が



第149図　須恵器坏分類図

全面回転ヘラケズリされるもの（ｉ）と、手持ちヘラケズリされるもの（ii）とがある。

〈高台付坏〉

高台付坏にも坏と同様に皿状のものと椀状のものがあり、これらをそれぞれⅠ類・Ⅱ類とする。また両者は細部の形態の違いからいくつかに分類される。

高台付坏Ⅰ類（皿状）

ⅠA類．体部下位に丸みをもち、上半は直線的に短く立ち上がる。高台は短くおさまる。

ⅠB類．体部中位に稜をもち、稜から口縁部にかけて直線的に短く立ち上がる。高台は短くおさまる。

ⅠC類．坏部はB類と同様であるが、高台が長い。

ⅠD類．坏部の形態および高台が短い点はB類と同様であるが、高台径の口縁比がより小さいものである。

高台付坏Ⅱ類（椀状）

ⅡA類．体部下位に丸みをもち、上半は直線的に立ち上がる。

ⅡB類．体部下端が強く屈曲し、口縁部まで直線的かつ急角度で立ち上がる。

ⅡC類．坏部はB類と同様の形態であるが、高台下端の肥厚するのが特徴的である。

ⅡD類．坏部が全体に丸みをもって立ち上がるものである。高台下端がC類同様肥厚する。

〈椀〉

椀には高台の付くものと付かないものとがあり、これらをそれぞれⅠ類・Ⅱ類とする。また両者は細部の形態の違いから、さらにいくつかに分類される。

椀Ⅰ類（高台付）

ⅠA類．体部下端が強く屈曲し、口縁部まで直線的に立ち上がる。

ⅠB類．椀部はA類と同様の器形であるが、A類の高台下端が薄いのに対し、本類では肥厚することが特徴である。

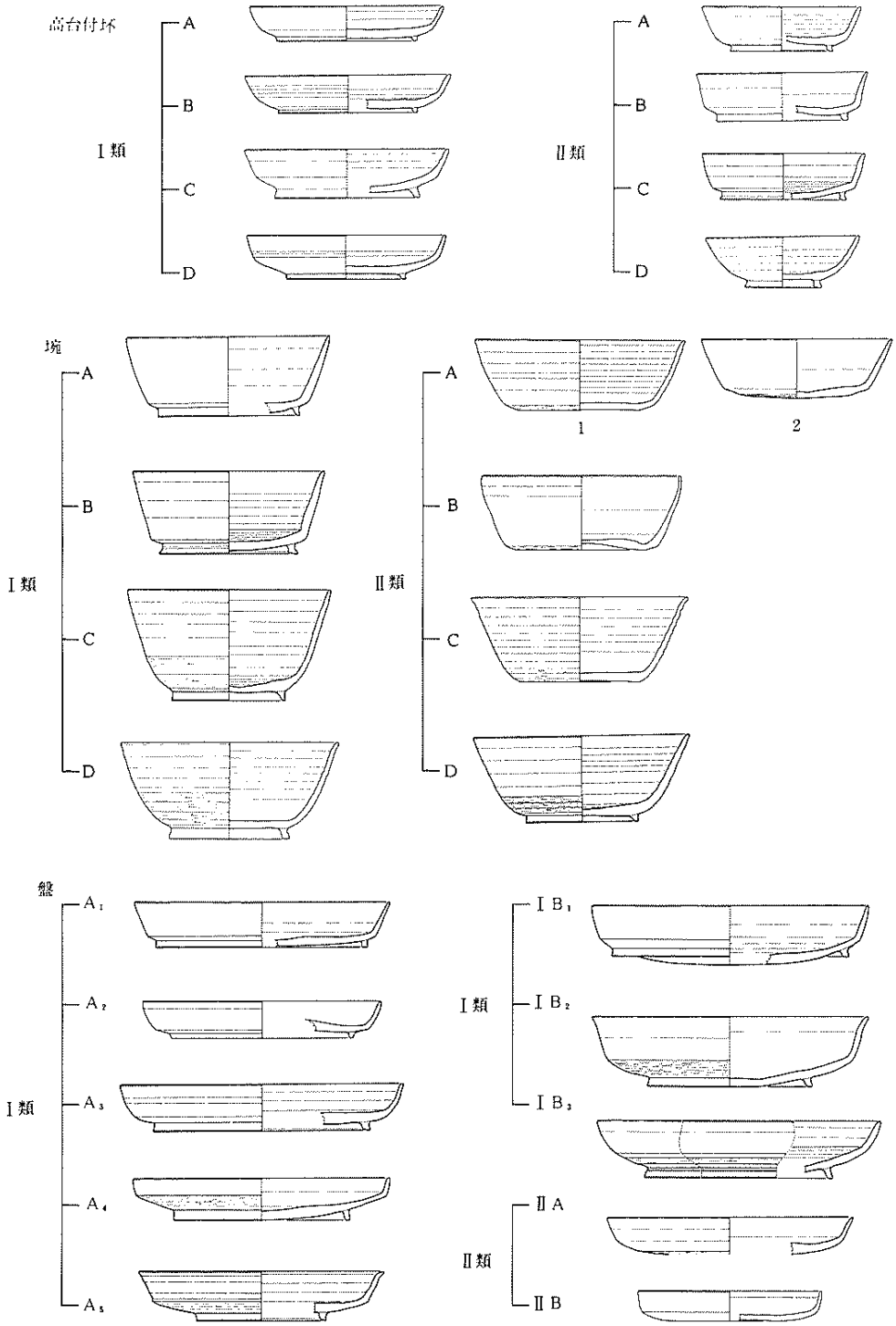
ⅠC類．体部下位が丸みをもち、上半は直線的に立ち上がる。

ⅠD類．体部から口縁部まで全体が丸みをもって立ち上がる。

椀Ⅱ類（高台なし）

ⅠA類．体部下位がやや丸みをもち、体部上半が直線的に立ち上がる。底部の再調整が回転ヘラケズリのもの（1）と手持ちヘラケズリのもの（2）とがある。

ⅡB類．体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや内弯する。



第150図　須恵器分類図

ⅡC類．体部が直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反する。

ⅡD類．体部から口縁部まで丸みをもって立ち上がる。体部中位に１条の隆線が巡る。

〈皿〉

皿は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる一形態のみである。

〈盤〉

盤には高台の付くものと付かないものとがあり、これらをそれぞれⅠ類・Ⅱ類とする。また両者は形態的特徴からさらにいくつかに分類される。

盤Ⅰ類（高台付）

ⅠA類．概して浅めのもので、細部の形態の違いから1～5類に細分される。

ⅠA1類－体部下端が強く屈曲し、その上は直線的に立ち上がる。

ⅠA2類－体部下端の屈曲はゆるく、体部中・下位に丸みをもつ。

ⅠA3類－A2類とほぼ同様の形態であるが、より大形である。

ⅠA4類－体部に稜をもち、稜から上は短く直立し、口径に比して高台がかなり小さい。

ⅠA5類－体部に段が付き、段から上が直線的に外傾、高台はA4と同様小さい。

ⅠB類．概して深めのもので、細部の形態の違いから1～3類に細分される。

ⅠB1類－体部にゆるい稜をもち、稜から上はやや丸みをもって立ち上がる。

ⅠB2 類－体部にゆるい稜をもち、稜から上は外反ぎみに立ち上がる。高台は口径に比してかなり小さい。

ⅠB3類－体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がる。高台は小さい。

盤Ⅱ類（高台なし）

ⅡA類．体部から口縁部にかけて開きぎみに立ち上がるもので、いわゆる皿形を呈する。

ⅡB類．体部下端が丸みをもち、体部から口縁部にかけて直立する。A類に比して小形である。

〈蓋〉

蓋は組み合う器種の違いによって次の3類に分かれる。

蓋Ⅰ類

口径が 22～28 ㎝で、その大きさから盤類に組み合うと推定されるものである。破片資料が多く、形態は必ずしも明らかでないが、天井部が高く丸みをもつものと、低く平坦なものとがあり、後者が主体を占める。つまみは欠損したものが多いなかで、中央がやや突出するものと、

ややくぼむものとがある。

蓋Ⅱ類

口径が 15～21 ㎝で、高台付坏や椀などに組み合うと推定されるものである。つまみをもつものともたないものとがあり、前者をＡ類、後者をＢ類とする。

ⅡＡ類．つまみをもつ。天井部の低い平坦なものが主体を占めるが、高く丸みをもつものもある。つまみは中央が突出するもの、くぼむもの、平坦なものなどがあって斉一性に欠け、また上記の天井形態との関連性も認められない。

ⅡＢ類．つまみをもたない。天井部に明瞭な平坦面を有するものと、天井部全体がやや丸みをもつものとがある。

蓋Ⅲ類

口径が 15 ㎝以下と小さいもので、天井部が概ね平坦かつ口縁部が長く下垂する形態から、短頸壷に組み合うと推定されるものである。つまみは中央が突出する形態のものが若干認められる。

〈甕〉

体部上半から口頸部にかけて残存しているものが多く、全体の器形を知り得るものは少ない。器形はいずれも口頸部が長く、大きく外反する。法量によって 2 つに分類される。

甕Ⅰ類．口径が 35～55 ㎝の大形のものである。

口縁端部は外側の上下端や上端・下端を引き出して口縁帯をつくり出している。なかには口縁帯直下に 1 本の隆線が巡るものもある。口頸部には、平行沈線とその間に櫛描き波状文・櫛描き波状文・平行沈線が描かれている。平行沈線間に櫛描き波状文が描かれる場合は、櫛描き波状文は平行沈線が引かれた後に施文される。体部外面には平行叩き目が施されるものもある。

甕Ⅱ類．口径 20～30 ㎝前後の小形のものである。

口縁端部は外側の上下端・上端・下端を引き出して口縁帯をつくり出しているものと、丸く仕上げているものがあり、前者が非常に多い。口頸部から体部あるいは体部の外面には平行叩き目の施されているものがある。内面は同心円状のオサエ痕が認められるものもあるが、多くはナデ調整によってすり消されている。

このほか、甕の体部破片のなかには外面に矢羽根状の叩き目が施されているものがある。

〈鉢〉

量的には少ないが、器形の特徴によってⅠ～Ⅳに分類される。

鉢Ⅰ類

体部は丸みをもって立ち上がり、頚部がくびれて口縁部が短く外反するものである。最大径が体部にあり、口縁端部は口縁帯をもつものと、丸く仕上げられているものとがある。体部外面に手持ちヘラケズリ、体部内面に回転刷毛目が認められる。

鉢Ⅱ類

体部から頚部にかけて丸みをもって立ち上がり、口縁部が短く外反するものである。口縁端部は口縁帯をつくり出しているものと、丸く仕上げられているものがある。体部外面には平行叩き目や、平行沈線間に櫛描き波状文が描かれているものがある。

鉢Ⅲ類

体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものである。口縁端部は平坦に仕上げられている。外面の体部下端から底部に回転ヘラケズリが施されているものがある。

鉢Ⅳ類

頚部でわずかにくびれて口縁部が直立するものである。口縁端部は平坦に仕上げられている。

〈壷〉

長頚壷

いずれも口頚部破片で、全体の器形は不明である。頚部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。口縁端部は外側の下端を引き出して口縁帯をつくり出している。

短頚壷

いずれも口縁部から体部上半にかけての資料である。口縁部は短く直立する。体部上半は肩が張るものや丸みをもつものがある。口縁端部は内側が削がれたようになるもの・平坦なもの・丸く仕上げられているものなどがある。体部外面には平行叩き目が施されるものもある。

このほか高台の付く壷の底部破片があり、体部下端回転ヘラケズリが施されるものや、底部に「±」とヘラ書きされたものもある。

〈甑〉

いずれも体部から口縁部にかけて変化なく外傾するもので、底部の判明するものでは中央に円孔があり、その周囲に紡錘形の孔が4個穿たれる形態である。体部中位やや上よりに左右一対の把手が付くが、その形状には手づくねによる舌状を呈するものと、ヘラケズリされた角棒状のものとがある。

〈水瓶〉

口頸部の破片が１点だけ出土している。細い頸部が直立し、口縁部は外反する。端部外側に小さな口縁帯をつくり出している。

(2)　須恵器の出土状況

ここでは前節で類型化された須恵器のうち、比較的数量が多くかつその多様性を端的に把握しうると考えられた坏および高台付坏について、各遺構における出土状況から、その属性を検討することにする。

〈硯沢窯跡〉

硯沢窯跡では、須恵器坏は窯跡のほか住居跡や遺構外の堆積層から出土している。このうち、大部分は窯跡から出土したもので、その主なものを出土状況の表から抽出すると次のようになる。

（B2・3 号窯跡等から出土したもの）

ＩＡｉ－B2 号窯灰原、B3 号窯灰原・堆積土、B16 号窯床面・堆積土

ＩＢ　－B2 号窯灰原・床面・堆積土、B3 号窯灰原、B9 号窯灰原

ＩＦiii－B3 号窯灰原

ＩＣｉ－B3 号灰原、（B16 号窯堆積土）、ＩＤ－B2 号窯溝・堆積土、B3 号窯灰原

ⅡＢiv－B2 号窯溝・堆積土、（B15 号窯堆積土）、ⅡＢiii－B2 号窯一次床面

ⅡＨii－B2 号窯溝・堆積土、（B16 号窯堆積土）、A1 号住居床面

（B8・10 号窯跡等から出土したもの）

ＩＡii－B9 号窯灰原、B4 号窯床面

ＩＥｉ－B9 号窯灰原、B10 号窯灰原、（B2 号住居 4 層）

ＩＦii－B9 号窯灰原、ＩＧｉ－B10 号窯下方灰原

ＩＨｉ－B9 号窯灰原、B10 号窯灰原・床面

ⅡＡ　－B8 号窯床面、B9 号窯床面、ⅡＣii－B10 号窯床面

ⅡＥ　－B9 号窯灰原、B10 号窯灰原・堆積土、B16 号窯灰原

各類の出土状況のうち、ＩＡｉ・ＩＢ・ＩＣｉ・ＩＤ・ⅡＢiii・ⅡＢiv・ⅡＨii類の場合についてみると、これらはB2 号・B3 号の両窯もしくはいずれか一方から主体的に出土している。ただし、B9 号・B16 号窯やA1 号住居など他の遺構から出土することもあるが、その場合は堆積土からの出土であったり、数量に乏しいなど、必ずしも良好な出土状況ではない。このB9 号窯以下一部の伴出例との関係は後でふれることにするが、以上のようなB2 号・B3 号窯を中心とした坏のあり方は、一つの土器群としてのまとまりを想定させるものである。

〈大沢窯跡〉須恵器の出土状況

出土地点 ＼ 分類		須恵器坏																														須恵器高台付坏							
		ＩＡ類				ＩＢ類	ＩＣ類		ＩＤ類	ＩＥ類			ＩＦ類			ＩＧ類		ＩＨ類		ＩＩＡ類	ＩＩＢ類				ＩＩＣ類		ＩＩＤ類	ＩＩＥ類	ＩＩＦ類	ＩＩＧ類		ＩＩＨ類		Ｉ類				ＩＩ類			
		i	ii	iii	iv		i	ii		i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	i	ii		i	ii	iii	iv	i	ii				i	ii	i	ii	A	B	C	D	A	B	C	D
B2窯	灰原	1				1																																			
	一次床面																						1																		
	溝								1															1									1	1				1			
	床面					1																																			
	堆積土					4			1															2									1					1			
B3窯	灰原	3				1	2		2			1																						5							
	床面																																	2					1		
	堆積土	2						1																						1				2							
B4窯	床面		1																															1							
B5窯	堆積土				1																													2							
B8窯	灰原																																					1			
	床面																			9																					
	堆積土																																	1							
B9窯	灰原		1			1				1				2				1										1							1						
	床面																			2																1					
B10窯	灰原									1								4										1									2			
	下層灰原															1																									
	床面																	1								1															
	堆積土																											1								1					
B14窯	堆積土																															1									
B15窯	堆積土														1									1																	
B16窯	灰原																											1													
	床面	1																							1																
	堆積土	1					1														1												1			1	2			
B2住	堆積土1																													3											
	堆積土4									2																															1
B4住	堆積土																																	2							
B5住床・カマド				1													1																								
B7住	周溝																													2						1					
B2～4窯	灰原	1																				1		1				1				1	1					1			
B11窯	付近									1			1			1												6						4			2	1			
B区	表土	1								2						1	1	1										2		1		2						1			
A1a窯	貼床																														1										
	堆積土																				1																				
A1b窯	堆積土																										1													2	
A1住	床面																																1								
〈大沢窯跡〉																																									
A2窯											1								3																						
B1住堆積土												1							1																						

〈硯沢窯跡〉 須恵器の出土状況

出土地点	分類	須恵器・椀									須恵器・盤											須恵器・蓋				須恵器甕		須恵器鉢				須恵器					円面硯	土師器・坏						土師器甕	
		I類				IIA類		II類			IA類					IB類			II類			I類	II類		III類	I	II	I類	II類	III類	IV類	皿	壺	甑	水瓶	高坏		a類	b類		c類			a	b
		A	B	C	D	1	2	B	C	D	1	2	3	4	5	1	2	3	A	B		A	B		I	II													1	2	1	2	3		
B2窯	灰原																								5																				
	溝										1														1								1												
	床面																				1																								
	堆積土										1								2						1	1	1				1	1													
B3窯	灰原	1					2							1		1			1	1	2	6			1	2			1			1													
	床面										1			1		2	1			1	4	4																							
	堆積土										1								3			4		1																					1
B4窯	床面																					2		1																					
B5窯	堆積土			1																		1		1	2	1	1						2												
B7窯	堆積土																				1				1																				
B8窯	灰原																					1			1	2	1				1														
	床面																																				1								
B9窯	灰原																					1		1	1	4			1				2		1										
	堆積土																						1				2																		
B10窯	灰原																					2			1												1								
	下層灰原																																							1				1	1
	堆積土																				1				5	1							2				1								
B14窯	床面																								1																				
	堆積土																								1									3											
B15窯	溝																								1																				
	堆積土																								1																				
B16窯	灰原					1							3								4	1																							
	床面			1									2											1	1	2	1											1							
	堆積土																	1				3			2	2							2				2								
B18窯	堆積土																								1																				
B2住	堆積土4				1																						1																		
	床面																																						1		1				
B4住	堆積土					1																																							
	煙道																								1																				
	周溝																																									1		
B5住	床・カマド							2																	1	1														1					
B6住	床面																									1																			
	堆積土																									1																			
B7住	周溝																																1			1									
	床面他																					2			1	2																			
2～4窯	灰原										1	1										1		1	3	3		2	1										1					
B11窯	付近								1																3																				
B区	表土			1						1					1						1				1		1	1			1	3	2			2									
A1a窯	貼床		1																																										
	堆積土																									1																			
A1b窯	堆積土																					1								1															
A1住	周溝																					1																							
	床面																							1																					

〈大沢窯跡〉

A2窯	灰原																									1	1	1																	
B1住	堆積土																					1				1		1																	

一方ⅠAⅱ・ⅠEⅰ・ⅠFⅱ・ⅠGⅰ・ⅠHⅰ・ⅡA・ⅡCⅱ・ⅡE類の場合は、上記のB2号・B3号窯からは全く確認されておらず、かわってB8号・B9号・B10号窯から主に出土する。この3窯以外では、B4号窯・B2号住居などからそれぞれⅠAⅱ・ⅡE・ⅠEⅰ類が伴出するが、いずれも少量か、もしくは堆積土からのものである。この他すでにふれたようにB9号窯ではB2号窯で主体を占めるもの（ⅠB類）が少量出土している。このことについてはB9号窯出土のものの内容をみる限り、その組成はB10号窯に近く、B2号・B3号窯に代表されるまとまりと比較すると、大きく異なっている。以上のことからすれば、B2号・B3号窯のものと一部で共通する可能性を有するにしても、大筋ではそれらと別な内容のB8号～10号窯出土土器を中心とした一群の存在が考えられる。

このようなことを高台付坏の出土状況から検討しても同様な傾向性が導き出される。高台付坏各類のうちⅠA・ⅡB類についてみると、両者はB2号・B3号窯からややまとまって出土しているほか、ⅠA類はさらにB4号・B5号・B8号の各窯およびB4号住居からも出土している。このうち、B9号・B10号窯と関係をもっとみられたB8号窯の場合は、堆積土からわずかに1点が出土したのみで、同窯に対する属性は弱く、坏の出土状況からみれば、むしろ何らかの理由で外部から混入した可能性が強い。したがって上記の両類の出土主体は、概ねB2号・B3号窯にあるとみられるが、これに対し、ⅠB・ⅠD・ⅡAの各類はB8号・B9号・B10号窯から主に伴出するもので、このうちの一部がB16号窯の堆積土から若干認められる以外は、他の遺構からの出土例はなく、その違いは明瞭である。

（B2・3号窯跡等から出土したもの）

ⅠA－B2号窯溝、B3号窯灰原・床面・堆積土、B4号窯床面、（B5号窯堆積土、B8号窯堆積土、B4号住居堆積土）、ⅡB－B2号窯溝・堆積土、B3号窯床面

（B8・10号窯跡等から出土したもの）

ⅡA－B8号窯灰原、B10号窯灰原、（B16号窯堆積土）

このように、高台付坏においても、既述した坏の関係と異ならない出土傾向が明らかになった。このことから、層位的一括性には乏しいという問題は残るものの、まずB2号・B3号窯出土のものを中心とした土器群と、B8号・B9号・B10号窯出土のものを中心とした土器群の存在がほぼ裏付けられたものと考えられる。

次にこの二つの土器群の各類とは形態的に少々異なり、出土状況もこれらとは明らかに分離されるものの一つとして、B7号住居出土の土器がある。その内容は坏ⅡF類・高台付坏ⅠC類の他、蓋ⅡA類や高坏なども伴う。このうち坏ⅡF類はB2号住居の窯跡部分の天井崩落後に一括廃棄されたものの一部と同類であり（註）、したがってこれらを含めると、B7号住居を指標とする土器には、さらに高台付坏ⅡD類や椀ⅠD類が組み合うことになる。

この他、もう一つの小さなまとまりをもつものとして、地点的にやや離れたA地区にあるA1a号・1b号から出土した土器がある。この二つの窯は重複しており、時間差があることは明らかであるが、土器の内容、特に高台付坏ⅡC類と椀ⅠA類の特徴の類似から、大きな隔たりはないと考えられたもので、これを他の遺構の出土土器と比較した場合、形態的にやや異なる点からみて、一つの土器群として把握したものである。

（註）出土状況の表ではこれをB2号住居跡1層としている。

以上が硯沢窯跡における須恵器のいくつかの土器群について、主に坏および高台付坏の出土状況から検討したもので、これに堆積土出土のものを除く同一遺構出土の他の器種を加えてまとめると次のようになる。

1群－B2号・B3号窯跡出土のものを中心とする土器群

坏ⅠAⅰ・ⅠB・ⅠCⅰ・ⅠCⅱ・ⅠD・ⅠFⅲ・ⅡBⅲ・ⅡBⅳ・ⅡHⅱ類、高台付坏ⅠA・ⅡB類、椀ⅠA類、盤ⅠA1・ⅠA4・ⅠB2・ⅡA・ⅡB類、蓋Ⅰ・ⅡA類、甕、鉢、壷、甑

2群－B8号・B9号・B10号窯出土のものを中心とする土器群

坏ⅠAⅱ・ⅠB・ⅠEⅰ・ⅠFⅱ・ⅠGⅰ・ⅠHⅰ・ⅡA・ⅡCⅱ・ⅡE類、高台付坏ⅠB・ⅠD・ⅡA類、蓋ⅡA・Ⅲ類、甕、鉢、皿、壷、水瓶、円面硯

3群－B7号住居出土のものを中心とする土器群

坏ⅡF類、高台付坏ⅠC・ⅡD類、椀ⅠD類・蓋ⅡA類、甕、壷、高坏

4群－A1a・1b号窯出土のものを中心とする土器群

坏ⅡBⅰ・ⅡD・ⅡGⅰ類、高台付坏ⅠC類、椀ⅠB類、蓋ⅡA類、甕、鉢

なお、この他堆積土出土のため先にふれなかったB3号窯の坏ⅠCⅱ類は、器形的に同窯灰原出土の坏ⅠCⅰ類と近似しており、またそれ自身他の遺構からは確認されていないことから、ここでは1群に含めておくことにする。またB5号住居出土の土器も層位的・地点的にいずれの群にも含めえなかったものであるが、同土器のうち坏ⅠGⅱ類については器形的にB10号窯出土の坏ⅠGⅰ類に近く、また坏ⅠAⅲ類については、B8号窯出土の椀状の坏ⅡA類をあたかもそのまま浅くしたような形態で、底部の調整もナデによる点で一致することからすれば、B8号・B10号窯の属する2群に含まれるものと考えることができる。

この他、坏ⅠAⅳ・ⅠFⅰ・ⅠFⅲ・ⅡBⅱ・ⅡCⅰ・ⅡGⅰ・ⅡHⅰ、蓋ⅡB類については、表土や遺構内でも単独で出土したもので、土器の特徴からみても群の設定をなしえなかったものであるが、出土地点および遺跡全体の土器のあり方からみて、B地区で構成される1～3群のいずれかに限定されるものと思われる。

〈大沢窯跡〉

大沢窯跡においては、須恵器坏は少量出土している。すなわちA2 号窯灰原からＩＥii・ＩＨii類が、B1 号住居跡の床面近くからＩＥiii・ＩＨiiがそれぞれ伴出している。この状況からみると、ＩＨii類が両遺構の共通要素であることから、これらの坏は一つの組み合わせをもつものとして把握することができる。この他出土状況から別の器種である蓋ⅡＡ類、甕、鉢などもこれに含まれるものである。

この一群のなかの坏類において硯沢窯跡のそれと比較した場合、ＩＥiii類については近似したものが認められないが、ＩＥii類については形態的にみて硯沢B9 号・B10 号窯出土のＩＥi類に近く、さらに本類の底部中央に小さく残るヘラ切り痕を除けば、回転ヘラケズリによる再調整が施されることでもそれと一致する。また IHii類についてみると、手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリという調整技法の違いはあるものの、形態的には硯沢B9 号・B10 号窯出土のIH i 類にきわめて近いものがある。したがって、大沢窯跡の土器群については、その数量が少ない一方で、一部に必ずしも共通しないものが存在するが、大筋では上記の理由から硯沢窯跡の「2 群」に近い様相をもつものと考えられることから、ここでは一応それに含まれるものとしておくことにしたい。

(3)　須恵器の年代

硯沢窯跡の須恵器は前述したように 1〜4 群に大別され、また大沢窯跡の須恵器は硯沢窯跡の 2 群土器に包括されることが妥当と考えられた。ここでは、各土器群の内容についてまとめ、それらの年代について検討していくことにする。

第 1 群土器

硯沢B2 号・B3 号窯を中心に出土したもので、坏・高台付坏・椀・盤・蓋・甕・鉢・壷・甑などの器種があり、その詳しい内容についてはすでに述べている。ここでは本群の特徴を明瞭に示す坏・高台付坏を主な対象として考察を加えることにする。

まず坏についてみると、皿状のものＩＡｉ・ＩＢ・ICｉ・ＩＣii・ＩＤ・IFiiiと椀状のものⅡBiii・ⅡBiv・ⅡＨii類がある。皿状のものは体部が比較的急角度に立ち上がり、それが外反か直線的になるものとやや丸みをもつものとがある。これらの多くは底部全面に回転ヘラケズリが施されるが、一部にはそれが手持ちヘラケズリにかわるものや、ヘラ切り痕を残し再調整が全くなされないものもある。全体にロクロ目はさほどシャープではない。椀状のものは体部中〜下位に稜をもつものが多く、それらは底部に回転糸切り痕や静止糸切り痕を残し、再調整は施されないのが特徴である。この他、体部がやや丸みをもつ小形の坏で、底部に手持ちヘラケズリが加えられるものが若干含まれる。ロクロ目は皿状のものとほぼ同様である。

高台付坏は皿状のものＩＡ類と椀状のものⅡＢ類とがある。前者は量的にまとまって出土し

たもので、体部下位に丸みをもち、上半は短く外傾し、高台は低いのが特徴である。また後者は体部下端が強く屈曲し、体部上半が直線的に外傾する。両者とも底部は回転ヘラケズリが施されており、体部のロクロ目はシャープさを欠く。

このような特徴をもつもの、特に坏においてこれまで知られている他の窯跡出土土器のなかで類似するもののいくつかに、色麻町日の出山窯跡群（岡田茂弘他：1970）、田尻町木戸窯跡群（野崎準：1974、宮教委：1975）、大和町鳥屋窯跡群（高橋富雄他：1972、東北学院大学考古学研究部：1975）、松山町次橋窯跡（東北学院大学考古学研究部：1983）などがある。

本群とこれらの窯跡出土のものとの比較検討を行ってみると、まず日の出山窯跡の場合は、器形的には全体として皿形のものが本群よりやや深い感じを受けるが、体部の立ち上がり形態などに大きな違いはみられない。ただし、一部において明瞭な丸底風のものが存在することは、類似したなかにあって見逃せない相違点である。一方底部の切り離し技法では、判明するものがいずれも静止糸切りである点で、ヘラ切り・回転糸切り・静止糸切りの3種類からなる本群と異なっている。調整技法については、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリの両者がみられるのは本群と同様であるが、体部下端になされたそれがシャープであるため、その部分と底部および体部との境がかなり明瞭になっている。

木戸窯跡の場合は調査報告がなされていないため、土器の出土状況は明らかでないが、いくつかの出土資料が紹介されている（野崎：前掲、桑原・辻：1976）。それによれば、同資料は器形的には皿状のもの、椀状のものがあり、さらにそれぞれいくつかのタイプがみられるが、その各々は本群の各類にほぼ対比されると思われるもので、かなり類似性が強いと考えられる。しかし調整技法についてみると、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリの両者が存在することは同様であるが、それがかなりシャープである点は本群のものと異なり、日の出山窯跡のものに共通している。また底部の切り離し技法は必ずしも明確でないが、回転糸切りや静止糸切りは認められないようである。

鳥屋窯跡出土の坏は、体部が丸みをもって立ち上がる皿状のものが、主体をなすのが特徴であり、これは本群のＩＣ類やＩＤ類に対比されると考えられるものである。この他、いくつかの別のタイプもみられ、その大部分は本群のいずれかと類似するものであるが、しかし一部において明らかな丸底風の形態をもつものが含まれており、この意味では日の出山窯跡のものと同様、本群とは趣を異にするものである。調整技法についても同様で、回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリの両者が体部下端にシャープに施される技法は本群よりも日の出山窯跡や木戸窯跡に共通するものといえる。さらに底部の切り離し技法はヘラ切りによるとされ、回転糸切りや静止糸切りが認められないことも本群とは異なる。

以上が日の出山窯跡・木戸窯跡・鳥屋窯跡出土の坏類の内容である。このようにみてくると、

これらの大部分を占める平底の坏の器形的な特徴では、大筋において本群に近い要素をもつが、日の出山窯跡・鳥屋窯跡の坏の一部にみる丸底風のものの存在は、類似したなかにあっても、本群とは若干内容を異にすることをうかがわせる。

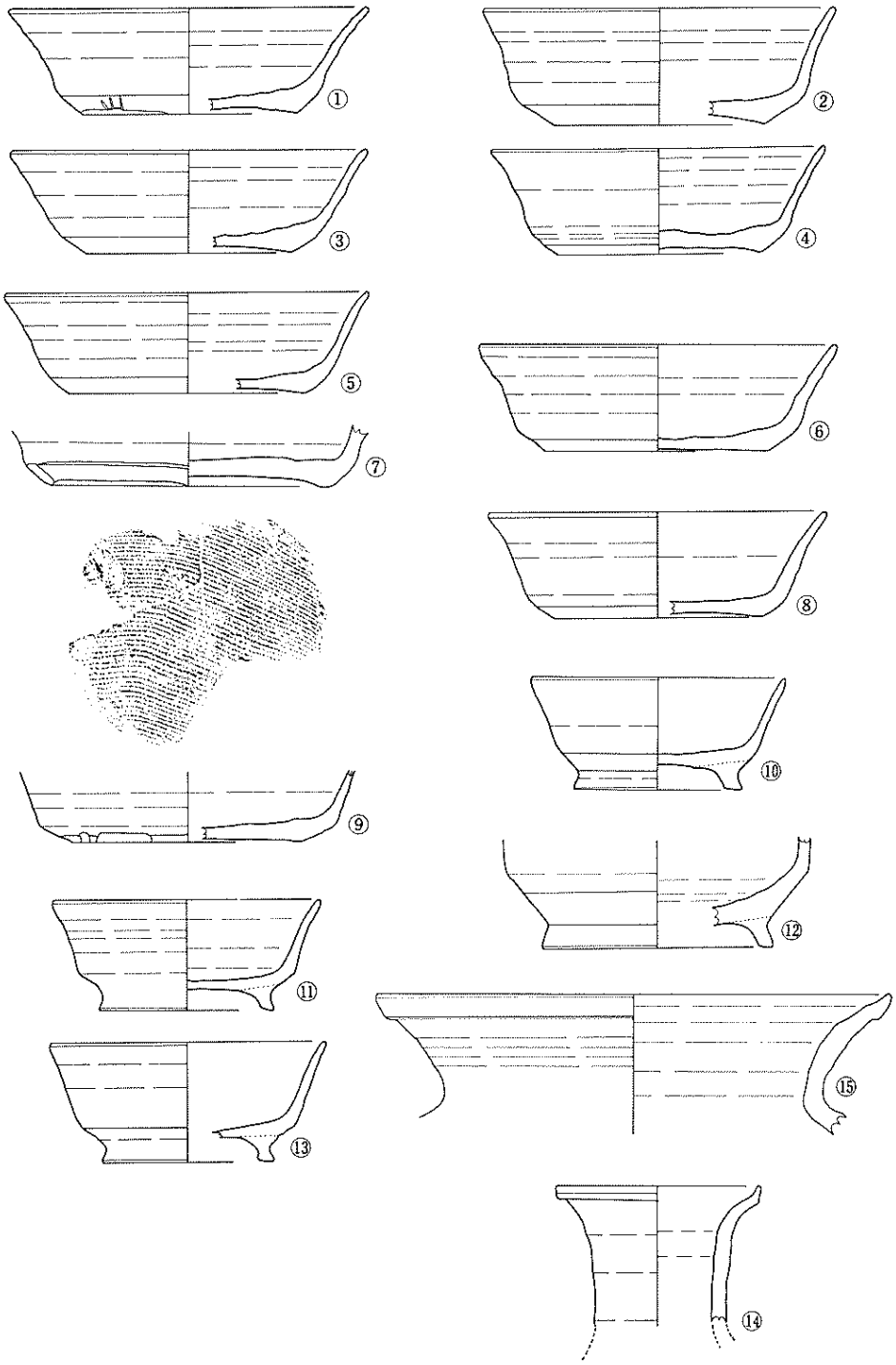
ところで、この丸底風をなす形態については、涌谷町長根窯跡（佐々木・桑原：1971）や福島市小倉寺高畑窯跡（工藤雅樹：1969）などの出土例から、より古い形態のものであることが明らかになっている。本群のなかにもＩＢ類やＩＤ類のように、わずかに底部周縁が浮き上がり、丸底風を思わせるものもあるが、それほど顕著ではなく、むしろ平底といってもよいものである。したがって、このような相違から本群についてはより後出的な様相をもつものとして把握することが可能である。

このことについては、調整技法の面からも指摘されるもので、すでに述べたように日の出山窯跡・木戸窯跡・鳥屋窯跡の場合、体部下端の再調整はかなりシャープになされるのであるが、本群の場合はそれほど顕著ではない。この三つの窯にみる特徴は、これまで報告されたより新しいとされる窯跡のものにはあまり認められないことからすれば、本群における調整技法のあり方は、上記の関係を裏付けるものといえよう。

そこで次にこのことをふまえ、日の出山窯跡等より新しい時期とされる次橋窯跡出土のものについて比較を行うことにする。

報告によれば、坏の場合においては器形やその他本群のものに概ね類似していることが明らかである。すなわち、直線的あるいは外反ぎみに立ち上がる浅い皿状のものや、体部中～下位に稜をなす椀状のものなど、本群のＩＡ類やⅡＢ類などに対比しうるものである。調整技法については回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリの２種類があり、その仕方にシャープさを欠くものが多くみられる点など本群に共通した特徴といえる。また底部の切り離し技法についても、ヘラ切り・回転糸切り・静止糸切りの３種類が併存することで一致しており、これまで比較したなかでは坏における類似性は最も高い。ただし、高台付坏の場合は若干様相を異にしており、本群では全く確認されていない稜椀がここでは主体的であり、さらに本群で特徴的である皿状のＩＡ類のようなタイプが全く見られないという明らかな違いがある。この違いについてはそれが時期差による結果とも考えられるが、しかし、上記のような坏の内容および椀状のものに偏った同窯のあり方からすれば、時期差というよりはむしろ窯の違いによって生じる組成の違いとみるのが妥当であろう。いずれにせよ主体をなす坏の特徴からみる限り、同窯の土器群は類似するとしたもののなかでは最も本群に近い様相を示すものとして位置づけることができる。

したがって本群の所属時期については、次橋窯跡とほぼ同様の年代が与えられても大きな誤りはないものと考えられる。ただしその年代は同窯において８世紀中葉とされるものの、その根拠が明確に示されていないが、この点についてはすでに検討したように、本群の内容が日の



第151図　次橋遺跡出土遺物（東北学院大学考古学研究部：1983より）

出山窯跡や木戸窯跡等のものより若干後出の様相を呈しており、かつそれら先行する窯跡の年代が、多賀城創建瓦との関係から8世紀前半に比定されていることからすれば、ほぼ妥当な年代と考えられるもので、本報告でも一応この年代に従っておくことにしたい。

第2群土器

硯沢B8号・B9号・B10号窯を中心とするほか、大沢A2号窯・B1号住居跡などからも出土する土器群である。器種には坏・高台付坏・椀・蓋・皿・甕・鉢・壷・水瓶があり、他に円面硯を伴う。このような器種組成を第1群土器と比較してみると、概ね共通する部分が多いが、一部の盤・甑・水瓶・円面硯等やや特殊とみられる器種において組成の違いが認められるようである。一方第1群との同一器種における比較においては、細部の形態がやや異なっており、それは坏や高台付坏において端的に示されるものである。以下、これらの比較検討を通じて、本群の年代を求めていくことにする。

まず坏についてみると、皿状のものはⅠAⅱ・ⅠB・ⅠEⅰ・ⅠEⅲ・ⅠFⅱ・ⅠGⅰ・IHⅰ・ⅠHに類があり、椀状のものとしてⅡA・ⅡCⅱ・ⅡE類がある。皿状のものは体部下位に弱い稜をもつものともたないものとがあり、いずれも口縁部の立ち上がり形態は外反か直線的である。第1群に比して体部は開きぎみであり、全体に深めのものが多い。椀状のものは体部下位～底部が丸みをもち口縁部が外反する一見丸底風を思わせるようなⅡA類が特徴的で、第1群の椀状のものに対してかなり異なった形態を示す。これらの多くは第1群同様鋭さを欠く回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリの再調整が施されるほか、ⅡA類のようにナデ調整されるものもある。ロクロ目の状態はややシャープである。底部の切り離し技法はヘラ切り・回転糸切り・静止糸切りの3種類からなる。

高台付坏は、皿状のものでは体部に稜をもち、高台が低く口径に比して小さめのもの、椀状のものでは体部下位に丸みをもち、上半が直線的に外傾するもので、いずれも第1群のものとは形態が異なっている。

このような内容をもつ本群と第1群土器との関係においては、上記の特徴のようにⅡA類など種類によってかなり違うものもみられるが、皿状のものの多くはその形態や調整技法が大筋において共通している。少なくとも日の出出窯跡や鳥屋窯跡のものなどと比較すれば、器形や調整の仕方など、第1群に近い関係にあることは明らかである。さらにこの先行する窯跡と、第1群との短い年代幅をふまえるならば、両群の内容の違いは時期差とみるよりは同一期間における何らかの工人単位の違いによるとするのが妥当と考えられる。以上のことから本群の所属時期については、第1群と同様8世紀中葉の年代が想定されることになる。

第3群土器

硯沢B7号居跡から出土するほか、B2号住居跡が廃絶された後に一括投棄されたものが

ある。坏・高台付坏・椀・蓋・甕・高坏などがあるが、坏以外のものは数量に乏しく、その内容はあまり明確ではない。坏の形態は体部から口縁部にかけて丸みをもつ椀状のもので、口径に対する底径がやや小さめである。底部から体部中～下位に回転ヘラケズリが施されており、底部の切り離し技法は不明である。このような特徴をみる限り、第1群や2群よりはいくぶん後出の様相がうかがえるものであることから、本群についてはやや大まかではあるが、第1・2群とは大きく隔たらない時期として8世紀後葉を考えておきたい。

第4群土器

硯沢A1ａ号・1ｂ号窯出土のものを中心とする土器群で、坏・高台付坏・椀・蓋・甕・鉢などの器種があるが、数量に乏しく、層位的まとまりもあまりみられない。このなかで坏の形態をみると、ⅡＧｉ類は体部から口縁部にかけて丸みをもつ椀状のもので、底部の外面径が底部内面や口径に比してかなり小さい。底部の切り離しは回転糸切りによるもので再調整はみられない。このような特徴はやはり第1群や第2群より後出のものと考えられるものである。年代については上記の坏の内面形態や高台付坏ⅡＣ類の特徴から8世紀後葉でも大きく降らないと思われるが、第3群との関係については現在のところ資料が十分ではなく、不明といわざるをえない。

(4)　土師器の特徴

土師器は大沢窯跡では出土しておらず、硯沢窯跡でも出土量はごく少ない。器種は坏・椀・甕がある。以下、その特徴をまとめる。

〈坏〉

坏には製作にロクロを使用するものと使用しないものとがあり、前者にはさらに体部に沈線が巡るものと変化なく立ち上がるものとがある。したがって坏は3種類に大別される。

坏ａ類：ロクロを使用し、体部に1条の沈線が巡るもの。体・口縁部が直線的に外傾し、底部に回転糸切り痕を残す。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。須恵器窯跡B16号から出土している（第53図6）

坏ｂ類：ロクロを使用し、体部に沈線のないもの。体部下端に丸みがついて口縁部にかけて直線的に短く外傾するもの（ｂ1）と、口縁部まで概ね丸みをもつもの（ｂ1）とがある。器面調整は、ｂ1 類には外面の底部から体部下位にかけて手持ちヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。ｂ2 類には外面の底部から体部下位にかけて回転ヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキがみられるものの他に、上半に回転刷毛目・下半に雑なナデ調整が施されて、坏としては特異な器面調整が認められるものもある。いずれも黒色処理は施されていない。ｂ1類はB2号住居跡から（第35図11）、ｂ2類は前者が須恵器窯跡B10号から（第42図1）、

後者がB2～B4号灰原から（第24図12）出土している。

坏c類：ロクロを使用しないもの。丸底で中位に段のつくもの（c1）、丸底・皿状で丸みをもって立ち上がるもの（c2）、平底・椀状で丸みをもって立ち上がるもの（c3）がある。外面の器面調整は、c1類がヘラミガキ・ヘラケズリ、c2類がヘラミガキ、c3類がヘラケズリ・横ナデである。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。c1類はB5号住居跡から（第85図8）、c2類はB2号住居跡から（第35図10）、c3類はB4号住居跡から（第46図5）出土している。

〈椀〉

ロクロを使用し、丸みをもって立ち上がる。底部に糸切り痕を残す。体部下位に手持ちヘラケズリ、内面にヘラケズリ・黒色処理が施されている。炭窯跡B12号から出土している（第79図4）。

〈甕〉

長胴形のもの（a）と、小形のいわゆる鉢形を呈するもの（b）とがある。a類はロクロ使用、b類は使用していない。a類は須恵器窯跡B10号から（第42図3）、b類は同B10号（第42図2）と須恵器窯B3号から（第21図9）出土している。

土師器の年代

土師器は前述のように出土量が少なく、また個々の遺構に出土がかたよることもないので、遺構内における出土状況をもとにした土師器としての共伴関係を把握することはできない。そこで、多量に出土している須恵器との共伴関係をみると、須恵器の項で記述したように須恵器は大半が窯内堆積土や灰原から出土しており、窯の重複関係などから若干の時間的幅はもつものの、窯ごとの共伴関係によって成立する土器群は一時期におさまり、それと共に出土している土師器についても同時期としてさしつかえないものと思われる。したがって、本遺跡出土の土師器はいずれも8世紀（奈良時代）中葉の年代が与えられる。

ただし、各器種とも製作にロクロを使用しているものを含んでおり、当該年代の土師器型式である国分寺下層式（氏家和典：1957ほか）とは技法の特徴を異にしている。一般に土師器にロクロ技術が導入されるのは表杉ノ入式（平安時代）とされており、この点だけからすると本遺跡の土踊器も表杉ノ入式に属することになる。しかし、坏の器形については、ロクロ使用という点を除いて検討すれば、坏a類は多くの国分寺下層式に属する土器群に類例が認められる（小井川・高橋：1977など）。また坏b類と椀は本遺跡出土須恵器の坏の中に調整技法も含めてごく近い特徴をもつものがある。さらに、検出された遺構が竪穴住居跡なども含めて須恵器生息に直接関連したものと考えられることからすれば、坏a類は当時に普通的な土師器坏の器

形を模倣してロクロにより整形したもの、坏ｂ類は窯で生産していた須恵器の特徴そのままに土師器として製作したもの、また坏ｃ類は一般的な土師器ととらえることができよう。

このような本遺跡における土師器のあり方は、一般的な土師器と、須恵器製作に携わっていた工人などが一般的な土師器あるいは須恵器に似せて異なる技法で制作したものとが共に使用されていたことを示しており、そのために一般集落遺跡とは異なった内容になっていると考えることが妥当であろう。

3．平安時代の遺構について

(1)　硯沢窯跡の遺構

平安時代の遺構は瓦窯跡 4 基全てと炭窯跡 2 基（A3・7 号）があり、ほかに奈良・平安時代のいずれに属するか限定できない炭窯跡 1 基（B12 号）を加えて検討する。

瓦窯跡

瓦窯跡はいずれも半地下式窖窯で、平面形は燃焼室が若干広がる長方形を成し、焼成室と燃焼室との境は必ずしも明瞭ではない。窯内部はA5・8 号窯が焼成室床面に瓦を用いた焼台を構築し、燃焼室はスサ入り粘土や瓦により床・壁面を貼り替えているなど、構築面を作り替えている。これに対し、A4・6 号窯は初期構築面がそのまま検出され、作り替えは認められておらず、瓦窯跡は 1 基おきに内面の構築方法が類似していることになる。規模は残存全体長が 7.1～7.9m、最大幅が 0.7～1.0mと近似しており、奈良時代の半地下式の須恵器窯と比較すると大沢遺跡の窯に比較的近い。焼成室床面の傾斜は 20～26°とほぼ均一で、前庭部としての施設は削平されて認められない。なお、A4・5 号窯には一部に整地層がみられた。

4 基の瓦窯跡は近接して同一標高に並列し、窯の外側に周溝が巡る。A4・5 努窯は 1 本の溝で囲まれており、同時に機能していることがわかる。ほかの窯でも溝は切り合い関係がなく一部で接続していることから、ほぼ同時に機能していたと考えられる。

炭窯跡

3 基とも平面形態は奥壁の方が若干広い長方形の炭化室に狭い焚口の付いた羽子板状を呈する。B地区でB8 号住居跡を切っているB12 号窯跡は天井が一部残存して地下式とわかる。A地区で重複するA3・A7 号窯跡は地下式か半地下式か判然としなかったが、壁が高いことや内傾する部分があることからB12 号窯跡同様地下式であったことが考えられる。A7 号窯跡にだけ排水溝が付いており、一部は瓦を被せて暗渠としている。この瓦は近接する瓦窯で製作したものであり、同窯は瓦窯と同時に存在したと考えられる。A3 号窯跡はA7 号窯跡を切って構築されているので時間的には新しいが、同位置に類似した形態・構造のものが重複している

ことからすればごく近接した時期に営まれた窯と思われる。

(2)　大沢窯跡の遺構

平安時代の遺構は瓦窯跡が 7 基発見された。いずれもある程度削平されているが、半地下式窖窯で、平面形は長方形と考えられ、焼成室と燃焼室との境には床面に段が付く。焼成室の床面には焼台として多く丸瓦を用いた瓦列が中軸線と直交して並べられている。燃焼室の床面はやや窪むものと平坦なものとが半々であるが、A9 号窯だけは床に平・丸瓦が敷かれており、貼り直されて 2 面みられる。前庭部は「ハ」字状に広がるものと長方形のものとがある。焼成室あるいは燃焼室から排水溝が延びており、丸瓦で架構されて暗渠となっているものもある。窯の幅は 0.9〜1.2mで、焼成室より燃焼室のほうが若干広い。

このような瓦窯跡の特徴を硯沢窯跡の瓦窯と比較してみると、規模はほぼ変わりなく、全体の平面形も長方形で共通すると思われる。異なる点は、大沢窯跡の場合には①焼成室と燃焼室の境に段が付く、②焼成室の床にはほぼ全てに焼台瓦列がみられる、③排水溝が窯内部から続いていることの 3 点である。②の焼台瓦列は硯沢窯跡でも半数の窯にみとめられるので、大きな違いは①と③の 2 点に集約される。硯沢窯跡では①の焼成室と燃焼室の境は床面では判別しにくく、③の溝は窯の外側に巡るのであり、この層位点は両窯群が出土する瓦からみてほぼ同時期に機能していたことを前提にすれば、異なった構造・構築方法で作られた窯によって操業していた異なる工人集団の存在を窺わせる。

なお､大沢窯跡には奈良･平安時代のいずれに属するか判然としない遺構として土壙群がある。調査区全体に分布するが、中央北部に集中しており、平安時代に降ったとされる灰白火山灰が内部に堆積している。土壙が掘られている地山の土層は良質の粘土と思われ、これらの土壙は須恵器あるいは瓦製作に伴った粘土採取の痕跡ではないかと考えられる。

4．平安時代の遺物について

硯沢・大沢両遺跡から多量の瓦が出土している。ほかに表土出土のごく少量の土師器があるが、図示できたのは 1 点だけであり（第 95 図 9・10）、省略する。瓦には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦があり、これらは両遺跡で窯跡に伴って出土している。量的には整理用コンテナで、硯沢窯跡では 126 箱（平瓦 104 箱、丸瓦 22 箱）、大沢窯跡では 64 箱（平瓦 46 箱、丸瓦 18 箱）である。以下、瓦の種類ごとに述べる。

(1)　出土瓦の観察と分類

ａ．軒平瓦（第 60 図 5、第 66 図、第 70 図 5、第 76 図 1、第 114 図、第 119 図）

笵による均整唐草文軒平瓦が 1 種類あり、硯沢窯跡から 9 点、大沢窯跡から 2 点出土しており、いずれも同笵である。すべて小破片で、完形品はない。

瓦当面には細い隆線による均整唐草とそれを囲む 1 重の区画線が表現されている。顎面には縄叩き目がそのまま残り、断面は三角形状をなす。顎部と平瓦との接合部にはヘラキガミはみられない。これらの痕跡から、顎部は平瓦凸面に粘土を付加し、縄叩きをして接合されたものと思われる。用いられる平瓦は、平瓦部が小片のため判然としない。

ｂ．軒丸瓦（第 64 図 1～4、第 70 図 6）

笵による細弁蓮華文軒丸瓦が 1 種類みられる。硯沢窯跡から 5 点出土しており、いずれも同笵である。大沢窯跡からは出土していない。すべて破片で、完形品はないが、復元すると文様は以下のようになる。

瓦当面には隆線によって 20 葉の蓮弁と子葉が表現され、外側には 1 重の圏線と 21 個の珠文が巡る。また、内側には 2 重の圏線が巡り、中房には 1＋5 の円形蓮子が配されている。笵の木目痕が顕著にみられるが、文様は不鮮明である。瓦当の直径は 20 ㎝、厚さ 2～3 ㎝である。

瓦当側面と裏面はナデ調整やヘラケズリ調整されており、それが及ばない部分には縄叩き目が残る。丸瓦との接合方法は、瓦当部の挿入溝に丸瓦を差し込み、内外面に粘土を付加して接合する「印篭つぎ」である。

ｃ．平瓦

平瓦は最も多量に出土しており、大部分は小破片である。以下、形態・法量・製作法などについて述べ、それらに基づいて分類を行うことにする。

〔形態〕　平面形は基本的に台形を呈するが、狭端部と広端部の差がそれほど大きくない長方形に近いものもみられる。断面形はすべて円弧状を呈するが、その曲率は一定しない。

〔法量〕　硯沢窯跡出土のものでは、広端幅 23.5～31.5 ㎝、狭端幅 18.5～28.5㎝、長さ 33～40 ㎝で、広端幅 27 ㎝、狭端幅 24 ㎝、長さ 38㎝程が平均的な大きさである。大沢窯跡では広端幅 22.5～28 ㎝、狭端幅 20～26.5 ㎝、長さ 32～36㎝で、広端幅 24 ㎝、狭端幅 21 ㎝、長さ 34㎝程が一般的な大きさであり、大沢窯跡出土のものがやや小さい傾向にある。しかし、両遺跡出土の瓦には個体による法量の違いが著しく、個体数も少ないことから法量の規格性は認められない。

〔胎土・色調〕　胎土には砂粒が多く含まれている。色調は黒色・暗赤褐色・オリーブ灰色・橙色など様々である。

〔製作時の痕跡〕　観察は側端部の残る比較的大きめのものを対象として行った。製作時の痕

跡についてみると、凸面には糸切り痕・縄叩き目・ヘラケズリ調整・凹型台圧痕がみられる。このうち、糸切り痕は少数にみられるが、最も古い痕跡であり、素材の粘土板をとる際の痕跡である。縄叩き目は平瓦の長軸方向に沿うものが大部分であり、縄の原体は径 2〜3㎜ の比較的細いものと、径 5 ㎜程の太いものとがある。ヘラケズリ調整はごく少量にみられ、長軸方向に施される（第 71 図 3）。凹型台圧痕には、平瓦側辺部にみられる凹型台の側端部の圧痕及びその周辺の縄叩き目のつぶれ（第 60 図 4 など）と、凹型台に掘り込まれた方形の凹みの圧痕である方形突出（第 67 図 1）とがある（進藤・高野：1983）。これらは縄叩き目やヘラケズリ調整よりは新しい。またこのほかに、凹型台の使用の結果と思われる縄叩き目のつぶれがみられるものもある。したがって、凸面の痕跡には縄叩き目だけのもの・縄叩き＋縄叩きのつぶれのもの・縄叩き＋凹型台の圧痕のもの・ヘラケズリ＋凹型台の圧痕のものの 4 種がある。

一方、凹面には糸切り痕・布目・ナデ・ヘラケズリ調整がみられる。糸切い痕は最も古い痕跡で、すべて平瓦の長軸方向に走るものであり、素材の粘土板をとる際の痕跡である。布目は全面に及ぶものがほとんどで、比較的目のつまったものが多い。ナデ調整は布目より新しく、長軸方向に施され、全面を調整するものと部分的なものとがあり、後者が多い。ヘラケズリ調整はごく少数で、長軸に直交して全面に施されている（第 63 図 3）。したがって、凹面の痕跡には、布目のもの・布目＋ナデ調整のもの・布目＋ヘラケズリ調整のものの 3 種がある。

側辺・小口面にはすべてにヘラケズリ調整がみられる。

以上の製作時の痕跡を、凸面と凹面の組み合わせてみると、次の 6 種類になる。

①	（凸面）縄即き目	（凹面）布目
②	（凸面）縄叩き目＋縄叩き目のつぶれ	（凹面）部分的ナデ
③	（凸面）縄叩き目＋凹型台圧痕	（凹面）布目
④	（凸面）縄叩き目＋凹型台圧痕	（凹面）ナデ
⑤	（凸面）縄叩き目＋凹型台圧痕	（凹面）ヘラケズリ
⑥	（凸面）ヘラケズリ＋凹型台圧痕	（凹面）部分的ナデ

これらを量的にみると、硯沢窯跡では①が 3 割、②が 2 割強、④が 4 割弱であり、大沢窯跡では①が 6 割強、④が 3 割で、他はいずれも少数である。

〔製作方法〕　製作方法は模骨痕や粘土板のあわせ目等が全くみられないことから、すべて 1 枚作りのものと考えられる。これら瓦にみられる痕跡から硯沢・大沢窯跡出土の平瓦の製作方法を復元してみると、A；布を敷いた凸型台上で縄叩きし、側面・小口面をヘラケズリ調整するものと、B；布を敷いた凸型台上で縄叩きした後、布を敷かない凹型台上でナデあるいはヘラケズリ調整を行い、側面・小口面をヘラケズリ調整するもの、C；布を敷いた凸型台で縄叩きし、布を敷かない凹型台上で側面・小口面をヘラケズリ調整するものとの三通りの方法があ

ったことがわかる。

前述した製作時の痕跡の組み合わせ（①～⑥）における製作方法は、①がAの方法で、③はCの方法、2・4～6がBの方法である。

〔分類〕　以上述べてきたように、平瓦は凹型台の使用の有無という製作方法の違いにより、

Ⅰ類：凹型台を使用せずに製作されたもの（製作方法A、製作時の痕跡1）

Ⅱ類：凹型台を使用して製作されたもの（製作方法B・C、製作時の痕跡2～6）

とに分類できる。

両者の平面形や法量・胎土や色調には特に相違はみられない。量的には硯沢窯跡ではⅡ類が7割を占めるのに対し、大沢窯跡ではⅠ類が6割強を占めている。

d．丸瓦

丸瓦は平瓦に次いで多く出土した。大部分は小破片で、全体のわかるものは少ない。以下、形態・法量・製作法についてのべる。

〔形態〕　すべて玉縁の付く有段のもので、断面形は半円形である。

〔法量〕　広端幅15.6～19.5㎝、狭端幅13.8～18.0㎝、長さ32.1～42.7㎝である。玉縁の長さは4.4～9.4㎝になる。個体差が大きく法量の規格性は認められない。

〔胎土・色調〕　胎土には砂粒が多く含まれている。色調は橙色・灰白色・オリーブ灰色・黒色など様々である。

〔製作時の痕跡・製作方法〕　凸面にみられる痕跡には、縄叩き目・ロクロナデがある。ロクロナデはほぼ全面に及び、縄叩き目をすり消している。凹面にみられる痕跡には、粘土紐痕・布目がある。粘土紐痕は幅3㎝程である。側面・小口面はすべてヘラケズリ調整される。

これらの痕跡から、製作方法は布をかぶせた円柱状の型に粘土紐を巻き付け、縄叩きし、その後にロクロナデ調整を施し、二分割後、側面・小口面のヘラケズリ調整をするという方法がとられている。

以上述べてきたように、硯沢・大沢窯跡出土の丸瓦はすべて粘土紐巻き作りによる有段丸瓦である。

(2)　瓦の共伴関係

硯沢・大沢両窯跡で出土した瓦には、軒平瓦1種類・軒丸瓦1種類・平瓦2種類・丸瓦1種類がある。これらの瓦の出土状況を表にすると以下のようになる（次表）。

また、瓦を焼成した窯は、硯沢窯跡では外周溝に重複や改修があり、焼台や焚口の側壁にも作り替えがみられることから、ある程度の時間的幅は想定しなければならないものの、両遺跡

とも窯群が斜面に整然と作られていることからほぼ同じ時期に操業していたものと思われる。このことから両遺跡出土の瓦はすべてほぼ同一時期に製作され、共伴するものと考えることができる。

なお、硯沢窯跡では瓦当文様のわかる軒平瓦は遺構に伴って出土していないが、灰原等から同種の軒平瓦が出土している。

〈瓦の出土状況〉

〈硯沢窯跡〉

窯 No.	A4号窯		A5号窯			A5・6窯	A6号窯		A8号窯		
場 所	堆積土	周溝溝	堆積土	施設瓦	周 溝	周 溝	堆積土	周 溝	堆積土	施設瓦	周 溝
軒平瓦		T								T	
軒丸瓦						○			○		
平瓦Ⅰ		○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	◎
平瓦Ⅱ	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	◎	◎
丸 瓦		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

〈大沢窯跡〉

窯 No.	A1号窯		A3号窯	A4号窯	A5号窯		A6号窯	A7b号窯		A8号窯	
場 所	堆積土	施設瓦	堆 積 土	堆 積 土	堆積土	施設瓦	堆 積 土	堆積土	施設瓦	堆積土	施設瓦
軒平瓦									○		○
軒丸瓦											
平瓦Ⅰ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
平瓦Ⅱ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
丸 瓦	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎

T印は瓦当文様不明，◎印は特に多量，「施設瓦」とは焼台・焚口の側壁等に用いられたもの

(3) 瓦の供給先

両遺跡出土の軒瓦と同笵のものは、多賀城跡（721－B、310－B類、宮多研：1982）、多賀城廃寺（伊東：1970、均整唐草文字瓦・素縁細弁蓮華文鐙瓦第2類c）、陸奥国分寺（伊東・工藤：1961、均整唐草文字瓦第1類・細弁蓬華文鐙瓦第2類c）、燕沢遺跡（原田：1974）、安養寺中囲窯跡・五本松窯跡（古窯跡研究会：1961）から出土している。前四者は消費地、後二者は生産地である。本遺跡を含めた全産地の軒瓦はいずれも同笵で、それぞれの需給関係は明らかではない。

(4) 年代

硯沢遺跡のA5号・A6号・A8号窯の外周溝の堆積土には灰白色火山灰が認められた。灰白色火山灰は10世紀前半頃に降下したと考えられており（白鳥：1980）、瓦が焼成された年代はそれ以前であることは明らかである。

ところで、多賀城ではこれらの瓦は政庁第Ⅳ－1 期に用いられたものであることがわかっている。第Ⅳ－1期は貞観11年（869年）の陸奥国大地震の復興とされており（工藤：1965、宮多研：1982）、政庁第Ⅳ-1期の瓦には貞観11年を上限とするこれにごく近い年代が与えられて

いる。したがって、硯沢・大沢両遺跡の瓦もその年代と考えられる。

以上、瓦について多賀城跡での成果に基づいて検討してきた。しかし、若干の問題が生じてきている。多賀城跡では政庁第Ⅳ期の瓦はⅠ類の凹型台を使用せず、凸型台上で製作されたものとしている（多賀城分類ⅡC類、進藤・高野：1982）。一方、硯沢・大沢両遺跡ではⅡ類の凹型台を使用する平瓦（多賀城分類ⅡB類）がⅠ類と共伴している。したがって、多賀城跡政庁第Ⅳ期の平瓦には多賀城分類のⅡC類のみでなく、ⅡB類も存在することになり、前述の見解は訂正する必要があろう。

5．近世の遺物について

近世の遺構・遺物は大沢窯跡から発見されている。遺構は瓦捨場としての土壙であり、多量の瓦等が出土している。土壙内には窯壁・炭化物なども堆積しており、近接した箇所に瓦を生産した窯が営まれていると思われるが、今回の調査範囲内では窯跡は検出されていない。したがって、出土瓦を中心にして検討する。

近世瓦としたものには軒平瓦6種・軒丸瓦6種・平瓦・丸瓦・隅切瓦・熨斗瓦・面戸瓦・棟込瓦・鬼瓦などがある。これらの瓦は松島の瑞厳寺（註 1）に供給されたもので、年代は慶長年間と受け止められてきた（宮城郡誌）。

これらの瓦は、①瓦捨場からまとまって出土すること、②各堆積層から出土した瓦が互いに接合する例が多いこと、③「太田市兵衛」の刻印が各種の瓦にみられ、それらが各堆積層から出土すること、などからこれらの瓦は同時期に製作され、短い時間内に投棄されたものと考えることができる。

前述したように、この窯跡で生産された瓦は瑞厳寺（五大堂も含む）に供給されたものであった。瑞厳寺の修理報告書（国宝端厳寺第二期修理委員会：1958）や県文化財保護課で保管する修理の記録写真（註 2）によると、今回出土した瓦と同じものは、瑞厳寺では軒平瓦A・D類、丸瓦・鬼瓦があり、五大堂(註 3)では軒平瓦E・F類がみられる。その他、仙台城三ノ丸跡でも軒平瓦D類がと思われるものが出土しているが、破片のため同一形態かどうか不明のため考察の対象から省くことにする（結城・佐藤：1985、報告書では軒平瓦A-7類とし、18世紀後半の土壙から出土している）。

次に瓦の年代について検討してみる。出土した瓦は全て燻し焼きであり、製作時に型と粘土の間に布の代わりに砂粒を用いている。こうした技法は織田信長が天正五年（1579年）に安土城を築城した時に、明人一観によってもたらされたものとされている。また、軒平瓦A～C類の「雲頭形」とされる瓦当面の形態は明様式とされ、姫路城（註 4）（慶長六年＝1601年改築）、

熊本城（慶長十二年築城）など慶長期の城郭でしばしばみられ、この時期の一つの流行であった。大沢窯跡の近世瓦の供給先である松島端厳寺の創建は慶長九年から十四年にかけて行われており、瓦の型式としては年代的にうまく符号する。

しかし、瑞厳寺の修理報告書は、五大堂の雁振瓦に「慶安三年　八月十五日　天王寺十人家□　太田市兵衛」と記されていたことを述べている（58 頁）。端厳寺の瓦で「太田市兵衛」とあるものはすべて刻印によるもので、本遺跡で出土した「太田市兵衛」の刻印と同じものばかりである。したがって、五大堂の雁振瓦の「太田市兵衛」も刻印で、本遺跡出土の刻印と同一のものと推定される。そうすると、この雁振瓦は本遺跡で製作されたものと考えられ、本遺跡出土の瓦の年代は慶長期ではなく、慶安三年（1650 年）前後と考えるのが妥当である（註 5）。ただし、この雁振瓦について修理報告書は写真や拓本を載せておらず、また説明も全くないので、刻印以外の文字が焼成前のヘラ書きによるものか、焼成後の墨書によるものなのかも不明である。若干疑問の余地も残るが、他に検証の手段もないので、ここでは上記の年代を本遺跡の年代と考えておくことにする。なお、「天王寺十人家□」であるが、天王寺に属する造瓦関係者を指すと思われる。この時期の造瓦関係者を擁する天王寺として最も可能性のあるのは大阪の難波四天王寺であろう。しかし、難波四天王寺に属する造瓦関係者に「十人家□」や「太田市兵衛」などを見出すことはできなかったので疑問が残る。このことに関して読者の御教示を得たいと思っている。

本遺跡出土の瓦の製作年代を慶安三年頃とみると、この時期に瑞厳寺や五大堂において大規模な屋根の葺き替えが行われたことになるがその記録はない。しかし、この時期には仙台藩内では多数の建物が建築あるいは修理されているのが注目される。まず、慶安二年には仙台東照宮の造営が開始され、承応三年（1654 年）に落成している。また、同じく慶安二年に仙台城は正保三年（1646 年）の大地震の復旧工事を完成させている。瑞厳寺周辺では法性院（正保四年）、陽徳院（慶安三年）が創建されている。ここで想像を逞しくすれば、正保三年（1646 年）の大地震で瑞厳寺や五大堂の屋根瓦も大きな被害を受け、この修理のための瓦が本遺跡で製作されたのではないかと思われる。地震から 4 年後に修理が行われたのは、仙台城の復旧を優先し、それから東照宮や陽徳院の造営などと合わせて行われたためと推測されるのである。

（註 1）瑞厳寺は慶長九年から十四年にかけて伊達政宗によって創建されたもので、現在残る本格的な本瓦葺きの建物としては日本で最北のものであるという。建物はそれぞれ国宝や重要文化財に指定されている。

（註 2）県文化財保護課で保管する昭和 30 年～33 年に行われた修理の際の記録写真による。これには「太田市兵衛」の刻印がみられる。なお、記録写真は修理報告書にない瓦も載せている。

（註 3）五大堂は大同二年（807 年）の創建と伝えられている。現在の建物は慶長九年に伊達

政宗によって再建されたもので、重要文化財に指定されている。
（註 4）姫路城では後の補修瓦も「雲頭形」のものを使用しており、現在も各時期の入り混じったこの形態の瓦を仰ぎ見ることができる。また、中国や韓国の寺院でもこの形態の軒平瓦が用いられている。
（註 5）なお、本遺跡の年代を慶安三年頃とすると、創建時の慶長期の瓦はどこで製作されたのかが問題である。現在のところ、瑞厳寺関係の瓦窯跡は本遺跡しか確認されていない。本遺跡の出土瓦は数も多く、笵による文様もしっかりしており、単なる補修瓦を生産するために築窯されたものではないと思われる。慶安三年の年代が事実なら、この時の屋根瓦の修理は大規模なものであったに違いない。五大堂の雁振瓦の「慶安王年　八月十五日　天王寺十人家□　太田市兵衛」の文字はもう一度確認する必要を感じている。

6．その他の遺構について

硯沢・大沢窯跡には前述した遺構の他に、遺物が出土していないため、所属時期を明確にできない遺構がある。硯沢窯跡のB11 号・B13 号・C1 号窯跡、大沢窯跡のA9 号・B10 号窯跡、あわせて 5 基の炭窯と、硯沢窯跡の溝 2 条である。

このうち、硯沢窯跡のB11 号窯跡と大沢窯跡のA9 号窯跡は炭化室が円形で深く、壁が内弯して立ち上がることから地下式と思われる。前者は焚口が斜面の下方ではなく、斜面を削平して作られた農道に面しており、また両者とも遺跡付近の人々が記憶している炭窯の形態と同様であったことから、近代のものである可能性もある。

硯沢窯跡のB13 号窯跡はごく小さいため、形態的な類似性の比較もしにくい。しかし、他の窯が並列している間に重複することなく構築されており、奈良時代の須恵器製作遺構群と一体を成すことも考えられる。

このほか、硯沢窯跡のC1 号窯跡と大沢窯跡のB10 窯跡は浅い長方形の炭化室と小さな焚口から成るもので、前述の窯より地上の構築物のほうが大きいものである。長方形という形態だけでみると、平安時代とした硯沢窯跡A3・7 号窯跡と類似してはいるが、それによって時期を限定できるとは考えにくい。

硯沢窯跡の溝 2 条のうち 1 条は奈良時代の須恵器窯跡であるB15 号窯跡を切っており、また両溝とも堆積土が現在の表土と同様であることから、近年まで使用されていた通路などではないかと思われる。

Ⅷ. ま と め

1. 硯沢・大沢窯跡、壇山A遺跡は仙台平野の北東部、低い丘陵地帯に位置している。今回の調査の結果、壇山A遺跡では時期不明の炭窯跡が1基検出されただけであったが、硯沢・大沢窯跡では奈良時代・平安時代・近世の各時代の遺構・遺物が多数発見された。

2. 硯沢・大沢窯跡は利府町春日地区に隣接して所在する遺跡であり、古くから県内でも仙台市北部の台原地区とならぶ大規模な窯跡群として知られている春日古窯跡群の一部を成すものである。近年さらに多賀城市・利府町教育委員会等の分布調査によって新たに窯跡が発見され、従来より窯跡群の範囲が広がり、今後より密度の濃い分布が確認されていくものと思われる。

3. 奈良時代に属する遺構は、須恵器窯跡18基・竪穴住居跡8軒である。須恵器窯跡は小さな沢を取り囲むように並列して作られている。窯の基本的な構造では、硯沢窯跡が地下式窖窯と少数の半地下式窖窯、大沢窯跡が半地下式窖窯という違いがある。出土した須恵器でみると、硯沢窯跡の半地下式窖窯出土のものが若干新しい要素をもっており、硯沢窯跡の地下式窖窯と大沢窯跡の半地下式窖窯はほぼ同時期である。したがって、両遺跡では地下式窯と半地下式窯とが同時期に存在していることになる。

硯沢窯跡の場合、16基の窯が3群に分かれ、それぞれが一つの単位としてそのなかで個々の窯が変遷している。規模・構造的には多様であり、他遺跡との比較によって本遺跡の特性を把握することは難しいが、各群のなかで時間的に最も古い窯は形態が類似して整っており、それより新しい窯は個々に異なった形になっている。したがって、このことが本遺跡の特徴と考えられる。

出土した須恵器は、坏・高台付坏・椀・皿・盤・蓋・甕・鉢・壷・甑・水瓶の 11 器種がある。坏類の器形・製作技法は種類が多いが、各遺構での共伴関係から検討すると、時期的にはほぼ同一のものと考えられ、8 世紀中葉の年代が推定される。窯の変遷もその時間的幅におさまるものであろう。ただ、共伴関係ととらえた出土状況は窯内堆積土あるいは前庭部に形成された灰原からの出土であるため、個々の窯に伴う土器を特定しにくく、多様な須恵器の内容がさに細かな時期差につながる可能性は比定できない。

竪穴住居跡は須恵器窯跡に近接して作られている。特に硯沢窯跡では使用しなくなった須恵器窯を住居跡の一部（張り出し部）として再利用されたものが2基ある。ほかに窯を改築して異なった空間として利用している1基もあることから、竪穴住居跡は一般集落での有りかたと異なって、須恵器製作に関連した、工人の住居・作業場、また再利用された窯は作業場の一部・倉庫などと想定される。

4. 平安時代に属する遺構は瓦窯跡 11 基・炭窯跡 2 基がある。瓦窯跡はいずれも半地下式窖窯で、規模に違いはないが、大沢窯跡の場合は焼成室に焼台として瓦が敷かれるものが多く、また敷きかたも整っており、焼成室と燃焼室との境に段が付くという構造上の違いがある。硯沢窯跡では 2 基をまとめて 1 本の外周溝で囲んだものがある。生産された瓦は多賀城が供給先であり、政庁第Ⅳ－1 期に使用されている。

5. 近世初頭に属するものとしては瓦溜から出土した遺物がある。瓦には軒平瓦 6 種・軒丸瓦 6 種・平瓦・丸瓦・隅切瓦・熨斗瓦・面戸瓦・軒込瓦・鬼瓦などがある。「太田市兵衛」の刻印などの共通点から松島瑞厳寺に供給されたものであり、その年代は慶安三年（1650 年）頃と考えられる。

ほかに鉢・火鉢・擂鉢・脚付鉢などの瓦質土器や陶磁器が若干出土している。

なお、瓦溜には上記の遺物とともに窯壁ブロックや炭化物などが多量に廃棄されているので、近接地に当時期の窯跡が存在するものと思われる。

引用・参考文献

伊東信雄編（1961）：「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」宮城県教育委員会

伊東信雄編（1970）：「多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－」宮城県教育委員会・多賀城町

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 8 輯

岡田茂弘他（1970）：「日の出山窯跡群『宮城県文化財調査報告書』第 22 集

大森忠行（1975）：「紋章のデザイン」『双書美術の泉 8』岩崎美術社

工藤雅樹（1965）：「陸奥国分寺出土の宝相花文鐙瓦の製作年代について－東北地方における新羅系古瓦の出現－」『歴史考古』第 13 集

工藤雅樹（1969）：「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」『福島市の文化財』

桑原・辻（1976）：「長根窯跡群Ⅲ」浦谷町教育委員会

小井川・高橋（1977）：「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第 5 号

国宝瑞厳寺第二期修理委員会（1958）：「国宝・重要文化財瑞厳寺修理工事報告書」

駒井鋼之助（1981）：『かわら日本史』雄山閣

古窯跡研究会（1973）：「陸奥国官窯跡群－台の原古窯跡群調査研究報告」『研究報告』第 2 冊

佐々木茂・桑原滋郎（1971）：「長根窯跡」涌谷町教育委員会

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究報告Ⅶ』

高橋富雄他（1972）：「宮城県黒川郡大和町島屋遺跡調査報告書」大和町教育委員会

坪井利弘（1980）：『日本の瓦屋根』理工学社

東北学院大学考古学研究部（1975）：「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告書」『温故』第 9 号

東北学院大学考古学研究部（1983）：「宮城県志田郡松山町次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財調査報告書』第 1 集

内藤政恒（1939）：「宮城県利府町春日瓦窯焼場大沢瓦窯址研究調査報告」『東北帝国大学誌文学部奥羽史料調査部研究報告第 1』

野崎　準（1974）：「東北地方における須恵器生産」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 6 号

原田良雄編（1974）：「内藤政恒先生蒐集東北古瓦図録」

宮城県多賀城跡調査研究所（1982）：「多賀城跡－政庁跡」宮城県教育委員会－宮城県多賀城調査研究所第Ⅵ章 1、第Ⅶ章 2 の(1)

宮城県教育委員会（1975）：「宮城県文化財発掘調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第 40 集

結域・佐藤（1985）：「仙台城三ノ丸跡」『仙台市文化財調査報告書』第 76 集